

---

# 烈月のサバイバー

早川みつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

烈月のサバイバー

### 【Nコード】

N2003W

### 【作者名】

早川みつぎ

### 【あらすじ】

二十一世紀後半。宇宙飛行士を目指す少年・響揮<sup>ひび</sup>は、オンラインくじに当選し、あこがれの月面都市に招待される。幼なじみの少女・遙香<sup>はるか</sup>とともに、期待に胸をふくらませて地球を離れるが、連邦政府の未来を左右する事件に巻きこまれてしまう。

幸運と不運が背中合わせの月域。身ひとつを武器に、響揮は命がけの勝負に挑む。託された謎の暗号を解き、陰謀を阻止することができるのか？そして無事に地球に帰り、秘めてきた思いを遙香に伝えることができるのか？

月の女神がほほえむ街で繰り広げられる、少年のサバイバル・ストーリー。

【空想科学祭2011・BLUE部門】参加、ライトSF作品です。

## プロローグ 凍える闇

少年は虚空を漂っていた。

厚さ一センチの与圧スーツの外はマイナス二百七十度。生存に必要な空気も水もない、死の静寂が支配する世界だ。

周囲は漆黒の宇宙。スプレーを噴きつけたようなプラチナ色の銀河と数万のまたたかない星々に囲まれ、左手後方には太陽、右手には灰色の丸い月。そして正面には、大気の薄いベールをまとった地球が見える。

奇跡のように青くみずみずしい、母なる惑星。そこを離れたのはつい昨日のことなのに、はるか遠い昔のように思えた。

足元に堅固な地面がないというのが、こんなにも頼りないものだとは想像していなかった。ただただ、はてしなく落下しているような感覚だけが続く。

酸素残量は十五分。

星々を眺めながら死ねるのは、額を撃ち抜かれて捨てられるよりずっとましだと思っていた。真空の冷たい闇にひとり放り出されると、これほどまで絶望と孤独に身を切り刻まれるものだとは知らなかった。

左腕のコントロールパネルで見るかぎりスーツ内の環境温度は適温なのに、やたら寒くなったように感じられる。

死の扉は手を伸ばせば届く距離にあり、巨大な鎌をかざした死神が待ち構えている。だがその刃は一閃で命を断ち切るのではない。ゆっくりと弧を描いて鎌が振り下ろされるあいだ、自分は数分、想像もできない苦悶にあえぐことになるだろう。

ふと、隣家の少女が教えてくれた占いを思い出す。

『獅子座のあなたへ。今週はいいことと同じだけ悪いことも起こりそう。でもねばり強く頑張れば、運勢は好転します』

悪いことはもう十分すぎるほど起きた。

脳裏によみがえった少女のあどけない笑顔に向けて、少年は問いかける。

あと十五分。

「頑張れば、また地球できみに会えるのか？ きみとの約束を守れるのか？」

少女の幻影は、ただほえんでいるだけだ。

その問いの答えを知っているのは、運命の女神か、あるいは十五分後の自分自身か。

すべてのはじまりは六月はじめの日曜日、蒸し暑い昼下がりのことだった。

## ACT1 運命のファンファーレ

6・2・3。

四ケタの数字の頭三つにそれを選んだのは、六月二十三日が彼女の誕生日だったからだ。最後のひとは0から9まで、順にキーを押していくことにした。

6 2 3 0、6 2 3 1、6 2 3 3……。一連の数字を打ちこむたびに、画面の上部に表示された緑の星がひとつ消え、画面の左から右に白いボールが転がっていく。白は？はずれ？だ。

自室の総合情報端末で機械的にオンラインくじを引きながら、鷹<sup>たか</sup>塔<sup>とう</sup>響<sup>ひびき</sup>揮は？その日？のことを想像していた。

彼女をちよつと大人っぽい雰囲気のレストランに誘ってランチをとり、午後はバーチャルシアターで『刑事ハル＆レイ』劇場版最新作を観る。そして夕方、黄昏の公園を散歩しながら……いよいよ……。

思わず椅子の上で姿勢を正したところで、違う色のボールが画面を横切ったのに気づき、響揮ははつと夢想から覚めた。

いまのボール、金色だったんじゃない？

突然、大音量の明朗なファンファーレが部屋に鳴り渡った。

『大当たり〜！ 特等当選です。おめでとunggざいます！』  
「は？」

その言葉の意味がすぐには理解できず、響揮は訊き返した。

いまや三十インチの画面いっぱい色とりどりの紙吹雪が舞い、  
？コングラチュレーション！？という大きな文字が派手に点滅している。

『特等が当たったんですよ』

すぐにスピーカーから答えが返ってきた。同時に、画面にウィンドウが開いてスーツ姿の中年男性が現れた。ライブ映像を示す緑色の文字がウィンドウの隅にともる。

「特等、つて……」

いちばん上のヤツだよな、とぼんやりと考えた。

ワールドネット上にあるシリウス・オンラインモールはいまセール期間で、買い物をするに金額に応じてくじを引ける。はなから当たるとは思っていなかったのでうる覚えだが、記憶が正しければ、特等の賞品は……。

響揮はごくりと唾をのみこんだ。

にこやかな笑みを浮かべた係員が、得意げに告げた。

『そう、賞品はこれです！』

デジフレームの画面がぱっと切り替わった。

星空。

漆黒の宇宙に、無数のダイヤモンドを散らしたように星が輝いている。カメラはゆっくりと下にパンしていき、やがて、まるで奇跡のように青い地球が丸く浮かびあがった。その前景には、太陽光を受けてきらきら輝く半球形のガラスのドーム。

響揮はかすれた声でつぶやいた。

「ルナホープ・シティ」

月面都市・ルナホープ 三十八万五千キロの向こうにある、地球連邦市民あこがれの街。

息をつめて見守る響揮の目の前で、ドーム上空に特大のオレンジ色の3D文字が現れた。

「特等「ルナホープ・シティ訪問七日間ペア旅行ご招待」？」

響揮はまばたきするのも忘れて、呆然と画面を見つめた。信じられない。まさか、月旅行が当たったのか？ この俺に？

『よろしければ？ ヴイジ？の使用を許可していただけませんか？』

「えっ？ ああ、はい」

係員の声にわれに返り、響揮はあわてて画面に表示された？ ヴイジ許可？のアイコンに指を触れた。これでカメラを通じて相手と顔を見ながら話せる。オンライン通信では個人情報保護のため、ヴィジの使用は許可制だ。

『ありがとうございます』

ウィンドウのなかで係員がうなずき、ほえんだ。いつのまにか画面いっぱいのも月面都市の映像は消えていた。夢だったのかと一瞬響揮は疑い、目をぱちぱちさせる。

『では改めて、特等当選おめでとう』

響揮がまだ少年だと見てとったためか、係員の口調が親しげなものに変わった。

『これからシリウス・オンラインモールの顧客リストに登録されている事項を確認してもらおうよ。そちらはヒビキ・タカトウくん、だね？ 居住地はニッポン・トウキョウ、年齢十五歳、ワールドネット会員IDは 』

てきばきと必要事項を確認していく係員に、響揮は夢見心地のままただうなずいていた。連邦内では英語をベースにした連邦標準語が使われており、市民はほとんどが標準語を話せる。係員との会話も当然標準語だが、家族のあいだでは日本語で話している。

『詳細はいまメールで送るよ。確認して、なにかわからないことがあったらいつでも顧客担当室に質問してくれたまえ』

その言葉が終わらないうちに、メールソフトのウィンドウが開く。表示された？ルナホープ・シティ訪問七日間・ご招待内容？というタイトル文字を、響揮は釈然としない面持ちで眺めた。

『まだ信じられないって顔だね。でも当選は本当だ。今期のセールでは十五億本のくじが出るけど、特等はたった五本なんだ。きみ、とんでもなく運がいいよ』

このオンラインくじは、引いた日付・時間と四ケタの数の組み合わせで当選者を決めるシステムだ。三億分の一という確率がどれほど小さいのか、響揮には見当もつかない。

「はあ、そうなんでしょうね。全然実感ないけど」

なま返事をしつつ、メールをプリントした。画面で見ただけでは現実とは信じられなかったからだ。

だがプリントを手にしても、目は白い用紙の上をさまようばかり



で、肝心の内容はちつとも頭に入ってこなかった。正月におとそを飲みすぎたときのような、奇妙にふわふわした感じた。響揮は二度三度とまばたきをして、文字に意識を集中しようとした。

係員がウィンドウのなかでくすりと笑みをもらした。

『五百UDとは、きみくらいの年齢にしてはかなり高額の買い物だね。ショップはジュエリー・エレクトラ、ってことは、ガールフレンドへのプレゼントかな？』

図星をさされ、響揮は返事をする代わりに赤面してうつむいた。

『じゃあ月へも彼女と？』

からかいを含んだまなざしが注がれるのを感じたが、響揮は否定しなかった。

ガラスのドームを頂く公園で、ベンチにふたり並んで座り、かなたに輝く青い地球を眺める。そんな光景が頭をかすめた。

ふたりで行けたら、どんなに楽しいだろう……。

『タカトウくん？』

「えっ？ は、はい」

係員は、きみの心の中などお見通しだというようにウィンクをした。響揮はふたたび赤面して、プリントを意味もなく折りたたんだ。『読んでもらえればわかるけど、この賞品にはもうひと組のペアも正規料金の半額でご優待、っていう特典も含まれてるんだ。ご両親とも相談して決めるといい。それじゃ、よい旅を。ゆっくり楽しんできてくれたまえ』

ヴィジのウィンドウが閉じ、係員の姿が消えた。それから数分、響揮はデジフレームの前でただぼうつとしていた。オンラインモールのウィンドウには注目アイテムの3D画像が次々に流れ、耳の底ではファンファーレが永遠のリフレインルナエリアを続けている。

ルナホープ・シティは人口三万を有する月域の首都だ。十年前、一般の連邦市民に月域が開放されて以来、観光の拠点としても重要性を増している。

だが月への渡航費用はそれこそ目が飛び出るほど高額だから、誰

でも気軽にというわけにはいかない。そこに、いわば買物のおマケで行けるなんて。

「……目が覚めたら夢だった、とかいうオチだったら悲しすぎるぞ」不安になって手のなかのプリントを開くと、パリパリと乾いた音がした。響揮は蛍光色の文字を声に出して読んでみた。

「？市制施行十周年記念行事にわくルナホープ・シティ。あなたも平和行進に参加して、大統領とともに平和の輪をつくりましょう！？」

旅程表によると、出発は六月二十一日。一年のうちでルナホープがいちばん賑わうのが、月条約締結記念日の六月二十二日だ。市制施行十周年と重なる今年は記念行事があり、地球連邦大統領フランク・ロシュフオードも祝賀に訪れる。

月域は入域ビザ発行のための審査が厳しいのだが、両親は犯罪歴ゼロの模範的市民で、病院にはここ何年もお世話になっていないほど健康だから、問題はないだろう。

とりあえず両親に報告しようと思いつき、響揮は椅子を立った。

父親の佑司は交響楽団アジアン・フィルの主任指揮者だ。上海での演奏会を終えて二日前に帰宅し、今日は朝から階下の音楽室にこもっている。母親の真城子はケアセンターの嘱託従業員。

「響揮、入るぞ！」

突然、ドアの向こうから佑司の声がした。と思うと返事も待たずにずかずか部屋に入ってきて、「おめでとう！」と言うなり響揮を抱きしめた。

響揮は目を白黒させた。どうして月旅行が当たったことをもう知ってるんだらう？

「響揮、すごいじゃない！」

真城子が佑司の腕から息子を奪いとり、強く抱きしめてからぐりぐりと頭をなでる。

「ヒューストン行きの航空券、予約しといたから。頑張りなさいよ！」

響揮ははっとして問い返した。

「ヒューストンって……もしかして、AAのこと？」

「そうよ。なんだと思ったの？」

「二次選抜、通ったって？ほんとに？」

たちまち心臓がどきどきはじめて、響揮は手にしたプリントを思わずぎゅっと握りしめた。

四月に願書を出した地球連邦アストロノーツ・アカデミー 通称？AA？は、連邦唯一の公立宇宙飛行士養成機関だ。AAの卒業生は主に連邦宇宙省の管轄下、宇宙開発の最前線で任務につく。それは出世コースでもあり、宇宙省の上層部にはAA出身者が多い。受験にあたっての学校推薦を受けるだけでも難しいが、さらに三次にわたる選抜試験が行われる。一次選抜の基礎学力試験を通ったのでさえ奇跡だと、響揮は思っていた。

二次選抜では数人ずつのグループ実習と体質適性審査、面接で国内候補を絞る。三次選抜はヒューストン郊外にあるAA本校での一週間に及ぶ実技実習と面接。最終的な倍率は二百五十倍だ。

佑司が穏やかな笑みを浮かべ、響揮の肩に手を置いた。

「嘘なんかつくわけないだろう。いま学校から連絡があつたんだ。おまえの携帯端末にもすぐに連絡が来るはずだ」

「さあ、早く知らせてあげなさいよ」

真城子が意味ありげに片目をつぶった。

「え？ 誰に？」

「やだなーもう、決まってるでしょ。は・る・か・ちゃん」

その名前を聞いたとたん<sup>マイティフォン</sup>に赤面した響揮の頭を、真城子はまたぐりぐりと撫でた。

「このっ、正直者め！」

「ち、違うよ！」

「なあにが違うって？」

「それよりさ、これ」

響揮はくしゃくしゃになったプリントを両親に差し出した。

「ふたりとも、たしか六月の後半は休暇がとれるって言うてただろ？　優待割引があるからさ、四人までなら安く行けるよ」

「なにになに……ルナホープ・シティ七日間の旅ご招待だってえええ！？」

言葉の最後はほとんど悲鳴のようだった。

それからの両親の狂気乱舞の様子といったら、ふたりが興奮しやすい性格だとわかっていている響揮でさえあっけにとられたほどだった。やがて真城子が鼻息も荒く力説した。

「家族旅行をしましょう！　こんな機会はまだ二度と来ないわ！」  
佑司が勢いよくうなづく。

「もうひと組が半額になるなら、四人でひとり分の値段ってことだ。行かなきゃ損だな」

「じゃあさっそく天音に電話あまねしましょう！　今日は日曜だからきつと家にいるわ」

いそいそとディジフレームに向かう真城子に、響揮はあわてて声をかけた。

「いまボストンは夜中だぜ？　それに兄貴は行けないと思うよ。仕事があるからって正月にも帰ってこなかったくらいだし」

「なに言ってるの。休暇をとるのは労働者の権利、いいえ義務だわっ！　しかも月旅行よ？　天音だって行きたいはずよ！」

鷹塔家の長男・天音は響揮より六歳年上で、いまは北アメリカのボストンに住んでいる。東都大学を去年卒業し、大学院に進学する予定だったのだが、連邦政府のプロジェクトに引き抜かれてしまったのだ。勤務先は地球連邦政府・総合科学研究所。

響揮は兄と電話やメールでやりとりしているが、去年の秋以来、直接顔を合わせていなかった。しかも最近は電話もメールもほとんどない。

天音は二十回を越す呼び出し音のあとでようやく顔を見せたものの、熱をこめた母親の誘いにはきっぱりと首を横に振った。

『とても行けないよ、母さん。いま大事な仕事のまっ最中なんだ』

充血した目をこすりながら、行きたいのはやまやまだけど、思  
いだしたようにつけ加える。いつもの天音らしくなく、どこかいら  
いらした様子だ。伸びすぎて目にかかる前髪をうるさそうに払う仕  
草にもそれが現れている。半袖の白いＴシャツには、胸元にコーヒ  
ーをこぼしたらしい染みがあった。

家族旅行を断る理由は？大事な仕事？とやらだけではなさそうだ  
と、響揮は直感で思った。

「……なんかあるの、兄貴」

言外に「母さんに言えない理由が」という意味を含めて問う。ひ  
と月ほど前に親しい同僚が突然亡くなり、天音はかなり落ちこんで  
いた様子だった。それが関係しているのかもしれない。

天音の顔に一瞬、驚きに似たものがよぎったように見えた。しか  
し、それは次の瞬間には消え去り、代わりにあいまいな微笑が浮か  
んだ。

『めっちゃめっちゃ忙しくてね。遊びに行く暇があるなら寝ていたい  
のさ。それにしてもすごいな、月旅行が当たるなんて。その運を少し  
分けてもらいたいよ』

あからさまな話題転換だ。兄貴は絶対になにか隠していると響揮は  
確信したが、追及はしなかった。天音が無言でそれを強く拒んでい  
るのがわかったからだ。

「分けたら三次選抜の分がなくなっちゃうからダメ。あ、まだ言っ  
てなかったよね。俺ＡＡの二次通ったんだ。ラッキーが続くと思わ  
ない？」

『三次はいつ？』

「六月三十日から。って、二次通ったことはスルーかよ。ちょっと  
冷たくないか？」

『ラッキーで通れるほどＡＡは甘くないさ。響揮の実力なら問題な  
いと思ってた』

見慣れた、穏やかな表情で天音はほほえんだ。笑うと天音は父親  
の佑司によく似ている。なんととはなしにほっとして、響揮は片目を

つぶつてみせた。

「運も実力のうちなんだぜ」

『それは少し違う。実力がない奴に運はついてこないさ。昔、プールで僕が溺れたとき、おまえは誰に教えられたわけでもないのに遙香ちゃんの浮き輪を持ってきただろ』

「ああ……必要な気がしたから」

『それがおまえの実力なんだよ。あのとき浮き輪がなければ、おまえも僕に引つ張られて溺れていたかもしれない』

「よくわかんないけど、俺、褒められてる？」

しょうがないなというように、天音は笑った。

『もつと自信を持てよ、響揮。三次選抜で必要なのはそういう實力だ。だから僕はまったく心配してないが、まあ頑張れ』

「了解。兄貴は、あんまり頑張りすぎるなよ」

天音はなんにでもとりかかるまでは慎重だが、いったんはじめると脇目もふらず突っ走る傾向がある。現在の仕事はワールドネットのセキュリティ強化システムの構築で、？クロスネットオペレーター？という連邦政府公認のクラッカーといった性格の特殊ライセンスを持つている。門外漢の響揮には実感がないが、天音はその道で一目も二目も置かれる存在らしい。

仕事のことがプライベートかは知らないが、いまの兄にはモーツアルトと蜂蜜入りのココアが必要な状況だと思えた。天音が家になら、確実に勧めるところだ。

「俺に手伝えることがあったら言つて。なんでも協力するよ」

天音は驚いたように眉を上げ、つかのま響揮を凝視した。そしてふっと目を細めてうなずいた。

『サンキュ。月へは遙香ちゃんを誘えばいいよ。夏休みなんだし』

響揮はいま、六年制の中高一貫校、私立青稜学園の三年生だ。地球連邦の成立とともに日本の学校制度も世界基準に合わせられ、六月下旬から八月中旬までの長い夏休みが設けられている。

『それに推測だけど』

天音がにやつと笑いかけた。

『買ったのは遙香ちゃんへのバースデー・プレゼントだろ。だとしたら僕より彼女のほうに行く権利がある。な、響揮？』

「あ、兄貴」

さつと響揮は赤面した。

『凶星か、わかりやすい奴。で、なにを贈るんだ？』

「……ペンダント」

『へえ、それはまたしやれたものを』

天音がにやにやしながらさらに問いつめようとする気配を察して、響揮は必死に抵抗を試みた。

「シリウスのオンラインモールで買ったんだ。兄貴、シリウス・グループの人に知り合いがいるんだろ？」

この話題転換の効果はてきめんで、天音ははつとした様子で表情を改めた。

『……そんなこと、僕が言ったかな』

天音の声には警戒するような響きがまじっている。響揮は説明する必要があると感じた。

「ネットニュースで兄貴のプロジェクトの紹介してて、メンバーの写真が載ってたんだよ。一緒に見てた遙香が、この人は前にモデルやってた超有名人って教えてくれた」

天音を含めて十名ほどが映っているなかに、その女性はいた。波打つハニーブロンドにエメラルド色の瞳。細身だがめりはりのある体つきをしており、身長は男性と肩を並べるほど高い。そこだけスポットライトが当たっているのかと思うほど目を引かれる、絵に描いたような美女だった。

「たしかミス・ディアナ・フローレスだったかな？ シリウス・グループ総裁の娘なんだろう？ 彼女にもお礼言つといて。この月旅行はシリウス・グループの招待みたいなものだから」

『オーケイ、伝えておく』

天音はにっこりしたが、目は笑っていなかった。兄とその女性と

は仲がよくないのかもしれないと、響揮は漠然と思う。

『じゃあ、僕は仕事に戻るよ。響揮、遙香ちゃんによろしくな』

電話が切れ、ヴィジのウィンドウが閉じた。

真城子がため息をついた。

「週末だつてのに、夜中に仕事？ それだけ忙しいってことか。仕方ないわね。となれば善は急げ、遙香ちゃんを誘いましょ。ほら、響揮も来るのよ」

「ええ？ なんで俺が？」

「きみの買い物で当たった旅行じゃないの。責任持ちなさいよ」

「責任つてなんの責任？ 意味わかんないし」

「ぐだぐだ言わない！ きみだつて遙香ちゃんが来てくれたらうれしいでしょ？」

「そつ、それはもちろん……いや、だけど……」

響揮は抵抗したが、有無を言わず真城子に腕をつかまれ、部屋から引つ張りだされた。

幼なじみの三井遙香は鷹塔家の隣に住んでいる。父親は機械メー

みつい・はるか

カーの技術者で、いまはタイに長期出張中。母親は病院勤務の医師。両親ともに家を留守にしがちなので、遙香はよく鷹塔家に遊びに来ていて、天音や響揮とはきょうだい同然に育った。

真城子が階段を下りかけたところで、ピンポン、とチャイムが鳴った。

「きつと以心伝心つてやつね！ 幸先いいわ！」

響揮の腕を放して階段を駆けおり、玄関のたたきに裸足で下りて、勢いよくドアを開けた。

遙香が驚いた表情で家のなかをのぞきこんだ。

「あ、おばさん。こんにちは」

「やっぱり遙香ちゃんだ！ パーフェクトなタイミングねっ！」

「あの、あたしになにか？」

とまどいぎみの笑みを浮かべ、遙香は首をかしげた。長いストリート  
の黒髪のひと房が肩からさらりとすべり、白いブラウスに包ま



れた胸に乱れかかる。それをまた肩に払いのけ、遙香は手にした花柄のプラスチック容器を真城子に差し出した。

「これジンジャークッキー。たくさん焼いたからおすそわけ」

「わあ、ありがとう！」

言い終わらないうちに真城子は容器のふたをとって星形のクッキーをつまみ、口に放りこんだ。

「んー、おいし。やっぱり女の子はいいわねえ。失敗したな、男ふたりなんておもしろくもなんともないわよ、ほんと」

真城子は遙香がお気に入りで、自分の娘のように思っている。

「悪かったね、おもしろくなくて」

階段を下りながら響揮が言っと、遙香が彼を認めてにこっと笑った。

「ハイ、響揮」

ぱつと玄関が明るくなったように感じて、響揮はどきつとする。

それを気づかれたなくて、ぶっきらぼうに言った。

「ジンジャーってショウガだろ？ 薬味入りのクッキーなんてうまいのか？」

「わかってないなあ、甘いなかにピリツとするとこがイイのよ」

遙香は頬をふくらませた。

「ま、この味は子供にはわかんないわね。それより遙香ちゃん、大ニュースなの！」

真城子は口早に月旅行のことを告げた。

「ねっ、一緒に行きましょうよ！」

三井家とは家族ぐるみのつきあいで、一緒に旅をしたのも一度や二度ではない。それが隣の温泉でも三十八万五千キロ先の月でも、真城子は気にする性格ではなかった。

「ほんとにあたしが行ってもいいの!？」

遙香の頬が興奮に輝く。

「もちろんじゃない。天音は仕事で行けないって言うし、遠慮はなしよー!」

「でも……渚沙がかわいそうだな」

遙香の妹、渚沙<sup>なぎさ</sup>はいま九歳だ。循環器系の持病があるので、重力の変化が激しい月への旅は無理だとわかっていた。遙香の返事が予想でき、響揮は周囲に気づかれないうちに小さく嘆息した。

「……やっぱり行けないわ」

「そんなこと言わないで。こんなチャンスめったにないわよ！」

「そうだよ、遙香ちゃん」

二階から下りてきた佑司も口を添える。

「渚沙ちゃんとはしかにかわいそうだけど、病気のことがあるから仕方ないさ。僕からもご両親に話すから、どうだい？」

考えこんでいる遙香に向けて、響揮は心のなかで強く念じた。

イエスって言うてくれよ、頼む。だって、この旅行はきみのためのプレゼントを買ったオマケなんだから。きみにはいちばんに、行く権利があるんだ。

「ありがとう、おじさん、おばさん」

遙香はにっこりほえんだ。

「父と母に相談してみます。渚沙にも」

「いい返事を待ってるわ！」

真城子が、響揮の心を代弁するように声をかけた。

ぺこりとひとつおじぎをして、遙香はスキップをするような軽い足取りで帰っていった。

\*

\*

電話が切れてからも天音はしばらくシートを立たず、暗くなったヴィジのウィンドウを見つめていた。電話をかければすぐ家族の顔が見られるのに、もう何週間も連絡を怠っていた。ポストンはいま午前一時。東京がとてつもなく遠く感じられる。

「協力、か……」

弟の言葉を思い出す。本来天音はポーカーフェイスが得意なのだ

が、弟にはどういいうわけかそれが通じたためしなかった。いまの電話でもだいぶ怪しまれていたのはたしかだ。響揮の勘が鋭いせいだけでなく、天音自身が弟に対して無条件の信頼を寄せているためかもしれない。

それにしても、家族がシリウス・グループの招待で月旅行に行くとは、幸運と言ふべきか、大いなる皮肉と言ふべきか。

天音は頭を振つてもの思いを絶ち切り、オペレーション室を出てキッチンに行った。実家から電話が来る前は、夜中のオペレーションに備えて一時間ほど仮眠していた。朝からコーヒー以外なにも口にしていないが、空腹は感じない。

無理やり栄養剤を一本流しこむと胃が痛んだ。胃腸薬を二錠口に放りこみ、スポーツ飲料でのみくだす。それから冷蔵庫を開けてブールのアンブルを一本とり、慣れた仕草でセンサー式の注射器にセツトした。

直径七ミリほどの円筒の底を肘の内側の静脈の上あたりに当てる。すぐにセンサーが静脈を探し当て、皮膚にかすかな痛みが走った。この薬は通称を？ラッシュ？といい、オペレーションの処理速度を高める効果がある。これからすることを考えると二本打ちたいところだったが、副作用が出るのでやめておく。

スポーツ飲料のボトルを手に薄暗いオペレーション室に戻り、幅のあるゆったりしたシートに腰を下ろした。やや固めに調整されたグレーの座面は、長時間のオペレーションでも疲れにくい設計になっている。

まもなく視界が全体に明るくなり、ものがくつきりと見えるようになってきた。薬が効きはじめたしるしだ。

天音はデスク状の広いコンソールに体の正面を向けた。バイザーとマイク、イヤホンのついたヘッドセットをかぶり、センサーが組みこまれた幅広のオペレーションリングを両手の中指にはめる。

コンソール手前に並ぶボタンのひとつに触れると、正面に大画面のディスプレイが立ちあがった。このディスプレイは現実に目の前

にあるわけではなく、バイザー内側に張られた特殊な極薄フィルムに投影されたバーチャルなものだ。コンソール下部に構築された専用システムと連動し、高速かつ高精度なオペレーションを実現する。天音は左右と手前を合わせ、合計四面のバーチャル・ディスプレイを手早く立ちあげて、深呼吸をした。

「レディ」

準備を指示して右のてのひらをコンソールの端にある認証用スキヤナにかざす。システムがてのひらの静脈パターンと声紋を分析し、使用者が天音本人であることを確認する。天音はコンソールのキーボードに指を踊らせ、システムの要求に従っていくつかのコードを入力した。やがて？準備完了？の文字が、視界いっぱいに展開されたディスプレイ群の中央に浮かび、環境がオペレーションモードに切り替わった。

ここからが本番だ。

てのひらを正面ディスプレイに向け、指を鳴らしてメインの作業ウィンドウを開く。ディスプレイ自体はバーチャルなものだが、中指のリングに組みこまれたセンサーの働きによって、手で自在に操れる仕様だ。

昼間の作業で、必要なルート設定やプログラムの準備はすませていた。天音は流れるような動作でディスプレイのウィンドウをさばき、キーボードに指を走らせる。

作業途中で止めておいたファイル呼び出し、作業を再開。一方で、地球連邦総合科学研究所のローカルネットを管理するサーバに侵入し、自分のコンピュータをダミーとすり替えて偽の作業情報を置く。外から見ると、天音はプログラム作成作業をしているように見えるはずだ。

周囲に地雷プログラムを埋め込んで侵入者をブロックする処置をしてから、天音は右ディスプレイにファイアーウォールのファイル構成を全体表示させた。ファイアーウォールはローカルネットを侵入者から守る、いわば警備の壁だ。だが内部のスタッフである天音

には自分の庭のようなもので、あまたのフォルダーに納められたファイルのひとつひとつまで熟知している。

必要なファイルを苦もなく選びだし、要所にダミーや偽の分岐を設けながら脱出と侵入のルートを複数確保。五面目のディスプレイを右奥に重ねて立ち上げ、ファイアーウォールの監視プログラムを配置して警報と追跡プログラムをセット。念のために偽のクラッキングプログラムを仕掛けてから、不要になったウィンドウを閉じ、要らないファイルははじき捨ててディスプレイを整理した。

ここまでわずか二十秒。さっき打ったラッシュの効果で処理速度が上がっている。

天音は息をつき、スポーツ飲料のボトルをとって口に運んだ。監視プログラムのウィンドウを見つめて数秒待つ。アラームは鳴らない。

オーケー。

天音は深呼吸して目を閉じ、眉間の奥に意識を集中させた。

「ゴー・ディセント  
下降せよ！」

鋭く口にして、ぱつと目を開けた。

視界が先ほどよりさらに明るくつきりとして、ウィンドウのフレームの濃いブルーがあざやかに浮き出て見える。ウィンドウいっぱいに表示された文字が、まるで脳に直接映されているかのように一瞬ですべて読み取れる。周囲の時間の流れが極端に遅くなったような錯覚に陥る。

いや、錯覚ではない。

「ゴー・ディセント？ は自己暗示のキーワードのひとつで、ラッシュとの相乗効果でオペレーション速度を飛躍的に高める？ ラッシュダイブ？ 開始の合図だ。実際に口にし、耳から音声として認識されることで効果が発揮される。」

実際にいま天音が感じている時間の流れは、相対的に遅くなっている。その分体力と精神力の消耗は激しいが、時間との闘いになる場合には必要不可欠なスキルだ。

天音は立ち上げた計七面のディスプレイと無数のウィンドウを駆使し、複雑に絡み合ったネットワークの糸をたどって目的地を目指した。加速のかかった切れの鋭い動作でウィンドウを操り、キーボードに指を踊らせる。宙に舞うてのひらの一閃で開かれるウィンドウに、滝のようにとうとうと文字が流れていく。聞こえるのは自分のやや速い息づかいと、歌うような打鍵の音だけだ。

全世界に張りめぐらされたコンピュータ網に潜り、膨大なデータとプログラムの海を渡って任務をこなすオペレーティングのプロ通称？ビットダイバー？。天音はそんな電腦空間をすみかにする者のひとりだ。なかでも？クロスネットオペレーター（CNO）？と呼ばれる連邦政府公認のビットダイバーは、任務中のクラッキング行為をかなりの程度許され、ネットの海を自由に泳ぎ回れる。

天音がいま携わっている仕事の正式名称は、？第四次ネットポリスシステム強化検討及び再構築プロジェクト？。セキュリティが脆弱なまま巨大化の一途をたどるワイルドネットでは、悪質なネット犯罪があとをたたないどころか、年々増加している。ネット犯罪を摘発するネットポリスシステムは役立たずとの悪評が高く、強化と再構築は連邦政府にとって大きな課題だ。

しかし、いま天音がしているのは、その仕事とはなんの関係もなかった。関係ないどころか、ネットポリスに摘発されれば即逮捕され、CNOのライセンスを剥奪される犯罪行為だ。

天音はある地方大学のコンピュータ使用者のIDを盗み、いくつかのローカルネットとプロキシを経由して足跡をごまかしながら目的地に向かっている。

ときおり出合うネットポリスプログラムをかわすのはあまりにも簡単で、これはたしかに役立たずだと、内部の人間ながら情けなく思う。だが、天音と同類のビットダイバー　人間のネット捜査官がパトロールしている場合もあるから、油断は禁物だった。

エメラインは優秀なネット捜査官だったなと天音は思いだし、その記憶が過去形でしか語れないことに、つかのま強い哀しみをおぼ

えた。

ラッシュダイブ中に雑念は無用。天音はいまは亡き同僚の面影をきっぱりと頭から消し、先を急いだ。追跡者が来たときのためにトラップやダミープログラムをしかけながら進む。ようやく目的地が見えてきたときには、開始から三十分が経過していた。

相手の？城？は予想以上に堅牢だった。何重にも張りめぐらされたファイアーウォールが不正アクセスを監視しており、天音でも舌を巻く高いセキュリティの壁が築かれている。門番に当たるプログラムは一見して凶暴で、侵入者をその鋭い牙で恫喝するドーベルマンのごとき表構え。だが本体は、退散する侵入者の気配をたどってどこまでも密かに追う、狡猾な追跡プログラムだ。

ビットダイバー歴がまだ二年足らずなのに、これほどの壁を築けるとは。感嘆を超えてうすら寒いものさえおぼえながら、天音は不用意に手を触れないよう注意して、入りこむ隙間を探した。やがて、壁の構築には天音も知っているプログラマーが何人が関わっているようだとなった。

プログラマーたちにはおのおの癖がある。それを自分は熟知している。ここからは経験の差が優位に働くはずだ。

悪いが、僕のほうが上手だ。

慎重に狙いをつけて、天音は侵入を開始した。

## ACT 2 天井の銀河

その日、響揮のマイティフォンには友人たちからAA二次選抜通過祝いの電話やメールが立て続けに入ってきた。それも一段落した夕方、響揮は日曜の習慣でランニングに出る。曇っているが、空気には日中の蒸し暑さが残っており、少し走っただけで汗が噴き出してくる。

自宅から一キロほど離れた公園に着くと、中央広場の噴水の前でストレッチをする木田真夏きだ・まなつが見えた。

すぐに真夏は走り出し、背に青稜学園女子柔道部とロゴが入った白いTシャツが木立のあいだに消えていく。

真夏は遙香の親友で、柔道部では練習熱心な優等生だ。小柄で女子と体格が似ている響揮は、女子柔道部の顧問に頼まれ、試合前にとどき真夏の練習相手を務めている。

自宅を出るときにストレッチを済ませていたので、響揮はダッシュして真夏を追いかけ、横に並んだ。

「よう、木田」

「あ、鷹塔くん、おめでと！」

にこっとして、真夏はぐっと親指を立ててみせた。

「直接言いたかったからメールしなかったんだ。不義理な奴とか思ってたかった？」

ゆったりした真夏のペースに合わせて、響揮は歩調をゆるめる。

青稜学園では日曜は部活がないため、夕方には気の合う仲間数人とつれづれに集まってランニングをするのが、運動部の生徒の慣例になっている。

「思うわけないだろ、そもそもまだ合格したわけじゃないし」

「鷹塔くんならもう合格したも同じだよ。二次通ったの、東京Bブロックでは鷹塔くんだけだったんだってね」

「らしいな。って、俺は担任から聞いたけど、なんで木田が知って



るんだ？」

真夏はぺろつと舌を出した。走るリズムに合わせて、肩までの癖のない髪が軽く跳ねる。

「ふふ、秘密だよ。いろいろ情報源あるんだから」

「うわ、なんかやな言い方。変な情報集めてないだろうな？」

「なによ、変な情報って」

「俺の身長とか体重とかカラオケの十八番とか」

「それ、柔道部員なら誰でも全部知ってるし。残酷なようだけど、『ハル&レイ』のオープニングテーマはやめといたほうがいいよ。鷹塔クンには荷が重いつて」

「……遙香にも同じこと言われたよ。じゃあエンディングテーマにするかな」

「歌詞ないじゃん。よけい荷が重いと思う」

真夏はおかしそうに笑う。

「変な情報って言えば、鷹塔クンの潜水記録は知ってるよ。三分二十二秒でしょ」

「遙香から聞いたのか？ それは先週更新して、三分三十八秒になった。ってか、変な情報とか失礼だろ、並の人間はもって一分半くらいなんだぞ。三分半超えれば全国海女協会からスカウトされるレベルだ」

「海女って女の人しかねないんじゃないの？」

「男も普通になれるよ。イケメン海女が採った天然アワビは、市場でえらい高値がつくらしいぜ」

「へえ、そーなんだあ！」

「嘘だよ、ばーか」

響揮はにやりとして、ぽんと真夏の頭をたたいた。真夏がむつとした顔でたたき返そうとするのを、響揮はひょいと頭をそらしてよける。

「でもさ、採ったイケメン海女さんの写真をアワビに添えてお店に並べたら、メチャ売れだと思っな。うんうん、イケるよそれ」

「マジ？ 女ってわかんねー。誰が採ったって味はおんなじじゃん」  
いつものようにとりとめのない話をしながら、木立を縫うように  
設営された一周約一キロのランニングコースを周回する。小一時間  
で十周するのがいつものパターンだ。

八周したところで横手から、公園を囲む道路を自転車で走る遙香  
に声をかけられた。

「ハイ響揮、真夏！ 暑いのによく頑張るね！」

「よう、遙香」

木立とフェンスをはさんだ向こうに、響揮は手を振った。

「運動部は体力勝負だもん。手は抜けないよ」

真夏がちよっとげのある声で返す。

「遙香こそ、暑いのにどこ行くの？」

「病院。呼び出されちゃって」

自転車の後ろのかごにはボストンバッグが積まれている。公園の  
先には遙香の母親の勤務する病院がある。おそらく着替えを持って  
いくのだろうと、響揮は当たりをつける。

「おばさん、また夜勤になったのか？ 大変だな」

「いつものことだから」

遙香は笑い、大きく手を振って自転車のスピードをあげた。そし  
てちらちら後ろを振り返りながら、先の角を曲がって姿を消した。

はぁ、と真夏がため息をついて、ひとりごとのように言う。

「遙香には……かなわないや」

真夏の様子がいつもとちよつと違うと感じ、響揮は首をかしげる。  
そのとき、ダッシュしてきた友人の剣道部員ふたりに追い越された。  
「鷹塔、なにちんたら走ってんだ？」

「このくそ暑いのにランでデートかよ。うらやましいから抜いてや  
る！」

「ばーか、そんなんじゃねーよ！」

響揮はダッシュしてふたりを抜き返し、余裕で百メートルほどの  
差をつけて最後の一周を走り切った。公園中央の噴水の前で持参し

たスポーツ飲料をあおり、置き去りにしてきた真夏を待つ。

「うう、疲れたあ」

髪を乱した真夏が噴水の前で止まった。腰のホルダーからスポーツ飲料のボトルをとり、いっきに飲んでぶはつと息を吐く。首にかけていたタオルで汗を拭きながら、噴水の縁にどさりと腰を下ろす。

「鷹塔くん、ラスト一周速すぎ」

「木田が遅すぎだろ。そういえば今日は早瀬、とうとう来なかったな」

響揮はストレッチをしながら、卓球部に所属するクラスメイトの名前をあげた。

「AA二次通過祝いのメールもらったけど、ランに来ないとは書いてなかったのに」

「ああ……そうだ、ね」

その返事の微妙な間に気づき、響揮は不審げに真夏の上気した顔を見る。目が合うと、真夏はタオルで顔の下半分を覆って視線をそらした。さっき木田の様子がいつもと違うと感じたのを思い出す。

「もしかして木田……早瀬にコケられた？」

早瀬がラン仲間に加わったのは半年ほど前だが、目当ては真夏であることを響揮は知っていた。そもそも早瀬を日曜ランに誘ったのは響揮なのだ。早瀬が告白するタイミングをはかっているのも本人から聞き、早くしろとけしかけていた。

さて結果はと、かなり興味津々で真夏の答えを待つ。

「んー、あのさ、あたしはね……」

真夏はちらりと響揮を見て、すぐにまた視線をそらす。それからぱつと立ちあがってタオルを胸の前で握りしめ、くるりと体ごと響揮のほうを向いた。

「ええい、言っちゃうよ！ あたしは鷹塔くんが好きなの！」

響揮はアキレス腱を伸ばした姿勢のまま硬直した。

「ああ、あの、ええっと……わかってるんだ、うん、鷹塔くんは遙香しか見てないって」

顔を真っ赤にして、真夏は所在なげにタオルを両手でもてあそぶ。「いやでもさ、ほらなんていうかあれよ、その……もう、なんか言っつてよ鷹塔くん！」

「あ……ごめん、いきなりで……心の準備が……」

「う、やっぱり気づいてなかったんだね……」

「ご、ごめん」

「いいよ、わかってたし。あー、なんかすっきりした！」

夕闇が落ちかかる空を見あげて、真夏はふうと息を吐いた。タオルを首にかける。

「じゃあまた、明日学校でね！」

さっと身を翻して、真夏は駆け去った。

その段階になってようやく響揮はストレッチ姿勢をやめた。伸ばしすぎたアキレス腱がきしむ。

まだ残っているラン仲間に別れの手を振り、家へと軽く流して走りながら、響揮はぼんやりと真夏のことを考えた。

目鼻立ちの整った美少女タイプの遙香の脇ではかすみがちだが、真夏は明るくてチャーミングな、魅力的な女子だ。三年間ずっと気の合う仲間として過ごしてきた彼女が、自分に特別な感情を抱いているなどとは思いつかなかった。

家に着くと風呂場に直行し、ぬるめの湯に浸かりながら防水仕様のマイティフォンを確認した。

早瀬からは「玉砕した。しばらく日曜ランは休む。チキンな俺を笑ってくれ」と涙顔の絵文字つきで報告メールが入っていた。響揮は「ドンマイ」とだけ返し、ため息をつく。

真夏からは「これから友達でいてくれるよね？」とらしくないメール。「当たり前だろ、ばーか」と返して響揮はまたため息をつき、マイティフォンのストッパウォッチ機能を起動した。

湯気をたっぷり含んだあたかい空気を三度、深く腹の底まで吸いこんで、頭を湯の中に沈める。

「ぶはっ」

記録、一分二十四秒。やはりまったく集中できていなかった。

\*

\*

天音がデータの海から帰還したときには、すでにラッシュの効果  
が切れかかり、意識がもうろうとしはじめていた。緊張する作業は  
消耗が早く、効果の持続時間が短くなる。

「？ゴー・アセント浮上せよ？」

自分の意識にラッシュダイブの終了を命じる。天音は手に入れた  
データを慎重に暗号化してプロテクトをかけ、ネットから隔離され  
た記憶媒体に収納した。システムをシャットダウンし、むしり取る  
ようにヘッドセットをはずす。

呼吸をするのさえつらいほど、疲労困憊していた。天音は汗だく  
になった体を引きずるようにバスルームに行き、冷たいシャワーを  
頭から浴びた。水をしたたらせたまま、裸でベッドに倒れこむ。

すぐに悪夢が襲ってきた。

天音は体高が自分の二倍はあろうかという巨大な黒い猟犬に追わ  
れ、ついには捕まって、がっしりした太い脚で地面に押さえつけら  
れた。唾液に濡れた牙が眼前に迫り、鼻をつく異臭を含んだ息が吹  
きかけられる。鋭い爪が胸に食いこみ、激しい痛み思わず悲鳴を  
あげた。

そのとき。

「兄貴！」

なぜか弟が突然現れて猟犬に躍りかかり、手にしたペンダントを  
獣の眉間に押しつけた。瞬間、青みを帯びた閃光がペンダントから  
ほとばしり、まばゆくあたりを照らした。

猟犬は苦しげに咆哮して後ろ足立ちになり、どうと横ざまに倒れ  
る。

天音は解放されたものの、あお向けに横たわったまま起き上がれ  
ない。

ずっと、目の前に手が差し出された。

「協力するって言ったろ？」

無邪気な顔で、弟がにつこり笑いかけた。

夢はそこで途切れ、はっと目が覚めた。

天音は頭痛に顔をしかめながら、のろのろと上体を起こす。全身が鉛になったかのように重い。服を着る気力もなく、冷えた体にシートを巻きつけただけで、またぱたりとベッドに体を倒した。オペレーションリングをつけたままだったことに気づき、両方の中指から抜いて無造作にベッドサイドのテーブルに放る。

転がったリングのひとつが金属のフォトスタンドに当たり、澄んだ音が響いた。

天音は顔を上げた。

昨年引越すときに、成田空港で見送ってくれた家族三人を撮った写真だ。背景にはボストン行きの旅客機が見える。

天音は手を伸ばしてフォトスタンドを取った。肩を寄せ合い、ピースサインをしている両親の手前で、弟が笑っている。悩みなどなにもなさそうな、屈託のない明るい笑顔だ。

自然に笑みを誘われて、天音はそつとカバーガラス越しに弟の顔を撫でた。

「響揮。またありがとって言い損ねたな」

弟には実際に命を救われたことがあった。もう十年も前の夏、響揮と遙香を連れてプールに行ったときのことだ。

勝負を持ちかけたのは天音のほうだった。

「よし、今度は水の中で長く息を止めていたほうが勝ちだぞ」

並はずれた運動神経の持ち主の弟には、すでに平泳ぎ勝負で負けていた。六歳も年上の弟にかなわないなんて、兄としてのプライドが許さなかった。

どんなことでも兄に挑んでくる響揮は、もちろん勝つ気満々でうなづく。まだ泳げない遙香は浮き輪をかかえ、日光が降り注ぐプー

ルサイドにちょこんと座って観戦だ。

何度か深い呼吸をしてから、兄弟は声を合わせた。

「一、二の、三！」

夏休みの公営プールは混んでいて、兄弟が禁止されている潜水遊びをしても監視員は気がつかない。

先に息が続かなくなったのは響揮だった。弟がプールの底を蹴って弾丸のように浮上していくのを見ながら、天音は苦しい息をこらえて、潜水したままプールの底を移動した。まったく別の場所から上がって弟を驚かせてやろうと思ったのだ。

そして本当に突然、意識を失った。

あとで監視員に教えられたのだが、限度を超えて息を止め続けると陥る？ブラックアウト？という状態だった。体内の酸素が不足して窒息し、天音は溺れたのだ。

「兄ちゃん、兄ちゃん！ 兄ちゃん！」

呼ばれて気がついたのは、青ざめた顔の監視員の手でプールサイドに引き上げられる間際だった。響揮が片腕に遙香の浮き輪をかかえ、もう片腕でしっかり天音の脇を支えていた。

水を大量に飲む前に弟が見つけてくれたので、天音は溺死せずすんだのだ。

その後、救急車と両親が呼ばれた。監視員には注意不足を謝罪されたが、天音は自分が情けなくて、穴があつたら入りたい気持ちだった。

小さい子をふたりも引率していながら、守ってやるどころか自分が助けられるなんて、恥以外の何ものでもない。優等生を自認する天音にはなおさら、自身の汚点となる失態が許せなかった。

駆けつけてきた両親にはいつものお気楽な調子はなく、天音の顔を見ると母親はその場に泣き崩れ、父親は黙って天音を抱きしめた。しかってくればいいのにと、天音は居場所のない思いを抱えてただ慄然としていた。

幸い入院は免れ、帰宅した。その夜はなかなか眠れず、エアコン

の効いたなかブランケットにくるまって、何度も寝返りを繰り返した。

真夜中を過ぎたころ、誰かが部屋に入ってくる気配がした。

「……兄ちゃん？」

背にしたドアのほうから、遠慮がちな声が聞こえた。

なんとなくばつが悪くて、天音は寝たふりをしていた。すると響揮がブランケットに潜りこんできて、そっと背中から抱きしめられた。

幼い子供のつねで弟の体は熱く、腹部に回された小さな手はしっかりと汗ばんでいる。背中に弟の耳と頬が押しつけられるのを感じた。

「心臓の音って、音楽みたいだ」

弟がほえむのがわかった。

やがて規則正しい寢息が聞こえてきた。体に投げかけられた弟の腕から力が抜け、心地よい重みを感じたとき、天音は自分が泣いているのに気がついた。

兄弟喧嘩をした日は、夜になるとよく響揮がこんなふうベッドに入ってきて？仲直り？を要求する。まどろむ背中には謝罪や文句を言いやすいらしい。でも今夜、弟が伝えてきたのは言葉ではなく、生きているという事実そのものだった。

完璧な兄でありたい。兄たるものはどんなときもかつこよく、弟の前を歩いてなくちゃいけない。ずっとそう思ってきた。けれども、響揮の前にはそんなプライドなんて塵ほどの価値もなかった。

天音は体を返し、弟を正面からぎゅっと抱きしめた。響揮が眠ったまま吐息をつき、身をすり寄せてくる。小さな体のなかでたしかに刻まれている心臓の音は、音楽というより生命の謳う崇高な詩のように聞こえた。

「響揮、ありがとうな」

弟のやわらかい髪を撫でながら、天音は眠りについた。朝になったらもう一度、ちゃんとありがとうと言おうと考えながら。



天音はため息をついた。

結局ありがとうを言いそびれたまま十年がたち、「兄ちゃん」という呼び方はいつのまにか「兄貴」になった。でも響揮は少しも変わらない。さつき夢で見たそのままに、まっすぐなまなざしを投げてくる。ただ自分が兄であるというそれだけで、絶対の信頼と協力を約束してくれる。

天音はそっと、写真を胸に抱いた。金属のフレームが素肌にひやりとするが、すぐになじんであたたまる。

世界中のすべての人間が信じられなくなったとしても、弟だけは響揮だけは信じられる。

安心感がやわらかなベールのように意識を包む。そして天音は、夢も見ない深い眠りに落ちていった。

\*

\*

夕食を終えた響揮は二階の自室に入り、西に面した窓を開けた。

正面には遙香の部屋のベランダが見える。距離はわずか三メートル。部屋は暗く、遙香はいないようだ。

響揮は安堵と落胆のまじった、複雑な気分で空を見あげた。雨が降り出すのか湿度が高く、空は灰色の雲で覆われている。

だめだ、星空は期待できない。

響揮は部屋の明かりを消し、ベッドにあお向けになった。暗くなつた天井には一面に星がきらめいている。小一るとき、天音とふたりがかりで描いた蛍光塗料の星々だ。天の川にはスプレーをかけ、星雲や星団は色分けしてある。この人工の夜空を眺めると、どんなときも不思議に気持ちが落ち着く。

「蠍、白鳥、鷺、琴……」

夏の星座がひときわ明るく見える。晴れていればいま頭上に輝いているはずの星たちだ。中学の入学祝いに室内プラネタリウムも買

ってもらったが、響揮は兄と相談しながらひと夏かけてつくったこの星空のほうが好きだった。

「デネブ、アルタイル、ヴェガ……M1、M31……」

星をたどり星雲をたどり、そして心は宇宙そらを翔ぶ。

宇宙に限りない憧れを抱くようになったのは五歳のときだった。

テレビをつければルナホープ・シティ誕生のニュースが流れ、夜になると連邦市民の誰もが月を見あげる、そんな時代だ。

東京の夜空はお世辞にもきれいとは言い難い。それでも月の輝きや星々のきらめきは、幼い少年の心を揺さぶるに十分な魅力を備えていた。響揮はごく自然に天音の本棚にあった子供向けの天文入門書を手にとり、たちまち夢中になった。

子供向けとはいえ、細かなデータも含めれば情報量は膨大だ。響揮はそれらをすべて暗記した。星座や星の名前はもちろん、星雲や星団の名前、メシエ星表とNGC星表のナンバー、月面地図や火星地図、人工衛星や宇宙ステーションの軌道表も。

そして当然のように、将来は宇宙で働きたいと考えるようになった。

AAに合格すれば、夢への第一歩を踏み出せる。三次選抜は月旅行から帰って三日後だ。合格率は二十パーセント。わかつてはいるが、狭き門だ。

ため息をついた響揮の目の前を、すつと白い紙飛行機が横切った。響揮は跳ね起き、あわてて窓から首を出した。

「寝てたの？」

向かいの家のベランダで、手すりに肘を置いた遙香が頬杖をついてこちらを見ていた。逆光になっているせいで顔の表情はよく見えない。

「まだ九時だぜ？ 子供じゃあるまいし」

響揮が自分の部屋の明かりをつけると、遙香はちよつとまぶしそうに目を細めた。

入浴したばかりらしい。遙香は下着が透けそうな薄いタンクトッ

プとショートパンツ姿で、濡れた髪に無造作にバスタオルをかけている。彼女の身長は響揮よりも六センチ高い百六十五センチ。発達した胸やすらりと伸びた脚は、もう幼い少女のものではない。

目のやり場に困って、響揮はつんとそっぽを向いた。心臓の鼓動が大きくなり、頬が熱くなる。

「窓開けたままだと虫が入るよ。響揮、蚊に刺されやすいんだから気をつけなきゃ」

「よけいな世話だ」

「なによ、親切で言っただけなのに。てか響揮、なんでこんな時間超絶寝癖頭なわけ？」

響揮はあわててさつと髪に指を通す。

「ああ、ランのあと風呂入って、夕食まで音楽室のソファで寝てたからかな。遙香こそ、そんなかつこで外に出るなよ。恥ずかしくないのか？」

「いいじゃない、見てるの響揮だけだもん」

だからまずいんだと、響揮は心中で毒づく。俺だって男なんだぞ？

まあ、たしかに遙香とは裸で一緒に風呂に入った仲ではある。もちろん小学生になる前の話だが。遙香のおへその脇にはほくろが四つあって、それがちょうど南十字星の形に並んでいるものだから、よくつついてはからかったものだ。

いまもきつと、その星はそこにあるんだろう。確かめることはできないけれど。

「あ、なんかヘンなこと考えてるでしょ」

すかさず遙香が言うが、響揮は流して話題を変えた。

「それでどうなった？ ツアーのこと」

遙香はうれしそうな顔で片目をつぶり、右手を突きだしてVサインをした。

「行く！」

「やった！」

響揮は小躍りしたくなる気持ちを懸命に抑え、親指を立てるだけ

にとどめた。

「あ、でも渚沙は？ 納得してくれたのか？」

「ん、渚沙も自分の体じゃ月に行けないことはわかってるから」

ちよつと目を伏せて続ける。

「もともとその時期は、ママがお休みとつてみんなでパパに会いに行く予定だったの。だからあたしが抜ける感じがな」

「そつか。なんか悪いな」

「全然。あたしはタイより月のほうがいいもん。でも、ほんとにあたしが行ってもいいの？ 迷惑なんじゃない？ 天音さんは」

「迷惑なんてことないよ！」

響揮は語気も荒く言ってから、遙香の言葉の最後を聞きとがめた。

「兄貴がなんだって？」

「天音さんは行かないんでしょ？」

「母さんが説明したろ、兄貴は仕事が忙しいから行けないって」

「そうだけど……」

遙香は頭からはずしたバスタオルを手すりにかけ、まだ濡れている髪の毛を指でもてあそびながら、思案する表情になる。

むらむらと、響揮の胸に嫉妬の雲がわきあがってきた。

「兄貴が一緒じゃないと不満なのか？」

遙香がむつとした表情でこちらをにらんだ。

「そんなこと言ってないよ。せつかく家族で月に行けるチャンスなのに、あたしが邪魔しちゃう悪いかなって思っただけじゃない」

「旅行なら温泉にだってよく一緒に行ってるじゃないか」

「温泉と月は違うでしょ」

響揮はついと視線をそらし、南の空を見あげた。雲の切れ間にぽつぽつと星が見えている。星を探すふりをしながら、遙香と天音のことを考えた。

遙香は昔から兄貴が好きなんだ。

響揮は背伸びして兄に追いつこうとしていたが、六歳の年の差はどう頑張っても追いつけるものではなかった。おまけに天音は飛び

級を重ねて大学を二十歳で卒業した秀才だ。

遙香はそんな天音のあとを、響揮と一緒に追いかけていた。そのまなざしに憧れの輝きが含まれているのに気づいたのは、いつのことだったろう。

天音がボストンに移住したいまも、遙香はよくなつかしそうに天音の名を口にする。以前は響揮も気にしていなかったが、A Aの受験を決めてからは、とりわけそれが耳につくように感じられていた。ちらりと遙香に目をやる。

「響揮、あたしに隠してることあるでしょ」

唐突に遙香が言った。

「え？」

困惑して問い返すと、遙香はすねた顔をつくってぷいと横を向いた。

「A Aのこと」

「あ、そうだった。ツアーの件で頭いっぱい、話すのすっかり忘れてた。悪い！」

両手を顔の前で合わせて謝罪のポーズをとる。

「ひどいよ響揮、そういう大切なことは真っ先にあたしに話してくれなきゃ。おばさんからうちのママ経由で知るなんてありえない？」

非難めいた口調で口をとがらせたが、すぐに満面の笑みを見せた。

「おめでとう！ やったね！ 響揮なら絶対大丈夫って思ってたよ」

「おめでとうってのはまだ早いよ。三次もあるんだから」

照れながら響揮が答えると、遙香はふっと真顔になってつぶやくように言った。

「響揮も行っちゃうんだね……」

響揮はどきつとした。そして遙香の次の言葉を待った。自分が離れていくのを、遙香はどう思ってるんだ？

だが、耳に届いたのは期待とまったく反対のことだった。

「ボストンとヒューストンがもつと近ければいいのにね。そしたら

あたしが行ったとき、天音さんと響揮と一緒に遊べるじゃない？」

俺は兄貴のついでか、と響揮は苦々しく考える。

「ね、響揮？」

首をかしげて、遙香が同意を求めた。乾きかけの髪がぱさりと肩をすべり落ちる。

「知るかよそんなの。第一、まだ受かったわけじゃないし」

かたい声で答えた響揮を、遙香は不思議そうに見つめた。そのとき。

「おねえちゃま！ パパからメール来てるよ！」

明るい声がして、ベランダにひよっこりとおさげ髪の少女が顔を出した。

「あ、響揮だ！ ハイ！」

こちらに気づいて顔を輝かせ、小さな手をひらひらと振った。

「やあ、渚沙」

救われたような気持ちで、響揮は少女に挨拶の手をあげる。

「月に行くんですよ。いいなあ！ 渚沙も行きたい行きたい行きたい……でも無理だから、ママとタイに行くの。それでね、パパと会ってインドとパキスタンを旅行するの。タール砂漠をラクダで歩くんだよ。手を振ってあげるから、響揮も月から渚沙のこと見つけてね！」

「それはちよつと難しい注文だな」

大げさに悩む表情をつくると、渚沙はくすくす笑った。それから意味ありげに首をかしげ、右手で小さく？OK？？というしるしをつくった。

響揮は軽く親指を立てて応える。渚沙が得意げに胸を張って、つんと顎を上げた。

遙香はげんそうな顔で響揮と妹を見くらべ、やがてこれみよがしに肩をすくめた。

「じゃ、あたし行くね。おやすみ、響揮。また明日ね！」

「おう、おやすみ」

遙香の姿が消えると、待ってましたとばかりに渚沙が手すりから身を乗りだした。

「どう、うまくいった？」

「もうばっちり。とんでもないオマケもついて、言うことなしだ」

「ほんと！ 月旅行のオマケなんて、響揮ってば運がいいよね。渚沙に感謝してる？」

「ものすごく感謝してる」

渚沙は満足げにほえんだ。

『おねえちゃまは六月生まれの蟹座だから、守護星は月で、誕生石はムーンストーンなの。いつも身につけていられるアクセサリーがいいと思うな。指輪はまだ早いし意味深すぎるから、ペンダントがお勧めだよ』

そう言って買い物をけしかけたのは、このおしゃまな妹なのだった。

「ステキなの見つかった？」

「うん。俺的には最高に気に入ってる」

「でも響揮の趣味でしょ、ちよつとどこるかすごく心配だなあ。

買う前に渚沙に相談してくればよかったのに」

「ごめん。見た瞬間に気に入っちゃってさ。即、購入ボタン押しちやっただ」

中天高くかかる冬の満月を思わせる色の石が、三日月をかたどったプラチナ台に貴婦人然とした表情でたたずむ。そんなデザインだった。遙香の胸にそのペンダントが揺れるところを想像すると、銀行口座の残高がみじめな数字になることも気にならなかった。

「ま、どんなでも響揮からもらえばおねえちゃまは喜ぶと思うけど」

渚沙はふつとうらやましそうな顔をした。

「あ、それからね、響揮」

小悪魔的な笑みを口の端に浮かべ、人さし指を顎に当てる。

「響揮がA Aの二次通ったってわかったとき、おねえちゃまってば

けっこう動揺してたの。やっぱり響揮が好きなのよ。受かったら離れ離れになっちゃうでしょ、それがイヤなんだと思うな」

「……そうは思えないけど」

響揮が暗い声で返すと、渚沙は断固とした口調で言った。

「自信持ちなさいよ、響揮！ 絶対大丈夫なんだから。渚沙が保証する！」

九歳の恋愛カウンセラーではこころもとないなと、響揮は苦笑した。

「ま、結果は月から帰ってのお楽しみだな。とにかくサンキュ」

「ユアウェルカムだよ！ じゃ、おやすみ！」

渚沙はまたひらひらと手を振り、家に入ってしまった。ベランダのガラス窓が閉まり、ネコの絵柄のピンクのパジャマがカーテンの奥に消える。それを見送って響揮は微笑した。

おとなっぽい口はきくけど、あんなパジャマ着てるなんて、やっぱりまだ子供だよな。



### ACT3 聖域を侵す者

イタリア産の白大理石がふんだんに使われた広いバスルームを出ると、ディアナ・フローレスは赤いペディキュアを施した爪先を寝室の床に下ろした。敷き詰められたペルシャ絨毯の深い毛足を足裏で楽しみながら部屋を横切る。

マホガニーの四柱式ベッドは十七世紀フランス製のアンティークだ。バスタオルを無造作に足元に落とし、ディアナはベッドの上に裸体を投げだす。そして、淡いグリーンのカバーの表面をいとおしげに撫でる。まだしつとりと濡れている肌に、真珠のような光沢のある生地がやさしくまつわりつく。

ディアナは絹が好きだった。なかでも日本のある地域にしか生息していない天然蚕の糸で織られたものがとくに気に入っている。このほのかな緑は染めてあるのではなく、生糸そのものの色だ。いまや彼女のためだけにしか生産されない希少品でもある。

絹そっくりの人工繊維もあるが、本物にはとうていかなわない。それはたぶん、本物の絹はあまたの蚕の命と引き換えにつくられるから。犠牲があるからこそ、この布はこんなにも、せつないほどに美しいのだ。

しばらく絹の感触をめてから、ディアナは一糸まとわぬ姿のままゆつくりとベッドを下り、ベッドとおそろいのアンティークのドレッサーの前に立った。大きな鏡の前で自分がいちばん美しく見えるポーズをとり、内から輝くような裸体を見つめた。

白磁の肌、つややかに波打つ黄金の髪、切れ長の目。瞳は母親ゆずりのエメラルド色だ。百七十八センチの長身を縁取る体のラインは完璧なバランスを保ち、トップモデルとしてファッション界に君臨していた一年前と寸分も変わらない。

この体で、数え切れないほどの男を虜にしてきた。ひと目見ただけでプロポーズしてきた男も両手の指に余る。

それなのに。

ある男性の顔が頭に浮かび、ディアナは唇を引き結んだ。彼はわたしに、仲間として以外のどんな関心も示さない。

ディアナは鏡から視線をはずした。ウォークインクロゼットに歩み入り、スポーツ用のシンプルなタンクトップと五分丈のスパッツを身につける。髪を後ろでまとめながらクロゼットを出て、部屋の一角に設けられた小さなバーコーナーに行く。

時刻は午前四時を過ぎたところ。床から天井まである窓には遮光カーテンがかけられているが、窓の外はまだ夜明け前の薄闇だ。

「オーダー、スクリーンをつけて」

アーティフィシャル・インテリジェンス

部屋の電子機器を一括管理するAIに命じると、象牙色の壁にはめこまれたパネルの一部が広いスクリーンに変わり、3Dフォロの画像が浮かびあがる。

「南米ニュースチャンネル、平和共立党党首のサンパウロ党大会演説を」

映し出されたのは、ダークブラウンの巻き毛に小麦色の肌の青年だ。瞳はディアナと同じエメラルド色。ぱりつとした明るい色のスーツに細身の体を包み、演壇で熱弁をふるっている。

『……現政権にこれ以上の横暴を許してはならない。社会をこの不公平な政策が陥れた泥沼の混迷から救い出すためには、わが平和共立党が政権を執ること、すなわち私、ジョアン・フロ雷斯が新しい大統領として連邦を導くことが第一に重要なのであります』

大きな拍手と喝采を受け、若き党首は演壇を下りた。支持者がどつと彼をとりまき、握手を求める。すかさず護衛のシークレットサービスが飛びだしてきて遮ろうとするが、支持者とのふれあいを大切にするジョアンは、次々に伸ばされる手と握手を交わしていく。

そんななか、かわいらしい黒人の少女が必死な顔で小さな花束を差しだした。ジョアンはにつこり笑って花束を受け取る。そして得意気な顔で頭上高く掲げた。

その瞬間。会場に閃光が走った。

画面はすぐに真っ暗になり、音声も途切れた。数分後に映ったのはニューススタジオの映像だ。あわてた様子のキャスターが横手から来てデスクにつく。

『臨時ニュースです。サンパウロ時間、本日午前十時八分ごろ、平和共立党ジョアン・フローレス党首を狙った爆弾テロが発生した模様です。フローレス党首の安否については情報が入りしだいお伝えします』

ディアナは氷を浮かべたライムソーダを飲みほした。

連邦大統領選挙をこの秋に控え、ディアナの兄、ジョアン・フロレスは地元の南アメリカを遊説中だった。彼はブラジルを出発点とし、現在は世界中に一万を越す事業所と関連企業を抱える巨大コングロマリット、シリウス・グループ総裁ナタリア・フローレスの長男だ。フローレス家からの巨額の支援に加え、卓越した政治的才覚とカリスマ性で、三十二歳にして平和共立党党首となった。

ディアナは二杯目のライムソーダをグラスに注ぎ、スツールに腰を下ろした。長い脚を組み、カウンターに片肘について手に顎をのせる。スタジオではキャスターと解説者が事件の背景について推測を述べている。

『やはり、グリーン・サンクチュアリ法を支持する勢力の過激な反応ということでしょうか』

『その可能性は否定できませんね。フローレス党首の扇動で、グリーン・サンクチュアリ法廃止の動きが活発化していたのは事実です』  
グリーン・サンクチュアリ

緑の聖域法は、人類の経済活動で破壊され、縮小の一途をたどる熱帯雨林を守るための法律である。

地球の大气が生命の繁栄に適したバランスに保たれているのは、この広大な熱帯雨林の力によるところが大きい。だが森林破壊の進行はとどまるところを知らず、大気バランスが崩れて世界各地に異常気象が頻発している。

そこで連邦政府は赤道付近のいくつかの熱帯雨林地域を？聖域？  
サンクチュアリとして経済活動を禁止し、研究者とレンジャーを除いて人の立ち入

りを禁じる法案を議会に提出した。連邦議会がまっぴらになり、激しい論議が闘わされたが、結局は与党人民党のこり押しで強行採決されて法案は成立した。それが去年一月のこと。

『熱帯雨林は南極や月と同じく、全地球連邦市民の共有財産であるという政府の主張は、地球規模で見れば正論に思えますが』

『しかし実際に当該地域で生活し、自然の恩恵を受けていた国や住民、企業にはいわば晴天の霹靂ですよ。移住や転職にともなう補償も十分ではありませんでしたしね。連邦政府の強引さに対する不満が鬱積するのも当然でしょう』

『地球連邦の崩壊・分裂を予測した政治学者も多かったわけですが』  
『ええ、とくに聖域指定地域が多い中南米やアフリカ、東南アジア諸国では現政権への批判が噴出し、各地で大規模な抗議行動が……』  
『オーダー、スクリーンを閉じて』

ディアナがAIに命じると、スクリーンから画像が消えて、ふたたび象牙色の壁と同化した。彼女はからになったグラスをけだるげに振る。残った氷が澄んだ音をたてる。

「退屈。早く来ないかしら……」

つぶやいてグラスをカウンターに置き、スツールを下りて部屋を出る。裸足のままカーペット敷きの廊下を歩き、オペレーション室に向かう。

ドアを開けるとなじんだシートとコンソールに迎えられ、ディアナは口元をゆるめた。ディスプレイにはファイアーウォールに仕掛けたいくつもの監視プログラムの作動状況がモニターされている。

システムに未許可の侵入があったことに気づいたのは一週間前だ。コンピューターセキュリティの世界でトップクラスとされるプロを複数雇い、自らもクロスネットオペレーションの技術を駆使して構築したセキュリティの壁は万全だと自負していただけに、シヨックは大きかった。

犯人の見当はすぐについた。

アマネ・タカトウ。しなやかな黒髪と理知的な黒い瞳を持つ東洋

人の若者だ。

ネットポリスシステム強化プロジェクトチームのなかでも彼の才能は飛び抜けており、穏やかな物腰といやみのないユーモア感覚で、癖のある人物が多いチームのまとめ役になっている。

ディアナがチームに加わった当初、ビットダイバー歴の浅い彼女が天音から得るところは非常に大きかった。自身のコンピュータのセキュリティに関して、壁の構築にあたって天音から得た知識や技術を応用した。

だからこそ、自分のシステムに侵入できるとしたら彼しかない。とわかる。

天音には動機もある。彼はチームの同僚、エメラインの恋人だったのだ。

エメライン・ブローディはあせた赤い髪でそばかすだらけの、やせっぽちで内気な女だった。二十四歳といえばディアナと同じ年だが、高校生といっても通る外見をしていた。その彼女が先月、ラッシュダイブ中に突然死した。

エメラインのラッシュが密かにすり替えられていたことに、天音は気づいたのかもしれない。

そのときスピーカーから抑えた警告音が響いてきて、ディアナはディスプレイに注意を向けた。ウィンドウのひとつに侵入検知のサインがつき、文字列がスクロールしている。

ぞくりと、歓喜にも似た震えが背中を走り抜けた。

クラッキングに気づいてから天音の身边を監視していたが、彼が情報を盗んだという証拠は出てこなかった。エメラインの死の原因にもなった自分の？計画？について、天音はどこまで知っているのか。再度クラッキングに来たということは、十分な情報を得てはいないということだろう。

ディアナは手早くラッシュを一本打ち、ヘッドセットをつけてオペレーションリングをはめた。シートに身を落착けてバーチャル・ディスプレイを立ち上げ、鋭く己に命じる。

「ゴー・ディセント！」

データの海にダイブする。

自分のコンピューターにはいくつか、彼の興味を引きそうな偽の情報を収めたファイルを隠してある。天音ほどのビットダイバーになると、過去のクラッキングの痕跡をたどるのは至難の業だ。気づかれる危険はあっても、リアルタイムのほうを追跡しやすい。

？計画？はすでに動きは始めている。誰にも邪魔をさせるわけにはいかないのだ。

「つかまえるわ、天音。もうあなたの好きにはさせない」

\*

\*

月への出立を二日後に控えた朝、響揮のもとに天音からビデオメールが届いた。

月旅行に誘って断られた翌日、響揮は遙香が同行することをメールで天音に知らせ、マグカップの絵文字にモーツァルトの《バイオリンソナタ第三四番変ロ長調》を添付して送ってやった。ピアノとバイオリンが軽快に競う明るい曲だ。天音からは翌日、「39、4649」と精神状態が疑われる数字列が返ってきた。

それ以来の、久しぶりにまともな通信だった。天音の笑顔はいつものように穏やかだったが、頬がだいぶそげ、やつれた印象だ。無理をしているようだ、と、響揮は心配になる。

「響揮、いよいよあさって出発だね。準備で忙しいことと思う。少しでもどこづかいを送るから使って。渚沙ちゃんにお土産を忘れるなよ。それじゃ気をつけて、よい旅を。あ、それから例の件、よろしく頼むよ。ナンバーは十三だ。いまの時期はいいね。じゃあな」  
響揮は思わずまばたきした。

例の件ってなんだ？ ナンバーは十三だって？ いまの時期はいって言っても、月には季節なんかないぞ。

意味がさっぱりわからない。だが天音は例の響揮にだけわかる言

外のメッセージでこうも告げていた。「質問は受け付けない」と。

響揮は腕組みをして考えこんだ。いったいどうということだろう？

「響揮、もうそっち行っていていい？」

窓の向かいのベランダから遙香の声がした。

「ああ、オーケー」

学校も休みに入り、今日は遙香と旅程の最終的な相談をする約束だった。響揮は天音のメールを閉じ、マイティフォンをとって階段を下りた。ちょうど玄関に現れた遙香が、響揮を見るなり顔をしかめる。

「響揮ってば、また超絶寝癖頭だ」

「そっか？ 今朝はいちおう直したんだけど」

あわてて指を髪に通すと、遙香の後ろからひよいと渚沙が顔を出した。背中に回した手に楽譜を持っている。

「ハイ、響揮。ピアノ借りていい？」

「どうぞどうぞ。遙香、俺準備しとくからコーヒーいれてくれる？」

「了解。これクッキー。響揮が好きなプレーンとチョコチップ。星形はジンジャーだよ」

遙香が花柄の密閉容器を差し出す。

「おう、いつもサンキュ。ジンジャーは遠慮しとくけどな。渚沙は飲み物ジュースがいいか？」

「渚沙もコーヒー！」

「了解、ミルクと砂糖たっぷりね。響揮、おじさんとおばさんは出かけてるの？」

「買い物。いまになって持っていくものが足りないのに気づいたらしいよ」

勝手知ったる他人の家で、遙香はさつさとキッチンに向かい、響揮は廊下の奥にある音楽室に入った。外は小糠雨で湿度が高いが、この部屋はグランドピアノや弦楽器が置いてあるのでいつも空調がきいている。

シアターコーナーのテーブルにマイティフォンとクッキーの容器

を置くと、響揮はさっそくふたを開けてチョコチップクッキーをとった。歯を立てるとさくつと口のなかでほどけ、舌にビターチョコレートのほろ苦さが広がる。

「うん、うまい！」

プレーンも一枚口に入れてから、響揮は壁面のシアターシステムを起動し、旅行社から送られてきた3Dデモ画像を呼び出した。自動的に部屋の窓ガラスが遮光モードになり、照明が落ちる。壁にはめこまれた大型スクリーンが明るい銀色に変わり、中央に？月域トラベルガイド？という文字が浮かびあがる。

響揮は部屋の奥に行った渚沙に声をかけた。渚沙はピアノのふたを開け、楽譜を立てている。

「渚沙、まだ見てなかっただろ。ついでだから見てけよ」

画面が切り替わり、スクリーンいっぱいには漆黒の宇宙、次いで月の象徴ともいえるルナホープ・シティのガラスのドームが映しだされる。

「わあ、きれーい！」

響揮の隣に来た渚沙がため息をついた。

「渚沙も行けたらよかったなあ」

「病気が治ったらいつでも行けるさ」

「そうだね。じゃあ来年！ 響揮がAA入って宇宙船のパイロットライセンス取ったら、連れてってくれるよね？」

渚沙は首をかしげて響揮を見あげ、にこつと笑った。

「大気圏を出たらぐるっと地球をまわって、オーロラを見るのが夢なんだ」

渚沙の病気がそう簡単に治る種類のものではないということを、響揮は知っていた。

「どんな奇跡が起きたって来年は無理だろ。一年は地上飛行実習だけだし。軌道ステーションから月域限定の二級ライセンスなら三年次でとれるけど、大気圏を行き来するなら特殊一級ライセンスが必要だからな」



「それ、とるの大変なの？」

そもそも在学中に特殊一級ライセンス取得が義務づけられているのはパイロットコースの生徒だけだ。他コースの生徒は unnecessary にと膨大な学習量をあてたりせず、自分の専門に集中するのがふつうだ。なにしろ、卒業できなければ意味がない。

「かなり大変。よほどやる気がないと無理。俺はパイロット志望じゃないからな、とれるとしたら最速で七年後かも」

遙香がコーヒポットとカップやミルク、砂糖を載せたトレイを手に部屋に入ってきた。

「おまちどうさまー」

トレイをテーブルに下ろし、湯気のたつコーヒを三つのマグカップに注ぐ。

「サンキュ」

スクリーン正面のソファに腰を下ろし、響揮はさつそく自分のブルーのカップをとって口に運ぶ。

渚沙は響揮の隣にちょこんと座り、渚沙専用のピンクのキリンの絵のついたカップをとった。砂糖をスティック二本分入れ、ミルクをたぶたと注いでかきまぜる。カフェオレ色のコーヒをすすり、露骨に顔をしかめた。

どうやらまだ苦かったらしい。

噴きだしそうになるのをこらえ、響揮はクツキーの容器を渚沙のほうに押しやった。

デモ画像が終わると響揮と遙香は旅程の相談に入った。月面での初日には？アペニン山脈・溶岩洞窟探検ツアー？に参加することに決めた。？晴れの海・アポロ十一号メモリアルサイト訪問ツアー？も捨てがたいのだが、日程的に両方は無理だ。

月面ではルナホープ・シティの？外？に出るだけでひと仕事になる。シティの内部は厚い月の砂と強化ガラスのドームに保護され、地球とほぼ同じ成分の空気が満たされているが、一步外に出れば真

空だ。気密を保つ与圧スーツと生命維持システムなしには生きられない。そういった装備の装着には思いのほか時間がかかるからだ。

「現地滞在がたった四日なんて、短すぎるよね！ 二日目の宇宙遊泳ツアーははずせないし」

「メイニンイベントだもんな。父さんたちと合流したら、氷の海遊覧ツアーだろ」

「あとはエアバスケットとムーンサーカスを観て、時間があればスパーランポリンにトライ。そんなところかな？」

重力が地球の六分の一の月面では、どれも高度にアクロバティックでもしろい。

ポットのコーヒーを飲みほしてしまったので、遙香はおかわりをつくりに席を立った。響揮も立ちあがり、ピアノを弾いている渚沙のそばに行つて譜面をのぞきこむ。去年までは週に一度天音が教えてやっていたのだが、いまはたまに時間が合うときに佑司が見てやる程度だ。

「《子犬のワルツ》か。通して弾いてみてよ」

響揮は演奏記録用のレコーダーを作動させる。

「えー？ まだへたくそだよ」

そう言いながらも、渚沙は二分半ほどの曲をちよつとつかえながら弾きあげる。

「すごいじゃないか、楽しそうな感じがよく出てるよ。あの超テキトーな親父先生の指導だけなのに、たいしたもんだ」

響揮がぐりぐりと頭を撫でると、渚沙は照れくさそうに肩をすくめた。

「もうブルクミュラーは終わったのか？」

響揮は練習曲集の名をあげる。自分には音楽の才能が絶望的に欠けていると悟った八歳までは、自身も使っていたものだ。

「途中だけど、もうやめたの。音楽家になるわけじゃないから、好きな曲を楽しく弾くほうがいいもん」

「ああ、それ賛成。まあ俺は楽器弾いても楽しくないけどな。むし

る苦行？」

「そのかわり響揮はスポーツめちゃ得意でしょ」

「いくらスポーツが得意でもなあ、カラオケの採点で五十点いかないってどうよ？」

ため息まじりに言う、渚沙はくすくす笑った。

「おねえちゃまだって八十点くらいだし。自分で思ってるほどうまくないよね？」

「……命知らずだな。遙香に聞かれたら、今夜の夕食のおかずピーマンだけになるぞ、きつと」

「げー、飢え死にしたほうがマシ。ま、デートでカラオケはタブーってことね。……あの日のことは決めたの？」

「あ、ああ……だいたいは」

あの日とは、もちろん遙香の誕生日、ルナホープに着いて二日目のことだ。響揮も段取りは遙香に内緒でいろいろと考えている。

「おねえちゃまって、ああ見えてけっこうロマンチストなのよ。場所とセリフはよく考えてね。間違っても公園のトイレの前とかでしちゃダメだよ」

渚沙が真剣な顔で言う。響揮は内心で苦笑しながら調子を合わせた。

「了解。でもそういうのってなりゆきだと思っただけ」

「ムードがよければその後のなりゆきもよくなるの。女の子ってそういうものよ」

さも経験ありげに渚沙がうなずいたので、響揮はついからかいたくなる。

「渚沙は？ 誰か好きな人がいるのか？」

渚沙は黒目がちの大きな目を見開き、つかのま響揮を見つめた。長いまつげの陰をあこがれと悲しみの色がよぎる。それが一瞬、彼女をひどく大人びて見せた。

どんな言葉よりも雄弁な、渚沙の答え。

響揮はなにも言えず、ただ渚沙を見つめ返した。

「あのね、響揮。……七年後じゃなくてもいいよ。渚沙は病気を治して、ずっとずっと待ってる。だから……約束してくれる？」

その声には、どれほど願っても得られないものへの渴望がにじんでいた。渚沙は顔を伏せ、小指を立てた小さな右手を響揮の前にかげた。

「ライセンス取ったら、誰より先に渚沙を乗せてくれるって。そして月に連れてつてくれるって」

「渚沙……」

あふれる思いを、受け止めてやりたかった。響揮は自分も小指を立て、細い指にそつとからめた。

「約束だ」

刹那、渚沙の指に力がこもった。それから渚沙はぱつと指を離し、手を膝のあいだにしまいこんだ。下を向いたまま数秒のあいだじっとしていたが、次に顔を上げたときには、もういつもの無邪気な九歳の少女の顔に戻っていた。

「ありがと。じゃ、夏休みの宿題やらなきやいけないから、帰るね」

とん、と椅子から勢いをつけて下り、ひったくるように楽譜をとって、駆け足で部屋を出ていった。

響揮は一瞬、渚沙を追いかけて抱きしめてやりたくなった。響揮に対してもまるで姉のようにふるまっているが、渚沙はせいっぱい背伸びをしていたんだらう。天音の背中を追いかけていた、かつての自分のように。

「あれ、渚沙は？」

ポットを手に戻ってきた遙香がいぶかしげに訊いた。

「……夏休みの宿題するから帰るって」

響揮はピアノの鍵盤を軽くふいてふたを閉じた。

「宿題？ そんなのいまじゃなかったっていいのに、へんな子」

「タイに行く前に片づけたいんだろ、きっと」

ソファに戻り、響揮はクッキーに手を伸ばした。ふと気づくと星形のクッキーをつまんでいた。

しまった。これはジンジャークッキーだ。ずっと避けていたのに。だが手をつけた以上食べないわけにはいかず、おそろおそろ口に入れる。ほんのりと甘く、ぴりりと舌をさす香味があった。

「味、どう？」

心配そうに遙香がたずねる。

「ん。……食べるよ」

響揮としては褒めたつもりだったが、遙香はぶつと頬をふくらませて、「いいよ、無理して食べてくれなくても」とすねた声で言った。

\*

\*

午後、響揮の両親は帰宅するやいなや旅行用の荷物をリビングいっぱいに広げ、パッキングをはじめた。これだけの荷物が制限重量内に収まるのかと、響揮は眉をひそめる。スペースシップが大気圏を脱出するために必要な燃料は重量に比例するから、荷物の重量制限は厳しいのだ。

響揮はうんざりした顔で、洗面所で見つけた書類を真城子の顔の前でひらひらさせた。

「母さん、これは捨てちゃっていいの？」

「なにそれ」

「参加誓約書。旅行社に返送しないといけないはずだけど？」

「そうそう！ 探してたのよ。ありがと、見つけてくれて」

どこにあったのか訊けよ、と響揮は心のなかで突っこんだ。なぜ大事な書類が洗面所の、しかもゴミ箱になど入っていたのか、響揮には見当もつかない。

「薬局には行ったのか？ 宇宙酔いの予防薬のまないと、絶対気分悪くなるよ。とくに母さんはバスでも酔うんだから」

「それは今日買ってきたわ！」

真城子は胸を張り、小さな箱を掲げてみせた。

「……？スペースヨイノン？？」

安易すぎるネーミングが非常に怪しい。本当に効くのかと響揮は疑った。なぜ市販薬にはこういうやつつけなダジャレ商品名が多いんだろう？

「オーケイ。カルシウム吸収促進剤と筋力低下防止剤は？」

「カル……なに？」

真城子にはっこりして首をかしげた。

「いや、いい。忘れて」

響揮は手を振った。低重力環境で過ごす骨のカルシウム不足や筋力低下が起きる。A Aの三次選抜を控えた響揮には対策が必須だが、一週間程度の旅行だから両親にはさほど問題はないだろう。

「んでさ、荷物減らさないと空港で重量チェックにひっかかると思うよ。制限七キロってわかってる？」

父親のスーツケースから、どこからどう眺めても折りたたみ傘に見える物体をつまみあげ、響揮はため息をついた。月面都市で傘が必要か？ 旅行社がよこした持ち物リストにはなかったと、百二十パーセント断言できる。

「これはいらないだろ、父さん。そもそもスーツケースなんて重い箱に詰めるのが間違ってるよ。案内書ちゃんと読んだのか？」

佑司は悪びれもせず肩をすくめてみせる。

「苦手なんだよなあ、文字がいつぱいあるのって」

父親が音楽以外のことにひどく不器用なのは、響揮もわかってはいた。デジフレームやマイティフォンも最小限の機能しか使えない機械音痴でもある。

「なんか不安になってきた。ほんとにふたりだけでルナホープにたどりつけるのか？」

「そう思うなら手伝ってよ」

真城子がむっとした顔を響揮に向ける。

「えー？ 俺だって暇じゃないんだけど。帰ってすぐ三次選抜だから準備もあるし」

「ぐだぐだ言わない！ あたしたちがトラブル起こすと、結局きみが困るんだよ？」

正論だ。響揮はまたひとつため息をついた。

「まず軽いバッグを探さない」と

そのとき電話のコール音が響いた。ディジフレームの近くにいた佑司が、すぐにやわらかな声で応じた。

「はい、鷹塔です…… ああ、シリウス・ツアーズの。お世話になってます…… えっ？ なんですって？ 日程を変更！？」

にわかに緊迫感を帯びた佑司の口調に、響揮と真城子は顔を見合わせる。佑司に手招きされて、ふたりはディジフレームに近づいた。ヴィジのウィンドウで担当者が申し訳なさそうにぺこりと頭を下げる。

「事情をご説明しますので、ご協力いただければありがたいのですが……」

額の汗をハンカチでぬぐいながら話しはじめる。

「市制施行十周年の記念行事がありますので、わが社も月行きの口ケット便の増発を前提に予約をお受けしていました。しかし本日、航路で貨物船の爆発事故があった関係で増便がキャンセルされてしまいました。事情をご理解いただいて、三日遅れの便に旅程を変更していただけないでしょうか」

「ああ、そのニュースは聞いた。たしかシリウス・スペースカーゴ社の船だったな。おたくのグループ会社だろう」

佑司が責めるような口調で言う。

「ええ。申し訳ありませんとしか……。もちろん相応のサービスをさせていただきます。宿泊もできるかぎりハイクラスなホテルに」

「しかし、息子は三十日からA Aの最終選抜に臨むことになってましてね」

担当者は驚いたように片方の眉を上げた。

「ほう、A Aに。それはすばらしい」

「ありがとう。だからねきみ、月から帰ったその日が試験というのではまずいんだよ」

『では来月の出発ではいかがです?』

「僕と妻の休暇は今月いっぱいしかない」

『では』

「だからどうしても、あさって出発のコースでなければ困る」

『しかし四名さまというのはなかなか空きがありませんので……お客さまは優待コースでもありますし』

「優待コースだからわれわれが我慢すべきだっていうのか?」

佑司は明らかに憤慨した顔つきでまくしたてた。

『それを理由に旅程を変えさせるといふなら、きみたちはオンラインモールで買い物した客すべてを侮辱することとなるんだ。シリウス・グループは信頼に値しないとワールドネットに意見広告を出すか、それでもいいかな?』

ふだんは穏やかな佑司だが、こういった理不尽なことには黙っていられない性格で、がぜん強気になる。

「まあまあ、佑司さん」

青ざめた担当者を気の毒げに見やって、真城子が仲裁に入った。

『折衷案があるんだけどな。ねえ、ふたりだけ予定どおり発つての、できない?』

特上の笑みを向けると、相手はほっとした顔になって手元の端末のキーをたたき、うなずいた。

『ええ、それでしたらなんとか。ホテルもクレセントのツインルームをおとりできます。最高級ホテルですよ、運がいい。ちょうどキヤンセルが出たところでした。あと二名の方は……翌日の便ではないかがです?』

「すてき! それでお願い」

『では先に行かれる方のお名前を』

「ヒビキ・タカトウとハルカ・ミツイ」

真城子の答えにはあまりにもためらいがなさすぎたので、響揮が



事態をのみこむまでに数秒かった。

「ちよつと、母さん！」

叫んだときには遅かった。担当者の指は名ピアニストさながらにキーボードを走り、予約変更終了の文字がウィンドウに現れる。

呆然として言葉もない響揮の前で、真城子は通話を切り、得意げに胸を張った。

「われながら名案だわ」

「どーいうつもりだよ、勝手に決めちゃって」

ようやく口を開いた響揮に、真城子はすました顔を向ける。

「だってこれがいちばん合理的でしょ？ あたしは佑司さんと久しぶりのハネムーン気分を楽しめるし」

「父さん」

響揮は助けを求めるように父親を見たが。

「さすがマキちゃん！ いいこと考えついたね」

佑司は感嘆のまなざしを真城子に注ぎ、ほれ直したとでも言いたげな顔をした。

だめだ、このふたりはどこか頭のねじがゆるんでいる。響揮は絶望的な気分でも抗議する。

「でも俺困るよ。いや、遙香が困るじゃないか。俺と父さんが先に行って、母さんたちはあとから来れば」

「ごちゃごちゃ言わない、もう決まっちゃったんだから」

真城子は人さし指で響揮の額をつんとつつき、にやつと笑った。

「しっかり遙香ちゃんのハートをつかみなさい！ でも言っとくけど、泣かせるようなマネしたら許さないからね」

「そーゆー問題じゃないだろ！？」

「まあ、おまえのことだから大丈夫とは思うが……」

言いながら顎に指を当てた佑司の目には、わずかに不安の色が見てとれる。やはり父親のほうが頼れると響揮は思ったが、それもつかのま。

「押しは大切だが無理強いはいけない。僕がマキちゃんにプロポー

ズしたときも　おっと、こいつは男同士の話だ。あとでゆつくりな」

意味ありげににんまりした父親に、響揮は思わず口をぽかんと開けてしまった。まったくどういう親なんだ。常識ってものがないのか？

そう考えて、響揮は顔をしかめた。この両親にかぎっては常識などあってないようなものだ。長いつきあいで、それは十分すぎるほどわかっていた。

ともかくも、遙香に事の次第を告げるといふ厄介な問題を解決しなければならぬ。

顔をしかめたまま家を出た響揮が、隣の家玄関の前でベルを鳴らすのをためらっていると、後ろから声をかけられた。

「響揮！」

振り向くと、腕に買い物袋を下げた遙香が立っていた。

「……遙香」

響揮はごくりと唾をのみこんだ。やけに喉が渴いているような気がする。

遙香がわずかに首をかしげた。

「どうしたの？　なにか急用？」

「……じつは……」

話を聞くと、遙香は「えっ！？」と言って目を丸くした。

「母さんはそれがいちばん合理的だって言うんだけど……やっぱり気になるだろ？」

「……ツインルームって、響揮と部屋一緒ってこと……だよね？」

内心動揺しているらしく、遙香は髪の毛の端を神経質にもてあそんでいる。だがやがて、こくりとうなずいた。

「いままでだって部屋が一緒のことはあったし、気にしないよ。クレセントに泊まれるチャンスだもん。あのホテル、あこがれてたの。ほんとラッキーかも！」

「そっか。ならオーケイだね？」

響揮がほつとした顔ではほえむと、遙香もまたほつとした表情になった。

「じゃ、あたし夕食の支度しなきゃならないから。バイ！」

\*

\*

遙香は玄関のドアを閉めた姿勢のまま、遠ざかる響揮の足音を聞いていた。

心臓がどきどきしている。

「もう、真夏のせいだ。あんなこと言うから……意識しちゃうじゃない」

親友に責任を転嫁してひとまず気を取りなおし、買い物袋をキッチンに運んだ。ジャガイモの皮をむきながら、ついさっき会った真夏との会話を思い返す。

近所のスーパリーの入口で偶然会った真夏は、ふわつとしたスカートの黄色いワンピースを着ていた。今日は美容院に行ったのと言い、ゆるくパーマをかけて毛先を遊ばせた髪を自慢げに振る。柔道着姿の真夏とは別人で、急に大人っぽくなったように見えた。

「へえ、すつごく似合ってるよ！」

遙香がお世辞でなくそう言つと、真夏はふふつと含みのある笑みをもらった。

「あたしも頑張らなくちゃと思って。遙香のカレなんかよりずーつとイイ男、つかまえるんだ！」

「カレって誰よ、まさか響揮？」

「なあによ、いまさら。月にも一緒に行くくせに」

真夏は怒った口調で唇をとがらせる。

「あれは家族旅行みたいなものよ。天音さんの代わりにあたしが行くだけ」

「あのねえ遙香、いいかげん幼なじみごっこは終わりにしてくれない？　じゃないとあたし、本気で彼をとっちゃうよ？」

「……どういうこと？」

「鷹塔クンとつきあうってことだよ、もちろん」

真夏は挑むような視線を遙香に向けた。

「もう告白もしたんだから」

「告白って……」

思わず遙香の声はうわずった。

「まあなんていうか、勢いってやつよ。彼、死ぬほどびっくりしたみたいで、まだちゃんとした返事もらってないんだけどね。あたしが鷹塔クンを好きなこと、遙香だってちよつとは気づいてたんじゃないの？」

「ううん……ごめん、全然」

どうしようもないなという顔で、真夏は息を吐いた。

「たしかに、あたしも遙香に遠慮して表に出さないようにはしてたけどさ。遙香が知らないだけで、鷹塔クンを好きな女子ってじつはいっぱいいるんだよ。遙香、近くにすぎるから彼のよさがわからないんじゃない？」

「……そんなことないよ」

「じゃあままごとは卒業して先に進めば？ わかってるの？ 八月の半ばには彼、ヒューストンに行っちゃうんだよ？ 三次は実技でしょ、鷹塔クンが受からないわけないもん」

真夏に言われるまでもなかった。響揮が二次選抜を通ったと聞いたとき、うれしさと誇らしさの次に胸に浮かんだのはそのことだったのだ。無事に三次も通過して合格してほしいと願ってはいたが、心の片隅にそれを喜ばない自分がいるのもたしかだった。

答えない遙香に、真夏の疑いの目が注がれる。

「もしかして遙香、まだ鷹塔クンをお兄さんと比べてるの？」

「天音さんと？」

「うん」

「そんなことあるわけじゃない！ 響揮と天音さんは全然違うんだから。響揮は天音さんみたいにやさしくないし、ガサツだし、

身長低いし、寝起きはいつも超絶寝癖頭だし」

「ストップ！ 遙香、それマジで言ってる？」

あきれたという表情で真夏は遙香を見つめ、姿勢を正して腕組みをした。

「だって……天音さんは理想のお兄さんなんだもの」

「でもさ、お兄さん引つ越してからもう一年近きたつよね？」

「うん。会えなくて寂しいよ。天音さんのバイオリンもしばらく聴いてないな。響揮は楽器でんでダメだからなあ。歌うほうもひどいけど。あ、それは真夏も知ってるよね、一緒にカラオケ行ってるし」

「……………」

絶句した真夏を見て、遙香は首をかしげる。

「ねえ遙香、この際はつきり訊くけど、鷹塔クンのことどう思ってるの？」

「どうって……いわゆる幼なじみってやつ？ 腐れ縁とも言つかも」

「ごまかさないでよ。男子としてどう思うのか訊いてるの」

「男子としてなんて……考えられないよ。響揮は響揮だもん」

真夏は本気で怒った顔になり、声を荒らげた。

「遙香はずるい！ 最つつ低！ 遠慮してたあたしがバカだった。月から帰ってもそんなこと言ってるようだったら、戦闘開始だからね！」

真夏はさよならも言わずにくるりと遙香に背を向け、振り返りもせず早足で去っていった。

遙香は包丁を握る手を止め、長いため息をついた。

真夏が怒った理由がよくわからなかった。けれども、真夏が響揮に告白したという事実が思ったより胸にずしんとこたえているのはたしかだ。さっぱりした性格の真夏には、男子の友達も多い。響揮もそんななかのひとりなのだろうと単純に思っていた。

真夏は柔道部で三年間響揮と一緒に、ときどきは練習相手にもなっている。日曜のランニングもいつも一緒に。自分より真夏のほう

が、響揮のことをよく知っているのかもしれない。

「あたしに遠慮してたって言われてもね……そんなこと頼んでないし」

でも。もし真夏が遠慮なんかしないで、もっと早く響揮に告白していたらどうなっていただろう？

響揮も真夏のそばではすごく楽しそうだ。告白されたことも自分には黙っていたうえ、まだ返事をしていないらしい。つまり迷っているということだ。

もしかしたら……響揮も真夏が好きなの？

「おねえちゃま！」

ふいに声をかけられ、遙香は飛びあがるほど驚いてジャガイモをとりおとした。ゴロゴロと床をころがっていくジャガイモを、小さな手がすばやく受けとめる。

「どおしたの？ ぼーっとしちゃって」

「ど、どうもしないわよ」

まだ半分もむけていないジャガイモを受けとり、遙香はまた長いため息をつく。

「渚沙、さっきママからメール来たよ。夜勤になっちゃったから帰るのは明日の朝だって」

「またあ？ ママほんとにお休みとれるのかな、心配だよ」

「お休みとるからいま忙しいんじゃない？」

「そっかな。おねえちゃま、今夜のおかずなに？」

「スペイン風オムレツ」

「わーい！」

渚沙は歓声をあげ、テーブルのまわりをぐるりと一周した。軽くゆでたジャガイモを卵でとじるだけの簡単な料理なのだが、渚沙は好物なのだ。

「ドライトマトも入れてね。あーよかった、おかずがピーマンだけじゃなくて」

「ピーマン？ どうして？」

「んー、べつに意味はないけど」

言葉とは裏腹に、思いつきり意味ありげな口調だ。そのとき、妹の手に薄いピンク色の封筒があるのを、遙香は見とがめた。

「手紙？ 誰に？」

渚沙はさつと表情を改め、手を後ろに回して手紙を隠した。

「誰だっついていいでしょ」

生意気な態度でつんと顎を上げるので、遙香はついからかってやりたくなる。

「ふうん。じゃあこのジャガイモ、サラダにしちゃおうかなあ？」

渚沙はうらめしげな顔になる。

「意地悪。でも秘密だよーだ」

ぱたぱたと足音をたてて、廊下を走っていつてしまった。

遙香には、手紙の宛先の見当はついていていた。それが正しかったことは、渚沙がすぐに戻ってきたことで裏づけられた。ポストは公園の近くにあるので、ポストに投函したのならこんなに早く帰ってくるはずはない。

妹は響揮を本当の兄のように慕っている。ここ数週間は遙香にも内緒で、響揮となにかやりとりをしているようだった。気になつてはいたが、妹に嫉妬しているみたいでなんとなくたしかめにくかった。

「響揮、か」

改めて口にすると、わずかな違和感があった。胸のなかにもややもやしたものが浮かんできて、息苦しくなる。だが、その理由を追及するのは危険な気がした。

深く考えちゃいけない。明後日から一緒に月に行くのに、ぎこちない雰囲気になるのはいやだ。

そう、いままでどおりでいい。なにもかも。

「オムレツ、オムレツ」

呪文のように繰り返して、遙香はおもむろにジャガイモの皮をむきはじめた。





## ACT 4 生と死のルーレット

「ゴー・アセント」

その日ラッシュユダイクから帰還したとき、天音はかなりひどい？ラッシュユ酔い？をおぼえていた。今回は副作用を承知でラッシュユを二本打ち、オペレーションに出たのだが、やはり無理がたたったようだ。

しかし、酔いをさましている時間はない。危機はすぐそこに迫っている。

天音は吐き気をこらえ、震える手でヘッドセットをはずした。視界がぐるぐる回っている。背もたれにすがってシートを下りたが、脚に力が入らず、その場にがつくりと膝をついた。

「くそっ……急がないと」

最悪の事態の光景が脳裏にフラッシュした。

砕け散るガラスの像。逃げまどう市民。胸を朱に染めて倒れるフランク・ロシュフォード。閃光とともに幾万の塵となる銀灰色の船。この情報をなんとしても友人に伝えなければ。いかに危険でも、直接コンタクトをとるしかないだろう。

そのときドアノブが回る音が部屋に響き、天音はぎくりとしてドアを見た。

胃がぎゅっと締めつけられ、不快な嘔吐感が食道を駆けあがる。ぐつと唾をのみこんでこらえるうちに、ゆっくりとドアが開いた。こうなることを予想はしていた。次善の手も打ってはある。

「響揮……！」

その名前をまるで祈りの言葉のようにつぶやき、天音はシートの台座に背をもたせかけた。

「おかえりなさい、天音。ラッシュユ酔い？ 情けない姿ね」

ドア枠に片手をかけて、シックな黒のパンツスーツに身を包んだ

長身の女性が首をかしげた。肩を覆うブロンドの巻き毛を背に払い、ルネサンス彫刻のような整った顔に冷たく美しい笑みを浮かべる。

「……ディアナ。招待したおぼえはないんだが」

アパートメントの玄関はてのひらの静脈パターンと虹彩のダブルチェックで本人を確認し、侵入者を防ぐシステムだったが、ディアナには自動ドアも同然だったようだ。

「あなたこそ、わたしの城に無断で入ったじゃない」

天音は答えず、目を細めてディアナの緑色の瞳を見つめた。ディアナは肩越しに背後を振り返り、ひとつうなずいて体を引いた。すつと、ショートボブの黒髪をなびかせた少女がディアナの脇をすり抜けて部屋に入ってくる。

丈の短い黒のチャイナドレスに黒のスパッツは、十七、八歳と思われる少女の均整のとれた体の線を引き立て、訓練された身のこなしを優雅に見せている。

「やあ、シャンメイ。監視人の次は拷問吏の役？ ご苦労だな」

ディアナの付き人の少女に、天音は皮肉な口調で言った。シャンメイはいつも影のようにディアナにつき従っているが、この十日ほどはずっと天音に張りついて行動を監視していた。

「……あるいは死刑執行人かな」

天音はひとりごちのようにつぶやいて首を振り、シートにすがってなんとか立ちあがった。こめかみを押さえて頭痛をこらえる。

ディアナが部屋に入ってきて天音の前に立った。

「天音、単刀直入に訊くわ。どこまで知っているの？」

死神の足音を聴いたときにはどんな気分がするものだろうと、天音は最近よく考えていた。そのとき自分を支配するのは恐怖か、狂気か。だが現実になってみると、そのどちらでもなかった。奇妙なくらい冷静で、頭がきりりと冴えている。

「教えたら計画を中止してもらえるか？」

ディアナの顔が一瞬凍りつき、瞳が冷たくきらめいた。  
「相当なところまで知っているってわけね。シャンメイ」

ディアナが呼ぶと、シャンメイが無駄のない動作ですつと天音の脇に立った。身長は天音より少し低いが、シルクの生地越しに明らかにトレーニングをしている筋肉質の体がわかる。

手錠をかけられ、シートに座らされて胸と上腕を背もたれにベルトで縛りつけられるあいだ、天音は抵抗しなかった。ディアナのボディガードを兼ねているシャンメイは、武闘術の一種、カリの達人だと知っていた。お世辞にもスポーツが得意とは言えず、しかもラッシュ酔いでふらふらの自分など勝負にならない。

「案外度胸があるのね。泣き叫んで命乞いでもすればかわいげもあるのに」

いらだつたように言うディアナに、天音はこともなげに返す。

「無駄なことはしない主義だ」

叫んで外に聞こえるならそうしていた。だが研究所の敷地内にある職員用アパートメントは、必要上完璧に防音されている。リビングに備えられた警報装置には、いまや手が届かない。

「……処刑方法は選べるのかな」

「安心して、わたしも無駄なことは嫌いな。苦しまないようにしてあげるわ」

「エメラインのように？」

「心不全？ ビットダイバーにはよくある死因ね。それでもいいわよ」

さらりとディアナが答える。

「なぜエメラインを殺したんだ」

天音の声に、はじめて怒りの感情が表れた。

ディアナはわずかに顔をゆがめる。

「あなたを独占するためって言うたら？」

「僕とエメラインはつきあってはいなかった。理由にはならない」

「そうなの？」

眉がかすかに上がったのが驚きのためなのか、演技なのか、天音にはわからなかった。

「でもあなたはいつもエメラインを見ていた。やせっぽちでそばかすだらけのあの女の、どこを気に入っていたの？」

ディアナはついと指を伸ばし、天音の頬に指先をすべらせた。

「まあ、彼女はビットダイバーとしては優秀だったわね。わたしの城を荒らそうとしたから、罰を与えないわけにはいかなかった。計画の邪魔をする者は容赦しない。でもあなたは例外にしてもいいわ。記憶を消して、生かしておいてあげる。わたしの前にひざまずいて頼むからね」

「死神のしもべになれって言うのか？ 謹んでお断りするよ。僕にもプライドがある」

ディアナのまなじりがつりあがり、口元がこわばった。

「気に障ったかな。ああそうか、死神だなんて失礼だったね、ディアナ。仮にもきみは女神の名を戴いてるんだから。だが知っているか？ ヒンドウーの女神カーリーは、死体のイヤリングと髑髏のネックレスで身を飾ってるんだ。きみと気が合いそうじゃないか？」

「……残念だわ、天音。あなたのことは気に入っていたのに」

平坦な声でディアナがつぶやく。その美しい顔には、もはやどんな感情も表れてはいなかった。

「ご期待に沿えなくてすまないね」

「謝る必要はないわ」

気味の悪いほどやさしい声色で、ディアナが答える。かがんで顔を天音の顔に近づけ、間近から目をのぞきこんだ。

「あなたはもう逃げられない。わたしのものよ。なにをするのもわたしの自由」

両手で天音の顔をはさみ、唇を重ねた。

天音が体をこわばらせ、シートがきしんで手錠が小さく鳴った。

ディアナは満足げにほほえんで体を起こした。

「全部話してもらっわ。わたしの城からなにを盗んでどこに隠したか、誰に伝えたか」

「……いまここで殺すんじゃないのか？」

「ご期待に沿えなくてごめんなさい。計画を知られたとわかったからには、ほかにもれていないことを確かめなくてはならないの。殺すのはいつでもできる」

天音はきつく目を閉じ、唾をのみこんだ。

腕をとられ、肘の内側に注射器が押しつけられるのを感じる。かすかな痛みが皮膚に走った。数分もすれば自白剤がききはじめ、問われるままにすべてを話してしまうだろう。

天音はかすかに震える唇から深く息を吸いこみ、気持ちを鎮めた。全身をめぐるアドレナリンの流れを感じとる。怯える心臓がどくどくと鳴っている。奥歯をぎゅっと噛みしめて、天音は頭の奥に隠されている扉を探した。

扉の向こうには、暗黒の宇宙のごとき闇が広がっているはずだった。ふたたび出てこられるかどうかかわからない、底のない落とし穴だが、行かなければならない。

十年前に真夏のプールで遭遇した一瞬の闇を思いだす。あのときとは違って、いまは死の自覚がある。しかし恐怖はなかった。

あの夜、自分を慰めるように抱いた幼い弟の体温が背中によりみがある。

目が覚めたら今度こそありがとうと言おうと決め、天音は長く息を吐きだした。

天音の顔から表情が消えた。眠っているかのような青ざめた顔に、ディアナはそつと呼びかけた。

「天音、目を開けなさい」

薬がきいているのなら命令に従うはずだ。だが天音の目は閉ざされたままだった。

ディアナははつとした。

「まさか……仮死催眠を？」

あわてて天音の肩をつかんで揺さぶったが、頭が前後左右に揺れるばかりで反応はない。

力まかせに頬をたたこうと手を振りあげたところで、ディアナは動きを止め、手を下ろした。

仮死催眠は自己暗示の一種で、情報を守るために心の深層にしかける強力な地雷だ。情報を奪われることが決定的になったときに踏み抜けば、自律神経系が一時的に狂い、肉体が仮死状態に導かれる。心拍も呼吸も極限まで落ち、体温も低下する。

こうなると、どんな薬を用いても自白を引き出すことはできない。覚醒にはキーワードが必要で、それを知らされているのは本人が絶対の信頼をおく者だけだ。だが仮死状態が長引くに従い、覚醒する確率は低くなる。危険な賭けなのだ。

ディアナは唇を噛んだ。

機密を扱う者は最後の手段として仮死催眠を使う。だが研究段階のプロジェクトのメンバーにすぎない天音が実行するとは思わなかった。ふだんは音楽を愛する穏やかな青年で、命がけの駆け引きをするタイプにはとうてい見えない。

「つまりあなたは、仮死催眠を使わなければならないほど深くわたしの計画を知っていたってことね」

計画実行の日まで、あとたった二日だ。とくに念入りに準備した華々しいクライマックスに向けて、すべてが順調に進んでいる。だが数日前にクラッキングに來た天音を、ディアナは結局つかまえ損ね、ビットダイバーとしてはまだ天音に及ばないことを思い知らされた。

時間切れだった。そろそろ地球を出なければならない。後顧の憂いを断つためには直接彼を問い詰めるしかなく、ディアナは今日ここを訪れたのだった。

「シャンメイ、引きあげるわ」

天音に関する記録をすべて洗い直さなければならぬだろう。コンピュータの中身はもちろん、郵便物や電話、このアパートメントの盗聴記録も。

「はい、ミス・ディアナ」

付き人兼ボディガードの少女が足音も立てずに部屋を出ていくと、ディアナはかたわらのシートに目を落とした。

「……そうね。インドに行ったらカーリーに会ってみるわ。でもあなたの死体はイヤリングには大きすぎるみたい」

力の抜けた天音の手をとり、ゆっくりとオペレーションリングを抜く。ふたつのリングをことりとコンソールに置いてから、ディアナは胸の前で腕を組み、まだシャットダウンされていないシステムを眺めた。

\*

\*

昨日の朝降りだした雨は、今日の午後になってもやむ気配がなかった。夏至を間近に控え、昼間がいちばん長い季節のはずなのだが、どんよりとたれこめた雲は夕暮れの時刻をふだんよりずっと早めている。

ディジフリームに向かっていた響揮は、部屋の照明がついたのに気づいて顔を上げた。センサー式の照明は、部屋に人がいるときは照度が一定以下になると自動的に点灯するようになっていた。

椅子の上で大きく伸びをして、できあがった両親のための旅行ガイドを眺める。

「よし、カンペキ！」 自宅からルナホープ宇宙港まで、3Dマップと音声で道案内するオプションも付けた。これならそっかしい両親も迷わずルナホープにたどりつけるだろう。

両親に渡しがてらこづかいを請求しようと、銀行口座の残高を確認した。記憶よりかなり多いのに驚き、きのう兄がメールでこづかいを送ると言っていたのを思いだした。出納明細を見て目を丸くする。

「五百UD!? マジで?」

月ぎめで両親からもらっているこづかいの五カ月分だ。

サンキュ、兄貴。おみやげ奮発するからな。

心のなかで両手を合わせてからふと、あのメールはどこか変だつたと考える。もう一度見てみようというウィンドウを開いた瞬間、水玉模様の服を着たピエロが画面に現れてぴょんと跳ね、派手なフェイスペインントを施した顔が大写しになった。

『ヒーツヒツヒツ！ 俺とゲームをしようぜ。知ってるかい？ ロシアン・ルーレットっていうんだ』

「げっ　！」

コンピューターが、数日前から流行しはじめたウイルス、？ロシアン・ルーレット？に感染したのだ。

「くそっ、やられた！」

実物を見るのはじめてだが、プロバイダーから警告のメールは届いていた。ウイルスとしては悪質なものではないが、まだワクチンプログラムがないため猛威をふるっている。響揮のコンピュータは十日ほど前にも別なウイルスに感染して、ハードディスクの一部が使用不能になっていた。

『ゲームの方法を説明しよう。おまえが正しい数字を打ちこめば俺さまは消える。だが間違った数字を打ちこむとファイルがひとつ消える。楽しいだろ？』

「全然まったく、一ミクロンも楽しくないぞ！」

響揮の抗議はきっぱりと無視され、ピエロが無情な声でカウントダウンをはじめた。

『十、九、八……』

プロバイダーからの情報では、0から9までの数字のうちどれかひとつを？当てる？とピエロはウイルスごと消滅し、二度と出てこないという。たしかに悪質ではないのだが、はた迷惑には違いない。

「よし、7だ」

響揮はなんの根拠もなく数字を選んでキーを押した。

ガン！

銃の発射音とともに、画面中央に放射状のひび割れが走った。ディスプレイ全体が一瞬真っ暗になり、ファイルの消滅を示す赤い文



字が画面の中央に浮かんだ。

『キヤーツハツハツハ！ 俺さまの勝ちだ。また来るぜ』 数秒後に画面はピエロが現れる前の状態に戻ったが、両親のための旅行ガイドは影も形もなかった。

響揮は呆然とした。

「あれ作るのに二時間かかったんだぜ！？」

ファイルをコピーして両親のアドレスに送っておけばよかったのだが、後の祭りだ。

「ちつくしょー、頭にきた！」

退治を決意し、ランダムに時間をおいて現れるピエロとゲームを続けた。だがどの数字もはねつけられ、画面がひび割れて終わる。重要なファイルは別に複製保存しておいたので、とくに被害はないが。

一時間後にすべての数字を試し終え、響揮は惘然とした表情で腕組みをした。

おかしい。情報と違う。

こんなときこそ兄の定番だと、響揮は天音にメールした。この程度のウイルスなど兄ならコンマ一秒で退治できるだろう。

「破格のこづかいをどうも。ありがたく使わせてもらうよ。それと、ちよっとコンピューターのことで頼みがあるから都合のいいときに連絡ちょうだい。以上」

天音の顔に疲れがにじんでいたのを思い出し、渚沙が弾いたショパンの《子犬のワルツ》を添付する。「弟子も頑張ってるぜ」と追伸し、送信した。これでちよっとは元気になるといいのだが。

入浴と夕食を済ませたのち、響揮はピエロに悩まされながらも両親の旅行ガイドを作り直した。首尾よくこづかいをせしめ、自室に戻ったときにはすでに夜中に近い時刻だった。

母親がリビングに放置していた郵便物の束に、渚沙からの手紙がまぎれていたのを発見し、救出してきたので封を切る。何色ものサインペンを使って手書きされた、かわいらしい手紙だ。

楽しんできてね、といった内容の最後には、おまけとして？今週の運勢？が書いてあった。

？獅子座のあなたへ。今週はいいことと同じだけ悪いことも起こりそう。でもねばり強く頑張れば、運勢は好転します。ラッキーカラーは青。ラッキースポットは公園です？

響揮はくすつと笑った。俺が占いを信じるなんて、本気で思ってるんだろうか？

しかし、たしかに悪いことは起こったなと、一転渋い顔になる。？追伸。おみやげいっぱい待ってるよ！？

いちばん言いたかったのはここだろうと考えながら、手紙を丁寧にたたんだ。

ベッドに入って部屋の明かりを消すと、頭上に蛍光塗料の星々が輝きはじめた。

ふと、天音から連絡がないことに気づく。もう一度メールしてみようか。考えているうちにまぶたが重くなってきて、響揮は眠りに引きこまれた。

夢のなかでピエロが踊っていた。

「ゲームをしようぜ！」

その手には、一般に使われるショックパルス銃ではなく、昔ながらの金属の弾丸がこめられたリボルバー。嬌声とともにトリガーが引かれ、弾丸が響揮の肩をかすめる。

「やめろよ！」

響揮の手にもいつのまにか銃が握られていた。ためらいながらもピエロに狙いをつける。

耳を打つ発射音。重たい反動を手に感じた瞬間、ピエロの額に穴があく。派手なフェイスペイントにひびが走り、まるで漆喰の壁がはがれるようにぼろりと割れ落ちて、別な顔が現れた。

うつろな目でこちらを見ているのは。

「兄貴　　！」

響揮は悲鳴をあげ、目が覚めた。

朝になっていた。

全身に冷や汗をかいていて気持ちが悪い。しばらくは悪夢の影響で頭がぼんやりしていて、時計を見るのも忘れていた。

「響揮！」

窓の外から声がしてわれに返った。あわててベッドを下り、窓を開ける。すっかり身支度を整えた遙香が向かいのベランダに立っていた。

「まだ着替えてないの？ あっ、また超絶寝癖頭！」

「……悪かったね」

梅雨の晴れ間の太陽がベランダの手すりにあたっていてまぶしいと、遙香の胸にきらりと光るものを認めて、響揮ははっとした。そしてあまりの驚愕に、心臓が止まったかとさえ思った。

遙香の胸にはペンダントがあった。三メートル先でもわかるそのデザインは、響揮が買ったものとそっくり同じだったのだ。

「……なんだよ、それ」

訊く声がかすれる。

「このこと？」

答えながら指先でチェーンをつまんで掲げ、遙香は得意げに顎を上げた。

「天音さんが送ってくれたの。バースデー・プレゼント」

バットで頭を殴られるというのは、こんな感じだろうか？ 響揮は思わずよろけそうになったが、しっかりと窓枠を握って体を支えた。「すてきでしょ？ きのう届いたのよ。あたしうれしくて……」

遙香はしゃべり続けていたが、響揮の耳にはもうなにも聞こえていなかった。

「……俺、着替えるから」

ようやくそれだけ言い、窓を閉めて意味もなくカーテンを引いた。そしてへなへなと床に座りこんだ。

＊

＊

「動いたって？」

高速パトロールシップの広いとは言えないコクピットの操縦席で、アレックス・ブローディは隣の座席にいる部下に訊き返した。クルーカットの赤毛を撫で、澄んだブルーの目をきらめかせる。体格と同じくがっしりとした顎に、意思の強さが感じられる。

「そうですね、大当たり。いま月域管制センターからの情報が入りました。で、まだゴミ監視を続けますか？　いままで回収できた分じゃ、爆破事件かたんなる事故かも特定できませんけど」

「サレム、おまえはどう思う？　恋人のにおいはするか？」

浅黒い肌で端正な顔立ちの青年、サレム・アフラムが眉をひそめ、短い髭をたくわえた顎を撫でた。

「恋人なんてぞつとしないな。奴とはもう縁を切ったはずだったのに。まあ奴のいつもの手口と矛盾はしませんね。船主はシリウス・グループの関連会社だし」

「なら決まりだ。いったんルナホープに帰ろう。生体ゴミも見つからなかったし」

「乗員がひとり行方不明っていうあれですか？　ゴミとはひどいな」アレックスは無表情な顔で計器をチェックしはじめる。

「誰だって死ねばただのゴミさ。もう望みはない。緊急脱出ポッドも使われてないし、仮に与圧スーツを着る暇があったとしても、ちゃんとした生命維持システムなしじゃ三時間ももたない。そんなことわざわざ言わなくてもわかってるだろう」

「月域はまだ慣れないもので」

サレムは弁解がましく言っただけ息をつき、フードウォーマーからとってきたコーヒーのパックの吸い口をくわえた。

「……ぬるい。こういう飲み方はコーヒーへの侮辱だって思いませんか、主任？」

無重力慣れしているアレックスにとっては、パトシップでコーヒ

ーがパツク入りなのはしごく当然で、やけど防止のためにぬるいのも当然だった。しかし地上職が長かったサレムには違和感があるようだ。

「どんな飲み方だって味は変わらんだろう。もっと柔軟になれよ、サレム」

「僕は柔軟ですよ。礼拝だって一日一回で我慢してますし」

アレックスはとりあわず、ただ肩をすくめた。日の出も日の入りも定かではない宇宙空間では、聖典の教えを守るのは難しいのだとサレムはこぼしている。信仰心というものがゼロどころかマイナス値のアレックスにとって、サレムのような人種はエイリアンに等しかった。

宇宙でしばらく働いていれば、運も不運も死の訪れも、信仰心とはなんの関係もないことが骨身にしみてわかる。

「主任、もうひとつ情報が入ってます」

「なんだ」

「アマネ・タカトウの家族の月旅行、旅程が変更になりました。このゴミどものせいで客船の臨時便が出なくなったので、弟と隣家の女性が先に来て、両親は翌日になるそうです」

アレックスは短くため息をついた。

「彼らも爆破事件の犠牲者ってわけだ」

サレムは眉をひそめる。

「感想はそれだけですか？ 十五歳の男女が両親のつきそいもなしに旅行するっていうのに」

「たった一日のことだろう。それに十五ならひとりで行動できる年だ」

「ふたりで行動するのが問題なんです！」

アレックスは数秒のあいだサレムを見つめてから、大声で笑いだした。

「まったくおまえって奴は？ 柔軟？ だな！ おそれいったよ」

サレムは皮肉を無視してむっつりと続ける。

「しかもクレセントのツインルームに泊まるそうです」

「へえ、最高級ホテルだ。俺も泊まったことないぞ」

「突っこみどころはそこじゃなく、ツインルームってところでしょ！」

「まったくおまえって奴は、以下略。ダブルルームじゃないだけマシだと思えよ」

「主任のモラル感覚はアバウトすぎます。なにがどうマシなのか僕にはわかりませんね」

本当に怒っているらしいサレムに、アレックスは絶滅した野生動物の剥製を見るようなまなざしを注いだ。

「クレセントに招待で泊まれるなんてラッキーだって、素直に喜んでやれないのか？」

「ラッキー？ 主任、本当にそう思いますか？」

サレムの真剣な目に、アレックスはさつと表情を厳しくした。「いや」と短く答える。そして、スクリーンの下方に広がるクレーターに覆われた灰色の地表をじっと見つめた。

「……祈りたいような気持ちだよ」

月と、月を訪れるすべての人が無事であるように。

だが、祈りを聞き届けてくれる神はどこにいるのだろうか？ 宇宙で働くようになって十年、教会で祈ったことはない。

しかし祈りはしなくても、教会に行くことは多かった。

アレックスの脳裏に、つい先月の光景がよみがえった。祭壇の前に置かれた白い柩。喪服に身を包んだ男女がつぎつぎに花をたむけ、やがて彼女の姿も、胸に抱かれた一挺のバイオリンも、純白の花に埋もれていった。

エメライン 最愛の妹。

アレックスは祈らなかつた。ただ誓ったのだ。このままでは終わらせないと。

「……アッサラーム・アライクム・ワラハマトウッラー」

？あなたがたに平和と恵みを？。サレムはアラビア語の祈りをつぶやき、いつもと変わらない表情でコーヒーマスターのパックをダストシュー

トに放りこんだ。

アレックスはこんなとき、宗教を 自分自身以外に頼れるものを持つ人間を、心底うらやましく、またうとましく思う。

「くそっ！ なんとかしてやるさ、この俺が！」

サレムがこちらをちらりと見て、かすかに肩をすくめた。

そのせりふが強がりにしか聞こえないことは、アレックス自身よくわかっていた。

## ACT5 リフトオフ

響揮と遙香を乗せたラムジェットエンジン搭載の新型旅客機は、成田空港を発って二時間後にパシフィック宇宙港に着いた。ここは赤道直下、インドネシアの島のひとつ。大気圏を脱出する旅客と貨物の両方を扱う総合宇宙港だ。

ローカル旅客機用と、地球・軌道ステーション間を結ぶスペースシップ用の滑走路を複数擁し、その上空にはいつも翼が反射する日光のきらめきと、エンジンの轟きとが満ちている。

「すげー……」

吹き抜けのロビーの高い天井を見あげて、響揮は感嘆の声をあげた。ターミナルビルは地上六階地下三階で東西に長い翼を持ち、真上からみた形は飛翔するアホウドリにたとえられる。中央部に位置するロビーはサッカーコートほどの広さがあり、地球の東半分から集まってきたさまざまな人種の人々であふれている。

「あたしたちの便の出発は予定どおりみたいね」

正面の巨大なスクリーンに表示された運行表を見あげて、遙香が言った。

その胸元に揺れるペンダントを、響揮は極力無視しようとする。ランチ、軽めでいいよな？ サンドイッチとか」

家を出てからずっと、ふだんどおりにふるまおうと努力を続けていたが、からまわりしているのは否めない。遙香が不審に思うのも当然だ。おなかの調子でも悪いのかと機内で訊かれたときには、思わず本当のことを言ってしまうそうになった。

「いいけど、ほんとに大丈夫なの、響揮？ いつもはカレー二杯とか食べるくせに」

「ああ……なんか胸がいっぱいっていうか。それにここ、ゲート通過に時間かかるし」



われながら言い訳がお粗末すぎる。響揮は絶望的な気分でがつくりと頭をたれた。

たしかに宇宙への出入口であるこの空港では、軌道域に伝染病を持ちこまないためのバイタルチェックや検疫、危険物の排除を目的とした荷物検査に時間がかかる。だが、その時間はもちろんスケジュールに織りこまれていく。

『臨時ニュースです。ただいまサンパウロ支局から、平和共立党ジョアン・フロレス党首の容体に関する最新情報が入りました』

ロビーの壁に設置された大スクリーンに、周囲の人々の注意が引きつけられる。響揮もスクリーンに顔を向け、これで話題を変えられると心のなかで感謝した。

「爆弾テロがあつたんだっけな」

遙香が不安げな顔でうなずく。

「うん。フロレス党首は意識不明で聞いてたけど」

すでに二期連邦大統領を務め、マンネリとの批判が出ているフランク・ロシュフォードにとっては、若く才気にあふれ、新興開発国の期待を背負ったフロレスの台頭は脅威だ。グリーン・サンクチュアリ法廃止の機運の高まりを恐れ、ロシュフォード側がテロを仕掛けたのではないかとの憶測も飛んでいる。

『現在サンパウロ中央病院に収容されているフロレス党首の容態が悪化し、母親であるシリウス・グループのナタリア・フロレス総裁が病院に駆けつけた模様です』

「やっぱりテロの原因はグリーン・サンクチュアリ法なのかな。いい法律なのに」

つぶやくように遙香が言う。

「俺もそう思うけど、感じ方は立場によって違うからな。赤道域じや悪法だって迷惑がられてる」

「でもあの法律がなくなったら、また温暖化が進むでしょ？ 地球全体の環境が悪化するのに」

「局所的な見方しかできない人も多いんだよ。フロレスを支持し

てるのはそんな人たちだ。フロールレスが大統領になれば、今度こそ連邦が分裂するかもって話だ」

響揮は顔をしかめる。地球連邦成立後は落ち着いてきている各地の民族紛争もふたたび活発化して、テロの脅威が再燃するかもしれない。

「なんで……人は殺しあうんだろ？」

遙香は病院を映しているスクリーンから目をそむけた。

「ロシュフォード大統領、月に来れるのかな」

「フロールレスの暗殺を指示したって疑われてるんだから、意地でも予定どおり来るだろ。噂なんて気にしてないってこと見せないと、次の選挙で勝てない」

「そっか。じゃあ平和行進で大統領に会えるね。じつはけっこう楽しみにしてるんだ」

暗い雰囲気を変えたいらしく、遙香が軽い口調で言ったので、響揮も調子を合わせた。

「マジ？ 遙香ってロシュフォードのファンだった？」

「うん。銀髪がいいよね、いかにも渋いオジサンって感じで」

「……外見よか中身見ようよ」

「ホントの中身は知り合いにならないとわからないでしょ。政治家なんてとくにね。さ、響揮、行こ！」

ぽんと響揮の肩をたたき、勢いよく駆けだした遙香の胸でペンダントがはずんだ。

追いかけながら響揮が呪いの言葉を吐いたことに、遙香はまったく気づいていないようだった。

\* \*

大気圏を脱出するためにふたりが乗るのは、？トロイカA？と呼ばれる離脱型スペースシップだ。正面から見ると、長い翼に三つの船体がつり下げられたような外観をしている。中央の船体が旅客用

で、翼でつながっている両側は主にハイブリッドエンジンと燃料タンクで占められている。

地上機よりかなり小さなつくりのエアロックを通って、ふたりは背もたれの傾斜が大きいシートについた。アナウンスに従って四点式のシートベルトを締めると、響揮は頭をヘッドレストに預け、大きく息を吐きだした。興奮で胸がどきどきしてくる。

トロイカAの全長は約三十メートル、翼の長さは約八十メートル、旅客定員は二十四名。大気圏外まで飛ぶのは固体燃料ロケットエンジン<sup>スペースシップ</sup>を備えた中央の旅客船のみで、残りの翼を備えた双胴のランチャーシップは、高度八十キロでスペースシップを切り離れたのち、滑空して地上に戻っていく。スペースシップにも地上に帰還する際に必要となる翼と垂直尾翼があり、前世紀末に活躍したスペースシャトルをスマートにしたような姿だ。

やがて双胴のエンジンがうなりはじめ、トロイカAは先導車に引かれて滑走路を動きだした。メイン滑走路に入り、先導車が離れていく。船体は地上機の倍の加速度でぐんぐん速度を上げ、そしてふわりと、だがかなり急な上昇角で滑走路を離れた。

はじめて体験する宇宙へのリフトオフ。響揮は無意識に隣の席の遙香に目をやった。遙香が興奮と緊張に満ちた顔でうなずく。

「なんか乱暴な感じだね？」

「ところろしてると滑走路を行き過ぎちゃうんだよ」

地球の重力に対抗し、厚い大気層を突き破るにはかなりのスピードが必要だ。そのために乗り心地が犠牲になるのは仕方がない。船体の振動は想像以上で、事前に知らされていたにもかかわらず、ちよつと不安になる。

高度十キロを過ぎると加速度は地上の二・五倍になり、体がシートに押しつけられて身動きが難しくなった。船内にアナウンスされる速度と高度がどんどん上がっていく。

『現在の高度は四十キロ、航行速度は秒速四・一キロです。まもなく当船はランチャーシップから離脱し、ロケットエンジンに点火い

たします。揺れを感じますが、異常ではありませんのでご安心ください』

乗務員の言葉どおり、切り離されたスペースシップはロケットエンジンを噴かしてさらにスピードを上げ、大気圏脱出速度の秒速七八キロに達する。そして高度百二十キロ、大気の影響がなくなる高度までいっきに飛ぶ。離陸からの二十分は、はじめて大気圏を離れる響揮には一瞬のことに思えた。

ふと体が軽くなり、肘掛けに置いていた手が浮きあがる。前もつて後ろで三つ編みにした遙香の髪がゆるく空中に漂う。同様にふわりと浮いたペンダントを見て遙香は顔をほころばせ、ブラウスの下に押しこんだ。

『当船はただいま地球を周回する軌道に入りました。船内は無重力状態になっておりますので、十分にご注意ください。当船は今後、徐々に高度を上げて連邦第三宇宙ステーションへと向かいます』

気がつくと、横手にある小さな窓いっぱい、したたるような青が広がっていた。

地球だ。

胸に熱いものが満ちてきて、響揮は知らずのうちに呼吸を止めていた。

隣の席で、遙香も同様に息を詰めて窓の外を見守っている。ふただけでなく満席の乗客全員が、言葉もなく外の光景に見とれていた。不思議な連帯感が船内を包む。

遙香が響揮のほうに顔を向けて、ふっと笑いかけた。

言葉は交わさなくても、響揮には彼女がなにを言いたいかわかった。うなずくと、遙香はきらきらした瞳でうなずき返した。

もうあのペンダントにこだわるのはやめようと、響揮は思った。いまこうして遙香の瞳に映っているのは、兄ではなく自分なのだから。

\*

\*

スペースシップが慎重に速度を合わせながら宇宙ステーションに近づいていくあいだ、響揮はその様子を小さな窓から食い入るように見つめていた。

現在、地球の低軌道では三つの宇宙ステーションが周回している。いちばん新しい連邦第三軌道ステーションは、大きなふたつのリングを縦に連ねた形から、？ダブルドーナツ？と呼ばれて親しまれている。

リングの一方はホテルになっているので、滞在を目的に来る観光客も多い。宇宙からの地球の眺望と無重力体験を売り物にしたツアーも多く企画されている。

スペースシップはここで地球からの乗客を降ろし、代わりに地球に帰る人々を乗せて、ふたたび大気濃い地表へ戻っていく。降りた乗客は船を乗り換え、軌道域に散らばる宇宙工場や研究施設、月へと旅立つ。

乗り換えが必要なのには理由がある。酸素が豊富な大気圏内と真空の宇宙空間では、エンジンの駆動系や使用する燃料、燃焼促進剤も異なる。それぞれに最適なエンジンと燃料を積んだ船を使うのが効率的、イコール経済的なのだ。

ダブルドーナツのドッキングベイにスペースシップが近づくと、牽引ビームが確実に補足して、強化カーボン素材のケーブルが機体をしっかりとベイにつないだ。続いて連結チューブが伸ばされ、エアロック外側の連結フレームにがっちり食いこむ。そのわずかな振動が到着の合図だった。

ここから先はグリニッジ時間に合わせた連邦標準時が採用されていると、乗務員がアナウンスした。

『ステーションのリング内は、回転による遠心力で地球の約五分の三、〇・六Gに調整されております。また、リング中央のハブ内ではほぼゼロGですので、ご注意くださいとともに、無重力体験を存分にお楽しみください』

そのあとに続く乗務員やら機長やらの挨拶は、興奮した乗客たちの耳には入っていなかった。

「ハブ?とは、ドーナツの穴を貫いて二重のリングを支える円筒形の建造物だ。ステーションの回転の中心にあるため、重力はほぼゼロ。ドッキングベイはこのハブの端にある。」

月には地球の六分の一とはいえ重力があるので、響揮と遙香にとって無重力を満喫できるのはここだけになる。ふたりは乗り換えまでの時間を利用して、ハブ内にある無重力室で遊ぼうと計画していた。

漂うようにエアロックを通り抜け、宇宙ステーションに入る。目を見交わすだけで互いの興奮が手にとるようにわかり、ふたりはどちらともなく手を差し出して軽くにぎりあつた。

遙香の手はふわつとしていてあたたかかい。響揮はぎゅっと握りしめたくなるのを必死に抑え、ぶっきらぼうに告げた。

「早く無重力室に行こうぜ」

無重力の空間では、なにかにつかまらなさと方向転換が難しい。一度床を蹴れば、そのスピードと方向を保ったまま慣性でどこまでも行ってしまう。便利な面もあるが、地球の1Gに慣れた体にはとまどうことが多い。壁に設置されている手すりをうまく使うのが、スムーズに移動するコツだ。

ものの数分で慣れた響揮に比べると、遙香の体さばきはなんともぎこちなかった。手すりを離すたびに思わぬ方向に流されるのにいらだつたらしく、遙香はしまいに響揮のウエストポーチをしっかりとつかんだ。

「な、なんだよ」

思いがけず遙香の体を間近に感じて、響揮の心拍は急上昇する。

「だめ? これがいちばん楽なんだもん」

「だめじゃないけど……」

ほんとはうれしいけど、と心のなかでつぶやく。

「自分でしないとうまくならないだろ」

「ケチ」

遙香はぶいと横を向いて手を引っこめる。

「あたしは宇宙飛行士にならないんだから、うまくする必要なんかないのよ」

心なしか、遙香の言葉にはとげがあつた。ふだんなら聞きとがめるところだが、こんなところで口喧嘩をしたくはない。

「……ごめん」

素直に、響揮は謝った。

「あ……あたしこそ。ごめん」

遙香がまた手を伸ばして、ためらいがちに響揮のウエストポーチをつかんだ。

表示に従って通路を進み、無重力室のドアを開ける。

「わ、エアバスケットやつてる！ ゲームかな、ラッキーだね！」  
顔を輝かせ、遙香は手で反動をつけて先に入っていった。

室と名はついていても学校の校庭くらいの広さがあり、ハブの円筒にそつた壁にはやわらかなマットが全面に張られている。その奥にエアバスケットのコートが設けられ、半透明のラバーフェンスで仕切られた空間で、ユニフォームを着た選手たちがボールを奪いあつていた。五名は赤のユニフォーム、残り五名はその上に白のベストをつけている。

試合は終盤らしく、掲示板に記された得点は七二対七二。遙香がすかさず「赤」と言い、響揮は「白」と答えた。

選手たちが六面のフェンスを巧みに使い分け、方向転換用に設けられたラバーグリップを操って自身とボールをコントロールするさまは、まさに芸術だ。コート周囲には観光客らしい人々やチームの応援団が浮いていて、思い思いの姿勢で声援を送っている。

観客のひとりに訊くと、これはステーション内に勤める人々の草バスケットチーム、？ドーナツメーカーズ？の紅白試合で、宇宙工場連合チームとの試合に備えて練習しているのだと教えてくれた。

審判のホイッスルが鳴り、試合は終了。九十六対九十二で赤チー

ムの勝ち。

遙香がにやつと笑ってVサインをした。

「明日のランチ、おごりね！」

「ちえっ、ついてないなあ」

ぼやく響揮を横目に、遙香は笑いながら試合の終わったコートに入った。浮かんでいたボールを拾い、ゴールリングをねらって放つ。だがボールはゴールのほうにすら飛ばず、自分の体が回転してしまう。無重力状態では、重心をうまくコントロールしないとボールを投げることにすら難しいのだ。

「あ、あれ？ やだもう、どーなってるの？」

「相変わらずへたくそだな」

手足をばたばたさせる遙香を横目で見て笑いながら、響揮はボールを拾い、足元のフェンスを蹴った。体を回転させて、かつては頭の上にあったフェンスに足をつく。体の中心から押し出すように、ゴールリングめがけてシュートを放つ。

ボールはまっすぐリングを抜けた。

「スリーポイント！ 案外簡単じゃん」

ようやく体の回転を止めた遙香はラバーグリップを握って体の方向を変え、リバウンドのボールを拾おうとした。だがボールは指先に触れただけで向こうに飛んでいってしまい、遙香は頬をふくらませる。

「どこが簡単？ 響揮ってば、なんでもやったとたんにうまくできるなんて反則だよ」

響揮はラバーグリップをつかんで軽く横に飛び、跳ね返ってきたボールを受け止める。体をひねってフェンスに足について蹴り、コートを移動しながらまたシュートした。

「脳細胞の不足分を運動神経が補ってるのさ」

ゴールリングを通過し、背後のフェンスでバウンドしたボールが、正確に遙香の胸をめがけて飛んでくる。今度はきちんとボールを受け止め、その慣性で後ろに漂いながら、遙香はあきれたように首を



振った。

「記憶力だつて抜群のくせに」

「……兄貴ほどじゃない」

「比べる対象が間違つてるよ。天音さんは特別なんだから」

響揮の表情が陰つたのに気づかず、遙香は陽気な口調で続けた。  
「そういえば響揮、自転車もまたがったとたんに補助輪なしで乗れたよね。覚えてる？ あのと、ふたりで隣町まで走ったでしょ」

「ああ、四つときね。おそろいの自転車買ってもらったんだよね」  
遙香はくすっと思ひ出し笑いをし、ボールをそつと響揮のほうに押し出した。

「あたしはもちろん補助輪ありなのに、負けるもんかって必死に響揮を追いかけた。そのうち補助輪に頼らなくても走れるようになって、楽しくて」

「どこまでも行けるような気がしたな」

「うん。ふたりでずつと走っていたかった。でも転んで怪我して、気がついたら全然知らない景色になつた。怖くて痛くてわんわん泣いたら、響揮ってばあたしよりチビだったくせに、おぶって帰るって言つたんだよ」

受け止めたボールを、響揮は左手から右手へと移し、遙香に投げ返す。

「遙香は泣き虫だからな、昔から」

遙香はふつとまぶしそうに目を細め、手元に漂ってきたボールに視線を落とした。

「響揮の前でだけだよ。どうしてかな。うちではそうじゃないのに」  
「いいお姉さんだもん、遙香は。いつも家族の食事つくって、片づけして、渚沙の世話をして……えらいと思うよ。俺にはとてもまねできない」

「あたしにはそれくらいしか取り柄ないから」  
ボールを胸にかかえると、遙香は照れたように顔を赤くして目をそらした。

「あのときね……響揮がおぶってくれたとき、すごくうれしかった。怖いのも痛いのも、どっかに飛んでいっちゃった」

「三步だけだったけどな」

遙香を背負ったまではよかったのだが、わずか三步で響揮は重さにおしつぶされてしまったのだ。なつかしさと同時に、痛みが胸によみがえる。

『あたし、自分で歩く。一緒に帰る』

涙でくしゃくしゃな顔で、遙香は気丈に言った。それからふたりはゆっくり自転車を引いて歩いた。夕焼けが夕闇に変わり、天頂に夏の大三角形が輝きはじめる。町境まで来たところで、心配して探していた天音に拾われた。軽々と天音に背負われた遙香が、ほほえんで響揮に片手を伸ばす。

『楽しかったね。また一緒に行こ？』

つないだ手は汗と涙と埃でべとべとだった。それからすぐ遙香は天音の背にもたれて眠ってしまい、力が抜けた手は響揮の手を離れた。た。

チビじゃなければ、もっと強ければ、遙香を背負って帰れたのにと、四歳の響揮は幼心にも情けなかった。柔道の道場に通いはじめたのはそれからだ。

持ち前の運動センスでめきめきと腕を上げ、小学生のころは学年別柔道大会で全国大会に出場したこともある。だが貧弱な体格がハンデになり、中学では関東大会止まりだった。十キロ以上も体重差のある相手には、さすがにかなわない。

それでも、四歳の当時から比べればずっと強くなった。体力には自信がある。いま遙香を背負ったら、と響揮は想像した。

あのやわらかそうな胸が俺の背中に押しつけられるのか。でもって髪がさらつと首筋にかかって、ふんわりといい匂いがする。後ろに回して支える俺の手に遙香のヒップが……。

「あ、またなんかヘンなこと考えてるでしょ」

「えっ？ い、いやなにも？ そろそろリングのほうに行って休憩

しないか？」

あわてて響揮はごまかし、遙香を促して無重力室を出た。

\*

\*

パールホワイトの優美な船体が、星々のあいだを悠々と、すべるように飛んでいく。スペースシップ？ネオペガサス301？は、地球の大気圏を離れるときはトロイカAと同様にランチャーシップの助けを借りるが、その後は搭載された強力なハイブリッドロケットエンジンを駆使して宇宙を渡る。

新素材の繊維強化セラミックスを使用した機体は軽量で、月面にもダイレクトに着陸できる。地球大気圏へ突入する際はふたたびランチャーシップとドッキングし、滑空して着陸する。経済性は完全に無視されており、連邦大統領専用機も同型だが、維持するにはそれこそ中堅都市をひとつまかなえるほどの巨費が必要だ。

法人所有でセレブ向けのゴージャスな宇宙旅行にレンタルされるのが主で、個人所有は連邦内で三隻のみ。そのうちの一隻に、いまディアナは乗っている。母親であるシリウス・グループ総裁、ナタリア・フロレスにねだって、去年買ってもらった。

垂直尾翼には控えめに、？エンデュミオン？という船名が記されている。ギリシャ神話に登場する美青年で、月の女神の恋人の名だ。夢のなかで女神に会い、恋に落ちたエンデュミオンは、永遠にその夢を見続けたいと神に願う。願いは聞き届けられ、エンデュミオンは眠ったまま夢の楽園で女神と幸福に暮らすのだ。

名づけたのはナタリアだ。ディアナとはローマ神話の月の女神の名だったから、おそらくしゃれのつもりだったのだらう。命名権は主張しないという条件で買ってもらったので、ディアナも文句は言わなかった。

『長いことお父さまをあなたひとりに任せるようなことになってしまつて……感謝してるのよ、ディアナ』

母親はそう言った。でもこの船は、感謝のしるしというよりは慰謝料だろうと、ディアナは皮肉に考えた。ナタリアはなんでも金で解決できると思っている。

ディアナは小さな窓のそばにたたずみ、彼方に輝く地球を見つめた。

青い星。きれいだとは思うが、そこにもう愛着を抱いてはいなかった。すべては去年、冷たい雨が降りしきるサンパウロの街で終わったのだ。あの日、ひっそりと家族だけで行った父親との別れの儀式のことは、終生忘れないだろう。

「父はね、母を心から愛していたの。でも母が愛していたのは会社とジョアンと……昔の恋人だけ。父とはただ結婚していただけだった。父はわたしにとってもやさしかったわ。正気的时候はね。じきにアルコールとドラッグにむしばまれて、心を病んで……姿を消した。月に行ったとわかったのは一週間後だったわ。シリウス・スペースカーゴ社の小型貨物船をチャーターして、無理やり飛ばせたのよ」

ディアナは目を室内に戻した。ベッドに横たわる青年の、青白い顔を見つめる。彼はこの船の贅沢な内装を見ることも、流れているゆるやかなクラシック音楽を聴くこともなく、眠り続けている。さながら神話のエンデュミオンのように。

ここにるのが父親だったら、とディアナはふと考える。

幼いころ、父親と屋敷のベランダからよく夜空を眺めて話をした。いつか一緒に月に行こうと言って、父親はほえんだ。

「だってディアナの名前は月の女神からもらったんだから、一度は行ってみないとね。その次は火星だ。ほら、あの赤い星。火星ではね、ディアナ、夕焼けが青いんだぞ」

「ほんと？　じゃあ木星の夕焼けは何色？」

ディアナが訊くと、父親は笑ってディアナの頭を撫でた。

「パパと一緒に行って確かめよう。木星の次は太陽のお隣の恒星、リギル・ケンタウルス。それから天の川の先にある大マゼラン雲だ。ちよっと遠いけど、ふたりならきつと行ける」

父親が指さした先、天の南極近くにある星雲は、ぼつとしたやわらかな光を銀河のそばに広げている。

『まるで花嫁さんのベールみたいね、パパ？　ねえ、大マゼラン雲に着いたら、ディアナをパパのお嫁さんにしてくれる？』

父親はまた笑い、ディアナを肩の上にかつぎあげた。

『ディアナにはパパよりずっとすてきな花婿が現れるさ。ディアナを誰より愛してくれる王子さまがね』

『その人はパパよりもディアナを愛してくれるの？』

『もちろんだ。それが運命の相手なんだよ。パパがママにめぐり会ったように、ディアナもいつか、たったひとりの相手にめぐり会うだろう』

父親の肩の上、やわらかな黒い髪に覆われた頭につかまって、ディアナは星雲を眺めた。近くには小マゼラン雲やオメガ星団、そしてひととき目を引く南十字星にケンタウルス座。一等星は十個以上見え、南半球の夜空は華やかだ。

手を伸ばせば星がつかめそう。そう思って父親の頭から手を離し、空に向ける。バランスが崩れて体が傾いても、すぐに父親の大きな手が支えてくれる。

『大丈夫かい、ディアナ？』

『うん』

目を見交わし、ふたりはほほえんだ。そしてまた、彼方の星々に顔を向けた。

大マゼラン雲が十六万光年もの彼方だとディアナが知ったころには、父親の体は月への渡航ビザの申請さえできない状態になっていた。

それでもディアナは夢を捨て切れず、自分で父親を月に連れていけるように、モデル業のかたわら猛勉強して特殊一級パイロット免許をとった。ビットダイバーを目指したのも、公のデータを改ざんするクラッキング技術を身につけ、父親をこっそり月面に下ろすためだった。

「……地球を出ることはできても、ビザがなければルナホープには入れない。だから、父の船はしばらく月の軌道を周回していたみたい。そしてあきらめて、地球に進路をとった。でも……船は突然連絡を絶ち、航路から消えた。それがちょうど一年前」

ディアナは窓から離れてベッドに体を漂い寄せた。青年の胸にそっと耳をつけ、目を閉じて、鼓膜に響いてくる間遠な心臓の音に聞き入る。

なぜこの男を始末してしまわないのだろう。

理由はわかっていた。黒い髪と黒い瞳、穏やかな笑顔が、正気のときのやさしい父に似ていたからだ。はじめて天音に会った瞬間に惹かれたのは否定できない。

天音はディアナを特別扱いすることもなく、ただの仲間として接してくれた。彼のそばではくつろいだ気分になれた。父親とベランダで夜空を見あげていたときのように。

ディアナは目を開け、ゆっくりと頭を起こして、天音の動かない指に自分の指をからめた。男にしてはほっそりとした繊細な指。バイオリンを持てば巧みに弦を押さえ弓を操る器用な指も、いまはただ冷たくこわばっている。

この指で、どんなふうにエメラインに触れたの？

結局、天音を選んだのはやせっぽちでそばかすだらけの女だった。自分のどこがあのない女に劣っていたというのだろうか？

青年の乾いた唇にキスをしてから、ディアナはベッドを離れた。興ざめしたように冷たい一瞥を青年に投げて部屋を出る。自分の個室に行き、デジフレームに向かう。

天音が仮死催眠を使ってまで守ろうとした情報はなんだったのか、いまだにわからないのが気にかかっていた。

ディアナは天音の交信記録を再度チェックし、弟とのやりとりを目をとめた。天音の寝室にあった家族の写真に、弟が写っていた。名前は響揮。天音によく似ているが、顔立ちにまだ幼さを残した少年だ。兄弟の仲がいいことは、交信記録からも十分にうかがえた。

それに、とディアナは考える。彼女がオペレーション室に入る直前に、天音が弟の名を呼ぶのがたしかに聞こえた。

もちろん、弟のコンピューターはすでに調べた。セキュリティは最低レベルでウイルスに汚染され、破壊されたファイルの残骸があちこちに散らばっていて、掃除をしてやりたくなる気持ちを懸命に抑えたものだった。ネット上にある弟のデータ保管庫ストレージにも、気になるものはなかった。

腕組みをして考えこむ。天音が最後に送ったビデオメールには、『例の件、頼むよ。ナンバーは十三だ』とある。だが過去の交信記録からは、？例の件？にあたるものが見つからない。日本語の暗号解析にもかけてみたが、結果は芳しくなかった。

ただ、『39、4649』は？ありがとっ、頼むよ？という意味の暗号らしいと判明した。そんなことをわざわざ暗号で伝える必要があるのだろうか？ 仲のいい兄弟のすることは、ディアナには理解の外だった。

弟はもう月に着くころだと考えて苦笑する。シリウス・グループの招待とは、なんとも皮肉な偶然だ。しかもホテル・クレセントに泊まるなら、接触の機会があるかもしれない。

ディアナは再度、弟の旅程を確認した。同行者は三井遙香、十五歳。誕生日は六月二十三日。

ふと、なにかが頭をかすめた。

女の子、誕生日……。

そのときパイロットの声がスピーカーから聞こえてきて、思考が中断された。

『ミス・ディアナ、緊急通信が入っています』

定員が六人以上の船が大気圏を出入りする際は、特殊一級ライセンス保持者が二名以上必要と宇宙航行法で定められているので、いまは臨時雇いのパイロットに操船を任せている。この船にはエンジニアも乗っているが、トラブルがないかぎりは個室から出ないよう言い含めてあった。

ブザーとともに、宇宙省所属パトロールシップからのメッセージが流れてきた。

『宇航機登録ナンバーHLD630SSTR、こちらはUCCI2357。この宙域は現在レベルBのスペースデブリ警戒警報が発令されています。最新のデブリ情報を送信しますので、そちらの航行制御システムの受信回路をひらいてください』

ため息をつき、ディアナは指示に従うよう機内通信でパイロットに告げた。大統領機がまもなく通過予定なので、連邦宇宙軍の警戒艇はもちろん、宇宙省のパトシップも多数動員されているのだ。レベルBの警報なら緊急で知らせるようなものでもないのに、こちらがVIPということで気を遣ったのだろうか。時計を見ると、ルナホープ宇宙港までは約一時間だ。

もうすぐ計画が動き出す。

ディアナはディジフレームを離れて革張りのソファに座り、腰のストラップをゆるくしめた。

慣性飛行中、船内は無重力状態だ。ソファに座った状態を保つためには、体をソファに繋いでおかなければならない。地球でのようにソファにゆったりと？身を沈める？ことができないのは不満だが、物理の法則を曲げることはできなかった。

目を閉じて、船のAIに命じる。

「《新世界》を。アジアン・フィル、指揮は鷹塔佑司で」

部屋に勇壮な交響楽が流れてくる。さきほど頭をかすめた日本の少女に関するかすかな疑問は、いつのまにかディアナの頭から消え去っていた。



## ACT6 ムーンウォーカー

ロケットで月に向かうあいだに日付が変わった。響揮と遙香は、月を周回する軌道ステーションでルナホープ宇宙港ゆきのシャトルに乗り換えた。

軌道ステーションからは、北極近くのルナホープ・シティや、南極近くにある月面第二の都市ルナサウス・タウン、また赤道域の施設群へのシャトルが出ている。赤道域には大規模発電施設や鉱物資源の採鉱・精錬工場、酸素製造工場、天文台などの各種研究施設が点在し、月域の産業を支えている。

三十分後、大型バスに似た箱形のシャトルは、底面にあるエンジンを逆噴射させ、コンクリートの堅固なポートめがけて垂直に降りていった。月域の交通には垂直離着陸機が使われる。月面には大気がないので、地球の飛行機のような翼は必要ないからだ。

シャトルから突きだした四本の脚がしっかりとコンクリートで固められた地面をつかむと、スプリングが着地の衝撃を吸収する。この脚部は箱形の本体に比べて華奢な印象だが、月面は低重力なので、この程度でも十分にシャトルの重量を支えることができる。

宇宙港の施設群は隕石の衝突や宇宙線の影響を避けるため、月の砂で厚くおおわれている。そこから長いエレベーターで地下へ降り、溶岩洞窟を利用して建設されたルナホープ・シティへと入る。

エレベーターを降りた響揮と遙香は、明るいベージュの壁と高い天井に囲まれた広いホールに出た。

「ここがネクススホールだ」

響揮はウエストポーチのホルダーからマイティフォンをとってマップを表示させた。

ネクススホールは月面の各観光ポイントや施設へ向かう人々の集合場所になっているので、観光客らしき人々があふれ、にぎやかだ。壁には3Dフォロの広告が浮かび、観光案内が流れている。

『氷の海遊覧ボートは、ネクサスホールBゲートより、毎日十時と十五時に運行しております。所要時間は約三時間、与圧スーツは必要ありません。市内と同じ服装で月面の絶景をお楽しみいただけます』

『ルナホープ・シティは今年、市政施行十周年を迎えました。本日六月二十二日の月条約締結記念日にはロシユフォード地球連邦大統領をお招きして、盛大なセレモニーを行います。おもな記念行事は』

響揮はスケジュール表を起動し、これからの予定を確認する。

早めのランチをとり、十一時にアペニン山脈の溶岩洞窟ツアーに出発。夜はアルテミスパークで行われる平和行進に参加。平和行進は月条約締結記念日の恒例行事で、市民総出でパークに立ち、手をつないで輪を作るというものだ。今年は大統領も輪に加わるということ、例年以上の盛り上がりが予想される。

そして明日はいよいよメインイベント、宇宙遊泳ツアーだ。ボートに乗り、地上十キロの上空で宇宙空間に出る。足もとに直径四十キロ、深さ三キロの月面でもっとも明るいクレーター、アリストアルコスを見ながらのスペクタクルな体験だ。

市内に戻ったら、朝到着している予定の両親と合流。夜は遙香のバースデー・パーティーで……。

響揮はマイティフォンをホルダーに戻した。明日、遙香にプレゼントを渡そうと思っていた。計画をみごとに狂わせてくれた兄には、いつかお返しをしてやらなければ。五百UD程度のこづかいで許せる問題ではない。

「どうしたの？　しかめっ面しちゃって」

遙香が心配そうに顔をのぞきこんでくる。

「……なんでもない」

ふと天音の奇妙なメールが思いだされたが、響揮はあえて無視した。兄貴はラッシュユダيبのやりすぎでおかしくなっているに違いない。きっとそうだ。

「遙香、ランチはどうする？」

「ネクススホールのフードコートにいろいろありそうだよ」

遙香はマイティフォンで月面観光ガイドを見ながら言った。

「響揮のおごりだから、高いもの頼んじゃおうっと。これなんかいいな、？月面産無農薬野菜たっぷりのアルテミスプレート。女性に超お勧め、二十UD、プラス二UDでドリンク付き？」

「うわ、大損。次は紅組に賭けよう」

ふたりは表示に従ってホールを歩きだした。

踏みだす足は妖精になったかのように軽く、油断すると宙に浮いてしまう。月に来たという実感がわいてきて、響揮はわざと床を強く蹴り、大きくジャンプした。

「待ってよ！」

遙香が追いかけてくる。空中に伸ばされた彼女の手をつかまえて、響揮はぐつとその手を強く引いた。一瞬にふたりの距離が縮まり、ふわりと泳いだ遙香の前髪の前が響揮の鼻先をかすめた。互いの顔がいつになく近い。

目を見つめ合ったまま着地すると、ふたりはどちらからともなく顔をそらした。

「ご、ごめん」

響揮はぱつと手を離れた。

所在なげに手をジャケットのポケットに突っこんで、遙香はまた歩きだす。

周囲を見ると、市民らしい月面慣れた人々は小股でさつさと歩いている。月では大股で歩くと前に進むよりも上に浮きあがってしまうからだ。

ふたりはさつそくまねをして、お互いを横目で見やって笑いをもらした。

「やれやれ、絵に描いたような観光客だな」

ときどき小さく跳ねたりしながら歩いていく少年と少女を見つめて、アレックスは壁にもたれたままつぶやいた。

「まるで月ってのは楽しい場所みたいじゃないか」

左の耳の奥にセットしたイヤホンから冷たい声が返ってくる。

『別な楽しみに発展しないように祈りますよ。彼らの両親のためにね』

「まだこだわってるのか、サレム」

アレックスはにやりとして、胸のエンブレムにセットされたマイクロサイズの通信端末にささやく。

「あいつらだつて子供をつくらないやり方くらい心得てるさ」

『主任！』

「わかつてるよ、そういう問題じゃないって言うんだろ。まったく化石みたいな奴だな」

『わたしから言わせてもらえば、両親はこんなことを許すべきじゃないんです』

真剣に憤慨しているらしいサレムに、アレックスはまた笑った。

「仲良きことは美しきかな、美は善なり、ゆえに仲良きことは善なり。うん、われながらみごとに三段論法だ」

『プラトンですか。哲学は苦手だな』

「文学だよ。ムシャノコウジサネアツってんだ」

『ムシャノシヨウジアツアツ？　なんだか怪しい呪文みたいですね』

「ムシャノコウジサネアツ、だ。俺には聖典の暗唱のほうがよっぽど呪文めいて聞こえるがね」

『ひどい偏見だな。今度意味を教えてあげますよ』

「そんな暇あったらデスクで報告書を書くぞ、俺は」

アレックスは背中を壁を押して離れ、フードコートのほうに向かう少年たちを見送った。彼らがこれから溶岩洞窟探検ツアーに参加することはすでに調査済みだ。

「女神さまは？」

皮肉な響きをこめて問うと、ややあって、かたい口調の返事がある。

った。

『現在月まで二万六千キロ。到着は十四時ごろでしょう』

「月の女神、故郷に帰るってわけだ。なにを狩ろうっていうのか」  
『狩るって？』

「ディアナってのは狩猟の女神でもあるんだよ。月域勤務ならギリシャ・ローマ神話くらい読んでおけ……」って、異端の神の話は受け入れられないんだったか？ 面倒な奴だ」

聞こえよがしのため息について通信を切ろうとする。

『ああ、待ってください主任。いま、鷹塔天音の所在を研究所に問い合わせた結果が入ってきました』

「どこにいるんだ？」

アレックスはわらにもすがる思いで訊いた。

『休暇中で所在不明。今朝本人から申請があつたそうです。期間は  
一か月』

「くそっ……！」

アレックスは唇を噛んだ。血がにじむほど強く。こぶしを固く握りしめ、額に当てる。

『主任……？』

気づかわしげな部下の声も、アレックスの胸に刻まれた深い悔恨の痛みをやわらげてはくれなかった。

『GPSデータを照会できればいいんですが……無理ですよ』

連邦政府機関に所属する人間は、所在把握のためにGPSによる位置情報発信機を携帯する義務がある。そのデータを照会すれば居場所がわかるのだ。しかし、緊急事態でないかぎり、休暇中の人間のGPSデータを照会するのは個人情報保護法違反だ。

「そもそも彼がいま発信器を携帯してるとは思えない」

通信を切ると、アレックスは足早にホールを歩きはじめた。

盗聴に二十四時間の監視つきという状況のなか、天音はよくやつてくれたと思う。だがいかんせん、ひとりで立ち向かうにはあまりにも相手が大きすぎた。いや、誰にとっても敵にするには危険すぎ

る相手だったのだ。

しかし、アレックスも当初はディアナのことをよく知らなかった。そうでなければ、妹を巻き込むことはなかっただろう。ことのはじまりは、新任の部下のサレムからもたらされた情報だった。

月域への異動前に中東とアフリカの過激派監視専門部署にいたサレムは、その方面の事情に詳しい。反政府地下テロ組織 赤いドロのメンバーのひとりが最近ディアナに接触したという報告を聞いたとき、アレックスは奇妙な引っかかりをおぼえた。

ディアナが新造のプライベートシップを手に入れ、何度も月に来ているのは知っていた。しかも彼女は特殊一級ライセンスを持ち、船を自分で操縦している。フローレス家は連邦一の資産家だから、金はあるほどあるだろう。しかし、月域に相当の執着がなければプライベートシップを所有したりはしないはずだ。

その彼女がテロリストと接触したというのは、どういうことだろう？

『おまえはディアナと一緒に働いているんだから親しいだろう。知っていることを教えてくれないか』と、妹のエメラインに頼んだのが先月はじめ。

アレックスが知リたかったのは、ディアナの職場での様子や友人関係など、表面的なことだった。しかし、エメラインも連邦政府の捜査機関の一員。研究所のプロジェクトに引き抜かれる前はテロ対策専門のネット捜査官だったから、勘が働いてなにかしら不審を抱き、深入りしてしまっただけに違いなかった。

『気になることがわかったの。また連絡するわ』

使い捨てアドレスからのメールを最後にエメラインは消息を絶ち、翌日、自宅のアパートメントで遺体で発見された。検死の結果は心不全。ラッシュの過剰摂取による副作用と断定され、事件にもならなかった。

葬儀に参列した喪服のディアナと握手をかわし、悲しそうな表情の彼女から悔やみの言葉を受けながら、このままでは終わらせない

とアレックスは決意した。

そうはいつても、ディアナは経済界の女帝ナタリア・フローレスの娘であり、政府内部や捜査局、警察関係者にも強力なコネがある。捜査しても、証拠はすべて、公になる前に闇に葬られるだろう。

当然のように、アレックスは裏道を選んだ。生前に妹からよく話を聞かされていた、彼女のごく親しい同僚、鷹塔天音に協力を求めたのだ。天音は連邦きつてのビットダイバーだ。ディアナに対抗するには、どうしても彼の技術が必要だった。

天音には葬儀ではじめて顔を合わせた。エメラインの棺に自分のバイオリンを入れてほしいと言われ、アレックスは驚いたものだった。

『エメラインとは秋に研究所内で演奏会をする予定で、一緒に練習していたんです。演奏会が終わったら正式な交際を申しこむつもりだった。僕はすいぶん年下だから、ちょっと遠慮していて』

自分の代わりに楽器を彼女のそばに、と天音は泣きはらした目を伏せて頼んだ。

最近雰囲気が変わったな、好きな男でもできたかと、アレックスが妹に訊いたのは死のひと月ほど前だった。エメラインははにかんで頬を染め、そばかすがいつそう浮きあがって見えた。

『片思いなの。彼すごくもてるし、わたしはすいぶん年上だから言いだしにくくて』

妹はそう答え、同僚の男のことを恋する女の顔で話したのだった。彼なら、とアレックスは見込んだ。いま思えば浅はかで、捜査官としてはならないことだったとわかる。だが当時のアレックスは、たんに妹の無念を晴らしたいだけの愚かな兄だった。

葬儀が終わった夜、アレックスは天音を教会に呼びだして事情を話した。天音は驚きを隠さなかったが、エメラインの死の真相を知りたいという思いはアレックスと同じだったようで、きっぱりと断らずいた。

『わかりました。その仕事ができるのは、僕以外になさそうだ』

天音と実際に顔を合わせたのは、そのときを含めて三度だけだ。それでも意気投合するには十分で、エメラインが生きていればこの男が義理の弟になったのかもしれないと思うと、アレックスの悲しみはより深くなった。

その後まもなく明らかになったのは、エメラインの死の真相ではなかった。ディアナが六月二十二日に　すなわち今日、とんでもない？計画？を実行する気らしいということ。

その時点で、アレックスは手を引くよう天音に忠告した。月域が仕事場のアレックスには、地球にいる天音を守る術がない。部外者の彼をこれ以上危険にさらすわけにはいかなかった。

だが、天音は聞き入れなかった。他の人の命を救うことで、エメラインの犠牲は無駄ではなかったと思いたかったのだろう。その気持ちはアレックスにも痛いほどわかった。

そして一週間前。近々詳しい情報を送ると連絡してきたのを最後に、天音からの接触は途絶えた。研究所での勤務は続けており、GPSで所在も確認できていたのだが、それも昨日までだ。

クラッキングがディアナにばれて監視されていたのはわかった。ディアナが実力行使に出たと考えて間違いないだろう。

アレックスは立ち止まり、眉間を指で押さえてため息をもらした。天音はおそらく、情報を守るために仮死催眠を使ったはずだ。生きている可能性はある。遺体をこの目で見るまではあきらめない。

いまはとにかく、自分にできることをするだけだ。

先ほど、反政府地下テロ組織　赤いドクロ　のメンバーで、広域指名手配中の爆弾魔、エリック・テイラーがルナホープ入りしたらしいとアフリカ支局から連絡が入った。現在ルナホープ支局はその対応に追われている。テイラーこそ、エメラインの死の原因ともなった、ディアナが接触したテロリストだ。私的に調査していた件が公になったのはありがたい。

テイラーは顔を整形して指紋も変えているが、摘発された闇整形医のオフィスからテイラーの新しい顔と見られる画像が押収された。



まずはこれを手がかりに、ルナホープ全域に手配をかける。地球連邦宇宙省宇宙域捜査局　UCCⅠは、こういった地球と軌道域、月域にまたがる犯罪の摘発が主な任務だ。

それに、手がかりはもうひとつあるはずだと、アレックスは希望を持っていた。天音が命がけで残した手がかりが。

アレックスは冷たい青い瞳を、天音の弟が消えたホールの奥に向けた。

\*

\*

正午。一時間ほど前にルナホープ宇宙港のローカル発着場を飛びたった小型船は、十二人の乗客と三人のインストラクターを乗せ、一路南のアペニン山脈を目指していた。エンジンは旧式の液体燃料型で、つぶれたカマボコのような外観の機体はお世辞にも優美とはいえない。

船内は各人が着ている蛍光イエローの観光客用与圧スーツのため、まぶしいほど明るく感じられる。インストラクターのスーツは蛍光オレンジだ。

漆黒の星空を背景にそそりたつ岩肌が見えてくると、船は静かに逆噴射をかけ、発着場に垂直に着陸した。

「ではこれからヘルメットと生命維持システムをセットして、船内を減圧して外に出ます。いよいよ月面探索になるわけですが、はじめてのかたは緊張してるでしょうねえ？　トイレに行きたい人は？」

このツアーのチーフ・インストラクターがにこやかな顔で問い、手をあげかけてやめた客に向けてにやつと笑った。

「どうぞ、遠慮せずはその場でね。だあれも気がつきやしませんからね。ガマンするのは健康に悪いですよ！」

客の緊張をほぐすように冗談めかして言う。客たちがくすくす笑った。観光用の与圧スーツでは、尿吸収パッド付きの下着を使うので、したいときにしていい。

与圧スーツの着脱にはコツが必要だが、響揮は事前に観たデモ画像で覚えてしまっていたから、さっさと自分で着てインストラクターを驚かせた。

「ではこれから外に出ますが、必ずふたりひと組で行動すること。どうしてかはルナホープを出る前に聞いたと思いますが、忘れちゃった人は？」

今度は誰も手をあげなかった。

シティの外は真空中で気圧もゼロだから、ちょっとしたミスが死につながる。不注意によって起こる事故を防ぐために、組んだ相手の様子に気を配ることが大切なのだ。注意すべき事項は、旅行前にネット経由での受講が義務づけられている「宇宙空間活動講習」によって、すべての観光客に周知されている。市制施行以来、観光客の死亡事故は不運にも隕石の直撃を頭部に受けた一件のみだ。

「オーケイ。なにか異常を感じたら、どんな小さなことでもすぐにわれわれインストラクターに言うてくださいね。そしてわれわれのそばを離れないこと。スーツには、あなたが迷子になったときすぐ発見できるようGPS発信器が組みこまれています。だからといって迷子になっていいということではありません。ここは安全な大気を守られた地球ではないということを、くれぐれもお忘れなく。では、これからみなさんに生命維持システムをつけてもらいます」

響揮と遙香の担当はチーフ・インストラクターだった。ひとりずつ背中にバックパック型の生命維持システムを背負わせて与圧スーツと接続し、ヘルメットをかぶせる。ヘルメットとスーツの接続リングを合わせてシールすると、すぐにスーツ内が酸素で満たされる。生命維持システムから送られてくる酸素は乾燥していて、ちょっとほこりっぽい。

左腕のコントロールパネルでシステムが正常に作動していることを確認し、準備完了。

『バディのシステムがオールグリーンになっているかどうか、お互いに見て。それから音声と目で、具合の悪いところはないかどうか

確認して』

スピーカーから聞こえる指示に従って、ふたりは互いのコントロールパネルを見せあった。

「オーケー?」

「オーケー」

スピーカーから明瞭な声が聞こえてくる。

通話はバディとインストラクターの声が大きく聞こえ、他のツアーマンバーの声はノイズ程度になるよう設定されている。ちよつととまどうのは、相手が遠くにいてもまるで耳元で話しているように、はつきり聞こえることと、ひとりごと相手によく聞こえてしまうことだ。

『みなさん、異常ありませんね? では外に出ますよ』

女性インストラクターがエアロック脇のコンソールパネルのカバーをはずし、赤い減圧ボタンを押した。ボートのキャビンには誰も残らないので、エアロックだけでなくキャビンも外と同じ真空になる。空気が徐々に抜けるに従い、与圧スーツ内の空気が膨張してふくらんでいく。

再度、全員に異常がないことを確認してから、チーフ・インストラクターがエアロックのハッチを開け、続いて外に通じるもう一枚のハッチを開けた。

そこは真空の大地だ。

響揮はタラップのてすりをつかんだ。手袋は厚いうえに気圧差のせいでふくらんでおり、自由がききにくい。与圧スーツもいまや風船を着ているようなものだから、想像していたよりもずっと動きが制限される。とまどいながらも十段ほどの階段を下り、コンクリートで固められた発着場に下りたつと、細かい月の砂が足元でふわりと舞いあがった。

『わあ!』

すぐ後ろから下りてきた遙香が歓声をあげた。

前方にそそりたつアペニン山脈の岩壁は、地平線に近い太陽の光

を真正面から受けてまぶしく輝き、その後ろの岩峰には長い漆黒の影が落ちて、目に痛いほどのコントラストだ。

背景には無数のクレーターが穿たれた平野が横たわっている。クレーターの縁は隕石衝突の激しい衝撃を物語るように盛り上がり、なかには二千メートルもの壁となっているものもある。太陽光を受けて縁の一方は光っているが、反対側はすべてを吸い尽くすようなまっ黒な影を長く平野に落としている。灰色の地表にところどころ明るい放射状の筋が見えるのは、比較的新しいクレーターができたときに隕石が吹き飛ばした蛍光質の岩石のせいだ。

風景に見とれていると、いつのまにかチーフ・インストラクターがそばに来て、指で天を指し示した。響揮はそり返るようにして頭上を見あげた。

漆黒のベルベットを広げたような空が広がっていた。空気がないために、空は地球とは違っていつも真っ黒だ。太陽が沈む？夜？には、またたかない星々や銀河の放つ硬質な光を見ることができると。その空に、青い地球がぼつかりと浮かんでいた。

半分の地球。いまにも破れてしまいそうなもろさを感じさせる薄い大気のパールをまとい、その惑星はくつきりと鮮やかに、虚空に生命の輝きを刻んでいた。

呆然と立ったまま、響揮は背中がぞくぞくするような感覚を味わっていた。形容しがたい思いが胸の底からわきあがってきて、頭の芯がしびれてくる。

チーフが静かに口を開いた。

『僕ははじめて月から地球を見たときに思ったよ。月はひとりぼっちでいるのが寂しくて寂しくて、それで地球を引力でゆさぶって生命を発生させたんだ、ってね。いつか宇宙を航って自分に会いに来てくれるように』

月はそもそも衛星と呼ぶには大きな天体で、地球とは二重惑星系といってもいいくらいの大きさの比率をもつ。大きな天体は、引力もまた大きい。月は地球を引っ張り、そのために潮の満ち引きが起

こる。数十億年前には月はもつと地球に近い軌道を回っていたため、月による潮汐はいまよりもずっと大きく、海岸の環境を短いサイクルで激しく変化させていた。それが進化のスピードを速め、生物の多様性を引きだす源となったのだと言われている。月はいまも、年に四センチずつ地球から遠ざかっているのだ。

『そしていま、われわれは月面に立っている。厳粛な風景をぶちこわすような蛍光イエローのスーツ姿でね。月の女神さまがファッションセンスにうるさくないことを祈るのみだ』

おどけた口調で言って、チーフは発着場を横切り、小さな岩石や月の砂に覆われた月面を歩きだした。

『さあみなさん、こつちですよ。転んでも痛くはないけど、スーツに傷がつくかもしれないから注意してくださいね。異常を検知すると警告のアラームが鳴りますが、すぐわれわれが駆けつけますからあわてないように』

アペニン山脈は月面有数の高峰群で、七メートル級の山々が連なるさまは、さながら地球のヒマラヤ山脈を思わせる。もつとここには万年雪もブリザードもないが。ふもとは三十六億年前に冷えて固まった溶岩によって、たくさんの洞窟ができています。

観光用に開かれたルートはごく一部だが、天井の高さが百メートル近くあるホールのような洞穴もあれば、人ひとりがやっと通れるくらいの、探検気分が味わえる狭い通路もある。内部の照明は抑えてあり、こつこつした岩肌がさまざまに陰影を刻んでいて神秘的な雰囲気だ。

洞窟の入口は、地面にぽっかりと開いた直径五十メートルほどの穴だ。そこに地下へ通じる長いリフトが設置されている。

リフト乗り場へと歩きながら、女性インストラクターが客に説明した。

『月はおよそ二十八億年前に火山活動を停止して、表面は冷えてしまいました。ここからは？雨の海？がよく見えますが、月面の？海？はご存じのように本当に水があるわけではありません。大きな隕

石が衝突してできた穴に内部から溶岩が流れこみ、冷え固まったものが黒っぽく見えるのです。月面の明るい部分を陸、暗い部分を海と考えたのは、あのガリレオ・ガリレイが最初です。雨の海は三十億年ほど前にできたものですが、みなさんがいま見ている風景は、そのころとほとんど変わっていません。当時地球では、恐竜はおろか植物さえ出現していませんでした。われわれはまだバクテリアだったのです……」

気の遠くなるような時の流れを感じてほしいとインストラクターは考えたのだろうが、客のほうは話を聞けるような状態ではなかった。みんな慣れない与圧スーツと月面の低重力にもてあそばれ、歩くだけで精いっぱいという様子だ。

故障したロボットのようによろめきながら進む客たちを尻目に、三人のインストラクターはリズムカルにとんとんと地面を蹴りながら、あまり砂を巻きあげずに進んでいく。歩くというよりは小走りという趣だ。

響揮もまねをして歩いていると、遙香の声がした。

『まただ。響揮ってば』

隣に目をやるが、ヘルメットのバイザーが太陽光を反射していて、遙香の表情はよく見えない。

「なに？」

『昨日のエアバスケットとおんなじ。なんでもやったとたんに上手にできちゃう』

「なんでもじゃないさ。楽器はからきしダメなの知ってるだろ。指揮者の息子のくせにつて、よく陰口言われるよ」

『そーいえばそおね。天音さんはピアノもバイオリンもプロ級だもんね』

『悪かったね、と響揮は心中で悪態をつく。どうせ俺は楽器音痴だよ、誰かさんと違って。』

母親の真城子も、ああ見えてビオラが得意だ。家族で弦楽四重奏団を結成するという両親の夢がかなうことは、永遠にないだろう。

響揮は嘆息し、無意識に足を速めた。

幼なじみの背中が遠ざかっていくのに気づき、遙香はあわてた。

追いつこうと足を前に出した拍子にバランスを崩し、転んでしまう。

「あつ」

思わずもらした声が聞こえたらしく、響揮が振り返った。とんとんとリズムカルな歩調で戻ってきて、さっと手を差し出す。

『大丈夫か？』

遙香はその手をとらず、自分で立ち上がろうとした。しかし、今度は背中の方に重心がいきすぎて尻もちをついた。

チーフ・インストラクターは、担当のもうひと組の客がふたりとも転んでしまったので、そちらのフロアに忙しい。

ふたたび差いだされた響揮の手を、遙香は一瞬ためらってから握る。

「あんまり先に行かないでよ。あたしは響揮みたいには歩けないんだから」

『……ごめん』

遙香は立ち上がるとすぐ響揮の手を離し、ついに彼に背を向けて、インストラクターがもうひと組の客を助け起こす様子を眺めた。こみあげてくる感情がなんなのかわからず、もどかしかった。いらだち？ 焦り？ それとも……。

ヘルメットのなかでそつと、肩越しに後ろを振り返る。響揮はヘルメットのバイザーを上げて、アペニン山脈の絶壁の向こう、立ちのぼる煙のようなプラチナ色の銀河を見あげていた。

遙香はどきりとした。

響揮の視界に自分が入っていないのは明らかだった。幼なじみの横顔が、まるで知らない人のもののように感じられる。

「響揮！」

思わず、大声で呼んだ。

響揮がすぐ顔をこちらに向ける。

『なに？』

「……なんでもない」

心臓がときどきしているのはなぜだろう？ 遙香は無意識に髪をいじろうとして手をあげたが、ヘルメットにはばまれ、はっとしてまた下ろした。

『お待たせしました、行きましょう』

チーフ・インストラクターが呼びかけてきた。

『みなさん、できればあんまり砂を巻きあげないようにね。月の砂は細かい上に表面が鋭いから、精密機器と相性が悪いんです。ボートに戻ったときは、エアロックで砂を落とすのを忘れずに……』

客たちは徐々に月面に慣れ、リフト乗り場に着くころには、みんなどうにか転ばずに歩けるようになった。

だけど、と遙香は隣を歩く幼なじみをちらりと横目で見る。

響揮は一步一步たしかめるように歩いていった。蹴りだしの角度とスピードで、どのくらい体の浮き方が違うのか。最適なスピードと歩幅はどれほどなのか。月の砂は静電気が起きやすく、すぐスーツに張りつくのに、響揮のスーツはきれいなままだ。

遙香は自分のスーツを見おろす。何度か転んだせいもあって、下半身はもちろん、上半身も砂だらけだ。

八月半ばになったら響揮はいなくなるのだと、遙香はふいに実感した。そう、真夏の言うとおり、響揮はヒューストンに行ってしまう。

ひどく寒くなったような気がして、左腕のコントロールパネルに目を落とす。けれども、数字の意味は頭に入ってこなかった。

髪に手をやりたくなる衝動を懸命に抑え、遙香はリフト乗り場で洞窟に下りる順番を待った。

\*

\*



強化遮光ガラスの向こう、灰色の地平線近くで輝く太陽を眺めながら、ディアナはシャンパングラスを傾けていた。

ホテル・クレセントはシリウス・グループが所有する高級ホテルのひとつだ。自慢は素晴らしい眺望だが、アルテミスパークの中央にそびえるルナタワーの上部にあるとなれば、それも当然。最上階のスイートルームは、オーナー族のための特別室だ。

ものうげに首を回して、ディアナは壁面を見た。スクリーンにはニュース番組が映しだされている。

『サンパウロ中央病院に収容されたジョアン・フロレス平和共立党党首の意識はいまだ戻っていません。爆弾が仕掛けられた花束をフロレス党首に渡した少女は、知らない男から花束をもらったと主張しており、現在捜査機関が連携して捜査にあたっています。しかし犯人の手がかりは得られていない模様です』

電話の着信音が鳴り、ディアナは発信者を確認してからスクリーンをヴィジモードに切り換えた。髪をアップにした中年のブロンド女性が写り、早口で告げる。

『ディアナ、お願いよ。早く帰ってちょうだい。……ジョアンが危ないの』

母親のナタリア・フロレスだった。いつもの経済界の女帝の鉄の仮面はどこへやら、ひどく取り乱した様子だ。まるで普通の、愛情あふれる母親のように。

「パパが呼んだのかもしれないわね。今日は？命日？だもの」

ディアナは冷たい口調で応じる。

「……あなたがジョアンを嫌ってるのはわかってるわ。でも  
「いいえ、ジョアンがわたしを嫌ってるのよ。わたしなんか見舞  
いに行けば、よけい具合が悪くなる」

『ディアナ』

ナタリアは絶句し、ヴィジのウィンドウのなかでただ涙を流した。夫が宇宙で行方不明になっても泣かなかったくせに。ディアナはますます自分の心が冷めていくのを感じる。

長男のくせに家業は継がずに政治畑を選び、しかもグリーン・サ  
ンクチュアリ法にまっこうから反対して　つまりは地球を破壊す  
る方向で人気を得ようとしているジョアンは、ディアナから見れば  
愚かたしか言いようがなかった。

地球はすでに飽和状態だ。人類の未来はこれからの宇宙開発にか  
かっている。そんなことも見通せない男が次期大統領候補だなんて、  
笑うしかない。

だがジョアンを盲愛するナタリアは、息子の政治への関心は実の  
父親に似たのだと、ひそかに喜んでいふしがあった。

そう。ジョアンの実の父親は、ナタリアの夫　ディアナの父親  
ではない。

『わたしのせいね』

抑えた嗚咽のあいまに、ナタリアがつぶやいた。

『わたしがあなたをかまわなかったから……こんな冷たい子に……』

「わたしはあなたにそっくりだってよく言われるわ。冷たいところ  
も似ていて当然でしょう。パパが苦しんでいるのを知りながら、あ  
なたは放っておいた」

『わたしは　』

「あなたがわたしをかまわなかったのは、嫌っているからよ。ジョ  
アンもそう。彼は小さいころからわたしを完全に無視してた。ジョ  
アンの前では、自分がまるで透明人間になったような気がしたもの  
だわ。彼と半分しか血が繋がってないのはわたしのせいじゃない  
のに」

『ディアナ、それは……』

ナタリアは涙に濡れた緑色の目を見開き、なにかを言いかけて、  
また口を閉じた。

秘密を告げようとするためのためらい。

ディアナは嘲るように言った。

「ジョアンの実の父親がパパじゃなくてフランク・ロシュフォード  
だってこと、わたしが知らないとも思ってたの？」

ナタリアの顔にゆっくりと絶望の色が広がっていくのを、ディア  
ナはただ無表情に見つめていた。

ACT7 女神の箱庭（前書き）

## ACT7 女神の箱庭

ツアーを終えてネクサスホールに戻った響揮と遙香は、市内を無料で運行している公営タクシーに乗り込んだ。四つの車輪のついた箱型の車体には屋根もフロントガラスもなく、車というよりはトロツコのような趣だ。

「パークにのぼるエレベーターまでお願い」

遙香が告げると、タクシーのAIはやわらかな女性の声で答えた。『かしこまりました。アルテミスパーク直通のタワー・エレベーターまでご案内します。所要時間は約五分です』

スライド式のドアが閉まり、タクシーがゆっくりと走りだす。重力の小さい月面では路面とタイヤとのグリップが保ちにくいので、速度は時速二十五キロほどだ。

シティのシンボル、強化ガラスのドームに守られたアルテミスパークが建設されたのはいまから十年前だ。地球に住む人は、ルナホープではどこでも漆黒の宇宙に浮かぶ青い地球が見られるのだと錯覚しがちだが、そんな絵のような光景は市内のセントラル地区・アルテミスパークだけのものだ。居住区や工場など、シティのほとんどの部分は地下にある。

ルナホープ・シティは、響揮と遙香がさつき見たような溶岩洞窟をベースにして築かれている。大気のない月では人体に有害な放射線や隕石が容赦なく地表に降り注ぎ、太陽光に照らされる昼間と闇に沈む夜との気温差が二百度にもなる。溶岩洞窟では、厚い岩盤がそれらの悪条件から人間や設備を守ってくれるため、居住施設や工場の建設に適しているのだ。大規模な掘削と整地が必要だが、溶岩洞窟を利用するメリットは十分に大きく、近年は溶岩洞窟の開発が進んでいる。

だが、閉ざされた空間で長いあいだ生活していると、精神的な問

題をかかえる人間も増える。そこでルナホープの市政施行にともなう社会基盤整備の一環として、地球連邦政府が巨費を投じ、？外に見える？公園、アルテミスパークを建設した。

響揮は防汚コーティングが施された合成皮革のシートにもたれ、流れていく地下都市の景色を眺めた。

天井までの高さは七メートルほどしかなく、圧迫感はないが、歩道にはフラワーポットが配されていて明るい雰囲気だ。壁面にプロの画家の手による絵が描かれているところもあり、道ゆく人を飽きさせない。区画ごとに設けられている小さな広場には低木樹や花が植えられ、住民の精神衛生に配慮した設計になっている。

もつとも、広場は住民が憩うためだけにあるわけではない。

『ではここで、シエルターについてご説明します』

A Iが淡々とした口調で言った。ルナホープはいまや一大観光都市だから、機会あるごとに観光客に安全教育を施すのが市の政策なのだろう。

「いいよ、わかってるから」

響揮は断るが、A Iは意に介さない。

『歩道や壁には一定間隔で、蛍光オレンジの矢印が描かれています。これは広場に設けられた緊急避難シエルターへの道しるべです……』

市内で火災などが発生した場合、その区画はシャッターで閉鎖されて消火が行われる。逃げ遅れた人は、独立した酸素供給や温度管理システムを備えたシエルターに避難して、その場をしのぐのだ。

A Iがとうとうとしゃべり終えるのを見計らったように、タクシ―が目的地に到着した。

ふたりは大勢の客とともに、ルナタワーに通じる長いエレベーターに乗り込んだ。着いたところは、半透明のガラススタイルが敷き詰められた明るい雰囲気のコロニー。その向こうに広がるパークの鮮やかな緑と色とりどりの花々を目にして、遙香は歓声をあげた。

「わあ、きれいな！」

エレベーターから吐き出された客たちと一緒に、ふたりは白いタ

イル張りの歩道に足を踏みだした。

ドームの強化ガラスを通して、真横から差し込む太陽光がまぶしい。枝を大きく広げた照葉樹や草花、芝生もすべて日差しを受けて輝き、反対側には長くくつきりと影が落ちている。地球では絶対に見られない、光と影の幻想的な競演だ。

月の北極近くにあるルナホープ・シティは、現在？夕方？の領域に位置している。地球から見るといま月は半月で、ルナホープは昼間と夜のはざまにあるのだ。夕方とはいっても地球のように大気があるわけではないから、空が茜に染まることはない。ぎらぎらした太陽がゆつくりと、何時間もかけて地平線に沈んでいくだけだ。

自転速度が遅く、約二十九日で一回転しかしない月面では、二週間？昼？が続いたあとは二週間？夜？が続く。だが？夜？のあいだも連邦標準時に従い、人工照明によって朝六時から夜二十時までは？昼間？として扱われる。

「響揮、早く！ アイスクリーム食べに行こ！」

ガイドブックで調査済みらしく、遙香は花壇の向こうの？神々の広場？へと跳ねるように歩いていく。

溶岩洞窟ツアーでは、遙香はなぜか口数が少なかった。疲労のせいだろうか、あるいは小さなミスが命取りになる空間で緊張しているせいだろうか、響揮はいぶかっていた。だがいま、彼女はいつもの元気さを取り戻したようだ。

ちよつとほつとして、響揮はぐるとドームを見渡した。

アルテミスパークはおよそ縦七百メートル、幅四百メートル、天井の高さは約四十メートル。面積はニューヨークのセントラルパークの十分の一にも満たないが、住民が三万人弱であることを考えれば贅沢すぎる広さだ。幾本もの単結晶ファイバー製の支持架に支えられた強化ガラスの天井は、ゆるいカーブを描いて地上に続き、上空から見るとまるで楕円形の箱庭のよう。

月面の鉱物資源を使って生産された強化ガラスは、強い放射線や紫外線を遮断する特殊なコーティングが施され、カーボンナノチュ

ーブをはさみこんだ構造が、隕石の衝突にも耐える強度を生みだしている。万ーガラスに穴があいても、ただちに支持架の要所からバブル状の密閉材が放出され、穴をふさぐ応急処置が施されるシステムだ。

神々の広場の手前に、目指すアイスクリームショップがあった。

甘いものに目がない遙香は、さっそく特大のアイスがダブルでのつたコーンを手にして、幸せそうな顔でぺろりとなめた。

「おいしーい！」

それを横目に見ながら、響揮はシュガーフリーのアイスコーヒーを買った。

「響揮は？ アイスクリームいらないの？」

信じられないという顔で遙香が問う。

「ん、なんか気分じゃなくて」

「もったいなーい。この上のやつは？ ムーンレディ？ っていって、パークでしか食べられないんだよ。蜂蜜とレモンとココナッツ、それにクラッシュキャンディが入ってるの。味見してみない？」

差し出されたアイスクリームを受けとろうかどうかどうか、響揮は一瞬迷った。

間接キス。

いかん、なに考えてるんだ、あさましい。ぶんぶんと首を横に振ると、遙香は手を引っこめてつんと横を向いた。

「少しでも食べてみればいいのに」

歩きだしながら、響揮はストローを口にくわえた。ときどき、遙香の鈍さにたまらなくいらさせられる。もつともこれほど鈍くなければ、いくら幼なじみとはいえ、男友達とふたりで月に来たりはしないだろうが。

遙香がいままで振った男は何人だろうと、ぼんやりと考える。少なくとも三人いるのは響揮も知っていた。ひとりなど、遙香の家の前で玉砕していた。

『ごめんね、あたし全然気づかなくて。これから友達ってことで、



よろしくね!』

腹立たしいほどに無邪気な死刑宣告。

につこりと遙香にほえまれ、男は虚ろな目をしてふらふらと帰っていった。それを響揮がリビングの窓からこっそりのぞき見ていたのを、もちろん遙香は知らないだろう。

アイスコーヒーの苦さが喉にしみる。

ストローを離し、響揮は小さくため息をついた。ベンチを探して周囲を見回す。パークは森や林、大小の池、芝生や花壇で構成され、バーチャルシアターやプール、クアハウス、アスレチックジム、バスケットコートなどの娯楽施設が点在している。

「ほんとにいらないの?」

隣から遙香が訊いた。アイスクリームはすでに半分ほどになっている。

「……いらない」

「ま、いいけど」

遙香がひょいと手を伸ばし、響揮の手からプラスチックのカップを取りあげた。

「ちよつともらうね」

言い終わるか終わらないかのうちに、ストローを口に含んだ。

「う、苦いー!」

顔をしかめ、カップを返してよこす。

「人の取っしておいてその言い方はないだろ」

文句を言いながら、響揮は手のなかのカップを見つめた。こんなことはいままでだってやってると自分を納得させ、ストローをくわえる。ときどきしながら横目で遙香を見ると、彼女はまた一心にアイスクリームをなめていた。

気にしているのは自分だけかと思うと、響揮はばかばかしくなった。だが気になるものは気になるのだ。そう、彼女の胸元で誇らしげに揺れるペンダントも……。

急にコーヒーがまずくなったように思えてストローを口から離す。

ぼんやりと歩きながらカップを小さく揺すり、氷が鳴る音に耳を傾けた。

自分と兄は容貌以外あまり似ているところはないと思っていた。それなのに、女の子に贈るアクセサリーの趣味が似てたなんて。しかもただの近所の女の子に贈るには高価すぎる品物だ。

兄貴はいつたいうつもりなんだ？ 遙香だって誤解するんじゃないか。

そこまで考えて、響揮は慄然とした。もしも もしも兄が意図的にそうしたのだとしたら？

俺がオンラインモールでペンダントを買ったのを、兄貴は知っていた。ビットダイバーの兄貴なら、品物を特定するのは簡単だ。そしてわざと同じペンダントを送ってきたのだ。

遙香の気を引くために。

一瞬で激しい嫉妬が胸にあふれ、頭がくらくらした。

「冗談じゃないぞ」

押し殺した声でつぶやく。

俺が遙香を好きなことを、兄貴は知っていたはずだ。応援してくれていたんじゃないのか？

「ねえ響揮、この像、すてきじゃない？」

ミルキーホワイトのガラス製の像の前で、遙香が足を止めた。アイスクリームはすでに食べ終えたらしく、手にはもうなにもない。

「え？ ああ……」

いつのまにか神々の広場に着いていたらしい。響揮は三メートルほどの高さのハンサムな男性の像を見あげた。着衣は西洋のもではないが、東洋のものとも違うようだ。しかし、いまの響揮にはそんなことはどうでもよかった。

「そうだな」と気のない声で返事をする。

この広場は一種の展示スペースでもある。中央の噴水のまわりのパネルでは、地球各地の月にまつわる神話や民間信仰を3Dフォロ映像と解説とで見られ、月の神とされる西洋のアルテミスやディア

ナ、エジプトのトート、アジアのソーマ、ツクヨミノミコトなど、神々の相互の関係や伝承の系譜がわかる。

円形の広場の周囲は月神たちをかたどったガラス像で縁取られ、中世の城の中庭といった趣だ。月にはガラスの原料となるケイ酸塩が豊富なので、巨大なガラス像は月の？豊かさ？の象徴でもある。

「名前はシン。古代バビロニアの月の神だつて。ちよつと天音さんに雰囲気似てるよね？」

「似てない」

にべもなく響揮は否定する。

遙香がマイティフォンの内蔵カメラを像に向けてから、ぐるっと回して焦点を響揮に合わせた。しかめっ面を撮られたくなかったので、響揮はぷいと横を向いて歩きだした。緊急避難シェルターを示す、足元のオレンジ色の矢印に導かれるように。シン像の背後には半地下式の緊急避難シェルターがあり、蛍光オレンジに塗られたハッチが場違いな明るさで存在を主張している。

「ねえ響揮、今日ちよつとヘンじゃない？」

遙香の声が追いかけてくる。いつそのままシェルターに逃げこんでしまいたいと、響揮は苦々しく考える。

「そんなことないさ」

「うっん、やつぱりヘンだよ。どうかしたの？」

腕をとらえられ、ぐいと引かれた。

「言ってくれなきゃわかんないよ」

答えられるわけがなかった。響揮はそつと遙香の手を払い、唐突に提案した。

「ルナレイクでボートに乗らないか？」

一瞬、遙香は目を丸くしたが。

「……うん。月の湖でボートって楽しそう。でもホテルにチェックインして、シャワー浴びてからにしない？ クレセントの部屋、早く見てみたいし」

「そうだな」

飲む気の失せたアイスコーヒーのカップをもてあそびながら、響揮はルナタワーへと足を向けた。

アルテミスパークの中央にそびえるルナタワーは、二次曲線に似たラインを描く塔の周囲に円盤状の居住スペースやレストラン、シヨッピングセンターなどが螺旋状に配された、重力の小さい月面ならではのデザインだ。そのルナタワーのいちばん上の円盤に、ルナホープ・シティで最高級とされるホテル・クレセントがある。

ふたりはタワー・エレベーターのホールで、ホテル直通のエレベーターを待った。

これからいよいよ遙香とホテルの部屋でふたりきりになるのだ。そう考えると響揮の脈は速まり、心臓がどきどきしてくる。顔が赤くなるのを意識し、深呼吸してちらりと遙香を見る。

クラシックな装飾が施されたドア上部の階数表示盤を見あげていた遙香が、ぱつと響揮のほうに顔を向けた。

「ねえ響揮」

まともに目が合い、響揮はどきつとしてあわてて視線をそらした。  
「な、なに？」

「荷物は宇宙港からホテルの部屋に運んでもらってるんだよね？」

「そのはずだけど」

「……あ！」

遙香が響揮の耳元に口を寄せ、興奮した声でささやいた。

「響揮の向こうにいるの、ミス・ディアナ・フローレスよ！」

言われて響揮は頭をめぐらせた。いつ来たのか、長身の女性がすぐそばに立っていた。響揮は上のほうにある女性の顔を見あげた。

緑色の瞳が印象的な、目の覚めるような美人だ。身長は百八十センチもあるだろうか、オリーブ色のシルクブラウスに、脚線美を見せつけるようなスリムラインの黒のストラップス。ブロンドはアップに結いあげ、いかにも大人の女性という雰囲気漂わせている。

たしかに、ネットニュースで兄と一緒に写っていた元モデルの美

女だ。

視線が合い、ディアナが軽くほえんだ。

「こんにちは」

やわらかで厚みのある、魅力的な声。

「こんにちは」

声をかけられたことが意外で、とまどいつつ響揮は返した。

エレベーターのドアが開くと、「お先にどうぞ」とディアナは響揮たちに言い、背後に立っていたチャイナドレス姿の中国系らしい少女を振り返った。手をちよつとあげて合図する。付き人なのだろうか。少女は心得たようにうなずき、数歩後ろに下がった。

ディアナが乗りこみ、ドアが閉まる。客はいま三人だけだ。ディアナから甘い香水のにおいが漂ってきて、響揮はちよつと息苦しくなる。

「どこから来たの？」

ほえんで、ディアナが訊いた。

「日本です」

「観光ね。もう月は堪能した？」

「今朝着いたばかりなんです。でも昼間は溶岩洞窟に行きました。地球がとつてもきれいだつたわ」

遙香が興奮に赤らんだ顔で言つと、ディアナはうなずいた。

「月はいいところよね。なかでも宇宙の眺めは最高よ。ホテルの部屋からもよく見えるから、味わつてね」

エレベーターがホテルのフロントのある十五階に着き、ドアが開いた。降りていく響揮と遙香に、ディアナは手を振る。

「楽しい旅を」

「ありがとうございます」

挨拶を返し、ドアが閉まると、遙香はうつとりとため息をついた。「話しかけてくれるなんて思わなかったな。気さくな人だね？ 彼女、天音さんと一緒に仕事してるんだつたよね」

「ああ。前にネットニュースの写真で遙香が名前教えてくれたろ」

「そうそう、写真でも美人だったけど、実物は女神みたいに輝いてたよね！ やっぱりオーラが違うよ。モデル引退しちゃったの、ほんともったいない！」

響揮は肩をすくめる。

「次の職がビットダイバーってのが、なんかよくわかんないよな」

「天音さん、ミス・ディアナについてなにか言っただけなの？」

「べつに。兄貴のタイプじゃないんだろ」

「ふうん？　じゃあ天音さんはどんな人がタイプなの？」

「さあ、知らない」

先月、兄は同僚を亡くしてだいぶ落ち込んでいたが、恋人という雰囲気ではなかったと響揮は考えた。ヴィジのウィンドウ越しに一度だけ会ったその女性は赤い髪で、まるで少年のような体型をしており、ディアナ・フロ雷斯とは正反対のタイプに見えた。

ふと、月に来る前に受け取ったビデオメールを思い出す。兄はいぶ疲れている様子だった。だが響揮は現在、心の中で一方的に兄に絶交を宣言していたので、同情するのをやめておもむくにフロントに向かった。

カウンターの女性係員がふたりを見比べ、遙香に向かって訊く。

「保護者のかたはどちらに？」

遙香のほうが年上に見えるのは、身長差から当然と言えば当然だった。響揮は無愛想に答える。

「ちよっとツアーの手配に行き違いがあつて。両親は明日来るんです」

手元の端末を確認して、係員は軽く頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。なにか不都合なことがありましたら、なんでもフロントにご相談くださいね」

ふたたび視線を遙香に向ける。

「すてきなペンダントですね。よくお似合いだわ」

「ありがとう」

遙香が頬を赤らめる。

響揮はつくづく、今日は厄日だと考えた。

だが部屋に案内されると、そんな考えをまた訂正することになった。

広い部屋の一面を占める大きな窓の外には、まさに絶景が広がっていた。見おろせばパークのしたたるような緑、地平線に目を転じれば荒涼と続くクレーターに覆われた灰色の月面。その向こうには漆黒の宇宙を背景に、青い地球がまるで魔法のように浮かんでいる。言葉も忘れて風景に見入る響揮の後ろで、遙香はやわらかなカーフが張られたソファにぽんと飛び乗り、部屋の内装を見渡した。

「わあ、さすがクレセントね！」

落ち着いたグリーンでまとめられた室内は、壁にかけられた現代絵画のリトグラフからゴミ箱にいたるまで、高級感が漂っている。

「お金持ちになった気分！」

すでに部屋になじんだ様子で、遙香はまたぽんとソファを下り、ドアわきに置かれていた自分のバッグを取って荷物台に運んだ。

響揮は急に落ち着かなくなった。いざ遙香とふたりきりになると妙に意識してしまう。ちらりと、ナイトテーブルをはさんで二台据えられたベッドに目をやる。濃いグリーンに金の刺繍のカバーに覆われたベッドはダブルサイズで、ふたりでもゆっくり横になれそうだ。

……ふたりで横になる？ 俺はいつたいなにを考えてるんだ！

気をまぎらわせようと、急いで壁面のスクリーンをつける。

ニュースチャンネルではジョアン・フロ雷斯暗殺未遂事件の続報を伝えていた。悲劇に見舞われた平和共立党党首は、さっきエレベーターで乗り合わせた女性の兄だと思いあたり、響揮は眉をひそめた。

彼女は兄を見舞いに行かないんだろうか？ 身内が危篤なようには見えない、平然とした様子だった。

「響揮」

ためらいがちな声が呼んだ。

「え……なに？」

振り返ると、着替えが入っているらしいビニールバッグを腕にかかえた遙香が、はにかんだ笑みを向けてきた。

「あのね、ずっと思おうと思ってただけ……ありがとう。月旅行、誘ってくれて」

「礼なんて……当然だろ、遙香は家族みたいなものなんだから」

一瞬、遙香の笑顔に寂しげな影がさした。黒目がちの大きな目になにか問いたげにこちらを見つめる。

どきりとして、響揮は見つめ返す。

「響揮、あたしね……」

「……なに？」

遙香はふつとまばたきをして視線をはずし、窓の外に顔を向けた。  
「……なんでもない。先にシャワー浴びちゃってくれる？ あたし髪洗いたいから長くなるし」

「……うん、じゃあ」

どきどきしている心臓の音が遙香に聞こえないよう祈りながら、響揮は荷物から着替えを取ってバスルームに入った。

高級ホテルらしく、シャワーからは熱いお湯が出てくる。月面では水は貴重品だから、水なしのドライ・シャワーが普通だ。しかしそんなことも、いまの響揮は気づかなかった。

遙香はなにを言おうとしたんだろう？ いくら考えてもわからなかった。だが知りたくないというのが本音でもあった。

うわの空のまま服を着て外に出る。入れ違いに遙香が入ってドアが閉まると、響揮はほっとため息をついた。

ひとりきりになるのは久しぶりだ。遙香といると楽しいけれど、緊張するのも事実。ベッドに寝ころんで伸びをする。と、ナイトテーブルの上の光るものに目がとまった。

ペンダント。遙香がはずしてそこに置いたのだろう。

考えもなく手を伸ばし、しげしげと眺めた。

そっくりだ、なにもかも。



裏をひっくり返してみる。銀色のフレームには数字が刻まれている。1、31、27。製造番号だろうか？

ふっとなにかが頭をかすめた。思い出せそうで思い出せない、そんなじれったさに襲われる。

「くそっ」

悪態をつきながら荷物から小さな包みを取り出し、一瞬のためらいのちに銀色の包装紙をばりりと破いた。どうせこのまま遙香に渡すことはない。

ケースを開けてペンダントを出し、裏をひっくり返す。

？TO HARUKA 23TH JUNE？

記憶どおり、響揮がジュエリーショップに頼んで刻んでもらった文字がフレームの同じ位置にあった。つまりここは製造番号を入れる場所ではないのだ。

響揮は眉をひそめた。そのとき、ガチャリとドアノブが回る音がした。

心臓が口からはみだすかと思うほど驚いて、響揮は文字どおり飛びあがった。電撃のような速さでペンダントをテーブルに戻し、同時にもうひとつをチノパンのポケットに突っこむ。その直後。

「響揮？」

バスルームのドアから遙香が顔を出し、こちらを見た。ちょっと顔が赤い。

「なっ、なに？」

うるたえたあまり声が裏返りそうになるのを必死で抑え、響揮はつくり笑いを浮かべた。

「……忘れ物」

小声で言っと、遙香は指につまんだものを差し出して、ぷいと横を向いた。

トランクスだった。

頭のなかで自分を激しく罵倒しながら、響揮は部屋をあとにした。遙香がバスルームから出てきたとき、その場にいたくなかったのだ。「あーもう、俺はいつたいたいにしてるんだ？ 冗談抜きで最低だろ？」

エレベーターホールでボタンを押し、思わず口に出す。だがそれで気が晴れるわけでも、遙香に対しての面目が回復されるわけでもなかった。

「浮かない顔だな。彼女とケンカでもしたのかい？」

頭上から、よく通るテノールの男性の声が降ってきた。はっとして見あげる。

クルーカットの赤い髪で、薄いブラウンのグラスをかけた青年が、返事を促すように首をかしげた。カジュアルなグレーのスラックスに紺色のスポーツジャケット。まくった袖口からのぞく腕はたくましく、意識的なトレーニングをしていることをうかがわせる。年齢は三十少し前というところだろうか。

ふと、どこかで会ったことがあるような気がして目を細めるが、記憶によみがえるものはなかった。

「まあ、そんなところです」

よけいなお世話だという顔をして、響揮は答えた。しかし相手は意に介さない。

「俺はアレックスだ。アレックス・ブローディ」

訊きもしないのに名乗って、じつと響揮を見つめる。

「はじめまして。で、俺になにか用ですか？」

礼を失しない程度の無関心さでたずねると、青年は拍子抜けしたような顔になり、無念そうに一度だけ首を振った。

エレベーターの到着を知らせる合図音が響く。

青年はきゅっと唇を結び、グラス越しにもわかる鋭いまなざしを響揮に当てた。

「ヒビキ・タカトウ、きみと話がしたい。だがここではまずい。十五分後にパークの神々の広場に来てくれ。ツクヨミノミコトの前で

待ってる」

「なぜ俺の名前を」 青年は口の前に人さし指を立て、黙れというしぐさをした。

エレベーターのドアが開く音がして、響揮は反射的に顔をそちらに向けた。客は中年の女性ひとりだ。響揮はすぐに青年のほうを振り返ったが、姿はすでになかった。ホール脇の非常階段のドアがゆつくりと閉まるのが見える。

「乗らないの？」

中年女性が訊いた。

「ああ……すみません、乗ります」

響揮は腕時計を見て、十五分後なら十七時五十分だと計算した。俺の名前を知ってるなんて、あの人はいったい誰なんだ？ なんの話があるっていうんだ？

わけがわからないが、青年の表情にはどこかせっぱつまつたふうがあり、無視できない気がした。あれは助けを求めている顔だと、響揮は感じた。

神々の広場には人があふれていた。十八時前といえばデートや食事やその他もろもろ、待ち合わせのゴールデンタイムだ。おまけに今夜は平和行進が行われるから、人出が多いのも当然だった。

大統領が来るためだろう、警戒にあたるルナホープ市警のライトブルーの制服が目立つ。広場の数力所に設けられた高さ七メートルほどの警備塔の上にも、同じライトブルーの制服が見える。UCC Iの腕章をつけた紺色の制服姿の捜査官もちらほらまじっている。

さっきも来たので、像の位置はわかっていた。響揮はひととき大きな台座に鎮座するパークの守り神、アルテミス像を横目に歩き、革鎧に身を固めて弓を引きしぼる姿のディアナ像の前に立った。

エレベーターで会ったディアナ・フロレスのことを思い出す。女神の名にふさわしく、近寄りがたい硬質な美しさと、凜とした強

さを全身に漂わせた人だった。

響揮は腕時計に目を落とした。十七時四十分。約束の時間まではまだ十分ある。

像の前の長いベンチには先客がいた。響揮は男から三人分ほどの距離をとって腰を下ろし、ベンチの背に体をあずけてぼんやりと広場を眺めた。

人波の向こう、風景に溶け込むよう工夫された美しいデザインのゴミ箱に目がとまり、思わずポケットに手を入れた。

いつそのこと捨ててしまおうか。

ペンダントを取り出し、チェーンをつまんで目の前に掲げる。三日月形のヘッドがくるくる回り、太陽光を反射してきらめく。

「……あ！」

フレームの裏側に刻まれた文字を目にして、響揮は愕然とした。

1、3 1、2 7の数字列。

これは天音が贈ったものだ。さっきあわてて取り違えたのだ。しまった、と思うと同時に、響揮の耳には悪魔のささやきが聞こえた。

遙香が気づかなければ、ずっとこのままでもいいんじゃないか？  
だがそんなことは良心が許さない。遙香だって気づかないとは思えない。

悪魔を追いだそうと、響揮はぶるぶると頭を振った。傷がつかないようペンダントをハンカチに包んでポケットに戻す。

ホテルに戻ったらこっそり取り替えよう。それまで遙香に気づかれないよう祈るだけだ。

そのとき、背後に人の気配を感じてぎくりとして振り返った。

ブルーの制服の警官が、険しい顔つきでベンチの中央を指さした。  
「それはきみのか？」

警官の示す先には厚みのある茶色の封筒が置かれていた。座ったときには気づかなかったが、先客のものだろうと響揮は思った。封筒から少し離れた向こうに、黒いキャップにグレーのジャケット姿

の男が座っている。腕を組み、深く頭をたれていて、どうやら居眠りをしているようだ。

不用心だなど、響揮は眉をひそめた。ルナホープの治安は連邦一だが、犯罪はゼロではない。こういう場所では荷物を手から離さないのが原則だ。

そこで響揮はようやく、自分が置き引き犯と疑われたらしいと気づいた。むっとした顔で警官に答える。

「いいえ、違います」

「そうか、ならいいんだが」

警官はとってつけたような笑みを浮かべた。右頬にある小さなほくろがまるでえくぼのようで、笑顔がさらに偽善的なものに見える。居心地が悪くなり、響揮はベンチを立った。ゆっくりと広場の反対側へ向かい、弥生時代ふうな髪を結った貫頭衣姿の日本の月神、ツクヨミノミコト像に近づく。すぐに例の赤毛の青年が現れて、「やあ」と短く挨拶した。

「よかった、来てくれて」

薄いブラウンのグラスをはずすと、なにもかも見通すような冷たいブルーの瞳が現れた。

「歩きながら話そう」

青年はすばやく周囲に目を走らせ、ふたたびグラスをかけた。

「話ってなんですか？ 俺はあなたを知らないし」

「きみの兄さんのことだ」

鋭い口調の短い答えが、響揮の言葉を遮る。

「兄のこと？」

月面慣れした歩調でさっさと歩きだした青年のあとを追ひ、響揮はさらにたずねる。

「兄のどんなことを？」

「天音と連絡がとれないんだ。きみは彼からなにか聞いていないか？ あるいは彼からなにか預かっていないか？」

響揮は首を振った。

「メールとこづかいはもらっただけ……」

響揮はつと足を止めた。数歩先で青年も立ち止まる。

「アレックスといったね。兄とはどんな関係？」

警戒の色をあらわにした響揮を見つめて、アレックスはやれやれといったふうにくちめ息をついた。

「友人だ。きみの話は天音から聞いてよく知ってる。たとえばきみの柔道の得意技は一本背負いだってこととか、隣の家の女の子にほれてるってこととか、ね」

ひやかすように言ってにやりと笑ったのは、響揮の警戒を解くためだろう。だが響揮はその手にはのらなかった。

「そんなこと、兄から聞かなくても知ってる人はたくさんいる」

アレックスは厳しい表情に戻った。

「天音が言ったとおり、きみはなかなかひとすじ縄じゃない相手らしいな」

歩こう、と手ぶりで示す。響揮は露骨に警戒しながら、半歩後ろをついていく。

「オーケイ、これならきみが信じるってエピソードを天音が教えてくれたから、それを話すよ。きみの部屋の天井には星空がある。そうだろう？」

響揮はうなずかない。アレックスは響揮の目を見つめて続けた。

「その星は天音と一緒に描いたものだ。しかし東京からは見えない南半球の空は天井に貼れないので、南十字星はどうしようかと天音は訊いた。きみの答えはこうだった。？遙香が持つてるからいい？」

たしかに、それは響揮と兄しか知らないことだ。響揮が苦笑して首を振ると、アレックスもつられたようにほえんだ。

「俺にはどうして彼女が星を持つてるのか謎なんだがね」

「それは教えられない。でもあなたが兄と親しいことはわかった。

兄は信頼していない相手にプライベートな話をする人間じゃないから。それで？ 兄と連絡がとれないってどういうこと？ 研究所に  
いるはずだけど」

「研究所にはもう問い合わせた。休暇中だと言われたよ。それも一か月だとさ」

「そんなはずは……。だって兄は、この旅行にも仕事が忙しいから来られないって言ってたんだ」

「……つまり、きみはなにも知らないんだな」

アレックスの言葉の端に絶望を聞きとり、響揮はじっと、心中を推し量るかのようにグラスの奥の目を見つめた。

「俺はなにかを知ってるはずだったってこと？　詳しく聞かせてもらえるかな」

アレックスはついと響揮から目をそらし、思案する表情になった。簡単に話せる内容ではないらしい。響揮もアレックスから目をそらした。そのときディアナ像が視界に入り、いつのまにか広場の反対側に来ていたことに気づいた。

さつき座ったベンチになにげなく目をやって、響揮は目を丸くした。茶色の封筒がまだそこにあった。足を止めてあたりを見回すが、居眠りをしていた男性の姿はない。

「あの封筒……」

「封筒？」

数歩先でアレックスが足を止め、振り返る。

「少し前にも同じ場所にあったんだ。男の人が脇に座ってて……」

響揮はベンチに近づいて封筒を取った。ありふれた事務用の封筒で、フラップは封をせず、上下の玉に無造作に紐をかけてあるだけだ。中身は書類のたぐいではなく、平たいプラスチックの箱といった感触だ。月の重力を考えると、見かけよりずっと重い。

響揮はもう一度周囲を見回した。つられてアレックスも響揮の視線を追う。

二十メートルほど向こう、人々がつれづれに談笑している花壇の前で、こちらを見ている黒いキャップの男と目が合った。

「あの人だ」

響揮が言つのと同時に、アレックスが押し殺した叫びをあげた。

「テイラー！」

男がさっと身をひるがえし、花壇を飛び越えて広場から離れていく。

追いかけようとした響揮を、鋭い声が止めた。

「動くな、響揮！」

反射的に響揮は振り返る。蒼白な顔のアレックスが落ちて着けというように両のてのひらをこちらに向け、厳しい口調で命じた。

「いいか、それをすぐ地面に置くんた、そつとな。衝撃を与えないように。そしたら全速力で離れる」

ジャケットの内側に手を入れてホルスターから銃を抜き、天井に向けた。周波数の高い耳ざわりな警告音が響き渡り、一瞬広場が静まり返る。

「UCCIED、全員ただちにここから離れる！」

アレックスは手にバッジのようなものを掲げ、ぐるりと周囲に示した。

「爆弾だ！ 早く離れるんだ！」

「爆弾だつて？」

「逃げる！」

悲鳴があがり、人々がわれ先に走りだす。

爆弾？ これが？

響揮はつかのま手のなかの封筒を見つめ、さっと腕時計に視線を移した。十八時二分前。

そのままゆつくりと頭をめぐらし、広場を見回した。楽しげに談笑するカップルや家族連れ、人待ち顔の若者があふれていた広場は、いまやパニックの渦にのみこまれていた。重力慣れしていない観光客の多くが焦りのために体のコントロールを失い、転んだりガラス像にぶつかったりしている。

これがいま爆発したら、この人たちはどうなるんだ？

「響揮、なにしてる！ 早くそれを置け！」

アレックスの怒声に、響揮ははっとわれに返った。また封筒に一



瞬目を落としてから、体が浮かないよう角度に注意して、強く地面を蹴った。封筒を脇にかかえこんで。

「響揮！？」

信じられないというようなアレックスの聲が追いかけてくる。

「それを置け、置いてくれ！ このほかものが！」

悲鳴にも似た懇願を、響揮は他人事のように聞いていた。どくどくと心臓が鳴っている。足が地面を蹴る感覚はなかった。まるで背に翼が生えたかのようなうだ。

あれがあつたのは月神シン像の近くだった。

時計が、十八時を刻んだ。

## ACT 8 見えない心

遙香はシャワーを浴びながら考えていた。

あんなものを忘れていくなんて、あたしはやっぱり女として見られてないんだ。家族のようなもの、と言ったのだってそう。響揮にとって、あたしはただの幼なじみでしかない。

胸の奥がきゅっと締めつけられ、熱いかたまりが喉に詰まる。涙が出そうになって、遙香はあわてて顔にシャワーを当てた。

どうして胸が痛むのかわからなかった。

昨日から響揮の態度がなんとなくよそよしく、避けられているように感じていた。遙香は無理をしてふつうにふるまおうと努力したが、逆効果だったのは明らかだ。

響揮はあたしのことをどう思ってるの？ 態度がぎこちないのは、あたしから離れるタイミングをはかってるからじゃないの？ AAの受験で忙しいはずなのに部活や日曜ランをやめないのは、もしかして真夏に会いたいからなの？

思考がどんどん暗いほうへと流れていくのを、遙香は止められなかった。

洗った髪を丁寧に乾かし、ひつつめの三つ編みにしてカラーゴムでとめた。月面は重力が小さいので、長い髪は結わないと毛先が遊んで邪魔だ。

ため息をついてバスルームを出ると、時刻はすでに十八時に近づいていた。部屋に響揮の姿はない。遙香は肩を落とし、ベッドの端に腰かけた。

もうあたしには会いたくもないってことなの？

そのとき、ナイトテーブルにメモが置かれているのに気づいた。手に取ると、男子にしては几帳面な整った字で、『ルナレイクのポートハウスで待ってる』とあった。

そういえばボートに乗る約束したっけ。

せっかく月に来たんだから、楽しまなければ損だ。気を取り直し、遙香はテーブルからペンダントをとって胸にかけた。バスルームのドアにはめられた鏡の前に行き、全身をチェックする。残念ながら、ショートパンツにラフな半袖のＴシャツという格好に、このペンダントは合っていないかった。

遙香は顔をしかめた。

「はずしていいのかな。せっかくのプレゼントだけど」

髪と同じく、月面ではペンダントがひと足ごとに大きく揺れるので、正直に言えば邪魔なのだ。天音からもらったのはうれしかったが、プレゼントには直筆のカードもなく、メールもなかった。遙香はお礼のメールを送ったが、返事はまだこない。

「きつと好きな人ができて、あたしのことなんかどうでもよくなっちゃったのね」

自虐的につぶやく。天音にとって自分は妹のようなものでしかない、よくわかっていた。すぐそばにディアナのような大人の女性がいれば、自分など赤ん坊にしか見えなくても当然だ。今回のプレゼントでそれが確かめられた。高価なペンダント。でも心はこもっていない。

響揮は違うと考え、遙香は口元をゆるめた。響揮のプレゼントにはいつも意表をつかれる。人気ドーナツショップのドーナツを全部種類ずつとか、クレーンゲームで遙香が取り損ねて悔しがっていたぬいぐるみとか、『刑事ハル＆レイ』の等身大ポスターとか。

およそロマンチックとは言いがたいものばかりだけれど、どれももらった瞬間に驚きや喜びがはじけて、そのときの記憶そのものがうれしい贈り物だった。

響揮も真城子も教えてくれないのだが、月旅行を引き当てたきっかけになった響揮の買ひ物は、自分へのプレゼントなのではないかと遙香は予想し、ひそかに期待していたのだった。

そのとき、ズン、と鈍い衝撃に部屋が揺れた。

遙香はぎくりとして周囲を見回した。地震だろうか？ 月にもまれに地震がある。

不安になって窓に近づき、外を見た。下の神々の広場では人々が逃げまどい、何人かは倒れているようだ。

「なに……？ 事故？」

驚いて息をのみこみ、よく見きわめようと目を細めた。と、自動的にスクリーンのスイッチが入って警戒警報が部屋に響き、遙香は弾かれたように振り返った。

『緊急警戒二ニュースをお伝えします』

アナウンサーが緊張した声で告げる。

『十八時〇分、セントラル地区アルテミスパーク内で爆発が確認されました。これにより、セントラル地区パーク街区は緊急区画遮断が実施されています。続報に警戒してください。負傷者が出ている模様ですが、詳細は 』

遙香は最後まで聞かずに部屋を飛び出した。エレベーターが止まっていたので、非常階段を月面ならではの七段抜かしで駆けおり、タワーを出る。

集まった大勢の野次馬や取材陣を蹴散らすようにして、消防隊員や警官、非常車両が走っていく。

「爆弾テロだ！」

「赤いドクロが 』

「東洋人の男の子が巻きこまれたって？」

きれぎれに聞こえてくる記者やレポーターの会話に、遙香は慄然とした。走っていく消防隊員を必死に追うが、焦ると体が浮いてしまい、思ったように前に進めない。心臓がときどきして破裂しそうだ。泣くつもりはないのに目頭が熱くなる。

東洋人の男の子。響揮じゃないかもしれない。でももし響揮だったら？

広場の端まで来ると、赤と黄の縞のテープで行く手がさえぎられていた。かまわずまたぎ越えようとすると、制服の警官に肩をつか

まれて押し戻された。

「だめだよ、この先は！」

「だって響揮が」

「捜査関係者以外立ち入り禁止だ。戻れ！」

「行かせて！ 響揮がいるかもしれないのよ！」

警官を押しつけて進もうとしたが、相手はがんとして譲らない。

「響揮、響揮　！」

喉が張り裂けんばかりの声で叫んだ。

聞こえるの？ 聞こえるなら応えて！

「 遙香！」

ふいに耳慣れた声がすぐ後ろから聞こえてきて、ぱつと振り返った。

響揮がいた。驚いたような、ほつとしたような顔でこちらに両腕を伸ばす。

「響揮！」

遙香は夢中でその腕に飛びこんだ。きつく抱きしめられると、どつと安堵の涙があふれてきた。

「響揮、あたし　あたし心配で、爆発、巻き込まれたって」

喉が詰まって、それ以上言葉が続かなかった。涙を止めようとすればするほど胸が苦しくなって、嗚咽がもれてしまう。

「俺は大丈夫だから……泣くなよ」

困ったような声が耳元でささやく。

遙香はぐつと嗚咽をのみこんでうなずいた。体を離し、響揮の顔を見つめる。

「血が出てる」

つと指を伸ばして響揮の頬に触れた。

「いてっ」

「ごめん。ホテルに帰ろ、手当てしなきゃ」

言いながら、遙香は響揮の腕に自分の腕を巻きつけた。ぎゅっと、まるでそうしてないと逃げていってしまってもいいかのように

強く。

\*

\*

遙香がバスルームから濡らしたタオルを持ってきて、響揮の頬のすり傷にそつと押し当てた。

「つっ  
」

響揮は顔をしかめる。遙香が不安げな声で訊いた。

「いったいなにがあったの？」

「爆弾が  
」

答えかけて、響揮は口をつぐんだ。封筒を手にしてからの記憶が、まるで映画のワンシーンのようによみがえってくる。

響揮は走った。爆弾を地面に置くより確実な、被害を最小限にとどめる方法があったからだ。おそらく、残された時間は一分と少しだが間に合うと思った。

オレンジ色の矢印をたどる。その先にはあるものは。

「シエルターだ、アレックス！」

響揮が肩越しに叫ぶと、アレックスは目でうなずき、長い脚で猛然と響揮を追い越した。

「道をあける！ シエルターには入るな！」

吠えるように言ってシエルターに逃げこもうとしていた人々を追いつ払い、強化タングステン製のハッチに取りついて開け放った。なかに人がいないことを瞬時に確認し、響揮に大きく手を振る。

ハッチまであと二歩。響揮は脇にかかえていた封筒を投げこもうとした。だが封筒が脇から離れない。

「なんでっ！？」

あわてたがどうにもならない。慣性がついたまま体ごとシエルターに飛び込んだ響揮を、アレックスが追いかける。

「なにやってんだ！？」

「紐がからだ！」

走るあいだに、フラップをとめていた封筒の紐がウエストポーチの金具にからみついたのだ。響揮は紐をはずそうとしたが、焦りで手が震えてうまくいかない。

アレックスがスラックスの裾をまくり、脛に巻いたホルダーからサバイバルナイフを抜き払って一喝した。

「手を放せ！」

響揮ははじかれたように両手をあげる。アレックスは響揮のウエストポーチをつかみ、一刀でベルトを絶ち切った。それを封筒ごと床に置き、突き飛ばすように響揮をハッチの外に押しだして、自分もシエルターを転がり出た。ハッチを閉め、響揮の上に覆いかぶさって地面に伏せる。

その直後、爆発が起きた。

緊急避難用のシエルターはさすがに頑丈だった。なかはもちろんめっちゃめっちゃになり、厚いハッチもゆがんだが、外にはほとんど影響がなかった。爆発による負傷者はゼロで、響揮の頬のすり傷も地面に伏せたときのものだ。ウエストポーチと一緒にマイティフォンが昇天したのは痛い、命に比べれば安いものだろう。

「……座ったベンチに偶然、爆弾が置いてあって」

目を見開いた遙香に、響揮は軽い調子で肩をすくめてみせる。

「それをシエルターに運んだ」「爆弾を！？　なんでそんな危ないこと」

「なりゆき。俺がいちばん近くにいたから」

「もー、信じられない！」

ぶるつと身震いして、遙香は自分のバッグからとってきた治療パッチをやや乱暴に響揮の頬に貼りつけた。

ついたままのスクリーンから爆破事件の続報が流れてくる。

『UCCの発表によりますと、容疑者の広域指名手配犯エリック・テイラーは、十八時二十分ごろセントラル地区D三街区で遺体で見られました。服毒自殺と見られています。テイラー容疑者は南アフリカの反政府地下テロ組織、赤いドクロのメンバーです。』

赤いドクロ から犯行声明は出ていませんが ㊦

画面に映されたテイラーの容貌は、響揮が見た黒いキャップの男とは違った。だがアレックスはあの男がテイラーだとひと目で見破った、と響揮は思い出す。

アレックスはUCCIだと名乗ってバッジを見せていたし、警報つきのショックパルス銃も携帯していた。テイラーは整形しており、アレックスは内部情報でそれを知っていたと考えれば説明がつく。

アレックスがUCCIの捜査官なのは間違いなさそうだ。その彼が兄と連絡が取れないと言っていたのは、いったいどういうことなんだ？

詳しく訊いておくべきだったと、響揮は後悔した。爆発が収まるとすぐ、響揮は止めるアレックスを振り切って現場を離れてしまったのだ。ポートハウスで待っているというメモを部屋に残したので、ルナレイクに向かう途中で遙香が騒ぎに巻きこまれてはいないかと、心配でたまらなかった。

そして人垣をかき分けて探すうちに、遙香が自分を呼ぶ声が聞こえた。願いのこもった、哀しくて切ない声が。あんなふうに名前を呼ばれたのははじめてで、響揮は胸の奥が熱くなった。

「あつ ！」

悲鳴にも似た叫声が聞こえて、響揮ははっと遙香のほうを見た。

「どうしたんだ？」

「ペンダントが ないの！ 広場に行く前はたしかにあったのに ！」

遙香は血の気の失せた顔で胸元に手を当て、やがて顔を覆ってわつと泣きだした。

「ペンダント……？」

響揮はかすれた声でつぶやいた。

俺が買ったペンダント。さっき間違って取り替えてしまった、あの……。

なぜか、笑いたい気分になった。実際、口元には苦い笑みがのぼ



っていた。

「……泣くなよ。俺があとで同じの買ってやるよ」  
「だってあれは」

しゃくりあげながら遙香が言いつのる。

「あれは天音さんが　天音さんがくれて……」

遙香の声はどこか遠いところから聞こえてくるようだ。響揮は体の脇で固くこぶしを握りしめた。

「俺が買ってやるって言うてるだろ」

「そういうことじゃないよ。せつかく天音さんが」

「俺のは受け取れないって言うのか」

無意識に言葉にこもった怒りに気づいたのか、遙香は嗚咽をのみこんで、驚いたように響揮を見つめた。

「遙香はいつも兄貴のことばかりだ。俺のことなんかどうでもいいんだよな」

「響揮……？」

遙香の頬に光る涙は自分のためのものではない。響揮の心に、ずつしりと重たいものがのしかかってくる。

押し殺した声で、響揮はついに言った。

「好きなんだろ、兄貴が」

「……好きよ、当たり前でしょ。だけど」

「もういいよ！　わかったよ」

「ちつともわかってないよ！　響揮が言ってるような意味じゃ全然ないんだから！　響揮のほうこそ　あたしに内緒で渚沙とこそこそして、あたしを仲間はずれにして。真夏に告白されたことも黙ってたよね。あたしがどんな気持ちだったかわかる？」

「木田のことは遙香に関係ないだろ！？　それに渚沙は」

渚沙は協力してくれてたんじゃないか。俺たちのために。自分の気持ちは誰にも言わないで。

「渚沙のことだって、遙香は全然わかってない。渚沙がかわいそうだ」

怒りのために言葉が震える。

遙香が青ざめた顔で響揮の目を見つめた。

「響揮、正直に言つて。あたしが嫌いになったの？　本当は月にもあたしじゃなくて真夏を誘いたかったんじゃない？」

「なんだつて……？」

「だつてあたしは？　家族みたいなもの？　なんでしょ。だつたらはつきり言つてくれば、あたし、いままでみたいに響揮に甘えるのやめるし、真夏はすごくいい子だから……応援、する」

遙香は目をそらし、うつむいた。

「遙香は……それでいいのか？」

頭ががanganして、響揮はなにも考えられなくなっていた。怒りは急速に冷え、代わりに絶望的なまでの虚無感に襲われる。

「……あたしに遠慮することないよ。響揮と友達でなくなるわけじゃないもの」

\*

\*

ホテルを出てからどこをどう歩いたのか、響揮は覚えていない。気がつくとパークの端にある人口湖に来ていた。ベンチに腰を下ろし、頬杖について、ボート遊びに興じるカップルや家族連れをぼんやりと眺める。

爆弾事件の直後に遙香が自分と呼ぶ声を聞いたときは、遙香も自分を好きなんだと確信していた。それがこんなにも早く、もろく崩れ去ってしまうなんて。

湖面から聞こえてくる屈託のない笑い声にいらだちを誘われ、響揮は耳をふさぎたい衝動に駆られる。

「ねえきみ、爆弾をシエルターに放りこんだヒーローくんじゃない？」

突然、頭上から張りのあるアルトの声に呼びかけられた。反射的に顔を上げると、ヘッドセットをつけ、目を輝かせた女性が目に入

った。肩の上あたりに親指の先ほどの小型中継カメラ、？フライングアイ？が浮いている。マスコミのレポーターらしい。

「いいえ」

響揮は不機嫌な声で短く答え、ぷいと横を向いた。ヒーローになるためにやったわけじゃない。

「ううん、絶対きみよ！ 白いジャケットの小柄な東洋人の男の子。遠目だったけど、ちゃんと見てたんだから。あのときはフライングアイを連れてなくて惜しかったわ！ 世紀の特ダネだったのに。捜査局のブローディ主任とは知り合いなの？」

「あの人、やっぱりUCCの捜査官なのか？」

響揮が思わず顔を戻して訊くと、レポーターは相手をしてもらえなかったのか、勢い込んでうなずいた。

「そうよ、知らなかったの？ じゃあ一緒にいたのは偶然？ 主任ったらいくら訊いてもきみのこと教えてくれなくて。雰囲気からすると日本人？ サムライボーイだね。名前は？ 年いくつ？」

質問をたたみかけられて、面倒なことになりそうだと響揮は警戒した。またぷいと横を向く。

「答える義務ないし。ほつといてくれないかな」

表情をとらえようとフライングアイが顔の正面に回りこんできたので、響揮はベンチから腰を浮かした。

「ねえ逃げないで！ お願い、話を聞かせてよ！」

レポーターに腕をつかまれて、響揮は瞬間かつとした。

「ほつといてくれて言ってるだろ！ いいかげんにしろよ！」

「おやめなさい、いやがってるじゃないの」

叱責の響きを含んだやわらかな声がかかった。

ベンチから二メートルほどのところに、サングラスをかけた長身の女性が立っていた。ワイン色のパンツスーツ姿で、波打つブロードが目にあぶしい。

「これは……ミス・フローレス」

レポーターは一瞬迷う様子を見せたが、しぶしぶ響揮の腕を放し

て悔しそうに唇を噛んだ。

ディアナがにつこりと響揮にはほえみかけ、手招きする。

「きみ、こっちへいらっしやい」

響揮は吸い寄せられるように彼女に近づいた。

ディアナは肩越しに振り返った。

「シャンメイ」

後ろに控えていた付き人の少女が、心得た様子でうなずいた。ついとレポーターの前に立ち、響揮を追いかけようとしたフライングアイめがけて手刀を一閃させる。フライングアイはタイル張りの歩道にたたきつけられ、粉々に砕け散った。

「なにするのよ　！」

レポーターの叫び声を背に、ディアナは響揮の肩を親しげに抱いて歩きだした。

「……ありがとうございます。助けていただいて」

「いいのよ。ああいう人種ってしつこくて本当にいやよね。それにわたし、きみのことを知ってるの。アマネ・タカトウの弟でしょう？」

「そうですけど……」

兄の名前を聞くとどろどろしたものが胸にわいてくるのを止められず、響揮は自分の卑小さが情けなくなる。そのせいで言葉尻がいまいになったのを、ディアナは警戒していると誤解したようだった。

「ああ、ごめんなさい。きみはわたしを知らないわね。ディアナ・フロレスよ。天音の仕事仲間。前に彼が家族の写真を見せてくれたの。きみ、天音によく似ているから、ホテルのエレベーターで会ったときにすぐわかったわ」

響揮はうなずいた。

「それで声をかけてくれたんですね。俺は　」

「ヒビキ、でしょう？　自慢の弟だって、天音が誇らしげに話してたわ。宇宙飛行士を目指しているのよね？」

「兄がそんなことを？」

自分のことを語る天音の様子を想像すると、響揮は一方的に嫉妬している自分がますます情けなくなった。

「最近はなかなか兄に会えなくて……。プロジェクト、忙しいらしいですね」

「暇ではないわね。でもこの季節はみんな交代で休みを取るのよ。天音も休暇に入っているはずよ」

「そうなんですか？　じゃあ……」

アレックスが兄と連絡が取れないのは、たんに兄が旅行に出かけたとかで、行き違いがあつたのかもしれない。プライベートなことも話しているらしい同僚の言葉を疑う理由はなかった。

「天音のことでなにか？」

「いえ、べつに」

「きみはこれから平和行進に参加するの？」

「そのつもりですけど……」

「そういえば、あのかわいい彼女はどうしたの？」

「遙香は……」

響揮が言いよどむと、ディアナはくすつと笑った。

「彼女に振られた？」

響揮は自分の頭のずつと上のほうにある美しい顔を見あげた。

「……なんでわかるんですか」

「エレベーターで会ったとき、きみの顔には彼女に恋してるって書いてあったもの」

きりりと胸が痛む。響揮はうつむいて唇を噛んだ。

「初対面の人にも見透かされるくらいなのに……。どうして彼女には伝わらないのかな」

「好きだつて、彼女にはつきり言つたの？」

「……はつきりとは……。俺たち幼なじみで、生まれたときから一緒に育つたようなものなんです。そんなこと、態度でわかるはずでしょう」

「距離が近すぎて、意識するにはきつかけが必要ってこともあるわ。それにうすうすわかつてはいてもね、女の子って言葉ではつきり言ってもらわないと確信できないものなのよ」

響揮は苦い笑みを唇に浮かべ、首を振った。

「わかつていてあんな残酷なことができるものかな。ほかの人からのプレゼントを得意げに見せびらかしたり」

「プレゼント？」

ディアナの口調が一瞬かたくなったのに、響揮は気づかなかった。  
「彼女の誕生日、明日だから。それに、ほかの子を好きなんじゃないかって俺に訊いたり」

「……残酷なのはきみのほうかもね」

「え……？」

いぶかしげに見あげた響揮に、ディアナは片方の眉を上げてみせた。

「ほかの子が好きなのかって彼女は訊いたんでしょう？ たぶん否定してほしかったのよ。好きなのはきみだけだって言うてほしかったの」

「でもそんなことは」

「言わなくてもわかるだろうって？ さっきも言ったけれど、言葉ではつきり伝えなければ女の子は信じないわ。きっと彼女、いまごろ泣いてるわよ」

「遙香が……？」

響揮は立ち止まり、呆然と足元を見つめた。

ディアナの緑色の瞳が、響揮をいつとき、いとおしげなまなざしで見つめる。そしてふっと目を閉じ、なにかを振り切ろうとするかのように首を振った。

「はつきり彼女に言いなさい。きみが好きだって。きつとうまくいくわ。……わたし、自分の船を持ってるのよ。今夜遊覧飛行をするんだけど、よかったら一緒にどう？ 彼女を誘ういいきっかけになるでしょう？」

響揮は少なからず驚いて、ディアナを見つめた。  
「プライベートシップで？　すごいな。でも……」  
「遠慮しないで。わたしたち、もう友達なんだから。二十一時にホテルの部屋で待っていて。迎えを行かせるわ」  
「……彼女と仲直りできれば」  
ためらいながら答えると、ディアナがにつこりしてうなずいた。  
「幸運を祈ってるわ」

\*

\*

響揮と別れたディアナは、ホテルの部屋ではなく、ルナホープ宇宙港に停めてあるエンデュミオン号に戻った。ホテルのエレベーターで会った少女の胸に、誇らしげにペンダントが揺れていたの思い出したからだ。

あれが？　ほかの人からのプレゼント？　だろう。少女の誕生日のデュータを見たときに気づくべきだった。

おそらく送り主は天音だ。それを確かめるには、専用にカスタマイズしたコンピューターからクラッキングをする必要がある。

数日前、大規模な太陽フレアによって磁気嵐が発生し、地球と月域を結ぶ通信衛星が二機故障した。その影響で通信環境が悪化し、クラッキングには最悪の状況だ。ディアナは途切れがちな回線と闘いながら、小一時間かかってようやく求めていた情報を手に入れた。ムーンストーンのペンダント。無垢な少女の胸元を飾るにふさわしい、シンプルで愛らしいデザインだ。販売したのはニューヨークに本店を置く宝飾店、ジュエリー・エレクトラ。天音は偽装IDを使って本店に注文した品物を、便利屋を雇って引き取らせていた。少女への発送も便利屋がしたのだろう。

ディアナは店のデータベースに潜りこんで調べ、天音が注文したと思われる品物には数字が刻まれていたことを知った。

1、31、27。

暗号だろうか？ ディアナはさらに少女のコンピュータに侵入してヒントを探した。メールボックスに細工がしてあり、天音あてのメールは送信済みのサインはついても実際には送信されないようになっていた。だから少女からのお礼のメールは天音のもとに届かず、ディアナの検閲にも引つかからなかったのだ。

そこで通信回線が遮断され、クラッキングを切りあげざるをえなくなった。

ディアナは乱れた髪をかきあげ、ゲストルームに向かった。ベッド脇のモニターでバイタルデータをチェックし、点滴が効いているのを確かめる。それからベッドの端に腰を下ろし、眠り続ける青年の端整な顔を見つめた。

そつと手を伸ばして、癖のないさらりとした黒髪に指を通す。なんの抵抗もしないその無防備さが、彼の容貌を年齢よりもずつと若く見せている。

似ている、とディアナは思った。

胸に甘い痛みが走る。それを認めたくなくて、ディアナはさつと立ち上がり、体の脇にたらしした手を握りしめた。

湖のほとりで会った少年は、天音によく似ていた。あの子も二十歳を過ぎれば、天音と同じ穏やかな笑顔で人に語りかけるようになるのだろうか？ 天音も十五歳のころは、あんなふうに幼い恋に悩んだりしたのだろうか？

「よけいなことを考えてはだめ」

ディアナは自分に言い聞かせる。わざわざルナレイクまで行ったのは、くだらない恋愛講義をするためではなかったはずだ。やさしさも同情もいっさい捨てると、彼女は一年前に誓っていた。

ディアナは首を振り、ふたたびベッドの端に腰を下ろして天音の顔を眺めた。

「あなたはなにをしようとしていたの？」

少女に送られたペンダントがただのプレゼントではないことは明らかだ。



「ブローディが弟に接触したのはあなたの指示なの？」

だが弟のあの様子では、天音からなにか伝えられているということとはなさそうだ。爆弾をシエルターに放りこんだのは天音の情報によるものではなく、偶然なのではないかと思える。

「……だとしたら命知らずね。そんなところもあなたに似ている」  
つまり、とディアナは考えをめぐらせた。

天音はクラッキングで得た情報をブローディに伝えるのに失敗したのではないだろうか。あのペンダントに情報が隠されているのかもしれない。少女の手から弟の手を経てブローディに渡されるべきところを、なにか行き違いが生じたとすれば筋が通る。

ブローディの手に渡る前にペンダントを手に入れなければ。

ディアナはかがみこんで、天音の冷たい唇にキスをした。

「ねえ、おもしろくなってきたわね？　あなたに見えていないのが残念だわ」

\*

\*

「いいか、市警がなんと言おうとティラーは単独犯じゃないし、自殺でもない。赤いドクロ　から犯行声明は出てないから、組織の指示でもない。奴をルナホープによこした黒幕が、今度の失敗を見てあきらめると思うな。いまにもっとでかいことをやらかすぞ」

時刻は二十時に近づいている。さほど広くないオフィスのすみで、アレックス・ブローディは大声でA班の部下たちにはっぱをかけていた。ここはセントラル地区の行政施設が集まる一角、連邦宇宙省宇宙域捜査局　UCCIのルナホープ支局。

「主任、ティラーの足取り、監視カメラから割り出しました」

部下のひとり、ムスマン・バヤルがスクリーンに地図を表示し、ポインターで示す。

「最初はネクサスホールFゲート付近、十七時五分、顔認識ソフトでマッチ。これ以前の足取りはいまのところ不明。誰かと接触した

形跡はありません」

「B班、そっちはどうだ？ 爆弾は見つかったか？」

アレックスがB班の主任を務める中年の女性捜査官に顔を向けると、いらだたしげな口調の答えが返ってきた。

「いまのところ収穫ゼロよ」

テイラーが大統領を狙って市内に時限式の爆弾を仕掛けている可能性もある。B班はそれを調べている。

「ブローディ、あなたの見込み違いじゃないの？ 無駄足踏ませられたってわかったら、ただじゃおかないわよ」

「よしてくれ。局の仕事は九十パーセント無駄でできてるってわかってるだろ？」

「まあそうね。でも無駄率争いじゃ市警にはかなわないと思うわ」  
皮肉な物言いに、アレックスはため息をつく。

「まったく、連中の楽観主義が心底うらやましいよ」

ルナホープ市警では、犯人の自殺により爆弾テロ事件は解決と決めつけ、のんきに平和行進の警備に人員をシフトしている。いくらルナホープが連邦一治安のいい街だとしても気を抜きすぎだと、アレックスは市警の担当者に噛みついた。だが、「テイラーを見つけれもしなかったくせに」といなされてしまった。

市警にも手配画像は配っていたのだし、あれほど警戒厳重な神々の広場にテイラーがいたのに見つけられなかったのは市警の責任だと、アレックスは思っていた。パークはもともと市警の縄張りで、紺の制服がうるうるしているとパークの評判が落ちると、露骨に追い払われるのが常なのだ。

もっとも、市警にも事情はある。午後ルナホープに到着した大統領は、セレモニーだ講演会だと市内を精力的に歩き回っているため、警備にかなりの人手をとられている。

アレックスは壁際のデジフレームに向かっていてるサレムに声をかけた。

「サレム、あの爆弾の鑑識結果は出たのか？」

「正式にはまだです。でもたぶん時限式のC七爆弾。ドームを破壊するほどの威力はなかったようですが、半径十メートル以内にいた運の悪い人は死んだかも、だそうです」

「それは俺のことか？」

サレムは肩をすくめた。

「テイラーにしては小さな爆弾です。本気じゃなく脅しって線が強いですね」

アレックスは顔をしかめる。

「本命はやっぱ大統領か。それなのに、ロシユフォードの奴は予定どおり平和行進に参加するって言い張ってるんだ。まったくどういう神経してるんだか」

「？テロには屈しない？があの人のもットーですからね。中止なんかしたら支持率だだ下がりでしょ。入院中のフローレスには同情票がたんまり集まってるから、彼が復帰してきたらロシユフォードは確実に負けます」

「あーくそつ、面倒だな政治は」

アレックスは短い赤毛をかきむしった。

「まあ、市警のお手並み拝見ですね。広場に監視塔つくったりして、総出で警戒にあたるらしいから」

「監視塔ねえ。たしかに上から見れば不審な人物や物を発見しやすいが、それであの爆弾やテイラーに気づかないって、連中の目はどれだけ節穴なんだ？」

そこでふと、アレックスはある可能性に気づいた。

「テイラーがいたベンチのそばにも警備の警官がいたんじゃないか？ だから監視塔の警官は、封筒を不審物だと認識できなかったのかもしれない」

「警官仲間の近くにテロリストがいるとは、ふつつ考えませんかからね。だとすれば無能なのは監視塔の警官じゃなく、ベンチの近くにいた奴ですね」

サレムはそこではっとした表情になり、アレックスを見た。

厳しい目で、アレックスはうなづく。

「そいつがテイラーに気づかなかったんじゃない、わざと見逃していたとすれば？」

「あるいはテイラーを守っていたのかも。至急、パークの監視カメラの映像を再確認します」

アレックスは時計に目をやり、舌打ちした。

「もう平和行進が始まる。俺は会場に行くぞ。連絡をよこせ」

「了解」

アレックスはサレムを連絡役として残し、残りの部下数人とともにオフィスを出た。

捜査局はもともと市警に比べて圧倒的に人員が少ない。貨物船爆破事件の処理に奔走した連中は疲れ切っていて使いものにならず、大統領訪問による周辺宙域の警戒にも人を取られていて、今日はひどい人手不足だ。

月域では、事件が起きたからといって局員を急に増やすことは物理的にできないのだ。地球からにしろ軌道域からにしろ、人を呼ぶにはまる一日以上かかる。ディアナはそれを知っているいろいろな事件を同時に起こし、捜査の分断をはかっているのだとアレックスは考えていた。

まったく悪魔みたいな女だ。だがテイラーが死んだいま、どこでどうやって大統領を殺すつもりなんだ？ もう時限式の爆弾を仕掛けてあるのか？ だがすみずみ探させているが爆弾は見つかっていない。それとも……。

天音からもたらされた情報によって、アレックスは一連の事件の黒幕がディアナ・フローレスであり、彼女の最終目標は大統領暗殺だと知っている。しかし、サレム以外にはそれを教えていない。証拠がなにもない以上、ディアナの名前を捜査線上に乗せることはできなかった。そんなことをすればたちまち各方面から圧力がかかって捜査自体がつぶされ、アレックスも部下も運がよくて左遷かクビ、悪くすると消されるだろう。

捜査局のバンに乗りこみながら、アレックスは胸の通信端末に小声で訊く。

「サレム、あの子は見つかったか？」

『努力はしてます』

「努力で事件が解決するなら警察も局もいらねえよ。顔認識ソフト使って監視カメラにオートチェックかけろ」

『もうしました。でもこの人出では誤認識が多くて』

アレックスは舌打ちする。

「こんなことなら手錠かけてでも引き止めておくんだった」

爆弾テロ事件のあとでしつこく響揮のことを聞いてきたレポーターが、ついさつき、響揮がディアナと親しげにしていたと教えてくれたのだ。ごくごくまれにだが、マスコミも役に立つことがある。

ディアナに目をつけられたとすれば、早く響揮を保護しないと危険だ。やはり接触したのは間違いだったと、アレックスは後悔した。響揮が天音からなにか情報を受けとっていたとしても、一般人の、それもまだ中学生の少年を巻きこむべきではなかった。

「くそっ、後悔してばかりだ。俺も成長しねえな」

パークへ向かうバンが自動操縦で動きだす。アレックスは厳しい顔で通信を切った。

\*

\*

電話の着信音が部屋に響き、遙香ははっとして体を起こした。泣き疲れていつのまにかうとうととしていたらしい。はれた目をこすりながらデジフレームの前に行く。

電話はフロントの係員からだった。

『落とし物が届いております。部屋にお届けしましょうか？』

「落とし物？」

『ええ、ペンドントです。お名前が入っておりますし、わたくしもお客さまがこれをつけていらしたのを覚えておりますので、間違い

ないと思います』

「取りにうかがいます」

ヴィジのウィンドウを閉じ、遙香はぼんやりと考えた。あのペンダントには名前など入っていないかった。裏に刻んであったのは製造番号らしい数字だけだ。どういうことだろう？ 顔を洗ってからフロントに下りると、女性係員が待ちかねていたように小さなビニール袋に入ったペンダントを差しだした。「クリーニング業者が非常階段で見つけたそうです。とてもお似合いでしたもの、よかったですね、見つかった」

「ええ、ほんとに。戻ってくるとは思っていなかったから」

「チエーンが切れていたのは直しておきました」

「ありがとう、ご親切に」

遙香はペンダントの裏側を見る。見覚えのない文字が刻まれていた。

? T O H A R U K A 2 3 T H J U N E ?

「これ……違うわ」

「え？」

係員が不審そうに眉を上げる。

「あ、いえ、なんでもないの」

キツネにつままれたような気持ちで部屋に戻ると、遙香はベッドの端に腰かけてしげしげとペンダントを眺めた。これには1、31、27と刻まれていたはずだ。なんの数字かわからなかったので、よけい記憶に残っている。でもいまは、まぎれもなく遙香の名前と誕生日があつた。

そのとき、部屋が突然ぱあっとピンク色に染まった。遙香はびっくりして窓の外に顔を向けた。照明弾がドームの天井で弧を描き、落下していくのが見える。平和行進が始まる合図だろうか。部屋は完璧に防音されていて、外の物音はなにも伝わってこない。

ふたたび照明弾が上がる。今度は淡いブルーの光が部屋をいっぱいに照らした。

響揮のベツトの下でなにかがきらりと光を反射したのに目を引かれ、遙香はかがんでそれを拾いあげた。

銀色の薄い紙の切れ端。印刷された文字が少しだけ読みとれる。  
？レクトラ？

照明弾のように頭に理解がひらめいて、遙香はゴミ箱に駆け寄った。同じ銀色の紙があつた。だがこちらはくしゃくしゃに丸められている。広げて切れ端を合わせてみると、上品な書体のグレーの文字全部が読みとれた。

ジュエリー・エレクトラ。店の名前だ。

同じ包装紙を、遙香は旅行に出る前日に見ていた。天音からのプレゼントが包まれていたのだ。それは丁寧にたたんで自宅の机の上に置いてある。

「ああ……そうか……！」

すべてがつながつた。めまいがして、遙香は呆然と床に座り込む。  
「どうして気がつかなかったんだろ。これは響揮が買ったものなんだ！」

旅行に出る朝、響揮は様子がおかしかった。当然だ、プレゼントに選んだペンダントが天音とかぶっていたとわかったのだから。ひどく動揺したに違いない。

そしてもうひとつの事実気づくと、遙香の目からはどつと涙があふれてきた。

こんな誕生石のアクセサリーを贈るなど、響揮がひとりで考えつくはずがない。渚沙が協力したのだ。それが渚沙の？秘密？だった。それなのに、自分はさっきなんと言っただろう？ 仲間はずれにされたなんて、小学生みたいな泣きごと。

「……あたし、ほんとになんにもわかってなかった。最低だ……」

窓の外、音もなく上がる色とりどりの照明弾に、やるせない気持ちがいっそうあられる。遙香はペンダントをぎゅっと握りしめた。もし記憶が消せるものなら、響揮の頭からさっき自分が言った言葉全部消してしまいたかった。

真夏が好きなら応援するなんて、真っ赤な嘘。そんなこと考えただけでもぞっとするのに。響揮の心を確かめたくて、言ってしまうのだ……。

「……許してくれるかな」

とにかく謝ろう。許してくれるかどうかはそれからのことだ。

遙香は立ちあがり、マイティフォンをとって響揮に電話した。だが聞こえてきたのは通話不能の冷たいメッセージ。

故障してるの？ それとも……あたしとは話したくないってこと？ 胸に鋭い痛みをおぼえ、唇を噛む。

遙香はペンダントをかけて目を閉じ、銀色のヘッドにてのひらを重ねて胸に押しつけた。この淡い月光色の石に、裏側に刻んだ文字に、響揮はどんな思いをこめたのだろう？

いつもの誕生日とは明らかに違う、特別なプレゼント。

それが意味するのは、ただひとつだ。

響揮と過ごしてきた日々の思い出が、尽きることなく胸の奥からあふれてくる。遙香にとって響揮は、誰よりも たぶん両親や妹よりも近い存在だった。

？ 鷹塔クンのことどう思ってるの？？

真夏の問いが耳の底によみがえる。

いまなら違う答えを返すだろう。ふたりで自転車をこいで隣町まで走った幼い日から、気持ちはもう決まっていたのだ。

いつまでも一緒にいたい。つないだ手を放したくない。

たぶんそれが、誰より好きってということ。

遙香はゆっくりと目を開け、立ちあがってドアに向かった。



## ACT9 祈りの環、つなぐ思い

照明弾が次々にあがり、華やかな光でパークを照らしだす。建物は連邦旗の青で彩られ、歩道の両脇は鮮やかなイルミネーションで飾られて、セントラル地区のお祭り気分は最高潮に達していた。

スピーカーから流れる地球連邦讃歌のメロディに、ルナ放送の人氣DJの声が重なる。

『俺としちゃあ、政府に望むことはただひとつ。この辛気臭い連邦讃歌をリニューアルしてくれてコトだね！ 大統領閣下、聞いておいでですかね？』

タワー近くの特設会場から、大統領が抑揚豊かな声で答えた。

「貴重なご意見は承ったよ。しかしこの曲はそんなに辛気臭いかな？ わたしには荘厳ないい曲に思えるが。ここにお集まりの諸君はどうかな。わたしの意見に賛成してくれる人は拍手してくれないかな？」

パークじゅうから拍手が起こったが、ブーイングのほうが圧倒的に大きかった。

DJが勝ち誇った声で言った。

『市民投票を勧めますよ、大統領。しかし賭けてもいいが、ルナホーブ市民三万の意見は？ノー？だ！』

わっと歓声があがり、大統領は笑った。

「オーケー、議会にはかつてみることを約束しよう」

大統領はつい二時間前に爆弾テロ事件があったにもかかわらず、平和行進への参加を強行していた。もちろん市民は大喜びだ。

『では大統領、市民にひとことメッセージを。ねがわくば』

「わかってるさ。話は短く、だろう？」

『そのとおり。？時は金なり？ですからね。いや、いまの状況だと？時は票なり？かな』

辛辣なDJの物言いに、大統領は苦笑をもらす。

「では？簡潔に？言わせてもらおうよ。ルナホープは連邦の誇りだ。地球に比べると不自由なことも多いだろう。しかし諸君がこの宇宙の最前線で頑張ってくれているからこそ、現在の連邦の平和と安定がある。そして未来の発展も。月域外の連邦市民九十七億を代表してお礼を言いたい。ありがとう」

一瞬、パークがしんと静まった。次の瞬間大きな拍手と歓声がわき起こり、木々の梢を揺らした。

『シンプル・イズ・ベストですね、大統領閣下。票の行方はわかりませんが』

語尾に皮肉な笑いをにじませてから、DJは続けた。

『さあみんな、平和行進をはじめよう。ブルーの標識のある通りまで出て。隣の人と手をつなぐんだ。輪が全部つながったとき、願う心もまたつながる。平和が未来永劫続くように、全員で祈ろうじやないか。地球や宇宙にいる同胞に祈りを届けよう！』

人々が笑いさざめきながら歩道を埋めていく。大人も子供も、女性も男性も。

ルナホープ市内だけでなく、月面の鉱山でも軌道ステーションでも人々は手を取りあい、たくさんの小さな輪をつくっていた。

ルナホープの治安がいいのは、この平和行進が市民全員の心をつないでいるからだ、市民は誇りに思っている。さっきの爆弾テロだって？よそ者？のしわざだったではないかと、みんなささやきあっていた。

『中継で見えている月域外のみんなも、近くに誰かいるならためらわずに手をとろう！ いけすかない上司しかいないって？ じゃあ早退を申し出るんだな。明日、会社に席があるかどうかは保証できないけどね！』

\*

\*

ルナレイクでディアナと話してから、響揮はしばらくパーク内をうついていた。遙香に正面から向き合う決心がつかなかったのだ。そのうちにどんどん人が増えてきて、ふと気づけば平和行進の開始時間になっていた。

神々の広場にたどりつき、ほつと息を吐く。マイティフォンがないのはとにかく不便だ。レンタルしようと考えながらタワーへ向かう。広場の一角、アルテミス像の前には赤いカーペットが敷かれ、その上には十名ほどの市民が緊張した面持ちで立っている。大統領と手をつなぐべく、あらかじめ抽選で選ばれた人々が主賓の到着を待っているのだ。

響揮はカーペットを囲む青い制服の警官たちのなかに、右頬にほくろのある顔を見つけた。爆弾テロの前に響揮を泥棒扱いした、あの警官だ。鋭い目つきで周囲を警戒している。彼に会った直後に、あの事件は起こったのだった。

「まったく誰だよ、幸運の場所は公園なんて言った奴は……」

ひとりごち、響揮は人の少ないほうへカーペットの反対側へと歩きだした。花壇のそば、？月の都、ルナホープ・シティへようこそ？と書かれた大看板の前に、宇宙省の星と太陽のマークをつけたバンがすべり込んでくる。止まると同時にドアが開き、捜査局の腕章をつけた人々が数名、あわただしく降りてきた。

そのなかにアレックスの姿を認めて、響揮は足を止めた。赤毛の青年は厳しい表情で部下らしい捜査官たちに指示を出している。

兄についての話が途中だったのが気になっていたが、いまアレックスに声をかけられる状況ではないと響揮は判断した。

そのとき、タワーのほうから大統領がやってくるのが見えた。四人のSPをまるで衣服の一部でもあるかのようにぴったり身辺に張りつけている。待機していたマスコミの取材陣が飛び出していき、周囲を囲む。爆弾がしかけられる危険があるフライングアイの使用が規制されたので、みんな中継カメラを手に持っている。

大統領はにこやかに手を振って周囲に応えながら広場に入ってきた。

て、赤いカーペットへ近づいた。警官隊の青い輪が動き、大統領を迎えるべく代表市民の一団が前に進み出る。握手が交わされる瞬間を見逃すまいと、マスコミと野次馬連中が色めきたつ。

広場の全員がそちらに注意を向けるなか、響揮の目は、広場を囲むように四棟設置されている警備塔のひとつに引きつけられていた。高さ七メートルほどの塔の上に、あのほくろのある警官の姿を認めたからだ。背後にパークの照明柱を控え、大統領の側からは逆光で見えにくいはずだ。

爆弾テロのとき、あの警官はテロリストと爆弾のそばにいた。そして、まるで爆弾を守るかのように、響揮をベンチから追い払った。もし、それが偶然ではなかったとしたら？

市民代表の名前を読みあげるDJの声がパークじゅうに響いている。

響揮は広場の反対側に据えられた大スクリーンに目をやりながら、ほくろの警官がいる警備塔に近づいた。スクリーンには式典の模様がライブで映しだされている。

大統領が十人の市民代表と順に握手を交わす。そしていよいよ平和行進をはじめようと、カーペットの中央に立つて両手を広げた。盾のように大統領を囲んでいたSPたちが、周囲に警戒の目を走らせながら、一步大統領から離れた。黒い制服のすきまから、大統領の全身がのぞいた。

響揮ははつとして、警備塔の上に目を戻した。

警官の右腕がさつとあがり、腰高の壁の上部に銃身がのぞいた。ほかの警官が携えている標準タイプのショックパルス銃ではなく、あきらかに銃身が長い。アクション映画でもおなじみの、長射程で殺傷力の高いレーザー銃だ。

あの警官はテロリストの仲間だ！

体は考えるより先に動いていた。数歩だけ助走してリズムを取り、思い切り地面を蹴って、跳んだ。

月面はまるでトランポリンのように、警備塔のてっぺんめがけて

響揮を投げあげた。

警官の銃口が大統領に向けられる。標的まで約五十メートル。警官はまだ響揮が下から接近しているのに気づかない。トリガーにかかった指に力がこもるのが、スローモーションのように響揮の目に映しだされる。

間に合うか？

懸命に差し伸ばした右手が警官の肩口に届いた瞬間、トリガーが引かれた。

大統領が目を見開き、焼け焦げたジャンプスーツの左肩に顔を向ける。その様子が大スクリーンに映しだされるのを、響揮は視界の隅でとらえた。ふたりのSPがすぐさま大統領をかばって前に立ちはだかり、もうふたりが大統領の両脇を守りながらカーペットから避難させる。市民代表の一団が悲鳴をあげ、ばらばらと散っていく。

響揮は警官の制服の肩をつかみ、腰高の壁の縁に両足をついた。警官が激しい怒声をあげ、体をひねりざま左のこぶしを繰り出す。響揮はそれをよけ切れず、こめかみを強打された。一瞬視界が暗くなる。そのまま床に引き倒され、乱暴に組みしかれた。

「このくそガキが！」

明らかな殺意のこもった指が、容赦なく喉を締めあげる。

声帯をつぶされて叫ぶこともできず、響揮はただあえいだ。必死に警官の手を喉から引き離そうとするが、力の差がありすぎてびくともしない。かすむ視界で、警官の憤怒を映したふたつの目がぎらぎらと燃えている。

額に銃口が押しつけられた。

撃たれる！ 響揮は目をつぶった。

「サンダース　！」

声が頭上から聞こえ、はっと目を開ける。腰高の壁に仁王立ちになったアレックスが、伸ばした両手に銃をかまえ、ぴたりと警官を狙っている。

上を振り仰いだ警官がさっと銃をアレックスに向けた。だがトリ

ガーが引かれる前に、アレックスの銃から放たれたショックパルスが警官の腕に命中した。

悲鳴とともに、響揮の喉を締めつけていた手がゆるんだ。警官の手を離れた銃が床に落ちて転がる。アレックスが警官に飛びかかり、床に組み伏せて腕を背中にねじりあげる。

響揮は激しく咳きこみながら上体を起こした。

「響揮、無事か？」

アレックスの視線が一瞬、響揮のほうにそれた。警官が痛みに顔をしかめながらも、無事なほうの手で床に落ちていた銃をすばやくつかみ、アレックスに向けた。

「危ない！」

とつさに響揮は脚を伸ばして、銃を握った警官の腕を蹴りあげた。その瞬間に放たれたレーザー弾がアレックスの頬をかすめ、皮膚が切れて鮮血が散る。反射的に腰を浮かせたアレックスの隙について、警官が立ちあがろうとする。

響揮はその警官の腕をとらえてぐいと引き、立ちあがりざま体を相手の脇に入れて一本背負いをかけた。

警官の体が腰高の壁を越え、放物線を描いて宙に舞う。だが警官の腕を放すタイミングを逸した響揮も、そのまま警官とともに警備塔からダイブする羽目になった。

警官がしぶとく握っている銃からレーザー弾が乱射され、照明灯が破壊される。強化プラスチックの破片が飛び散り、市民のヒステリックな悲鳴が響きわたる。

「響揮　！」

上からアレックスの叫び声が降ってくる。

「くそ……っ！」

響揮は体をひねって背中から警官の腰に両脚をからめ、締めあげた。地面が迫り、ふたりはもつれあつたままタイル張りの歩道に転がる。そこへ警備塔から飛びおりたアレックスが駆け寄り、警官の両腕にがっちりと手錠をはめた。

「怪我はないか、響揮？」

「ああ……なんとか大丈夫みたい」

響揮は息をつき、締めていた脚をほどいて立ちあがった。

アレックスも立ちあがる。駆けつけた市警の警官たちが狙撃犯を引き起こし、やるせない口調でつぶやいた。

「サンダース、どうしてこんなことを……」

サンダースと呼ばれた警官は、ただ虚ろにほえんだ。右頬のほくろがえくぼをかたどる。次の瞬間。彼の目は大きく見開かれて眼球が反転し、眼窩からとびださんばかりにふくれあがった。白目がむきだしになり、唇がまるでコミック画のようにめくれあがる。獣のような咆哮が喉の奥からあがったかと思うと、ゴボツと音をたてて口から血が吹きだした。

どろりとしたどす黒い液体をまともに浴びてしまい、響揮はその場に凍りついた。警官たちがわっと跳び離れる。狙撃犯は断末魔の悲鳴をあげながらころげまわり、まもなく、糸が切れたように静かになった。大きくあいた口から紫色の舌がだらりとたれている。広場に敷かれた白いタイルのあちこちにまがましい血溜まりを残し、彼は息絶えた。

周囲の者たちは声もなく立ち尽くした。騒然とした広場で、そこだけがまるで時が止まったかのようにしんとしている。

呆然と、響揮は自分の体を見おろした。ジャケットの胸に広がった大きな赤黒い染みから、なまあたたかい血のにおいが立ちのぼる。胃をぎゅっとつかまれたように感じて、口を手で覆った。食道をえずきが駆けあがり、視界がぐるぐる回りだす。膝がぐだけてよるけたところを、たくましい腕に抱き止められ、体をすくいあげられた。

「響揮」

見あげると、心配そうな青い目がのぞきこんできた。

「すぐ病院に連れてってやる。もう少し頑張れ」

「アレックス……」

急激に気がゆるみ、すつと目の前が暗くなった。響揮の意識はそこで途切れた。

\*

\*

雑踏も陽気なDJの声も、遙香には虚ろに聞こえていた。数万人規模のイベントのただなかで響揮を見つけるのは、砂浜で針を探すようなものだった。

あきらめかけてぼんやり歩いていると、十歳くらいの少女に手をとられ、輪の中に引き入れられた。

「おねえちゃん、観光に来たんでしょ？ 歩き方が地球<sup>テラ</sup>っぽいもん」  
少女が大きな目をくりくりさせて話しかけてくる。

「うん、まだ今日着いたばかりだから」

「ひとりなの？」

「……友達と……はぐれちゃって。電話もつながらない」

「そっか、だから寂しそうな顔してたんだね。でも大丈夫、きっとお友達も輪の中にいるよ！ だって平和行進だもん。ルナホープにいる人は、みんな輪になってるんだよ」

少女は確信に満ちた口調で言い、につこり笑った。その表情が渚沙と重なって、遙香はたまらなく地球が恋しくなった。地球は遠い。そして自分はひとりぼっちだ。

無理に笑みを返すと、唐突に少女が訊いた。

「おねえちゃん、好きな人いる？」

「え……？」

好きな人。

浮かんだ面影に、胸がずきんと痛んだ。そばにるのが当たり前で、笑いかければいつも笑顔を返してくれる、ずっと手をつないでいてくれる 幼い夏の日、ふたりで自転車を飛ばした午後のように。

そんな関係が、永遠に続くと思っていた。



「やっぱ、いるんだ？」

いたずらっぽい表情で、少女が遙香にウィンクした。

「いいこと教えてあげるね。行進してるときにその人の名前を百回心のなかで唱えると、両想いになれるんだよ。だってその子も輪のなかにいるから、きつと気持ちが伝わるの。ルナホープの子はみんなやってるよ」

たあいのないおまじないだ。真に受けたわけではもちろんなかったが、遙香は信じたい気持ちになった。でも、いま響揮は輪の中にいるんだろうか？

どこにいるの、響揮。あたしをひとりにしないで。

「響揮……」

ほろほろと涙がこぼれてきた。少女が驚いたように目を丸くして見あげる。

『遙香は泣き虫だからな』

耳の奥で響揮の声が聞こえた。なつかしくて、悲しくて、涙は止まらない。

会いたいよ、響揮。

胸の奥の深いところから、強く熱い想いがつきあげてくる。遙香は一瞬めまいをおぼえ、ようやく悟った。

ああ、人を好きになるって、こういうことだったんだ。

遙香はほえんだ。不思議に心が落ち着いていた。

まだ握ったままだった少女の手をそっと放して「ありがとう」と言い、人々の輪から離れた。

行進のあいだ待っているなどと悠長なこととはできない。一秒でも早く響揮を探し出して、言いたいことがあった。

手の甲で涙をぬぐい、人の波を抜けてホテルのほうに歩きだす。木立の向こうの広場のほうがなにやらざわついている。妙な胸騒ぎがして、遙香は走りだした。

広場は二時間前と同様に規制テープで通行が止められていて、周囲をマスコミと野次馬が囲んでいる。遙香はそのひとりの袖を引い

た。後頭部がはげかけた中年男性が振り向いた。

「あの、なにかあったんですか？」

「お嬢ちゃん、アナウンス聞いてなかったのかい？　大統領が撃たれたんだよ」

「大統領が？　でも平和行進は続いてるじゃない」

「大統領は無事で、もう平和行進に戻ってるからね。なにがあっても行進はやめないって言って。小さな男の子が犯人に飛びかかって捕まえたらしいよ」

小さな男の子。いやな予感に襲われ、遙香は自分でもびっくりするほどの強引さで人垣をかきわけて規制テープの前まで進んだ。

監視塔の前の一角が青いシートで囲まれている。脇に駐まった救急車に、捜査局の腕章をつけた体格のいい赤毛の男性が早足で近づくと、その腕の中に、響揮がいた。意識がないのかぐったりしていて、見慣れた白いジャケットの胸には赤黒い染みが広がっている。

遙香は凍りついた。

響揮！

叫んだつもりだったが、声にはならなかった。さまざま恐ろしい想像が頭を駆けめぐり、足は石にでもなったかのように動かない。すぐに救急車が走りだした。

追いかけるければ。

けれども、足がもつれてうまく歩けない。遙香はよろよると人垣から離れ、ガラス像の冷たい台座にもたれかかった。

響揮は大丈夫、死んでなんかない。そう自分に言い聞かせるが、不安で胸がつぶれそうで、呼吸が苦しい。

そのとき電話の着信音が響き、遙香はぎょっとして飛びあがった。もしかして、悪い知らせでは？　遙香はショートパンツのポケットからマイティフォンをとった。番号は非通知で、画像もない。

「はい……？」

『三井遙香さん？　鷹塔響揮くんはあなたの友達ね？』

事務的な女性の声。遙香は凍るような恐怖と激しいめまいに襲わ

れた。

「響揮は まさか……」

『彼、さっき病院に運ばれたの。南エレベーターを降りたところに迎えを行かせるから、一緒に病院にいらっしやい』

「南エレベーター……」

『そうよ、早くね』

電話が切れると、遙香は周囲を見回して表示を探した。こんもりと茂る林を抜けたところにも、地下の市街とパークとを結ぶエレベーターがある。

不安に張り裂けそうな胸を自分の両腕でぎゅっと抱き、遙香はエレベーターに乗り込んだ。市街まで永遠に着かないのかと思うほど、下降の時間が長く感じられる。

ようやくドアが開き、ホールに出た。ネクサスホールとは違って人も少なく、こぢんまりとしている。

すぐに中国系の少女が近づいてきた。どこかで見た顔だと遙香は思ったが、頭が混乱していて思い出せなかった。

「遙香さんね？ 一緒に来て」

「響揮は」

「話はあとよ。さあ、早く」

少女に腕をとられ、遙香は花壇の向こうに駐まっていたバンに導かれた。乗り込むとすぐにドアが閉まり、車が動きだした。

\*

\*

白目をむいた男が地面をのたうちまわっている。自分の体はぴくりとも動かず、男を助けることもこの場を去ることもできない。鼓膜を破りそうなほどの絶叫が絶え間なくあがり、口から吹きだす血の泡が地面を、男の体を、そして響揮の全身を真紅に染めていく。助けを求めるように、男の手がこちらに伸ばされる。

男が自分の兄だとわかったのは、その瞬間だった。

「兄貴　！」

自分の叫び声で目が覚め、はっとして上体を起こした。

「落ち着いて、大丈夫だ、響揮」

額に冷たい手が当てられる。首をめぐらすと、赤い髪 of 青年が映った。ブルーの目に安堵の色が浮かぶ。

「アレックス……ここは？」

「病院だ、もう少し休むといい」　夢だったのか。

響揮は息を吐いた。全身が汗にまみれている。悪夢の記憶とともに警官の死の瞬間が脳裏によみがえり、底知れぬ寒さを感じてぶるぶると震えだす。

響揮の歯がちがちと鳴っているのに気づくと、アレックスがベツドのそばにスツールを寄せ、響揮の体に腕を回して抱きしめた。大きな手で髪を撫でる。

「鎮静剤が必要か？」

「……いや、大丈夫」

アレックスの手や広い胸から伝わるぬくもりが、無残な死の残像をやわらげてくれる気がした。目を閉じて体をあずけるうちに、震えが止まった。

「無理するなよ。正直、俺も吐きそうになった。精神科医の許可がおりたら記憶の部分消去をしてもらうといい。覚えていると害になる記憶もあるからな」

響揮は目を開けてアレックスを見あげた。

「そういう経験があるの？」

「俺は大人だ。トラウマとつきあう術は知ってるさ。それにしてもおまえ、ほんとに無茶すぎだぞ」

響揮の肩に両手を置いて体を引き、かがんで顔をのぞきこむ。厳しい色をしたえた目で諭すように見つめる。

「あの爆弾が強い振動に反応するタイプだったらどうなっていた？ サンダースがジャンプして近づいてくるおまえに気づいて、標的をおまえに変えていたら？　おまえは今日、二度死んでいてもおか

しかなかったんだ」

響揮の首筋には、首を絞められたときのあざが残っている。アレックスはいたわるようにそつとそのあざを撫でてから、また響揮の体を引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

「無事でよかった」

「……ごめん。俺なにも考えてなかった。頭より体が先に動くのが悪い癖だつて、よく言われるよ」

ふたたび響揮を離して、アレックスはぼんと響揮の頭をたたいた。「命はひとつだ、粗末にするなよ。ところで、なぜサンダースが大統領を狙っていることがわかったんだ？」

「神々の広場でアレックスと会う前に、サンダースは爆弾が置かれたベンチから俺を追い払った。その彼が監視塔の上にいるのに気づいて、変だと思ったんだ」

「いい勘してるな。俺もベンチのそばに警官がいたはずだと考えて名前を割り出したんだが、UCCIと市警はまあ、いろいろと訳ありだね。居所がわかったときには、おまえが走り高跳びの世界記録をつくってた」

アレックスはにやりとしてスツールから立ちあがり、壁際のキャビネットに歩み寄った。さほど広くない病室に、ベッドは一台だけ。キャビネットの脇には洗面台とトイレに続くドア、部屋の隅にはデイジフレームが置かれたテーブルがある。

「倍の体重じゃあ無理な芸当だから、俺は素直に監視塔のリフトを使ったがね」

「ありがとう。あなたが来てくれなければ、俺は……殺されてた」  
冷静に考えると怖くなって、響揮は首筋に手を当てた。喉を絞めつける手の感触が肌によりがえってくる。

「お互いさまだ。認めるのは癪だが、俺も助けられた」  
キャビネットの上のビニール袋をとって響揮に放り、アレックスは左の頬に貼られた治療パッチをさつと撫でてみせる。

「礼を言うよ。未成年でなけりゃ局にスカウトするのに、残念だ」

ゆるい放物線を描いて落ちてくる袋を、響揮は胸の前で受け止める。

「おまえの服はクリーニング中だが、いずれにしてももう着られないだろう。とりあえずそれを着てくれ。局の支給品だ」

「サンダースは……自殺だったのか？」

「ああ。検死の結果、死因は薬物による中毒死。自殺用の毒を齒に仕込んだ。もっと楽に死ねる薬もあるだろうにな……。背後関係は調査中だが、まあ、これで表向きは一件落着だ。あとは天音が無事でいてくれれば……」

響揮ははつとして息をのんだ。

「そうだ、兄貴は……兄になにかあったのか？」

その瞬間、アレックスの目に激しい後悔の色がよぎった。アレックスはベッドのそばに戻り、スツールに座って響揮の顔を見つめた。「もっと早く話すべきだったな。すまない。天音にはある重要人物の調査を依頼していたんだ。局としての公式なものじゃなく、俺の個人的な頼みだった。天音も危険性は承知していた」

「危険性？」

「……調査が相手にばれたら、消されるかもしれないってことだ」  
「消されるって……」

響揮は絶句した。一瞬めまいがして視界が揺れた。差し出されたアレックスの腕にすがり、悲痛な色をたたえた顔を見あげた。

「まさか兄は……殺されたのか？」

「わからない。自分と連絡がとれなくなったら弟にコンタクトするようにと天音は言っていた。中学生だが、自分にとっては誰よりも信頼できる相手だから、と。それで俺は今日、おまえに声をかけたんだ。天音からなにか渡されてるんじゃないか　情報を託されてるんじゃないかと思ってるね」

「いや、俺はなにも受けとってない。情報ってなんの情報？」

「情報のことはもういい。対象の事件は終わった」

ふいにアレックスの表情があらたまり、捜査官の顔になる。それ

以上訊くなということだと響揮は理解したが、おとなしく引き下がるわけにはいかなかった。

「なるほど、爆弾テロと大統領狙撃事件についてだね」

アレックスが渋い表情になるのを無視して、響揮は続ける。

「兄はその情報を重要人物の調査から得た。つまりふたつの事件はその人物の指示によるものなわけだ。誰なんだ、その重要人物って？」

「……教えられない」

「俺は関係ないってこと？ 兄はその人に殺されたのかもしれないのに！」

「そうじゃない！ マジで危険なんだよ、おまえ自身が狙われる可能性もあるんだ。今日おまえは二度も彼女を」

失言したという色をあらわにして、アレックスは口を閉じた。

「彼女、ね。女性なんだ。で、俺は今日二度も彼女の計画を邪魔したから狙われるって？」

「まったく油断ならねえな。やりにくいったら」

苦々しげにアレックスがつぶやき、それから納得したようにひとつなずいた。

「天音がおまえを信頼している理由がわかった気がするよ。だから俺もおまえを信頼して話す。天音はまだ死んではないと俺は思ってる。おそらく彼は仮死催眠を使ったはずだ」

「仮死催眠って……刑事ドラマに出てくるあれ？」

「『ハル&レイ』か？」

アレックスは苦笑する。

「そつだ。重要な情報を奪われないための手段のひとつだ」  
響揮は唾をのみこんだ。

「そんなものをどうして兄貴が……。たしか覚醒にはキーワードが必要なんだろう？ キーワードはあなたが知ってるの？」

「いや。おまえが知ってるんじゃないかと期待してたんだが」

響揮は顔を曇らせ、首を振る。

「俺は兄貴が仮死催眠を使えることさえ知らなかった」

「そうか……。だが天音がもし仮死催眠を使っているなら、覚醒する算段はちゃんとあるんだろう。無計画に命を捨てるような奴じゃないからな」

「でも対象の事件が終わったというなら、兄貴が守ろうとした情報はもう役に立たないはずだ。兄貴自身も用済みってことじゃないのか？　だとしたら……」

その先が続けられなかった。言葉にすれば現実になってしまうような気がして怖かった。

「……天音は俺がきつと探して連れて帰る。だから信じて待つてくれ」

アレックスの目には決意が鋭く輝いていて、響揮は圧倒され、うなずいた。

「兄貴があなたを信頼している理由が、俺にもわかった気がするよ」  
ふつと目を細めたアレックスの視線が、響揮を通り越して彼方を見つめた。

「その信頼を、俺は裏切ってしまった。私的なことで天音を巻きこんだ結果がこれだ。彼を守ってやれなかった。最低だな」

「私的でもなんでも、兄貴は危険を承知で引き受けたんだろ。覚悟はしてたはずだ。このところ兄貴の様子がおかしかったのはそのせいだったんだな。友達が亡くなったせいかと思ってたけど……」

その瞬間、アレックスにはじめて会ったときのことか響揮の頭をかすめた。どこか見覚えがあると思つた理由がわかった。

「ああ、そうか。あなたは兄貴の友達の　エメラインのお兄さん？」

アレックスの顔に驚きの色がよぎった。

「妹を知ってるのか？」

「前に兄貴に電話したときにたまたま部屋に彼女が来てて、紹介してもらったんだ。ふたりでバイオリンの練習をしてると言ってた。彼女が突然亡くなって……兄貴はひどく落ち込んだ。あなたの妹



だっただね。どつりで似てゐるはずだ」

そこで響揮ははっとした。

「もしかして、エメラインは殺さ」

さつとアレックスが手を響揮の口に当て、言葉を封じた。また遠くを見るまなざしになり、深く息を吐く。なにか振り切るように首を振ると、冷たい青い目で、刺すように響揮の目をのぞきこんだ。

「ヒビキ・タカトウ、おまえはこれ以上この件に関わるな。俺が許可するまで、当分ここでおとなしくしてろ。わかつたな？」

アレックスの言葉には、命令することに慣れている人間ならではの有無を言わせぬ雰囲気があり、響揮は反射的にうなずいた。アレックスが口から手を離し、にやりとして響揮の髪をくしゃつとかきまぜた。

「ガールフレンドにはさつきメールして、ここに来るよう伝えておいた。まだ返信はないが、じきに来るだろう。悪いが『ハル＆レイ』でも観て時間をつぶしててくれ」

「あなたも『ハル＆レイ』ファンなんだ」

響揮がからかうように言うと、アレックスはわざとらしく顔をしかめてみせた。

「言つとくが、あれは嘘のかたまりだぞ。あんな警察組織は存在しない。ファンタジーとして観るのが正解だ」

「おもしろけりやなんでもいいよ。ハルとレイ、どっちが好き？」

「そりやハルだろ」

「俺もだ。意見が合うね」

そのとき軽いノックの音が響き、ドアが開いてアラブ系の男性が顔をのぞかせた。

「主任」

「なんだサレム？」

「ちよつと……いいですか？」

アレックスはうなずき、「すぐ戻る」と響揮に言つて病室を出ていった。

響揮はすばやくベッドから下りた。アレックスになんと言われようと、おとなしくしている気はなかった。

アレックスの話から、兄が何者かに拉致されたらしいのはわかった。しかも、自分に重要な情報が託されていた可能性がある。それがないかわければ、兄を救出する手がかりが得られるかもしれない。グレーの診察衣を脱ぎ、アレックスから渡された服に袖を通す。

白の半袖Ｔシャツとスウェットパンツは薄手で軽い合成繊維製。濃紺のベストの左胸には宇宙省のマークが入っている。女性用Ｓサイズというのが気に入らないが、文句は言えない。ラバーソールの月面用ブーツに足を入れる。サイズはぴったりだ。

まず自分のコンピューターを呼び出して兄からのメールを再チェックしようと、病室の隅にあるデジフレームに向かった。コンソールの脇には響揮の所持品が置かれていた。腕時計、月域渡航ビザ、それにペンダントを包んだハンカチ。

ペンダント！

なぜ思い出さなかったのかと、響揮は自分にあきれた。直接渡されたわけではなかったが、これはまぎれもなく？兄から送られたもの？だ。

あわててハンカチからペンダントを出したとき、電話が着信して画面にヴィジのウィンドウが開いた。

『元気みたいね、ヒーローくん？』

聞き覚えのある女性の声だった。

「……ミス・ディアナ？」

画像は現れず、ヴィジのウィンドウには？ノー・イメージ？と記されたまま、音声だけが流れてくる。

『そうよ。今夜会っ約束をしたでしょう』

やわらかいアルトの声にはとがめるような調子があった。

『これからわたしが言うことには答える必要はないわ。質問もなしよ。二十二時に天音のペンダントを持って、ネクサスホールのＦゲートにいらっしやい。もちろんひとりでね。ガールフレンドもあな

たを待つてるわ』

「遙香が……？」

電話の向こうから、いまにも泣きだしそうなかぼそい声が聞こえた。

『響揮？ あたし 』

『わかった？ 来ないと彼女にはもう二度と会えないかも。この件は他言無用よ。意味はわかるわね？ きみ賢いから。じゃあ』

電話は一方的に切れた。

響揮は呆然として、ヴィジの閉じた画面を見つめた。口調はやわらかかったが、内容はまぎれもなく脅迫だった。

どういうことだ？ 遙香はなぜディアナの船に？ ディアナはどうしてこれを欲しがるんだ？

手を開き、ペンダントに目を落とす。けむる月光の石を抱いた銀の三日月。兄が遙香に贈ったものだ。

そのとき、響揮の頭で理解がはじけた。

ディアナ・フロレス。彼女は？ 女性？ で、言うまでもなく？ 重要人物？ だ。

「兄貴はディアナを調査していたのか……！」

じゃあ、爆弾テロも大統領暗殺も、ディアナが仕組んだのか？

信じられなかった。ルナレイクのほとりで会ったディアナは親切で、とてもそんな事件をたくらむような悪人には見えなかったのに。答えはきつとこれに隠されている。

響揮はペンダントを裏返した。1、31、27。謎の数字。

気持ちを鎮めるために目を閉じ、深く息を吸いこんで、ゆっくりと吐き出した。

ふたたび目を開けたときには、すべてが明瞭になっていた。これは宛先が遙香だっただけで、兄が本当に渡したかった相手は自分だったのだ。このデザインを選んだのもわざとだ。弟の目に触れれば必ず手にとって、暗号に気づいてもらえると期待していた。

だが響揮はそれに気づかなかったばかりか、愚かにも兄にいわれ

のない嫉妬をつのらせた。

「最低だな……」

響揮はつぶやいた。兄貴は俺を信頼して、重要な情報を伝える役を頼んだのに。遙香の気を引こうとしてるなんて、どうして誤解できたんだろう？

だが、いまそれを悔やんでも意味はない。響揮は気持ちを切り替え、兄と交わしたやりとりの記憶をたどった。この数字の謎を解く鍵が、どこかにあるはずだ。

「考えろ、響揮。兄貴が解けない暗号をよこすはずがないんだから」  
響揮は病室のドアを少し開けて外をうかがった。アレックスが戻ってくる気配はない。サレムと呼ばれていたアラブ系の男性捜査官が、少し離れたところでブルーの制服姿の警官ふたりとなにか話している。口調は丁寧だが、表情にはいらだちがほの見える。どうやら楽しい話ではないらしい。

アレックスの同僚とはいえ、サレムに相談するのはためられた。響揮はドアをそっと閉めてディジフレームの前に戻り、地球にある自分のコンピューターにアクセスした。ディアナはペンダントを手に入れる絶対の自信があるようだ。ならばこの部屋も通信も監視されてはいないだろうと、響揮は判断していた。

数日前に起きた磁気嵐の影響で、地球との通信回線は不安定だ。焦る気持ちを抑え、響揮はまず兄からのビデオメールを開いた。

ここにも謎の数字があった。『ナンバーは十三だ』。ナンバーは……。

そのとき、ディスプレイがぱつと切り替わった。派手なフェイスペイントを施したピエロが現れ、嘲るような笑い声をたてる。

『ヒーツヒーツ！俺とゲームをしようぜ』

「ちくしょう、忘れてた！こいつまだ退治してなかったんだっけ」

響揮は歯噛みした。

「勘弁してくれよ、おまえにつきあってる暇はないんだ！」

ピエロがにたと笑う。

『間違った数字を打ち込むとファイルがひとつ消える。楽しいだろ？』

……数字！

響揮の指がキーボードをすべる。1、31、27。

ガン！

発射音が轟き、ファイルが壊れたことを知らせる表示がディスプレイに流れた。

「くそつ、違うのか」

このウィルスをしかけたのは兄かもしれないと、そしてこのロシアン・ルーレットに勝てば、兄が自分に託した情報が現れるのではないかと思ったのに。

『キヤーツハツハツ！ 残念！ もう一度やってみるか？』  
楽しそうにピエロが言った。

このせりふははじめてだと、響揮は気づいた。いままでは数字をひとつ入力するたびにピエロは消えていた。もしかしたら、正解に近づいているのかもしれない。

「兄貴なのか？」

にたにた笑っているピエロに、響揮はさすがのような目を向けた。  
「だったらそう言ってくれよ」

ピエロは答えない。

「ヒントをくれよ兄貴、俺は兄貴みたいに頭よくないんだぜ？」  
数字を入れるブロックでカーソルが点滅している。

『響揮、おまえならわかるはずだ』

耳の奥で天音の声がささやいた。

『ナンバーは十三だ。いまの時期はいいね』  
「Mか！」

響揮は思わず短く叫んだ。

天文の世界では、新たに発見された彗星や小惑星に、数字とアルファベットを組み合わせた仮の名称をつける。アルファベットの十三番目はM。そしてMは六月後半、つまり？いまの時期？に発見さ

れた小天体に付される文字なのだ。

1、31、27はそれぞれM1、M31、M27だ。そうすると数字の意味はまた違ってくる。星雲・星団をリストアップした？メシエ星表？の掲載順だ。メシエは十八世紀の天文学者で、地球から見える主な星雲・星団の星表をつくった最初の人物だ。

メシエ星表には百十個の星雲・星団が記載されている。名前と座標はもちろん響揮の頭に入っている。M1はかに星雲、M31はアンドロメダ星雲、M27はあれい星雲。ポイントは、これらの天体がすべてもうひとつのナンバー？NGCナンバー？を持っているということだ。メシエ星表より多い八千個あまりの星雲・星団を記載したリストの番号だ。

にやにや笑うピエロをにらみつけ、響揮は点滅しているカーソルに、メシエナンバーと対応するNGCナンバーを打ち込んだ。

1952、224、6853。

瞬間、ピエロがほえんだように見えた。

ガーン！

大きな発射音とともにピエロの額に穴があいた。

やった！

響揮は息をのみ、画面を見つめた。ピエロの顔がこなごなに割れ散る。

次の瞬間に現れた、白地の画面全体を埋め尽くす黒の文字列を目にすると、響揮はがっくりと肩を落とした。これも暗号らしい。

落ち着けと自分に言い聞かせて文字列を観察する。ギリシャ文字やロシアのキリル文字のアルファベット、韓国のハングル文字、中国の繁体字、画数の多い日本の旧漢字が雑然と並んでいる。小さな文字なので目がちかちかして、響揮はまばたきした。

ふと、？遙？という漢字に目を引かれた。数えると全部で十個、規則性もなく置かれている。

いや、規則性は……ある！

響揮は十個のうち六個を手早く削除していった。画面の上下左右、

対称に配された四個の？遙？の文字を残して。

南十字星だ。

数秒後。四個の漢字がぱつと青色に変わった。次の瞬間、文字が全部消えて画面が真っ黒になった。

「ビンゴ」

静かにつぶやき、響揮はなにひとつ見逃すまいと画面のほうに身を乗りだした。おそらく表示されるのは一度だけだ。集中して記憶しなければならぬ。

星が輝くかのように、真っ黒な画面に白く、日本語の文字列が浮かびあがってきた。

\*

\*

アレックスが病室に戻ったとき、時刻はすでに二十二時を回っていた。護衛としてドアの前にいるはずのサレムがいないのに気づき、顔をしかめる。ドアを開けて病室をのぞく。誰もいない。乱れたベッドの上には丸めた診察衣が無造作に置かれている。

「しまった！ あいつ」

アレックスは病室に飛びこみ、ディジフレームの前にメモが置かれているのに気づいて手にとった。

？遙香を人質にとられた。ディアナの船に行く？

「くそっ」

ありとあらゆる罵倒のことばを並べながら、アレックスはトイレのドアを開けた。思ったとおり、バキューム式のコンパクトな便器に、首をうなだれたサレムが座っていた。アレックスは部下の顔を乱暴に上げさせ、容赦なく頬をたたいた。

「起きろサレム！ 職務怠慢だぞ！」

「う……ん、ああ、主任。……くそっ、あのガキめ 地獄に墜ちて三千年呪われる」

アレックスはサレムの顔の前で響揮のメモを振ってみせた。

「どうしてこんなことになったんだ？ おまえらしくもない失態じゃないか」

サレムはメモを読むとまた、神には聞かせられないたくいの言葉をつぶやいた。

「主任が行った直後に市警が来て、十五分ほどもめてたんですよ。サンダースが家族あての遺書を残していて、大統領狙撃事件はグリーン・サンクチュアリ法の強行採決とジョアン・フローレス暗殺に抗議するためだったってわかったんだそうです。赤いドクロとは無関係だから捜査権は市警にある、事情聴取のためにあの子を市警本部に連行するってうるさくて」

「ブルータス、おまえもか」

アレックスは毒づき、サレムの腕をつかんで立たせた。

「俺も責められてたんだ。ルナホープ・シティ警察署長殿から、かたじけなくもじきじきにね。報道規制も行き過ぎだ、響揮をマスコミに取材させるとおっしゃる。冗談じゃない。ネタに飢えた野獣の群れにあの子を放りこめつてのか？」

連邦の個人情報保護法では、十五歳以下の少年についての報道に細かく段階を設け、制限している。アレックスは最高度の規制を適用しているので、いまのところ響揮の名前は表に出ていない。

「サンダースが身内だったんであわててるんですよ。あの子をヒーローに仕立てて祭りあげれば内部の失態が目立たなくなる。姑息な作戦が見え見えです」

歩きだしたサレムはみぞおちを押さえてうめいた。

「くそつ、サムライの国の子孫のくせに、だまし討ちなんて卑怯だ。気分が悪い、吐きそうだって言うから介抱してやったのに、いきなり肘鉄を。狭い場所で逃げ場がなかったんです」

「言い訳は見苦しいぞ、サレム。油断するのが悪い。外見はまるで子供だが、あいつは柔道二段なんだ」

「柔道はスポーツでしょ。反則ですよこんなの」

恨めしげな顔のサレムの背中を、アレックスが軽くたたいた。



「子供に不意打ちくらって失神したなんて、局に広められなくなきや黙っとけ」

「子供？ じつは特殊工作員でしたって言われても僕は信じますね」「それは同意する」

ふたりは病室を出ると、足を速めて病院を後にした。捜査局のバンの乗りこみ、A Iに公用宇宙港行きを指示して、アレックスはサレムのほうを見た。

「祈ってくれ、サレム。神のご加護とやらがたっぷり必要になりそうだ」

いつもは明るい青のアレックスの瞳は、不安と焦りのために深い藍に沈んで見えた。

## ACT10 約束の行方

電話を切ったディアナが遙香を見おろし、薄くほえんだ。

遙香は後ろ手に手錠をかけられ、ソファに座らせられていた。バ  
ンに乗った直後、首筋に冷たいものが当てられて、十秒もしないう  
ちに目の前が真っ暗になった。気がついたときにはここに運ばれて  
いた。

遙香からペンダントをとりあげたディアナはすぐに、それが響揮  
の購入したもので、天音のものとすり替えられたことに気づいた。  
「心配しないで。彼すつとんでくるわよ。したらあなたは帰して  
あげる。もちろん記憶消去をしてね。数時間の記憶なら注射一本で  
できるの」

ディアナを美しいと思ってあこがれていた記憶こそ、消してほし  
かった。

「なぜ響揮を呼ぶの？ ペンダントが必要なだけなんですよ。誰か  
に取りに行かせればすむじゃない」

「あの子自身に用があるのよ」

感情の読めない冷たい緑の瞳で、ディアナはじつと遙香を見つめ  
た。

背中をぞくつと悪寒が走りぬけ、遙香は本能的に、ディアナは響  
揮をただでは帰さないつもりだとわかった。そのとたん、いまま  
で恐怖でいっぱいだった胸に激しい怒りが満ちてきた。

「どうして？ あのペンダントはあたしがもらったのよ。響揮には  
関係ないわ！」

「おばかさんね。天音はあれをあなたに送ったんじゃない、弟に送  
ったのよ」

「どういうこと？」

「弟が買ったものと同じデザインだったでしょ。わざとよ。弟に気

づかせるため。どうやらその計画はうまくいかなかったみたいだけ  
ど」

「もしそうだとしても、なぜあなたがそれを欲しがるの？　いった  
いあなたはなにをたくらんでるの？」

ディアナはおもしろがるような表情になり、遙香の隣に来てふわ  
りと腰を下ろした。バナラのまじった濃厚な香りが漂ってきて、遙  
香は顔をしかめた。エレベーターで乗り合わせたときはすてきな香  
りだと思ったが、いまはただ鼻についた。尊大で傲慢で自己主張が  
激しい、いやなおいだ。

ディアナが遙香の顔をのぞきこむ。

「どうせ記憶を消してしまうんだから教えてあげるわ。あの子さえ  
邪魔しなければ、計画はすべて成功していたのよ。悔しいからお仕  
置きしてあげるの」

「計画？　響揮が邪魔したって……爆弾テロも大統領の暗殺も、あ  
なたが仕組んだことだったの？」

「あら、思ったほど鈍くはないのね」

「お仕置きって……響揮をどうするつもり？」

そう問う言葉の端が、冷たい予感に震えた。

ディアナは少し首をかしげて遙香を見つめた。

「あなたはあの兄弟とかなり親しかったのね」

遙香の質問には答えないままソファから立ちあがり、遙香の腕を  
とってキャビンを出た。通路を進み、いくつかあるドアのうちのひ  
とつを開ける。

遙香は背中を押され、その部屋に入った。狭い部屋をぐるっと見  
まわして、驚きに目を見開いた。

「天音さん……！？」

ディアナに促され、部屋の奥のベッドに近づく。

まぎれもなく遙香の理想の兄、ボストンにいるはずの鷹塔天音だ  
った。顔は紙のように白く、生気が感じられない。

「まさか、死んでいるんじゃない……？」

「死んではいないわ」

ディアナが枕元にかがみこみ、親しげなしぐさで天音の髪を撫でた。

「天音さんになにをしたの!？」

「……その様子だと、あなたは知らないのね。残念だわ」

「どういうこと? わけがわからない。ディアナ、あなたはいい……」

ディアナは冷たい目を遙香に向けてから、また視線を天音に戻した。

「わたし? わたしは、そう……死神だって、天音は思っていたみたいよ」

\*

\*

祭りの夜とあって、市内は二十二時になっても大勢の人でにぎわっていた。響揮がネクサスホールのFゲートに着くと、見覚えのある中国系の少女が近づいてきた。ディアナの付き人、シャンメイだ。「持ってきた?」

響揮はベストの胸ポケットからペンダントを出し、シャンメイに渡した。裏を返して確かめると、シャンメイはうなずいて、それを黒いチャイナドレスのポケットにしまった。

「遙香は無事だね?」

「来ればわかるわ」

シャンメイはついてくるよう手振りで示し、歩きだした。シリウス・グループの関連会社のマークが入ったバンに乗せられ、しばらく走る。やがて倉庫街に入り、シャッターの開いた倉庫のひとつに車がすべりこんだ。

一部だけともっている照明の下に、蓋のあいたコンテナが置かれている。

バンから降りたシャンメイはコンテナのそばに響揮を立たせ、脇

に置かれていた暗いオレンジ色の与圧スーツを指さした。

「着方はわかる？」

「……いちおう。俺は荷物ってわけ？」

「まあ、そうね」

人間がルナホープ宇宙港で船に乗るときには必ずチェックゲートを通り、月域渡航ビザを提示しなければならず、乗船記録が公に残る。だから自分は貨物として積まれるというわけだ。

殺して船から捨てても、誰も気づかないように。

落ち着くと、響揮は自分に言い聞かせた。予想はしていたことだ。兄のメッセージに書かれていた内容が事実なら、ディアナは人ひとりを殺すことなどなんとも思わない、冷酷な女なのだ。

コンテナは密封されるうえ、貨物室では人間の生存に適した環境が恒常的に維持されるとはかぎらない。与圧スーツを使わせてもらえるだけでもありがたいと思うべきだった。

響揮は構造をたしかめながら、ゆっくりと身につけた。溶岩洞窟探検ツアーで使ったものより生地が薄く、外観もスリムだ。生命維持システムやプロテクターなど、外部ガジェットの組み合わせ方しだいで多目的に使える、新方式のシステムスーツ。ごく最近実用化されたばかりだが、今後、与圧スーツの主流になると目されている。実物を目にするのは初めてなので、こんな状況でなければ喜々として試着するところだ。しかし、さすがにそんな余裕はない。

シャンメイは響揮がスーツに慣れていないと判断したらしく、装着に手を貸してくれた。簡易生命維持システムを腰の後ろに接続し、左腕にコントロールパネルをはめ込む。

スーツはあつらえたかのように響揮の体にフィットしていた。小柄な自分のために、ディアナはわざわざジュニア用を用意したのだろうか。親切なことだと、響揮は皮肉っぽく考える。

視界が広いフルウィンドウタイプのヘルメットを取ろうとしたところで、シャンメイに止められた。シャンメイは生命維持システムを作動させ、コントロールパネルをチェックする。

酸素残量百五十分、通信システム未設定、簡易ビーコン未設定。  
響揮は内心でため息をついた。いざというときに使える機能が軒並み未設定だ。

それからすぐに両腕をとられて後ろに回されてしまい、ほかの機能や数値がどうなっているかは確認できなくなった。スーツ越しに手首に手錠をかけられたのがわかり、息をのみこむ。腕を動かそうとすると、強化プラスチック製らしい手錠が乾いた音を立てた。

「こんなことしなくても」

思わず弱音がもれた。額に冷たい汗が浮いてきて、言いようのない不安におびえているのを自覚し、情けなくなる。

「そう指示されてるの。お仕置きが必要だからって」

言い訳めいたつぶやきが返ってくる。

「お仕置き？　なるほどね、なら納得だ」

直後、響揮はうなじに冷たいものが押しあてられるのを感じた。

「少し眠っていて」

麻酔剤を打たれたのだ。ヘルメットをかぶせられたところで、響揮の意識は途切れた。

目覚めたのは真っ暗闇のなか、軽い振動と加速のGに体を揺さぶられたときだった。船が飛び立ったのだろう。ディアナから遊覧飛行に誘われたことを、響揮は思いだした。少なくともその約束は守られたわけだ。

まだコンテナに閉じこめられているらしく姿勢が窮屈で、拘束されている腕はまったく動かせない。

「荷物にしたってこの扱いはひどすぎるんじゃないか？」

言っても誰にも聞こえないのはわかっていたが、言わずにはいられなかった。ヘルメットのなかで自分の声が反響し、鼓膜の奥にむなしくこだまが届く。

生命維持システムからは乾いた空気が送られてきているが、いつ

までもつのかと不安が頭をもたげる。この姿勢ではスーツのコントロールパネルを見ることもできない。せめて明かりが欲しかったが、スーツの肩に装備されたライトをつけるのも無理だ。

締めつけられるような恐怖がじわじわと胸を這いのぼってきて、響揮はわきあがる唾をのみこんだ。

出してくれ、早く早くはやくはやく！

呼吸が速まり、心拍が上がっていく。頭ががんがんにして全身が熱くなる。

パニックに陥りかけているのに気づき、響揮は歯を食いしばった。  
「落ち着け、響揮！」

これが？お仕置き？なら、パニックに陥ったりすればディアナの思うつぼだ。

響揮はぎゅっと目を閉じ、自室の天井に浮かぶ蛍光塗料の星々をまぶたの裏によみがえらせた。

琴、鷺、白鳥、アンドロメダ、ヒアデス、プレアデス。

狂ったように暴れて肋骨を揺さぶる心臓をなだめながら、星座をなぞり、星雲をたどる。

プロキオン、ポルツクス、カペラ、アルデバラン、リゲル、シリウス。

恒星を数え、震える息をのみこんで、意識して呼吸を浅く保つ。

兄貴のメッセージを無駄にしないために。遙香を無事に地球に還すために。俺にはしなくちゃならないことがある。

永遠のように思える時間が過ぎ、ようやくコンテナのロックがはずされる音が聞こえた。ふたが開き、抑えた照明がヘルメット越しに入ってくる。暗闇から解放され、シャンメイの手でヘルメットがはずされると、響揮は深く息をついた。

空気にはほどよい湿気があり、かすかに甘く感じられる。

生き返った気がした。死は覚悟していたはずだったのに、と苦い思いが胸にあふれてくる。

「出られる？」

シャンメイが訊いた。

響揮は努力したが、暗闇との闘いで消耗したのに加えて、長時間同じ姿勢でいたせいで体がこわばり、動けなかった。見かねたように、シャンメイが腕をつかんで引っ張りあげてくれる。

「ああ……サンキュ」

言ってから響揮は後悔した。反射的とはいえ礼を言うなんて、俺はばかか？

シャンメイも意外だったのか、目に一瞬驚いたような色が走った。だが彼女はなにも言わず、またいつもの無表情に戻った。

船はすでに慣性飛行に入ったらしく、無重力状態になっている。シャンメイに腕をつかまれたまま、響揮は貨物室の気密ドアを抜け、薄暗い通路に出た。さっと視線を周囲に走らせる。天井に緊急脱出ポッドの派手な蛍光オレンジのハッチが並んでいる。正面は標準タイプのドッキング用エアロック。

それから、いくつかのドアが並ぶ通路を奥へと漂うように進んだ。突きあたりのドアがさっと開き、まぶしい光がもれ出てきて、響揮は思わず目をつぶった。

「ようこそ、エンデュミオン号へ」

やわらかな声が聞こえた。

ゆっくりと、目を光に慣らしながらまぶたを開ける。

「道中は快適だった？」

白と金を基調とした豪華なキャビンのソファの上で、ディアナが艶然とほほえんでいた。

「……BGMがあればもっとよかったかな」

冗談めかして答えたが、ディアナは響揮の虚勢を感じとったようだった。くすつと笑ってソファを離れぎわ、船のAIに命じる。

「《惑星組曲》を。アジアン・フィルで」

流れてきたホルスト作曲のシンフォニーに、響揮は聴き覚えがあった。父、佑司の指揮になるものだ。一瞬、両親の顔が脳裏に浮かび、喉元に熱いものがこみあげてくる。



「《火星・戦争をもたらす者》か。あなたのテーマ曲にふさわしいね」

皮肉な口調で言い、響揮はぐつと奥歯を噛んで喉元のかたまりをのみくだした。反抗的な態度は控えるべきだとわかっていたが、抑えるのが難しかった。ティンパニの刻む不穏な五拍子のリズムに引きずられるように、響揮は怒りを目にこめてディアナをにらむ。

ディアナはただほえんただけだった。

「シャンメイ」

響揮のそばにいたシャンメイがうなずいた。チャイナドレスのポケットにクリップでとめてあったキーをとり、響揮の右手首から手錠をはずす。それをドア脇の壁に設置された手すりにかけてからキヤビンを出ていく。

利き手が自由になったのはありがたかった。響揮はそつと左手を引っ張ってみた。こちらは残念ながらしっかりと手すりにつながれている。

やがてシャンメイが戻ってきた。片方の腕に、もがく遙香を抱えて。

「遙香！」

さつと遙香がこちらに顔を向け、大きく目を見開いた。後ろ手に手錠をかけられ、口は粘着テープでふさがれている。

「うつつ……！」

くぐもった声がもれる。それは響揮の耳に、自分の名を呼んだのだと聞こえた。

響揮は深くうなずいてみせ、大丈夫だと目で伝えた。

シャンメイが遙香をソファにストラップで固定するのを見届けると、ディアナは無重力慣れした動作でついと響揮のほうに漂ってきて、間近に顔を寄せてささやくように言った。

「天音のペンダントの秘密を話してもらいましょうか。きみの持ってきたこれ、数字だけしかないのよね。きみのコンピューターにもヒントがなくて、困ってるの」

響揮は内心でにやりとした。ディアナはあのウイルス・プログラムの解析まではしていなかったようだ。弟のコンピューターの管理がいい加減なことをよく知っている天音ならではの、木を森に隠す作戦が功を奏したというわけだ。おそらく、ロシアン・ルーレットのウイルス自体も、天音がつくつてばらまいたのに違いない。

「遙香はルナホープに帰してくれるね？」

「きみの出方によるわ」

ここからは演技力が必要だ。響揮は表情に緊張と敗北感をにじませ、ディアナの視線から逃れるように目をそらした。

「逆らっても、どうせ自白剤打たれて無理にでも言わせられるんだろ」

「わかってるじゃない」

響揮は小さく息を吐く。

「……ペンダントの金属フレームのある部分に細工がしてあって、並んでいる原子一個一個をはぎとる方法で文字が書かれてるんだ。読み取るには高性能の電子顕微鏡が必要だ」

「そんな細工、いつしたのかしら」

ディアナはいらだちを見せた。この船に電子顕微鏡などあるはずがない。

「この数字はなんなの？」

「俺と兄にだけわかる暗号だ。ちょっとひねると、兄のメッセージを読むためのパスワードになる。ウイルスの形になってたから、俺も兄の意図に気づかなかった」

響揮は言葉を切り、無念そうな表情をしてみせた。

「あなたにペンダントを渡せて言われてはじめて、これが暗号かもしれないと気づいたんだ。さっき病院で兄のメッセージを読んでペンダントに情報が書かれてることがわかった。電子顕微鏡がないから内容は知りようがないけど」

ディアナは悔しげに、わずかに口元をゆがめた。

「天音のファイルがまだコンピューターに残っている、ということ

はありえないでしょうね。彼のことだから、表示が終われば自動的にメッセージを消滅させるプログラムを組みこんだはずだもの」

「ああ。三十秒ほどで全部消えたよ」

「ペンダントはアレックス・ブローディに渡せと指示があったの？」

響揮は答えなかったが、それ自体をディアナは肯定とみなしたようだった。人差し指を唇にあて、数秒のあいだ探るように響揮の目をのぞきこんでから、軽く目を閉じて首を横に振った。

納得してもらえたらしい。響揮は内心で安堵の息をもらした。

「兄は休暇中なんかじゃないんだろう？ 兄をどうしたんだ？ 無事なのか？」

「天音のことが心配？」

「当たり前だろ、たったひとりの兄だ」

「天音のせいでこんなことになってるのに、恨んでいないの？」

「兄のせいじゃないさ。あなたは俺自身に用があるんだ。ペンダントの情報を聞きただけなら、手間をかけてこの船に俺を連れてくる理由はないからね」

ディアナは軽く腕を組み、首をかしげた。

「それがわかっていて来たの？ 度胸があるじゃない」

「遙香を人質にとられちゃ、来る以外選択肢はない。俺があなたの計画を邪魔したのがそんなに気に入らなかったのか？ 爆弾テロと大統領の狙撃はあなたが仕組んだことだったんだろう？ 爆弾魔をルナホープに密航させたり、警官を死客として雇ったりするのもあなたなら簡単だ」

「……そうね、簡単だったわ。きみさえ邪魔しなければ、わたしはいまごろ祝杯をあげていたはず」

響揮は息を吐いた。

「爆弾テロは大統領を確実に平行行進に参加させるため？ テロに屈しないのがロシュフォードのモットーだ。それを逆手にとったのか？ 警備の目をルナホープの外の人間に向けさせる意図もあったのかもしれないけど」

「わかつてるなら訊かないで」

「じゃあわからないことを訊くよ。なぜロシュフォードを殺したいんだ？ あなたの兄さんのジョアンが大統領になれば、シリウス・グループがさらに発展するから？ まあ、ジョアンは危篤だっていうから先は不透明だけど。あるいは、大統領が主導したグリーン・サンクチュアリ計画にあなた自身が反対だからかな。でも、それならわざわざ月で事件を起こさなくても」

くくつ、とディアナは抑えた笑い声をもらした。それはやがて笑いの発作のようになり、嬌声がキャビンを満たした。響揮と遙香はもちろん、シャンメイも目を丸くしてディアナを見つめた。

「政治とか経済とか、そんなものはどうでもいいの。ジョアンに爆弾入りの花束を贈ったのはこのわたしよ！ なぜって、ジョアンはナタリアがロシュフォードと不倫してできた子だから！ そしてかわいそうなパパを死に追いやったから！」

いつきに言つて口をつぐむと、ディアナはキャビンの窓に漂っていき、外に広がる宇宙に視線をさまよわせた。

「パパは心からナタリアを愛していた。だから彼らを責める代わりに自分の肉体と精神を痛めつけた。パパは去年ここで、この宇宙で死んだわ。月から地球に戻るあいだに、船ごと行方がわからなくなつたのよ。でも絶対に自殺じゃない。ドラッグ中毒の親がいると大統領選挙に不利だから、ジョアンが殺させたのよ。ナタリアは涙ひとつ見せなかつたわ。船の搜索もほんの数日で打ち切った。あの女は いまもロシュフォードを愛してるのよ」

ディアナは潤んだ目を伏せ、やがて取り乱したことを恥じるようにうつむいて、きゅつと唇を噛んだ。

「だからって ほかの人を巻き添えにするような復讐が正しいと思うのか？」

響揮は思わず大声で言った。大義も理想も信念もない復讐劇のために、ルナホープ市民全員が危険にさらされたのだ。兄や自分、遙香までも。

「正しいわ、わたしには。ナタリアの汚らしい欲望がジョアンを生み、ジョアンのくだらない征服欲のために父は殺された。月に行きたがっていた父を、ルナホープは受け入れてくれなかった。……月も地球も、全部壊れてしまえばいい」

そのとき、響揮にはディアナの計画のすべてが見えた。

「あなたの兄さんが死んだら、暗殺はロシュフォードの指示だったって証拠がどこからか出てくるんだろうな。平和共立党の支持者は激怒する。もしロシュフォードの暗殺が成功していれば、こちらもじきにあなたの兄さんの指示だったって証拠が出てきただろう。人民党の支持者も黙っちゃいない。ほんの数日で二大党首がふたりとも暗殺されて、政府も捜査機関も動けないうちに世界各地で大規模な衝突が起きる。それがあなたの目的だったんだ　連邦を崩壊させることが」

ディアナは顔を上げ、疲れた笑みを響揮に向けた。

「かわいくない子ね」

「それでいったいどれだけの一般市民が死んだり怪我したりすると思うんだ？　勝手すぎるだろ！？」

「……きみにはわからないわ。誰にもわからない。父の絶望も、わたしの孤独も。わかってほしいとも思わない」

抑揚のない乾いた声音で、ディアナはつぶやくように言った。

「今日は父の命日よ。冷たい宇宙にひとりぼっちで、きつと寂しがつてるわ。……シャンメイ、もういいわよ。指示どおりにして」

付き人の少女は一瞬目を見開いた。髪に手をやってためらいがちに口を開きかけ、また思い直したように閉じる。

キャビンに流れる曲は《水星・翼のある使者》に代わり、さまざまな楽器が繰り返す旋律のきらめきがキャビンを満たしている。

時間かせぎもここまでらしい。無意識に呼吸を止めていたことに気づき、響揮はゆっくりと息を吐きだして、心拍の上昇を抑えようとした。顔が青ざめたのは、もはや演技ではなかった。

「遙香にお別れを言わせてもらえる？」

「……そうね、それくらいは許してあげてもいいわ」

ディアナがシャンメイにうなずきかけた。

シャンメイはキーを手に、一瞬躊躇してから響揮の左手首の手錠をはずした。

「……サンキュ、シャンメイ」

響揮は壁を蹴って遙香のほうに飛んだ。彼女の肩に手をかけて体を止め、口からテープをはがしてやる。

「ごめん遙香、こんなことに巻きこんで」

「響揮、あたしはいいから逃げて！ あの人、響揮を殺すつもりよ！ あたし」

響揮はぎゅっと、遙香を抱きしめた。シャンプーのかすかな花の香り。三つ編みからほつれた遊び髪に頬をくすぐられる。

「大丈夫、俺は死んだりしない」

遙香の目から涙があふれだした。涙は透明な粒になって空中を漂い、水晶のようにきらきら光った。

「約束して、響揮。すぐまた会えるって」

「約束する。だから泣くなよ」

その約束の実現になんの根拠もないことは、ふたりともわかっていた。船の周囲は真空の闇、故郷の惑星はるか三十八万五千キロの彼方なのだ。

「……やっぱりいや！ あたしも一緒に行く！ 連れてって、響揮」

「だめだ、遙香」

静かな、だが強い拒否の口調で響揮は言った。遙香の肩をつかんで体から離し、すぐるようにつめる遙香に穏やかな微笑を向ける。「俺、遙香に謝らなきゃならない。いままではつきり言わなかったことを」

少なくとも、ディアナがルナレイクのほとりで語った言葉は真実だった。

「遙香が好きだ。誰よりも、遙香がいちばん大切だ」

「……あたしもよ、響揮。謝らなきゃならないのはあたしのほう」

潤んだ瞳を後悔の色が満たす。

「今日やつと気がついた。響揮が好き。ずっと前から……いつからかおぼえてないくらい昔から、誰よりも響揮が大切だった。真夏にも渚沙にも、ほかの誰にも渡したくない。響揮にはあたしだけを見ていてほしい」

涙の粒がまた遙香の目からあふれだし、きらきらとキャビンを漂っていく。

きれいだなと、響揮はつかのまその行方を見送った。遙香に目を戻し、ためらいがちに訊く。

「……キスしていい？」

遙香はかすかにうなずき、そっと目を閉じた。

わずかに震える唇に、響揮はかすめるようなキスをした。そして遙香の肩を強く押し、離れながら体をひねって彼女に背を向けた。

「響揮！ 響揮！」

背中から遙香の声が追いかけてくる。響揮はディアナとシャンメイに両脇をとらえられ、キャビンから連れ出された。ソファにつながれたままの遙香には、追いかけることはできない。響揮は振り返らなかった。

「待つて！ 響揮！」

キャビンのドアが背後で閉まる。遙香の悲痛な声の残響だけが薄暗い通路の壁にかすかにこだまし、響揮の胸の奥を震わせた。

響揮は隣のディアナに訊く。

「約束だ、遙香は無事に返してくれるね？」

「そんな約束はしていないわ。あなたの出方によると言ったのよ」

哀れむようにディアナが眉をひそめてみせる。

「なんだって？ 知ってることは全部話しただろ！ 遙香は関係ない、殺すのは俺だけで十分なはずだ！」

「なにか誤解してるみたいね。十分かどうか決めるのはわたしなの」  
ディアナは通路に面したドアのひとつで体を止めた。まとめた髪からほつれた金色の筋が頬にかかるのを、うるさそうに払いのける。

「ルナレイクできみに言ったことは忘れて。あのときのわたしはどうかしてた。他人の恋を応援するなんて柄じゃないのよ。ままごとみたいな青い恋なんてなおさら、踏みにじってずたずたに引き裂くのがわたしの流儀だわ」

「……なんだよそれ」

響揮には理解できなかった。つまり、ディアナは俺をそこまで憎んでいるということか？ 関係のない遙香まで殺そうと思うほどに？

ディアナが通路に面した部屋のドアを開け、響揮の腕を乱暴に引いてなかに押しこむ。

「もうひとりお別れを言わせてあげる」

視界に飛びこんできた光景に、響揮は目を見開いた。

「兄貴……！」

狭い部屋の奥のベッドに、天音がベルトで固定されていた。響揮は急いでそばに行き、血の気のない頬に手を当てて呼んだ。

「兄貴、兄貴！ 兄貴！」

体をゆすつたが、意識のないことを示すように頭が大きく揺れるだけだ。

「……仮死催眠か」

「知ってたの？」

「アレックスから聞いた。やっぱりあなたが兄を拉致してたんだな。こんなところまで連れてくるなんて、どういうつもりなんだ？」

憤りのこもった響揮のまなざしを受け止めて、ディアナは平坦な声で返した。

「覚醒のキーワードを知ってる？」

「……いや。残念だけど」

「ブローディは？」

「知らないと言ってた」

ディアナはいらだったようにため息をつき、肩をすくめた。

「仕方ないわね、このまま自然に死ぬのを待つわ。あと数日は持つかしら。ひとりじゃ寂しいでしょうから、お隣の女の子も一緒に逝



かせてあげる」

「なんだって？ 待てよ」

聞く耳を持たず、ディアナは冷たく遮った。

「さあ、お別れは済んだ？ キスはしなくていいの？」

ディアナにつかみかかりたくなるのを、響揮は必死にこらえた。

そんなことをすればまた拘束されて体の自由を奪われる。つまり脱出の可能性が低くなる。

ディアナはふたりをすぐ殺すとは言っていない。まだ救うチャンスはあるのだ。そのために、自分はなんとしても生き延びなければならない。

怒りが急速に引いていき、代わりに研ぎすまされたナイフのように頭が冴えわたるのを感じた。そう、病院のコンピューターでピエロを撃ち殺し、兄のメッセージを知ったときのように。

ディアナは信じたようだったが、さっき響揮が話したことの半分は大嘘だった。ペンダントにはどんな微小な文字もいっさい隠されてはいないのだ。

天音はすべての情報をピエロに託していた。内容は、ディアナが企んでいるルナホープでの大統領暗殺計画について。狙撃手の警官の名前と、事前に爆弾テロがあること。監視されているため自分はこの情報をアレックスに直接伝えられない、だからおまえに頼むと書かれていた。

情報は正しかった。響揮がすぐ暗号に気づいていれば、事件を未然に防ぐことができたのだ。

しかし、そうはならなかった。

俺が兄貴に嫉妬してたせいだ。響揮はきつく目を閉じた。天音のメッセージの最後の部分が、兄の声で耳の奥に再生される。

『こんな厄介なことに巻き込んですまない。だが、信じられるのはおまえだけなんだ。許してほしい。ルナホープ行きはキャンセルしてくれ。月はいま、あまりにも危険すぎる。僕に万一のことがあったら、響揮、父さんと母さんを頼む』

そのメッセージを読み終えたとき、響揮は正直、呆然とした。結果的にディアナの計画を阻止はできたが、命をかけた兄の努力を無にしたのはたしかだったからだ。

それでも、メッセージの本当の内容をディアナに知られないうちは、時間稼ぎに使える。だからディアナにあんな嘘をついたのだった。

響揮はゆっくりと目を開けた。

「兄貴……ごめん」

兄の信頼を裏切る結果になったのが悔しくてたまらない。けれど、まだ挽回のチャンスはある。そう信じたかった。

必ず助けるから。待ってて。

響揮は心のなかで語りかけた。そのとき、天音のまぶたがかすかに動いたように見えた。錯覚だろうか？

「もういいでしょう」

ぐいとディアナに腕を引かれ、響揮は彼女を見あげた。ディアナの顔は無表情で、目にはいらだちがほの見える。

「俺を……どうやって殺すつもり？」

ディアナの後ろにいるシャンメイにも聞こえるように、響揮は心細げな声で訊いた。シャンメイが自分に同情のようなものを抱いているのを感じていた。年齢より幼く見える外見のせいかもしれない。ディアナはおもしろがるように眉を上げた。

「選んでもいいわよ。毒？ それとも銃？ あとは太陽に向かって放ってあげるから、いずれ一千万度のプラズマに焼かれて原子以下の粒子に戻るわ」

ちよつと考えて、響揮は「銃」と答えた。狙撃犯の警官、サンダースのような死に方はごめんだった。

背中を押されてドアへと漂うあいだ、響揮は名残惜しげに天音を振り返った。うつむき、肩を落としてドアをくぐる。そうすると自分がいっそう幼く、頼りなげに見えるとわかっていた。

背後でドアが閉まった。

「あとはまかせるわ」

さすがにディアナも気がとがめるのか、そうシャンメイに言う  
と振り返りもせずキャビンに行ってしまった。

シャンメイはためらうように数秒その場にとどまってから、響揮  
の腕をとって通路を貨物室へ進んだ。

こうして間近で観察すると、シャンメイは女性ながら筋肉質で、  
無駄な脂肪がいつさいついていないのがわかる。身長も百七十セン  
チ以上あるだろう。自身も柔道をたしなむ響揮は、シャンメイがな  
にがしかの実践的な格闘技を身につけているのを察していた。機敏  
な身のこなしに加えて、彼女からは常時、隙のなさを感じるからだ。  
自分が正面から挑んでも勝ち目はないだろう。体格で劣るうえ、  
与圧スーツを着ている状態ではとても無理だ。

シャンメイは貨物室のドアを抜け、コンテナに背を押しつけるよ  
うに響揮の体を置いた。背中に手を回し、スパッツのウエストに差  
していた小型の銃を抜く。形状からはショットパルス銃のように見  
えるが、殺傷力の強いタイプなのだろう。

「両手をあげて、頭の後ろで組んで」

速まる鼓動をなだめながら、響揮はゆっくりと指示に従った。わ  
ずかに加速のGを感じるのは、ディアナがさっきの言葉どおり、船  
を太陽に向けて加速しているからだろう。

「シャンメイ」

「……なに？」

「きみの名前って、漢字でどう書くの？」

「シャンメイの切れ長の目にとまどいが浮かぶ。」

「なぜそんなことを？」

「ただ知りたいだけ。こんなふうに会ったんじゃないければ、友達に  
なれたかもしれないと思って。日本人は名前の漢字の意味にこだわ  
るんだ。中国の人もだろ？」

「……香、梅」

「ああ、女の子らしいきれいな名前だね。俺は」

シャンメイはさつと銃を構えた。照準の赤い可視光ポイントが響揮の額の中央をぴたりと狙う。

「言わなくていい。わたしはミス・ディアナの命令を実行するだけよ」

「……いまキャビンにいる子　俺の好きな女の子の名前にも、香って漢字が入ってるんだ。これもなにかの縁かな」

一瞬、銃口が揺れた。ぽつりとシャンメイがつぶやく。

「シャンファイ」

「え？」

「あなたの名前。？響、揮？。中国語ならそう読むのよ」

響揮は苦笑した。

「知ってたのか。まあ当然だな。ディアナは俺のことかなり調べてたみたいだし。シャンファイ？　なんか不思議な感じだ」

「……響と香は、中国では読み方が同じなのよ。縁、かもしれない」  
シャンメイの腕から力が抜け、銃口が下を向いた。響揮はそっと息をつく。だが、それもつかのま。

「銃は苦手なの。毒ではだめ？」

シャンメイが困ったように少し眉をひそめて訊いた。

響揮は頭の後ろで組んでいた手をほどき、ゆっくりと下ろしたが、シャンメイはとがめなかった。

「人を殺すのは本意じゃなさそうなのに、なぜディアナの命令に従ってるんだ？」

「……お金が必要だから。妹と、病気の弟を養わないとならないの」

「弟さん、病気なのか」

シャンメイは小さくうなずく。

「もう入院して二年になる。名前は？春、帆？と書いてチュンファン。あなたと同じ年よ。でも背はずっと高いわ」

しゃべりすぎたと思ったのか、シャンメイはまたとまどった顔をした。

「どうせ俺はチビだよ」

すねたように響揮が口をとがらせると、「気にしてるのね」と言い、シャンメイはくすつと笑った。それは蕾がほころぶさまに似ていて、ともすると機械人形のようにさえ見えるいつもの無表情からは想像できず、響揮は思わず口にした。

「もったいないな、きみもつと笑えばいいのに」

はつとしたように笑みを消して、シャンメイは響揮を見つめた。そして何秒かのち、響揮に視線を据えたまま、ふたたび銃を構えた。ポイントを今度は響揮の胸に当てる。

「それをかぶって。早く」

コンテナの脇に留められていたヘルメットを目で示す。

シャンメイの意図を察して響揮はためらったが、ポイントを額に当てられて促され、仕方なく従った。ヘルメットをとってかぶり、接続リングをシールして生命維持システムを作動させる。シャンメイが近づいてきて背後のコンテナを示した。

「入って」

スーツのコントロールパネルには、酸素残量が五十五分と表示されている。

コンテナに閉じこめて窒息死させるつもりなのだ。毒殺よりたちが悪いだろ、と響揮は心中で悪態をつく。躊躇していると、シャンメイがじれたように響揮の腕をとろうとした。

彼女の利き手には銃がまだ握られているが、照準は響揮からはずれている。

一瞬の隙。

これ待っていた。

響揮はさつと手を伸ばしてシャンメイの上腕と襟をつかんだ。コンテナに押しつけた背中を支点にして巴投げをかける。シャンメイの体が宙を飛ぶ。同時に響揮はコンテナを思い切り蹴って、開いていたドアから通路に飛びだした。

残念ながら無重力状態では、得意の投げ技でも有効ポイントはとれない。シャンメイはくると体を回転させて貨物室の奥の壁にタ

ンと足をつき、反動を利用してドアに向かってくる。

「シャンファイ！」

怒りのまじったシャンメイの声を、響揮は勢いよくドアを閉めて断ち切った。通路を横切って壁のボタンを押し、ドッキング用エアロックの内扉を開ける。

天井には緊急脱出ポッドがあるが、使うことはできなかった。ポッドが射出されると自動的に船から管制センターに救難信号が送信され、脱出したことが公になってしまうからだ。

響揮は扉が開き切らないうちに体を横にしてエアロックにすべりこみ、扉を閉めて減圧ボタンを押した。

エアロックのコントロールパネルにイエローランプが点滅し、減圧中を知らせるのを確認しながら、響揮は横手の壁にある収納庫の赤い扉に手をかけた。

ドッキング用エアロックは緊急時に宇宙空間でも開放できるよう、内側からも気圧と空調をコントロールできるつくりだ。収納庫から七十二時間使用可能な生命維持システムや、姿勢制御用のハンドジエットスラスタ、救難信号発生装置をとって船外に出れば、救助してもらえる可能性がある。

おそらくそうやって響揮が船外に出たことを、シャンメイはディアナに報告はしないだろう。

エアロック内の減圧が完了して外扉を開けられるようになるまで、ふつつはおよそ三十秒かかる。気圧差があるあいだは、セキユリテイ上、内扉は絶対にかかない。気圧差のある状態で扉を開けると、圧力を均衡に保とうとする力が働き、空気が急激に動いて危険だからだ。エアロック内に人間がいる場合は、外部より内部からの、つまり響揮からの指示が優先されるはずだった。

だが命綱ともなる非常用物資を手にする前に、外扉が突然開いた。手すりをつかもうとした手はむなく宙を切り、響揮の体はエアロック内に残っていた空気とともに虚空に吸いだされた。

## ACT11 ブラックアウト

地上で星がまたたくのは、厚い大気の層を通って光が届くためだ。真空の宇宙では星はまたたかず、強くまっすぐな光がそのまま闇を飾っている。

銀河の腕はくつきりと全天を囲み、刺すような輝きを放つ太陽は、はるか左手に、荒涼として明るい月と、奇跡のように青い海をたたえた地球が前方に見える。

見慣れた星座を探すのは、幾万の星のすべてがはつきりと見える宇宙空間ではなかなか難しい。銀河のほとりにたたずむひととき、赤い恒星、蠍座のアンタレスを見つけて、なんとはなしにほっとする。エンデュミオン号の白い船体は、とうの昔に星々にまぎれてしまった。自分の体は船と同じく時速数千キロで飛んでいるのだが、まるでそんな感じはしない。止まっているのではないかと思えるほどだ。

酸素の残量表示は三十分を切った。もともと簡易生命維持システムは、短時間の作業を行うためのものだ。命綱なしで宇宙を漂流するには向かない。

呼びかけても応えるものはなく、ただ果てしなく落ちていくような感覚だけが続く。底知れぬ寒さに全身が覆われ、頭の芯までゆっくりと凍っていく。

永遠に続く拷問だ。

「……希望がなければ頭がおかしくなるだろうな」

響揮は片腕を軽く振って重心を移し、体を反転させた。

つかまるものがないにもない状態では、方向転換するのにもコツがある。宇宙空間は絶対零度に近いマイナス二百七十度と言われるが、実際は太陽が当たる部分と当たらない部分では、スーツの外温に二百度近い差ができる。生命維持システムを効率よく稼働させるには、

適度にローリングして温度差をならすほうがいい。

生きのびる可能性を高めるために。

響揮はできるだけ呼吸をゆっくりと保ち、リラックスに努めた。精神状態も酸素の消費量を左右する。コンテナのなかで目覚めたときにパニックに陥りかけ、だいぶ酸素を無駄に使ったことが悔やまれた。

「死ぬわけにはいかない。遙香と兄貴のためにも」

自分に言い聞かせる言葉が、むなしくヘルメットに反響する。

凍るような絶望がまた胸に忍びこんでくるのを感じて、響揮は頭を振った。

死の訪れを一秒でも先に延ばす。それがいますべきことだ。

？希望？はある。アレックスだ。

月の周辺宙域には、絶えず多くのデブリクリーナーが巡回している。それらは生体ゴミ、すなわち生命反応のある人間を発見すると、直ちに座標を管制センターに送って救助を要請する。たいていは座標にいちばん近い船が救助に向かう。

病院に残したメモを見れば、必ずアレックスはエンデュミオン号を追ってくるだろう。デブリクリーナーが自分を見つければ、きっとアレックスの船が救助に来てくれる。

スーツの警告音が鳴りだして、AIが『酸素残量はあと二十分です』と無情に告げた。

『酸素パックの交換をしてください』

「あればそうしてるさ。もっと気のきいたこと言えないのか？」

漂流開始からの時間は、一瞬だったようにも、一日だったようにも、あるいは永遠だったようにも思える。

虚空に放り出された直後、響揮はショックで遠のきそうになる意識を必死につかみとめながら敗因を考えた。シャンメイはエアロツクの自動制御システムを上部管理できる特殊コードを知っていたのだろう。機械より人間の判断のほうが上というわけで、無理やり外扉を開ける指令を出したのだ。



その後、響揮はなんとか体の回転を止めて与圧スーツの環境を調整した。通信システムを作動させて外部からのコンタクトに応えられるよう設定し、位置情報発信ビーコンをオンにする。これで多少は見つけてもらいやすくなるはずだった。

それから孤独との闘いだった。

AIの声も警告音も音楽のように聴こえだし、意識がもうろうとしはじめていることを自覚する。ディアナの船で最後に聴いた《惑星組曲》が耳の奥によみがえる。

もう父さんと母さんも地球を発ったはずだ。いまどのあたりにいるんだろう。

両親の顔が頭に浮かぶと、熱いかたまりに胸をふさがれた。さまたいだす意識は地球に還り、家や学校をめぐる。

ひらひらと手を振る渚沙。ジャージ姿で公園を走る木田。部活仲間。クラスメイト。

遙香。兄貴。

『酸素残量はあと十五分です』

AIの声にわれに返り、響揮はゆっくりと左腕をあげてコントロールパネルを見た。酸素残量ゲージで点滅する数字が徐々に減っていく。

俺は……死ぬのか。

自分でも意外なほど冷静だった。真っ暗闇のコンテナのなかで感じたような恐怖はない。もっとも、実際に酸素が切れたときには冷静ではいられないだろう。まだ死ぬという実感がないだけだ。

響揮は深くため息をついた。最後になにを目に映していようかと考える。

重心を移動させ、体の正面をふたたび地球に向けた。あざやかなブルーの海、緑と茶色の大陸に、掃いたような真っ白な雲のコントラストがまぶしい。

響揮はしばし時間も、確実に近づいてくる死の足音も忘れて、ただみとれた。

地球　もう帰れない故郷。

ユーラシア大陸の南、はるか太平洋の沖合に生まれたばかりの台風の渦が見える。インド西部のあたりは雲がなく、パキスタンとの国境に近いタール砂漠は晴天だ。

いまごろ渚沙がラクダの背に揺られて、こちらを見あげて手を振っているかもしれない。そう考えてほえんだところで、響揮ははつとして笑みを消した。

小指に、切ない思いのこもった約束の感触がよみがえった。

『約束して、響揮』

「渚沙……」

渚沙の声に遙香の声が重なる。

『約束して、すぐまた会えるって』

「遙香……！」

そうだ。渚沙を月に連れていく約束を果たさないままにするつもりか？　遙香と二度と会えないまま、こんなところでのたれ死んでいいのか？

渚沙の手紙に書かれていた占いにはなんとあった？　？　ねばり強く頑張れば、運勢は好転します？

「そうだ、あきらめるな響揮！　まだ時間はある。勝負は終わっちゃいない！」

響揮は必死に周囲を見回した。だがなにも見えない。そのとき、スピーカーから突然、与圧スーツのAIとは違う声が聞こえてきた。『こちらはルナエリア・デブリクリーナーP361号です。生体反応を確認しました』

やはり抑揚に乏しいAIの声だ。それでも響揮の耳には女神の声のように響いて、涙が出そうになった。船体は見えないが、デブリクリーナーが近くにいたのだ。

「遅いよ！　どれだけ待ったと　」

安堵のまじった抗議はあっさり無視された。

『このメッセージは自動設定でお送りしています。あなたの現在座

標とベクトル情報は月域管制センターへ送信されました。救助船到着は約十五分後の予定です』

「十五分」

響揮は絶句した。

『酸素残量はあと七分です』と、警告音とともに与圧スーツのAIが告げる。

幼稚園生レベルの、単純な引き算だった。

間に合わない。

頭がフル回転しはじめる。

酸素残量は七分だが、これは普通に呼吸可能な時間の値だ。ゼロになったときにすぐ死ぬわけではない。まだスーツ内には地球上と同じ二十パーセントの酸素が残っている。

酸素濃度が十六パーセント以下になると人体は構造上、酸素を取りこむことができなくなる。つまり自分は、差し引き四パーセントと体内に蓄えた分の酸素で八分持ちこたえなければならぬ。

問題は、低酸素濃度の空気を一度でも吸えば、意思に関係なく反射呼吸が起こることだ。そうなると肺の生理機能上、逆に体内の酸素を吸い出される事態に陥り、人間は瞬時に窒息する。だから酸素濃度が十六パーセントを切ったら、呼吸を意識的に断つ必要があるのだ。

「三分三十八秒」

響揮はつぶやいた。自分の現在の潜水記録だ。

普通の人なら三十秒から一分のところを、響揮は兄が溺れたことをきっかけに、息をこらえる訓練を続けて記録を伸ばしてきた。

「なにが役に立つかわからないもんだな」

反射呼吸によって酸素を奪われることなく、体内の酸素を消費し尽くす。これは人体の生理現象。人間の生存本能への挑戦だった。いままでは限界がくる前に呼吸を再開させたが、今回はそのまま意識喪失。ブラックアウトを目指す。

その後はもう、意思でコントロールはできない。自分の体は酸素

を求めてむなしく反射呼吸を繰り返し、まもなく心臓が止まる。

「脳細胞が完全にやられて蘇生不能になるまで、猶予は三分てどこか。三分半の潜水記録をいつきに五分にしろって？ キツイぜ」

わずか九十秒。だがそこに、明確な生と死の境界がある。

響揮は目を閉じ、深く息をついた。ぱつと目を開けてAIに命じる。

「スーツ内の温度を三十度、湿度をリミットまで上げる」

だがAIは命令の実行を拒んだ。当然ではあった。実行するとスーツ内の環境は最悪になる。けれども、結局は機械より人間の判断が優先されるのだ。

響揮は生命維持システムの自動制御を強制解除した。手動で数値を上げ、AIの警告を無視して実行ボタンを押す。

たちまちむつとする湿気に包まれて、自宅の風呂場のイメージが頭に浮かんだ。体がいい具合にゆるんでリラックスする環境だ。

スピーカーからノイズが聞こえ、続いて外部通信の音声が入る。

「こちらUCCI1022。遭難者、聞こえるか？」

待ちこがれていた人の、なつかしい声だった。

「アレックス！」

「……まさかとは思ったが 響揮おまえ、こんなところでいったいなにをしてるんだ！ この大ばかものが……！」

アレックスの声には怒りと、抑え切れない絶望がにじんでいた。

つながった通信回線を通じて、アレックスは響揮のスーツ内環境やバイタルのデータも受け取っているのだ。つまり、間に合わないことをアレックスも知っている。

「きつと来てくれるって信じてたよ、アレックス」

響揮はぐるりと周囲に視線をめぐらす。

「船はまだ見えないけど、もうそばに来てるんだろう？」

「ああ、俺にはおまえが見えてるぞ。すぐつかまえてやる」

「頼むよ。待つあいだに、俺は潜水の自己記録更新に挑戦する。目標は五分だ。俺さ、今週のラッキーカラーは青なんだぜ」

『占いの話なんかしてる場合か!?!』

響揮は苦笑した。

「俺も占いは信じないけど、いまだけは違う。俺を今日、二度助けくれた人の目の色が青だったからね」

スピーカーの向こうの沈黙に、涙がまじるのが感じられた。

『……二度あることは三度ある。そうだな?』

スーツの環境不適を警告するブザーに、『酸素残量ゼロです』というA.I.の声が重なった。

「時間切れだ。アレックス、行ってくるよ」

『……待つてるから。還ってこい、響揮』

その声には信頼と覚悟、そして祈りが満ちていた。

響揮は湿気を含んだあたたかい空気を深く、腹の底まで吸い込む。いつものように三度繰り返し、呼吸を止めた。全身の力を抜き、視線を虚空の彼方に向ける。

いま見ている銀河と星々の光は、何万年も何百万年も、あるいは何億年も昔に発せられたものだ。光はまっすぐに、はるかな時間と空間をわたって響揮のもとに届き、あまたの星座をかたどって尽きない夢を見せる。

その宇宙の営みと比べれば、たかだか数十年しか生きない人間が数分のためにあがいても、なんの意味があるだろう?

それでも、希望があるかぎり人は生にしがみつく。

響揮は目の前の宇宙に蛍光塗料の夜空を重ねた。どんなときも心を落ち着かせてくれる、兄との絆の星図。紙飛行機がすつと横切るとき、自分だけが知っている南十字星が現れる。

もう一度、あの六畳間の小さなプラネタリウムに帰るんだ。遙香と、兄貴と一緒に。

やがて肺が空気を求めて暴れだした。いつもなら水から出るタイミングだ。

大丈夫、俺の体にはまだ酸素が残ってる。最後の一分子まで使うんだ。

自分にそう言い聞かせ、与圧スーツの上から体を抱きしめて、本能の叫びを抑えこむ。

『響揮、あと二分で着くから頑張れ！ 頼むから死ぬな！』  
アレックスの声が遠くに聞こえているが、もう意味はわからない。希望の糸を必死にたぐり、響揮はかすむ視界に船影を探した。

近づいてくる銀色の船を認めたときは、すでに耳の奥が高い金属質のうなりで満たされ、ほかの音はなにも聞こえなくなっていた。全身が燃えるように熱くなり、やがてざらりとした重たいけだるさに手足からのみこまれていく。

どうやらここが限界らしい。

意識を手放す直前、最後に目に映っていたのは地球でも月でもなく、船体の横腹に描かれた星と太陽のマークだった。

響揮はかすかにほほえみ、息をつくことを自分に許した。

\*

\*

間に合わないのはわかっていた。

それでもアレックスは目をそらさなかった。励ましの言葉を送りながら、断末魔の苦悶を受け止めた。

サレムが操る船外マニピュレーターの腕のなかで、オレンジ色の与圧スーツは数秒痙攣して動かなくなった。心拍と血圧の数値がゼロに近づいていく。

『行ってくるよ』

耳の底に、悲壮な決意のにじむ少年の声がよみがえる。

これほど残酷な拷問があるだろうか？ 目の前で命の火が消えていくのを、ただ見ていることしかできないなんて。胸を荒れ狂う焦燥に、全身が焼き尽くされそうだ。

あるいは、これは自分が知らぬ間におかしたなんらかの罪への、神が与えた罰なのだろうか？

「いや、神なんていない。罪を裁くのも、罰を与えるのも人間なん

だ」

棺に横たわる妹の白い顔がまぶたの裏にフラッシュする。  
あのときの自分と同じ思いを、天音に味わわせるわけにはいかな  
い。

「ラッキーカラーだと？ 笑わせやがって。おまえが信じてるのは  
ちんけな占いなんかじゃない。この俺なんだろう？」

あいつが俺を信じるなら、俺もあいつを信じるだけだ。

無言で収容作業に集中するサレムを横目に見て、アレックスはぎ  
りりと奥歯を噛みしめた。

\*

\*

呼ばれたのがわかった。何度も、何度も。

待ちこがれていた人の、なつかしい声。

闇の中、冷たく閉ざされていた心の門の鍵がはずされ、扉がきし  
みをあげてゆつくりと開いていく。

光が見えた。太陽のない極地の冬をいろどるオーロラのように、  
虹色の光がゆらめきながらときどき強く輝く。やがて虹に闇が払わ  
れて、象牙色の夜明けが訪れた。

心臓が、ためらいながらもふたたび力強く鼓動をはじめた。血液  
がしだいにあたたまって全身をめぐる。指先と爪先にしびれるよう  
な感覚が走り、自分の体が少しずつ目覚めていくのがわかる。

けれども、まぶたが重くて持ちあがらない。

ため息をもらす唇に、しっとりとしたあたたかな唇が重ねられた。  
濃く甘い香りに疲労した体が反応し、飢えたようにその唇をむさば  
った。より深く求めてしまうのを止められない。

やがて満足げな吐息とともに、蜜をまとった唇が離れていくのを  
感じた。惜しむように追いかけようとすると、ひんやりした指先が  
唇に押しあてられた。

「もう少しじっとしていたほうがいいわ。覚醒したばかりで体力が

落ちているから」

そのやわらかな声には、聞き覚えがあった。

懸命に努力して、天音は半分ほどまぶたを開けた。ぼんやりとしていた視界がしだいにはつきりして、翡翠のようにとろりと潤む緑色の瞳が見えた。まなざしに安堵の色を認めて、天音は意外に思う。彼女とは敵同士だったはずだ。

「……ディアナ」

「おかえりなさい、天音」

天音はゆっくりと頭をめぐらせ、周囲を見回した。見覚えのない狭い部屋。天井と壁との境はなく、ゆるい曲線でつながっている。小さな窓を覆うように迫って見える丸い天体は明るい灰色で、表面にクレーターが穿たれている。

月だ。

なにより体の重さを感じないところから、飛行中の宇宙船のなからしいと天音は察した。ディアナがプライベートシップを所有しているのは知っていた。

ようやく脳もはつきりと目覚め、思考が回りはじめる。

僕はいつたい何日眠っていたんだ？　ディアナの計画は阻止できたのか？

上体を起こそうとして、胸と上腕にベルトがきつく巻かれ、体がベッドに固定されているのに気づいた。両手足は手錠で拘束されている。思わずかっとして拘束を解こうともがいたが、強化プラスチックの手錠が締まって皮膚に食いこむだけだった。

いらだちの息を吐き、ディアナをにらむ。

「……ルナホープはどうなったんだ？　大統領は？」

ディアナの瞳の色が冷たくなった。

「そんなことより自分の身を心配すべきじゃないの？　あるいは弟の身とか」

「弟の？　なぜ」

「どうして仮死催眠が解けたと思うの？　あなたが覚醒のキーワー



ドを弟に預けていたからでしょう」

「弟が……響揮がここにいるのか？」

「もういないわ」

「なんだって……？」

混乱した頭で、天音は懸命に考えた。たしかに覚醒は響揮に託した。だがディアナの船に響揮が来る状況などありえない……はずだ。

「まさか……拉致してきたのか？ 弟をどこへやったんだ？」

青ざめ、狼狽をあらわにした天音に、ディアナは苦い笑みを向けた。

「きょうだいもいろいろよね。弟はあなたによく似ていた。顔立ちだけじゃなく、賢くて生意気なところも。かわいい子だったわ、とっても。さすがにわたしもためらいを感じた。でもやっぱり許しておけなくて」

「弟を……殺したのか」

凍るような恐怖に胸をつかまれ、天音の唇は震えた。

「わたしは死神だもの。邪魔をする人間は容赦しないわ」

突然、視界が真っ暗になる。

響揮が死んだ 殺された。大切な弟が。僕のせいで。

信じられない。信じたくない。

「なぜだ？ なぜ響揮を……！ あいつは僕の指示どおりに動いただけだ。なんの関係もないんだ！ 頼むディアナ、嘘だと言ってくれ！」

「せつかくあなたがプライドを捨てて頼み事をしてくれたのに、応えてあげられないのが残念」

「……あいつはまだたった十五なんだ。殺したなんて、たちの悪い冗談なんだろう？ 頼むから響揮には 弟にだけは手を出さないでくれ」

ついとディアナが手を伸ばし、天音の目からあふれた涙を指で払った。涙の粒が空中を漂っていく。ディアナはかすかに目を伏せ、緑の瞳にまつげの影が落ちた。

「どんなに頼んでももう遅いわ」

かたく握りしめられた天音の手に、自分の手を重ねようとして寸前で止める。そして一瞬のためらいのちに手を引つこめ、唇をきゅつと結んだ。

「せいぜい自分を責めるといい。あなたが仮死催眠なんか使ったのがいけないのよ」

天音は反応せず、ただぼんやりと天井に目をさまよわせていた。こんなはずじゃなかった。いったいどこで間違ったのだろうか？

できるなら時間を巻き戻したかった。自宅のオペレーション室で自白剤を打たれたあのときに。響揮を失う結果になるとわかっていたら、仮死催眠など使わずにすべてを話していた。月都市の未来も大統領の命も、天音にとって弟の笑顔以上の価値はなかった。

そもそも、弟に頼るべきではなかったのだ。遠い日本にいて、まだ中学生の弟にならディアナの目も届かないなどという考えが甘すぎた。

だが、過去は変えられない。

まだありがとうも言っていないのに。ごめん、もおまえにはもう届かないのか。

全部、僕が悪いんだ。

天音はうつろなまなざしをディアナに向けた。

「もう僕に用はないだろう？ 早く殺してくれないか。響揮と同じやり方で。必要ならいくらでもひざまずいて頼むよ。結局、僕のプライドになんか塵ほどの価値もないんだ」

ディアナはぐつと顎を引いた。

「いいえ。もう少しつきあってもらうわ。最後の花火を見届けるまで」

「……最後の花火」

天音は平坦な声で繰り返す。

「あなたもそこまでは気づかなかったみたいね。このフライトはその花火を見るためのものなの。あなたにも響揮にも、もう邪魔はさ

せないわ」

\*

\*

名前を呼ばれたような気がして、遙香は目を開けた。明るい色の壁には丸い小さな窓があり、外には宇宙と、カーブを描く灰色の月面が見える。

「遊覧飛行……いつのまにか眠っちゃったのね」

あこがれのセレブ、ディアナ・フロレスからプライベートシップに招待されて、遙香は胸を躍らせて船に乗った。でも今日ははじめての月面とルナホープ・シティの観光で疲れていて、船が宇宙港を離れる前にキャビンで眠ってしまったのだった。

この部屋はゲストルームらしく、広くはない空間に体を固定できるベッドとユーティリティコーナーが設けられている。おそらくシヤンメイと呼ばれていた中国系の美しい付き人の少女が、自分をここに運んでベッドで休ませてくれたのだろう。

壁の時計を見ると、もう午前零時だった。

「うわ、こんな時間。きつと響揮が心配してるよ……」

響揮。

その名前を思い浮かべた瞬間、頭がずきんと痛んで、遙香は片手を額に当てた。

「響揮が心配してる……響揮はどこ？ ああ、そうだ。ホテルで喧嘩して、あたしだけこの船に乗ったんだっけ……」

そのとき、ジャケットの胸を朱に染めた響揮の姿が脳裏にフラッシュした。

「なに、いまの……」

急に心臓がどきどきしはじめる。不安に襲われて、遙香はストライプをはずしてベッドを離れ、ドアに向かった。マイティフォンをホテルに忘れてきたのを悔やみながら、たぶんキャビンに行けばホテルと連絡をとってもらえるだろうと考える。

薄暗い通路に出て、突き当たりのドアを目指した。センサーに触れるとさっとドアが開く。なかはまぶしいほど明るい。内装の壁は白がメインでところどころに金色が使われている。宇宙船のなかとは思えない贅沢なつくりだ。

正面の左手には、主に大気圏を行き来するときに使う八人分のリクライニングシートが据えられている。右手はリビングスペースで、奥に三人掛けの革張りのソファ、ガラステーブルの対角の窓際にラブシート。無重力でも浮きあがらないよう、家具はどれも床に固定されている。

遙香が来たのに気づいたのか、正面奥のコクピットのドアが開き、付き人の少女が顔を出した。

「あの、ごめんなさい、すっかり眠ってしまつて。シャンメイ、だったわよね。そう呼んでもかまわない？」

遙香がにつこり笑いかけると、シャンメイは一瞬とまどつた顔をしてから、ぎこちない笑みを浮かべた。

「ええ。喉は乾いていない？ なにか飲む？」

「あ、じゃあコーヒーを。あたしのことは遙香って呼んで」

「……座っていて、遙香」

シャンメイがソファを示す。なぜか座りたくなくて、遙香はためらつた。

「見ていてもいい？ こんなすてきな船、はじめてだからなにもかも珍しくつて」

そばに寄つていくと、シャンメイは困つたようにかすかに眉をひそめた。フードウォーマーからコーヒーのパックを取り出し、遙香に手渡す。

遙香はその場で封を切り、口をつけた。

「うん、すごくおいしい。もう少し熱いと最高だけど、味はセレブ御用達だね」

シャンメイはかすかにほほえんだ。人形のような無機質さがやわらぎ、親しみがのぞく。

「ミス・ディアナはなんでも特別なものが好きなの」

「わかるよ。この船も、それにあなたも特別なもの」

「わたしが……特別？」

「うん。すごくきれいだし、スタイルいいし、身のこなしがこう……うまく言えないけど、キレがある感じ？ とにかくかつこいい」

「あ……ありがとう」

シャンメイが頬を染め、照れたようにほえんだので、遙香もにっこりした。

「笑うといちだんと美人だね」

「美人？ わたしが？」

遙香は大きくうなずく。

「誰が見たってそう思うんじゃないかな。きつと響揮も」

また一瞬、今度はオレンジ色の与圧スーツを着た響揮の後ろ姿のイメージが脳裏をよぎった。遙香は言葉を切り、顔をしかめる。これはいつたいたんだろう？

「響揮……」

シャンメイの顔にさつと緊張が走り、たちまち無表情な人形の顔に戻る。

「ああ……友達。月にも一緒に来たの。ちょっといま喧嘩してて……マイティフォン忘れてきちゃって連絡つかないし、どうしてるかなって少し心配」

「そう」

シャンメイの反応はそつけない。

「あの、ミス・ディアナはどこにいるの？ 招待してもらったのはうれしかったけど、あたしそろそろ帰らないと。友達もたぶん心配してると思うし」

「ミス・ディアナはいま手が離せないの。遊覧飛行はミス・ディアナがご自分でパイロットをするから、ルナホープに帰るのはもうしばらくあとになるわ」

「そっか……。じゃあホテルに連絡してもらえない？」

「ええ」

遙香は飲み終えたコーヒーマグのパックをダストシュートに放りこみ、スクリーンを起動するシャンメイに近づいた。

「シャンメイってきれいな名前よね。どういう漢字書くの？」

後ろからなにげなく訊くと、シャンメイが明らかにぎくりとして振り返った。

「どうしてそんなことを？」

おかしい質問だっただろうか、遙香はうつろたえる。

「……ただなんとなくだけど。日本人の名前は漢字の意味にこだわってつけるから。中国の人もそうでしょ？」

ためらってから、シャンメイは答えた。

「……香、梅」

「かわいい名前だね。ふんわりいいにおいがしてきそう。香って字、あたしの名前にもあるよ、すごい偶然じゃない？ 遙香って中国語でどう読むの？」

「ヤオシャン」

「ヤオシャン？ なんか不思議な感じ」

遙香がくすくす笑うと、シャンメイはなぜか泣きそうな顔になった。

「……どうして同じことを言うの？」

「同じこと？」

シャンメイは答えず、つと壁を蹴ってドアに向かった。そのまま通路に出ていく。

「あの、シャンメイ、ホテルに連絡は……」

ドアが閉まり、シャンメイの後ろ姿が見えなくなる。

その瞬間、また遙香の脳裏に響揮のイメージがフラッシュした。両脇をディアナとシャンメイにかかえられて、オレンジ色の与圧スーツの背中が遠ざかる。響揮は振り返らないまま、キャビンの白いドアの向こうに消える。

待って、とあのとき自分は叫んだ。

……あのときっていつ？

猛烈な頭痛に襲われて、遙香は頭をかかえた。

なんだろう。なにか大切なことを忘れている気がする。

とても大切なことを。

\*

\*

弛緩した体を覆う衣類を鉄で乱暴に切り裂きながら、アレックスは神を呪う言葉を吐き散らした。収容した少年はすでに心停止状態で、閉じきらないまぶたのすきまからのぞく目に光はない。

職業柄、死体は見慣れていた。それでも、これが死体だとは認めたくなかった。

「このばかものが！ 還ってこい響揮！ このまま死んだら一生恨んでやるぞ！」

罵りながら、少年の薄く開かれた唇を押し開き、喉に管を通して気道を確保する。呼吸補助マスクをつけて酸素を送りこみ、はだけた胸に電極を当てる。

サレムは少年の胸の中央を強く押し、心臓マッサージを施している。

「チャージ……離れろ！」

アレックスはサレムに促し、電気ショックをかけた。小柄な体がびくりと跳ねたが、心拍は戻らない。

「交代しろ、俺がやる！」

アレックスは力まかせにサレムを押しつけ、自らの手で心臓マッサージを再開した。重ねた両手のてのひらで胸を思い切り圧迫すると、華奢な肋骨がきしみをあげる。一方でサレムが少年の静脈からエピネフリンを追加投薬する。これで蘇生が促されるはずだが、パトシップに通常積んである心肺蘇生キットでは治療にも限界があった。

歯がゆいが、ERのある病院まではどんなに急いでも二時間はか

かる。ここでもなんとかするしかないのだ。

力いっぱい少年の胸を押しながら、アレックスは天井をにらんだ。  
「おい！　そこにいるのかよ、神さまって奴は！　いるんなら奇跡を見せてみる！　こそこそ隠れてねえで存在を証明しやがれ！」

見かねたように、サレムがアレックスの肩をつかんだ。

「落ち着いてください、主任！　そんなに乱暴にしたら肋骨が全部折れてしまいます！」

「おまえはなんでそんなに落ち着いてられるんだ」

「主任が泣いてるからです。チャージ……離れて」

電気ショックをかけ、モニターを見る。心拍の値は動かない。

「もう一度。主任、奇跡は願っているだけじゃ起きないんですよ。奇跡を起こそうと努力する者にだけ、神がほんの少し手を貸してくれるんです」

サレムの目には揺るぎない信仰の光が宿っている。

アレックスは制服の袖で目をぬぐい、すぐるように訊いた。

「だったらこいつには奇跡が起きる。そうだろう？」

潜水の自己記録更新に挑戦すると、響揮は言った。目標は五分の  
はずだったが、意識を喪失して反射呼吸が起きたのは七分二十秒後  
だった。そのあいだ心拍は通常の半分以下にまで落ち、無呼吸で深  
海に潜るベテランのフリーダイバー並みに自律神経系をコントロール  
していた。

アレックスはコクピットの後部に治療スペースを確保し、心肺蘇  
生キットを準備して待機していた。少年を船に収容してから時間の  
ロスは一秒もないと断言できる。

サレムが確信を持つてうなずいた。

「その資格は十分でしょ。あとは僕らがおかえりって言うてやるだけ  
です。チャージ……離れて！」



## ACT12 逆転の星図

割れるように痛む頭をかかえて、遙香は体を丸めた。固定していない体が宙を漂い、キャビンの壁に背中が当たる。とっさに伸ばした手が手すりに触れ、遙香はそれをつかんで壁に背中を押しつけた。

「響揮……待って、響揮」

すぐるように繰り返し返すと、今度は胸がずきんと痛んで、遙香はあいている手をぎゅっと胸に押しつける。Ｔシャツの生地越しにペントがてのひらに当たる。耳の奥でどくどくと血流が鳴る音を聞きながら、チエーンを胸元から引きだし、ふわりと宙に浮く銀色のヘッドを見つめた。

三日月がぐるりと回転してきらめき、ムーンストーンのなかで淡い炎が揺れる。裏には響揮が刻んだ文字がある。？ T O H A R U K A ? 遙香へ。

その瞬間。遙香の頭の奥でまぶしい光がはじけた。

『俺、遙香に謝らなきゃならない。いままではつきり言わなかったことを』

ああ、そうだ。忘れちゃいけないことがあったんだ。

『遙香が好きだ。誰よりも、遙香がいちばん大切だ』

唇に、わずかに響揮が残した感触。

ファーストキス。

レモンの味でもバニラの味でもなく、ひんやりしていてかすかに涙の味がした。響揮の唇が触れたところから、しびれるような熱いうずきが広がっていった。

「響揮……！」

遙香は両手でペントを胸に抱きしめ、祈るように呼んだ。

ふいに頭痛が消えた。あたりはしんと静かで、空調のうなりさえ聞こえない。

遙香は体が宙を漂うにまかせ、明るいキャビンにぼんやりと目を泳がせた。

約束を、思い出した。

いとおしむようにそっと、指先を唇に当てる。

『泣くなよ』

響揮の声が聞こえた。

もう泣かないよ。遙香は胸のなかで答え、目を閉じた。

すべてが鮮明に思い出せた。

響揮がキャビンを出てしばらくしてから、ディアナは戻ってきた。数時間の記憶を消して新しい記憶と入れ替えると言われ、遙香は薬を打たれた。

『忘れたほうがいい記憶もあるのよ』

ディアナがつぶやいた。

『目が覚めるまで、お休みなさい』

そして頭がたちまち真っ白になった。

でも遙香は、どんな小さなことも、ひとかけらだって忘れなかった。だから懸命に抵抗した。唇に残ったかすかなうずきを、手がかりとして記憶に刻みつけたのだ。

遙香は目を開ける。見えているのはキャビンのドアだ。

約束したんだから、響揮は死んだりしない。遙香はそう自分に言い聞かせ、いま自分になにができるかを考えた。

まずは、記憶が戻ったことをディアナにもシャンメイにも悟られないこと。それから天音の様子をたしかめ、一緒に逃げられるかどうか検討すること。

ペンダントを服の下に戻し、通路へ出るドアに近づいたところで、さっとドアが開いてシャンメイと鉢合わせした。遙香はぎこちなくほほえんでみせる。

「あの……ちよつと疲れちゃって。ルナホープに戻るまで時間があるなら、ベッドで休ませてもらってもかまわない？」

「ええ、もちろん」

シャンメイは遙香と目を合わせずに答え、「こつちよ」と言つて通路を漂つていく。遙香は天音がいた部屋のドアを横目でたしかめながら通りすぎ、案内されたゲストルームに入った。シャンメイがキャビンに戻るのを見計らい、そつと部屋を出る。通路の天井を見あげて、四枚並んでいるオレンジ色のハッチを確認する。逃げるなら、この緊急脱出ポッドを使うのが確実だろう。

問題は天音だ。死んではないないとディアナは言っていたが、天音がただ眠っているだけではないのは遙香にもわかった。意識がないとすれば、一緒に逃げるのはなかなか難しくなりそうだ。

でも、天音さんを助けられるのはあたししかない。響揮が爆弾をシエルターに運んだように。危険を知っていてこの船に来たように。できることをしなければ。

遙香はＴシャツの生地の上からペンダントを押さえた。

あたしに勇気をちょうだい、響揮。

ごくりと唾をのみこんで、遙香は壁の手すりを握り、前方に体を押し出した。そのとき、天音がいた部屋のドアが開き、ディアナが漂い出てきた。

「ミス・ディアナ」

あわてて遙香は壁の手すりをつかみ、体を止める。ディアナの背後でドアが閉まり、なかの様子は見えなくなった。天音がいるのかどうかもわからず、遙香はじりじりする。

「目が覚めたのね。気分はどう？」

「ええ、大丈夫。ちよつと疲れていたみたいで、眠ってしまったてごめんなさい」

「気にしないで。もうしばらくしたらルナホープに戻るわ。遅くなつて悪いけれど、少し待っていてね」

につこりとほほえむディアナは美しく、神々しくさえある。遙香は一瞬、自分はなにか勘違いをしているのではないかと疑った。

こんなに美しくて頭がよくて裕福な人が、恐ろしいテロや殺人などたくらむだろうか？ あたしはおかしな夢を見ていただけで、ホ

テルに帰れば響揮が待っているのかもしれない。天音さんもいまごろは地球で、いつものように働いているのかも。

響揮に電話をして確かめてみればいいんだ。でもさっき電話したときは通じなかった。……あれ？ さっきっていつ？ マイティフオンを忘れてきたんだから、電話なんてできるはずなのに……。

記憶が混乱してきて、激しい頭痛に見舞われた。遙香が無意識に頭を手で押さえると、ディアナがそばに来てやさしく肩を抱いた。

「もう少し休んだほうがいいわ」

「……ええ」

「ホテルにはさっき連絡しておいたから、心配しないで」

「響揮は」

オレンジ色の与圧スーツのイメージが頭をかすめ、遙香は息をのむ。

「先に寝ているって言うていたわ。わたしはもう数日ルナホープに滞在する予定だから、今度はふたりで遊びにいらしゃい。ね？」

「……ありがとうございます」

忘れちゃいけないと、遙香は呪文のように心のなかでつぶやき、そつと唇に指を当てた。ディアナに導かれるまま、ゲストルームに戻る。

焦らず、機会を待つしかなかった。なんとかディアナとシャンメイの目を盗んで天音を連れだし、通路の天井のオレンジ色のハッチに飛びこむのだ。レバーを引けばポッドが射出され、救助要請信号が管制センターに送られる。

響揮もきつとどこかの船に救助されて、ルナホープに戻っている。約束したんだから。またすぐに会えるって。

「長い一日よね、わたしも少し疲れたわ」

ディアナはコーティリティコーナーの冷蔵庫を開けてミネラルウォーターのパックをとり、遙香のほうを見た。

「あなたも飲む？」

「ああ、はい、いただきます」

「水でいい？ ジュースもあるわよ。オレンジにアップル」  
「水を」

もうひとつ冷蔵庫からパックをとって遙香に渡し、ディアナは封を切ってひと口飲んだ。

なにか薬が入られているということもなさそうだと考え、遙香も口をつける。唇に吸い口が当たると思いがけずうずきがよみがえってきて、彼女ははつとして口を離し、とっさに指を当てた。

ディアナがぼつりと言った。

「……思い出したのね」

「え？」

「さつきも唇に指を当てていたわ」

どう答えればいい？ 狼狽を隠して黙り込んでいる遙香に、ディアナはほほえむ。

「記憶操作は薬だけでするんじゃないのよ、遙香。？目が覚めるまで、お休みなさい？」

瞬間、頭が真っ白になり、遙香は心のなかで悲鳴をあげた。

だめよ、やめて！ あたしの記憶を盗らないで！ 大事な思い出を奪わないで！

「何度記憶操作をしても、結局あなたは最後のキスを思い出してしまうのかもしれないわね。そんなにあの子が好きだったの？ ばかね、もっと早くその気持ちに気づいていれば……わたしもあの子を殺さずにすんだかもしれないのに」

もう泣かないと決めたはずなのに、遙香は涙があふれてくるのを止められなかった。

だったら涙を記憶の手がかりにすればいい。すぐるものはなんだったかまわらない。あたしは忘れない。どんな小さなことも。ひとかけらだって。

忘れ、ない。

\*

\*

「……ラッキーカラーだ」

意識をとり戻して真っ先に視界に入ってきた青い瞳に、響揮はかすれた声で告げた。

「アレックス、ただいま」

「このばかりが！ 宇宙遊泳するときには命綱をつける！ 運を天にまかせるなんて愚か者のすることだと何度言ったら」

「一度も言われてないって。それに大声出さないでよ、頭に響く」

「口答えするのか？ 十年早い！」

アレックスの目は真っ赤に充血し、目尻に涙の跡が残っている。怒った口調とは反対に、目には深い安堵と感謝の色があった。

「……ごめん」

響揮はため息をついて半分目を閉じ、口にあてられたマスクから流れてくる酸素を味わう。酸素がこんなに甘いものだったとは、いままで知らなかった。

「まったくおまえは……」

アレックスはくしゃつと響揮の髪をかきまぜた。

「よく還ってきた、褒めてやる。正直、もうだめだとあきらめかけたがね。柄にもなく奇跡を祈ってしまったよ」

「主任のあれは祈りじゃなく脅迫でしょ」

副操縦席からサレムが、シートの背もたれ越しに言うてにやりとした。

アレックスは首を振った。

「結局はおまえの生きたいって執念が勝ったってことだ。しかし命綱なしで宇宙遊泳する前に、ちょっとは結果を考えろよ。俺がどれだけ」

言葉を詰まらせ、顔をそらす。

自分が苦悶しながら死へ向かっていくさまを、アレックスはただ見守るしかなかったのだと、そのときはじめて響揮は気づいた。それがどれほど残酷なことだったか。

「ごめん。でも仕方なかったんだ。遙香と兄貴を助けるためには」  
「天音もエンデュミオン号にいたのか？ ガールフレンドは無事か？」

響揮は酸素マスクをはずして体を起こそうとした。それをアレックスが止める。

「おい、無理するな。おまえ一度死んでるんだぞ？ 本来なら集中治療室で完全看護されてなきゃいけないんだ」

「平気だ、のんきに寝てなんかいられないよ。遙香は無事だけど、兄貴は仮死催眠に入っていた」

「やっぱりか。だがディアナはまだ天音を手にかけてないんだな。つてことは……」

考えこむ表情になり、アレックスは顎を撫でた。

「重力の低い宇宙空間のほうが、仮死催眠中の人間には地球上より延命に適している。ディアナは天音に惚れてるのかもな」

「それどういう冗談？ ディアナは平然とした顔で、兄貴が自然に死ぬのを待つって言うってたぜ？ ひとりじゃ寂しいだろうから遙香も一緒に殺すって」

「ああ……子供にはわからんだろうさ」

「わかんないよ全然。なぜあんな理由で大統領暗殺を企てるのかも、俺にはまったく理解できない」

「なんだ、その理由って？」

響揮はディアナから聞かされたロシユフォード大統領とフロース家の因縁を話した。ディアナの最終的な目的が連邦の崩壊であることも。

そのあいだにサレムが響揮のそばに来てバイタルデータをチェックし、全身を触診する。心臓マッサージで強く圧迫された胸はあざだらけで、軽く触れられるだけでも痛み、響揮は顔をしかめた。

「幸い肋骨は折れてないようです。主任のあの様子だと二、三本はいかれてるだろうと思いましたが。野生動物並みのたくましさですね」

「野生動物はもつと自己保存本能が発達してるさ。こいつみたいに無鉄砲なことしてたら命がいくつあっても足りやしない」

渋い顔で言うアレックスに、響揮は返す言葉がない。

「まあ、いまの話でいろいろと合点がいったよ。それにしても、ディアナがおまえにそんな突っこんだことをしゃべったってのがね……」

アレックスは頭をかき、また考えこむ顔で響揮を見つめる。

「勢いだと思うよ。彼女、失言したって顔してた」

「感情のコントロールがきかなくなっただってことだろう。そこが肝心のさ」

サレムが同感というように両手をあげ、アレックスと目を見交わした。

「なにふたりだけでわかりあってたんだよ」

「十年後に仲間に入れてあげますよ」

サレムがしれっと言って響揮のそばを離れ、コクピットの隅に備えられたフードウォーマーに行く。

「とにかく、ディアナがあと何日か後に遙香と兄貴を殺すつもりでいるってことはたしかだ。この船でエンデュミオン号に乗りこんでふたりを取り戻すことはできないのか？」

アレックスは顔をしかめた。

「できりやもうやってるさ。まず捜査令状がとれない。情けないが、局の上の連中も市警もディアナの言いなりなんだ。令状がとれたとしても、踏みこむ前に捜査の情報が裏からディアナに回るだろう。」

つまり証拠隠滅の時間が　天音とガールフレンドを始末する時間がたっぷりあるってことだ。まったく腹立たしいかぎりだが、それが現実ってやつでね」

「だから僕らがきみを救助したことも、まだ上には報告してないんですよ。管制センターへの報告もうやむやにしたままです」

サレムがフードウォーマーのところから肩越しに言う。

「きみが生きてることをディアナに知られるとまずいかもって判断



で。いま僕らはテロリストの密入域情報があつたと上に嘘をついて、パトロール名目で飛んでるんです」

「おまえとしちゃ納得いかないだろうがね、とりあえずはエンデューミオン号がルナホープ宇宙港に降りるのを待つしかない。宇宙空間なら証拠隠滅も簡単だが、港に降りればそうはいかないからな。捜査令状がなくなつて、俺が責任を持って天音とガールフレンドを取り戻すよ」

アレックスの青い目には決意があつた。局を辞めても、ということだと響揮は理解した。

「だからおまえはとにかく休んでろ。後遺症が出る可能性もあるんだからな」

緊急通信の着信ブザーが鳴った。応じようと副操縦席に戻りかけたサレムを目で制し、アレックスは響揮の髪をくしゃつとかきまぜてから操縦席に向かう。

入れ替わりにサレムがやってきて、医療用栄養補給ゼリーのパックを二本響揮に渡した。

「はい、これ全部飲んで」

「……なんか微妙にあつたかいんだけど」

「正確には？ 絶妙なあたたかさ？ です。三十六度が摂取の適温なんですよ」

サレムがすまして答える。響揮はオレンジ味とアップル味を見くらべ、オレンジ味のほうから封を切った。ひと口飲んでむせそうになる。中途半端にあたたかいせいもあつて、暴力と言つていいレベルのまずさだ。サレムはそれをにやにやしながら眺めている。

「もしかして、トイレの仕返し？」

「そんなおとなげないまねはしませんよ。……それが終わったらメロン味ですからね」

絶対根に持たれていると、響揮は確信した。

「悪かつたとは思ってる。でもあの時点ではあなたと話したことになかつたし……信頼できる相手かどうか判断できなかった」

「だからって不意打ちは卑怯でしょ、黒帯が泣いてますよきつと」  
本当にメロン味のパックをあたたためはじめたサレムを、響揮はう  
らめしげに見た。

「でも、俺が正直にディアナの船に行くって言ったら止めただろう  
？」

「当たり前です！ 荷物扱いで船に積まれるのは予想できますから  
ね。実際、きみが宇宙港のチェックゲートを通過した記録はありま  
せんし」

「……倉庫で眠らされて、コンテナに閉じこめられたんだ。気がつ  
いたら船の貨物室だった」

操縦席のアレックスが肩越しに振り返り、サレムと顔を見合わせ  
た。

「すまん。そんなことじゃないかとは思ってたんだが、俺たちには  
VIPの荷物を検査する権限がなくてね。しかし、下船方法はさす  
がの俺にも予想がつかなかったぞ。なんで与圧スーツ一枚で宇宙遊  
泳する羽目になったんだ？」

「ほんとに船のなかで処刑される予定で、毒か銃か選べって言われ  
て」

「……ひでえな」

「とりあえずエアロックに飛びこんだんだ。でも非常用物資を手  
入れられないまま外に放り出された」

アレックスがあきれた顔で天井を仰ぐ。

「そこでとりあえずエアロックに飛びこむって発想が俺には理解不  
能だ」

「チビの中学生がひとりきり、おまけにふたりも人質を取られてち  
や、とうていディアナに太刀打ちできない。とりあえず外に逃げて  
助けを求めるのが正解だろ」

「外っておまえ、簡単に言うがな」

「主任、こいつにはなに言っても無駄ですよ。天然トラブルメーカ  
ーのにおいがします」

ようやく二本のパックを空にした響揮に、サレムがメロン味のパックを渡して意地悪くほえむ。

「きみにはやっぱりこれが必要ですね。極限の体験をした体によく効きます」

響揮は顔をしかめて封を切り、チューブに口をつけた。メロン味のあたたかいゼリーは、この世のものとも思われないまずさだったが、たしかに効果は抜群で、体の隅々にエネルギーが行き渡る気がする。

同時に頭もクリアに回りはじめる。ゼリーの現実離れた味に耐えかねて脳が反乱を起こしたらしく、超がつくほど最低で反吐が出るようなアイデアが浮かんでくる。

「ストロベリー味も試してみますか？」

「いやもう謹んで、全力で遠慮しとく」

響揮がぶんぶんと首を振ると、サレムは掲げたゼリーのパックを残念そうにしまった。

「で、オレンジとアップルとメロン、どれがいちばんマシでした？」

「その比較、かなりむなくない？」

返しながら、響揮は両手のこぶしを握っては開き、感覚をたしかめた。蘇生直後にあったしびれも消えており、いまのところ後遺症はなさそうだ。

「局の備品担当にアンケートとってくれて言われてるんです。でもみんな一パックでリタイアしてしまうんで、アンケートにならないくて」

「そんなもん俺に三パックも食わせたのか？ ひどい虐待だ」

「とんでもない。虐待するつもりならストロベリー味を最初に渡してましたよ」

サレムはにやりとして、ふたたび響揮のバイタルデータをチェックした。うなずいて、胸とこめかみに貼られていたセンサーパッチをはずす。

「オーケイ、サムライボーイ。もう動いてもいいですよ。いやはや、

気味が悪いほどの回復力ですね。治療記録を医学研究所に送ったら、論文が一本書けそうです」

「……褒め言葉に聞こえないんだけど」

「耳に後遺症が出てますかね？ 最大限の賛辞なのに。はい、これ着て」

サレムは局支給品のジャンプスーツを響揮に渡した。船内活動用で動きやすさ重視のデザインだ。また女性用Sサイズかと、響揮はひそかにため息をついて身につける。大人の女性用の服の欠点は、響揮には胸囲が大きすぎることだ。まあ当たり前なのだが、胸元を盛大に空気が出入りして落ち着かない。

響揮はゆっくりと操縦席に向かった。アレックスはまた緊急通信で呼ばれて、局の誰かと話している。

「さっきの緊急救難信号の件なら無理だと言ったはずだぞ、ムスマン。取り込み中なんだ、手が離せない。……部長？ ほっとけ、そのうちあきらめる。切るぞ」

アレックスは一方的に回線を切り、大きなため息をついた。

「緊急救難信号って？」

響揮が尋ねると、アレックスがこちらに顔を向け、顎を撫でた。

「貨物船がデブリにやられて操船不能になったらしい。乗員は無事だが、放っておくと船はカシオペア座の向こうへ永遠の旅に出ちゃうんだと。僚船が急行中だから問題ないよ。おまえは？ もう大丈夫なのか？」

「うん、サレムが動いてもいいって」

「あきれた回復力だな。まあ無理はするなよ」

響揮はうなずいた。

「あの、お礼がまだだったよね。ありがとう、助けてくれて」

アレックスは軽く肩をすくめる。

「礼は天音とガールフレンドを無事に取り戻してからだ」

わかったというように響揮はほほえみ、視線をアレックスの左脇に吊られたホルスターに落とした。

「そのシヨックパルス銃って『ハル＆レイ』のと同じなの？」

「基本性能は似てるが、そもそもメーカーが違う。俺たちのはライナックス社製LX627PL50、最大出力五十レジオン。ハルのはレミントン社製REM330-A2T、最大出力四十五レジオンだ。レイのは」

「型番がひとつ後ろでA3S、だろ」

「おう、わかってるじゃないか」

「ファンブックに載ってるよ」

「俺は実物見りゃわかるぞ」

アレックスは自慢げだ。響揮は操縦席のヘッドレストにもたれてため息をついた。

「パークの警備塔で俺を助けてくれたときのアレックス、かつこよかったな。銃を両手で構えてるところが最高に絵になってた」

「そうか？」

にやにやして、アレックスはクルーカットの赤い髪に手をやった。「なに見え透いたおだてにのってるんですか主任」

後部で響揮の治療に使った備品を片づけながら、サレムがひやかす。

「ばれたかというように舌を出してみせ、響揮はアレックスの肩に寄りかかった。」

「銃、見せてもらえない？ 本物さわったことないんだ」

「そうくると思ったよ。だめだ」

「えーケチ！ いいだろ、減るもんじゃなし」

「おもちゃじゃないんだ」

「わかってる。ちよつとだけだから」

「だめだったらだめ」

「なにもつたいぶってるんですか主任、見せたくて仕方ないくせに」サレムが茶々を入れると、アレックスは「しょうがないなあ」とうれしそうに言い、ホルスターから銃を抜いた。

「まあ男なら誰だって興味があるよな。ちよつとだけだぞ？」

「やった！ サンキユ、家に帰ったら学校の友達に自慢しよう」と

「俺の名前は出すなよ？ 懲戒処分になれちまう」

グリップのほうから差し出された銃を両手で受け取って、響揮はしげしげと眺めた。

「LXはREMより弾のねばりがある。照準コントロールがちと難しいが、慣れれば着弾率が上がる。だから射撃が得意な奴にはLXのほうが人気だ。若干重いが宇宙じゃ関係ないし、局はこつちを採用してる。地上警察はレイが使ってるREM330-A2Sを採用してるところが多いな」

「ふうん、『ハル＆レイ』はいちおうそのあたり考えてはあるんだね」

そう返したものの、響揮はうわの空だ。アレックスの大きな手にはなじむのだろうこついグリップは響揮の手に合わず、トリガーまでの距離が遠い。出力ゲージを見ると十五レジオンに設定されている。刑事ドラマからの知識で、十五はパトロールモードだと知っていた。

「パークで警官を撃ったときも十五だった？」

「ああ、あいつはおまえの首を絞めてたからな。下手に気絶させると衝撃で首を折られる危険があった」

「本気モードは三十だっけ？ ハルはいつも四十五マックスだけど」

「言っただろ、あれはファンタジー刑事ドラマなんだ。現実にあんな銃の使い方したら即懲戒処分だよ。四十五なんて、当たり前どころが悪けりゃ気絶じゃすまない」

「三十ならどこに当たっても死にはしない？」

グリップを両手で握って照準をのぞき、響揮は銃身の上部にある銀色のボタンを押した。これは安全装置だと知っていた。ゲージがグリーンになり射撃可能のサインがつく。

「響揮、そこまでだ。返せ」

危険な気配を察したらしく、アレックスが手を差し出した。

「個体認証設定は解除してるの？ やっぱ誤作動が多いのかな。ハ

ルと同じだね」

響揮がにやりと笑うと、アレックスはやれやれというように首を振った。

「その点じゃレミントンもライナックスもクソ以下だよ。おまけに認証に〇・一秒もかかりやがる。地球なら即金属弾が飛んできて死亡宣告だ」

銃には登録された人間以外使用できないように生体認証でロックがかけられる。だが現場ではすこぶる評判が悪いというのは、『ハル&レイ』で描かれているとおりのようだった。

「いろいろ大変なんだね」

響揮は同情するように言い、銃口を上に向けた。赤い可視光ポイントが天井に当たるのを仰ぎ見る。

それにつられてアレックスの視線が天井にそれた。刹那、響揮は銃口をすばやくアレックスの胸に向け、トリガーを引いた。

アレックスの体がシートベルトの下でびくと大きく跳ねる。

「――！」

見開かれたブルーの目が語ったのは、純粋な驚愕と疑問。

「ごめん、アレックス」

ささやくような謝罪を、アレックスは聞いていたかどうか。ゆっくりとまぶたが閉じ、力の抜けた腕が宙を泳いだ。

「主任！？」

異変に気づいたサレムがキャビン後部で短い叫び声をあげ、響揮はあわてて銃口をサレムに向けた。

「動かないで！ サレム、俺の話を聞いてくれ」

だがアレックスを撃った動揺は予想外に大きく、手がぶるぶる震えて照準が定まらなかった。どんな理由があろうと、人を傷つける行為は自分も傷つける。頭で考えるのと実行するのは別だと、響揮は思い知らされた。

目に怒りをたぎらせたサレムが強く壁を蹴り、一瞬で響揮の懷に飛びこんだ。響揮の手首をつかんで銃をもぎとり、腕を背中にねじ

り上げて、副操縦席の背もたれに響揮の体を押しつける。

「くっ」

蘇生措置で傷んだ胸を容赦なく圧迫されて、響揮はあえいだ。腕が折れそうに痛む。柔道の練習で関節技を極められたときの比ではない。

「……なんのまねですか、サムライボーイ。しやれになってませんよ」

サレムは銃口を響揮のうなじに押しあて、出力ゲージを確認して舌打ちする。

「三十。最初からそのつもりだったんですね？ 小賢しいガキだ」

響揮は苦痛に顔をゆがめながら、肩越しにサレムを見た。浅黒い肌の端整な顔には殺気が満ちていて、響揮はごくりと唾をのむ。ひょうひょうとした穏やかな人物というサレムのイメージががらりと塗り替えられる。

「病院のトイレじゃ油断しましたが、僕は特殊部隊出身なんですよ。怒らせると危険かもしれません」

丁寧な口調が変わらないだけに、低いトーンになった声がより危険性を感じさせた。

「……わかった。わかったから腕、ちよつとゆるめて」

「その前に主任を撃つた理由を説明してもらいましょうか」

「アレックスを守るためだ」

「……どういうことです？」

「あなたも察してるんだろう？ エンデュミオン号がポートに降りたら、アレックスはバッジを置いてひとりで特攻するつもりだ。下手するとその場でアレックスも、遙香や兄貴も殺される。ディアナにとつちや、証拠隠滅なんて宇宙だろうが地上だろうが関係なく簡単なんだよ。あの人は兄貴と同じビットダイバーだ。証拠のデータを書き換えるのも朝飯前さ」

響揮の腕をとらえているサレムの手から、ほんの少し力が抜ける。「主任をひとりで行かせたりはしませんよ。火器一式そろえて僕が



援護します」

「マジで言ってるのか？ それじゃ心中と同じだろ！？ あなたはもっと冷静な人だと思ってたよ！」

サレムはむっとしたらしく、またぎりと響揮の腕をねじあげた。

「僕はいつも冷静です」

「いたたたっ                   ！   どこが冷静！？ 腕折れるって！」

「大丈夫、この程度じゃ折れません。僕がいままで何人のテロリストの腕をへし折ったか知りたいですか？」

「……知りたくない」

「賢明です。で？ どうやって主任を守るっていうんです？」

「アレックスが特攻する前に決着をつけるんだよ。俺はディアナに取引を持ちかけるつもりだ。俺の身柄と交換で遙香と兄貴を返してもらおうように。でもアレックスがそんなこと許すはずないだろ。だから眠ってもらったんだ」

うなじに押しつけられていた銃口が離れた。

「サレム、頼みがある。俺をエンデュミオン号に連れていってくれ」  
サレムは響揮の腕を放し、体を返して自分と向き合わせる。

「……正気ですか？」

響揮は痛む肘を押さえて息をつき、サレムをにらんだ。

「ああ、これ以上ないくらいだ。ポートでドンパチやるうなんて思ってる奴こそ正気じゃないね。火器ってなに、閃光弾？ 催涙弾？ 月面じゃ原則、非殺傷兵器しか使えないだろ。たぶんエンデュミオン号の中に入ることさえできないよ」

「言ってくれますね。原則はたんに原則で、裏道もあるんです」

「どっちにしても、アレックスもあなたも職と命を賭けることになる。でもいまならディアナと取引して、最小の犠牲で解決できるんだ」

腕をさすって、響揮は続ける。

「俺はディアナにとっちゃかなり都合が悪い？ 証拠品？ になったからね。彼女の大統領暗殺計画とその動機を知ってる。おまけに大統領

領暗殺を阻止したせいで殺されかけた。救助のときの記録動画もこの船に残ってるだろ。ディアナが取引を拒むなら、事件の顛末をワールドネットに公開する」

「……彼女を脅すつもりですか」

「ショッキングな動画や有名人のスクリーンダルは一瞬でネット上に拡散して、完全消去は不可能になる。ディアナだってそんな事態は避けたいはずだ。取引に応じるさ」

サレムは顔をしかめた。

「彼女にとっては煮え湯を飲まされるようなものです。最小の犠牲って言うけど、きみ、エンデュミオン号に残れば楽な死に方はさせてもらえませんか？」

「……そういうことは思っても言わないのが優しさじゃないのか？」

「僕がまったく優しくないことは、きみの体に教えたはずですが」

「たしかに。でも心はまだ認めてないらしくて」

響揮は苦笑した。

「いつも冷静なあなたならわかるだろ。証拠品の俺と交換でなければ取引は成立しない。ディアナは応じないよ。あるいは応じたふりをして、翌日にでも俺たちを皆殺しにするってほうが現実でありそうかもな」

サレムはあきれたように首を振って操縦席に近づいた。かがみこんで、動かないアレックスのホルスターに銃をゆつくりと戻す。

「まったく無茶苦茶ですね。いったいどうすればそんな自己破壊計画を思いつくのか、僕には見当もつきませんよ」

「メロン味のゼリーのせいだろ。なんかこうヤケクソな気分になれるところが最高。備品担当の人にイチ押しって言うつといて」

「僕のイチ押しはストロベリー味ですけどね。そりゃもう殺人的に凶悪な味で脳が麻痺します。きみには最初に飲ませて思考能力を奪っておくべきでした」

「ただだけまずいんだよ、それ。飲まなかったのが損みたいに見える」

てくるな」

サレムは軽口を続ける気分ではないようで、厳しい顔で腕組みをしている。すでに殺気は引いているが、代わりに冷たい憤りがうかがえた。

「……あなたには悪いと思ってる。俺に脅されて仕方なく従ってるってふりをしてくれないかな。それならディアナもアレックスやあなたを責めることはないだろう」

サレムの目に不満げな色が浮かぶ。

「ディアナはかなり俺を憎んでるらしい。好きにさせれば満足して、ほかの人のことは放っておいてくれる……と期待してる」

「それで、僕や主任にまたきみが死ぬのをただ見てるって言うんですか？ あのと僕らがどんな気持ちだったと」

響揮は強い口調でサレムを遮った。

「じゃあ訊くけど、あなたが俺の立場だったらどうする？ 自分が切り札になるってわかってるのに隠れてられるのか？」

「……よほど僕を人でなしに仕立てあげたいようですね」

サレムは無表情になって黙りこんだ。張りつめた空気の中、たつぷり一分ほど響揮を見つめてから、ようやくゆっくりとうなずく。「いいでしょう」

彼の暗い色の目の奥にぎらりと光るものを認めて、響揮は思わず息をのんだ。サレムのなかで自分に対する評価が変化したのを感じる。

「きみがそこまで腹をくくってるなら、僕は遠慮なく保身に走らせてもらいますよ。上司に恵まれて仕事もおもしろくなってきたところだし、もうしばらくは局で働いていたいですからね」

「……納得してくれたってことかな。恩に着るよ。じゃあ詳細を詰めよう」

サレムは答えなかった。くるりと響揮に背を向けて、操縦席のアレックスの様子をたしかめてから副操縦席につく。コンソール下の備品ケースを開けてなにかごそごそやりながら、ディスプレイにヴ

イジのウィンドウを開く。

響揮はカメラに映らない壁際に移動した。

「こちらUCCI1022、航宙機登録ナンバーHLD630SS  
TR応答願います」

宇宙船間通信らしい。十秒ほどして同じメッセージを繰り返すと、スピーカーから返答が聞こえてきた。

「こちらHLD630SS TR。遊覧飛行中よ、無粋なことは遠慮してほしいものね」

響揮はぎくりとして身をすくませた。この位置からはディスプレイが見えないが、声は間違いなく、いまやなじみ深いディアナのものだった。

俺となんの打ち合わせもなくディアナと交信するなんて、サレムはいつたいなにを考えてるんだ？

「ブローディは寝てるの？ 優雅なものね」

「ああ、ちよつとわけあつて、強制的に眠ってもらってるんですよ。はじめまして、ミス・ディアナ。僕はアレックスの部下のサレム・アフラム。これは個人的な通信です」

「ふうん、UCCIの船から個人的な通信？」

「記録は残しませんよ。もちろん気に入らなければ通信を切つていただいてけっこうです。でもあなたの興味を引きそうな提案があるので、聞くだけでも聞いてもらえませんか？」

サレムは席を離れた。そして壁際にいた響揮の腕をつかみ、カメラの視界に引き入れた。ふいをつかれ、響揮は抵抗する間もなかった。

「響揮？」

驚きのまじったディアナの声が聞こえた。ディスプレイに開いたイジのウィンドウは暗く、ディアナは映っていない。彼女は捜査局からの突然の接触を警戒して、まだイジを許可していないのだらう。

「……アフラム、わたしの興味を引く提案ってなに？」

その声は平坦で怒りや動揺は感じられず、自分が生きていたことをディアナがどう思っているのか、響揮にはわからなかった。

「あなたの船の落とし物を偶然拾いましてね。で、これからそちらにお届けしようかと。とりあえず梱包しておきます」

響揮はいぶかしげにサレムを見あげる。感情の読めない暗い色の目が冷たくこちらを見返す。

「梱包？ どういう」

響揮の腕をつかんでいないほうのサレムの手に、いつのまにかふつうの手錠とは明らかに違うごつい外観の拘束具が握られていた。

響揮は本能的に逃げようとしたが、腕をつかまれたまま、圧倒的な力で副操縦席の背もたれに押さえつけられた。

「なにすんだ、放せよ！」

「無駄な抵抗はやめなさい。いまのきみじゃ僕にかないつこないんだから」

刹那、みぞおちにこぶしを入れて呼吸ができなくなった。動けずにいるあいだに、すかさず幅広で分厚い金属製のリングを両手首にがっちりとはめられてしまう。黒光りのするリング同士は、こぶし一個分ほどの長さの太いワイヤーでつながれている。

サレムは細長いプレート状のキーを手錠の根本のスリットに通した。ピツと電子音がしてワイヤーの接続部にオレンジ色のランプがともる。

響揮は必死に空気を肺に入れ、言葉を絞り出した。

「……なんだよこれ」

「局で凶悪犯の拘束に使う電子手錠です。人権無視という批判もあるのであまり出番はないんですが」

カメラ越しにディアナに見られていることは、すでに頭から抜けていた。響揮は本気でサレムに食ってかかる。

「凶悪犯？ 冗談じゃないぞ！ 俺がいったいなにを」

「ああ、気をつけて。下手に動くと」

リングをつなぐワイヤーがぴんと張った瞬間、バチバチという音

とともに手錠全体に青白い火花がほとばしった。腕から上半身に電撃が走り、響揮は声にならない悲鳴をあげた。

「……高圧電流が流れます。けっこうこたえるでしょ、心肺蘇生あがりの体にはとくにね。わかったらおとなしくしてなさい」

冷たく言い放ち、サレムは無抵抗になった響揮の足首にも電子手錠をはめる。

電撃よりむしろサレムの豹変ぶりに衝撃を受けて、響揮は呆然としていた。？保身に走る？という言葉の意味がようやく頭に染みこむ。

「俺をディアナに売るってことか……？ サレム、なんで」

「わからないんですか？ アレックスと僕の身の安全のためですよ。僕は現実主義者なんです。フロレス家を敵に回すようなばかなまねはしません。むしろ恩を売るチャンスです。出世にも有利になる」

サレムは響揮を後部座席に運び、四点式のシートベルトで固定した。

「まわりの人間がみんなアレックスのようなお人好しの正義漢だとは思わないことです。不愉快なんですよ、きみの行為はたんなる自己満足だ。ヒーロー気取りで突っ走ってまわりを振り回して、迷惑をかけてる自覚もない」

サレムの口調には抑えた怒りがこもっていて、響揮はなにも言い返せなかった。言葉のナイフが胸を奥深くまで切り裂いていく。

「そんな思いついたガキのためにアレックスが犠牲になるのを、僕は見てられないんです」

サレムはかがんで響揮の足首の手錠にキーを通した。センサーの作動を知らせる電子音が響く。体を起こし、キーを制服の胸ポケットのフックに留めた。

「もちろん僕自身も、きみの暴走の巻き添えにはなりたくありませんし」

「暴走なんて、そんなつもりは全然」

「つもりがない？ よけいに悪質でしょ。これが暴走でなくてなん

なんですか？　ひとりじゃなにもできないくせに」

「俺は……遙香と兄貴を」

サレムは備品ケースからダクトテープを取り、無造作に響揮の口をふさいだ。そしてカメラのほうに顔を向けた。

「ミス・ディアナ、梱包完了です。これからお届けしてよろしいですか？」

「……とんだサディストね、アフラム。電子手錠なんて大げさなものの持ちだして。そんな小さな子をいたぶって楽しい？」

「楽しくないと言えは嘘になりますね。でもけっして大げさじゃありませんよ。こいつは放っておくとなにをするかわからない。それはあなたもよくご存じでしょ？　なにしろ船からまんまと逃げられたようですよ」

「……まあね。いいわ、ドッキングコードを送信する」

「了解。こちらの座標とベクトル情報を送ります。できればそちらもヴィジの許可を」

数秒後、コクピット上部のスクリーンにヴィジの映像が映った。

後部座席の響揮にも見えるように、サレムがディスプレイの映像をリンクさせたのだ。

カメラを通して響揮と目が合い、ディアナは緑の目を細めた。

「また会えてうれしいわ、響揮。遊覧飛行の続きを楽しみましょう。みんなだね」

十五分後、パトシップはエンデュミオン号の牽引ビームに捕捉され、ドッキングプロセスに入った。

### ACT13 再会の航路

エンデュミオン号のエアロックの内扉が開く。瞬間、レーザー銃の赤い可視光ポイントに額を狙われて、響揮は息をのんだ。扉の向こうに無表情な顔のシャンメイがたたずんでいる。

ポイントをゆっくりと隣にいるサレムの胸に移し、シャンメイは促すように顎をしゃくった。

「手を頭の後ろに。武器は預かる」

「持つてませんよ。話をするだけですから」

近づいてきたシャンメイは軽くサレムの身体検査をして武器がないことを確認し、制服のフックにとめられていた手錠のキーをはずした。その後、響揮の腕をつかんで通路に出ると、キャビンのほうへ響揮の背中を押した。

突き当たりのドアが開き、キャビンの明るい光とともにパンツスーツ姿のディアナが通路に漂い出てくる。光沢のある淡いグリーンシルク生地、アップにまとめたハニードロンドと耳元にのぞく小さな真珠のピアスが映える。

手足を拘束されている響揮は動きを制御できず、そのままディアナに抱き止められた。閉じたキャビンのドアにディアナの背が押しつけられ、反動で彼女の豊かな乳房が揺れるのを、響揮は触れあった自分の胸の下で感じて思わず赤面した。

「響揮……おかえりなさい」

軽く抱擁され、やわらかな声と甘い香水のにおいに迎えられて、響揮はとまどった。歓迎されていると勘違いしてしまいそうだ。

「ああ、これじゃ返事ができないわね」

響揮の口を覆っていたテープをはがし、顎をとらえて顔を自分のほうに向けさせる。

「口を開けて。キーを出しなさい」



「……キーなんてない」

ディアナは後ろに來たサレムに視線を投げた。

「手錠のキーは入れなかったの？ 本物のサディストだったのかしら」

他意はないというように、サレムは両手をあげる。

「言っただでしょう。僕はフローレス家を敵に回す気はありません」

「……人でなしね」

「否定はしませんよ。長いものには巻かれるのが長生きの秘訣です」  
響揮とサレムが共謀して芝居を打っているのではないかと、ディアナは疑っていたのだ。彼女は響揮の目をのぞきこみ、髪にすつと指を通してから、シャンメイにうなずきかけた。

「自由にしてあげなさい」

手足の電子手錠がはずされ、ようやく響揮は電撃の恐怖から解放された。

「サンキュ、シャンメイ」

ほほえんでみせると、シャンメイはかすかに口元をゆるめた。

ため息をついて手首をさする響揮に、ディアナが言う。

「その手錠、今度はきみが捜査官のお兄さんにかけてあげて。後ろ手にね」

ぎくりとしたサレムの背後にすつとシャンメイが回りこみ、銃をうなじに突きつける。

「……さすが、徹底してますね、ミス・ディアナ」

「響揮とどっちがより危険かといったらあなたでしょう、アフラム。調べさせてもらったわ。特殊部隊仕込みの腕を自由にさせてはおけない。この船は遊覧飛行中だから、いまスタッフはかわい女ふたりだけだし」

「辞書があれば、かわいって単語の意味を確認したいところです  
がね」

「長生きしたいなら言葉に気をつけたほうがいいわ。まあ、経歴を見るとあなたは十分運命の女神に愛されてるみたいだけど」

シャンメイに手錠を差し出されて促され、響揮は唾をのみこんだ。サレムがあきらめたように息を吐き、自ら手を後ろに回す。いかめしい金属製のリングを浅黒い肌の手首にはめるとき、響揮はそこに刻まれた古傷に気づいた。

修羅場をくぐってきたことを示す傷だ。

ためらいを捨て、響揮はサレムの両手を拘束する。シャンメイがキーをスリットに通し、センサーを作動させた。

ディアナが平坦な声で告げる。

「遊覧飛行の続きをするんだったわね。さあ、キャビンにどうぞ。あなたも、アフラム。遠慮はいらないわ」

ずっとディアナの背後のドアが開いた。キャビンは響揮の記憶どおりにまぶしいほど明るく、ディアナの姿が一瞬、光に吸い込まれたかのように見える。目を細めた響揮の手をとり、ディアナが室内に導き入れた。

「……響揮？ 響揮なのか？」

突然なつかしい声に呼びかけられ、響揮はまばたきして声のほうに顔を向けた。

「……兄貴！」

数時間前には死んだように眠っていたはずの兄が、目を見開いてこちらを見ていた。キャビンの横手、ゆるくカーブした船の側壁に開いた丸い窓のそばにたたずみ、手首の片方を窓枠の手すりに手錠でつながれている。

響揮は壁の手すりをつかんで強く反動をつけ、いつきにキャビンを飛んで天音の首に抱きついた。触れあった頬はあたたかく、心臓の鼓動が命の営みを伝えてくる。

天音は拘束されていないほうの腕を響揮の体に回し、ぎゅっと抱きしめた。

「響揮、ほんとにおまえなのか？ おまえは死んだと聞かされて…

…僕は……」

「アレックスに助けてもらっただ」

「アレックスが？　そうか、彼に会えたんだな。よかった、本当に……生きていてくれて」

耳元でささやく言葉の語尾に涙がまじる。

「僕のせいでおまえを死なせてしまったと思っていた」

「兄貴のせいじゃない」

「「ごめん」」

言葉が重なり、ふたりは苦笑して顔を見合わせた。互いの目をのぞきこむ、その一瞬で、お互いの言いたいことはすべてわかった。

天音がふつと目を閉じ、「ありがとう」と言った。

「礼はまだ早いよ。兄貴は俺が助ける。そのために来たんだ」

「響揮」

響揮は振り返ってディアナを見た。

「遙香はどこにいるんだ？　会わせてもらえる？」

「ゲストルームで眠っているわ」

ディアナは首をかしげる。

「覚醒のキーワードは日本語だったのね」

そういえば、と響揮は兄に視線を戻す。天音がうなずいた。

「キーワードはおまえに託していたんだ、響揮」

「俺に？　でも……」

「世界中でただひとり、おまえだけが僕を？　兄貴？　と呼ぶ。たぶん僕が目覚めるまで、おまえは何度だって僕を呼び続けると思った。五回呼ばれたら覚醒する設定にしていた」

「兄貴……　オールダー・ブラザー」

ディアナが口をはさむ。

「弟をあなたに会わせたわたしの判断は正しかったということね。感謝してほしいものだわ」

「すてきな冗談だな。大事な弟を殺そうとした女に、感謝などできるはずないだろう」

「弟に命を預けたりするのこそ、すてきな冗談だわ。なぜそこまで信じられるの？」

「弟だからさ」

まるでそれが全世界の共通認識だともいうように、天音はさらにと答える。

「たぶん響揮も、無条件で僕に命を預けてくれる。ぼくが兄だから」  
「……兄貴」

喉が熱いかたまりでふさがれ、響揮はなにも言えなくなった。天音にしがみつки、白いジャンプスーツの胸に顔をうずめる。なつかしい兄のにおい。幼い日にもぐりこんだベッドでされたように、やさしく髪をすかれてると、泣きたくなってくる。

「すまなかった、響揮。おまえにあまりにも多くを頼りすぎた。いまごろ反省しても遅いが」

「……兄弟は他人だわ。いつ裏切るかわからない」  
ひとり言のようにディアナがつぶやく。

「きみはたったひとりの兄さんに爆弾を贈るような人なものな」

辛辣な天音の言葉を無表情に受け止めて、ディアナはついと兄弟に背を向け、フードウォーマーに近づいた。通路に続くドアの脇では、シャンメイがサレムの手錠の一方をはずし、それを改めて手すりにかけている。

「ミス・ディアナ、お招きはありますが、用も済んだし、僕は船に帰らせてもらえませんか」

ディアナはサレムに顔を向けてふっとほえんだ。

「そんなに急がなくてもいいでしょう。コーヒーでもいいかが？」

「ぬるいのは遠慮しときます。で、相談ですが、僕とアレックスは生体ゴミを拾ったことになってるんですよ。管制センターに報告しなきゃならないんで、手ぶらで帰るわけにもいかなくて。響揮の代わりに日本のお嬢さんを引きとらせてもらえませんか。手早く記憶消去して渡してもらえば、適当にホテルに返しておきます」

「遙香の目が覚めたら連れて帰って。記憶消去はもうしてあるわ」  
ディアナはあっさりと答え、コーヒーのパックをとった。

「……いいのか？」

息をのんだ響揮に、ディアナは苦い笑みを向ける。

「意外だった？ それに……きみも天音も、記憶消去して返すつもりよ」

「本気なのか、ディアナ？ 死神に情けがあるなんて聞いたことがない」

疑わしげな天音に、またディアナは苦笑して、コーヒーの封を切った。

「そんな皮肉を言うとな気が変わってしまうかもしれないわよ、天音」  
「勝手なことを！ いままでさんざん僕や響揮を脅しておいて」

「命は取らないって言ってるのよ。感謝しなさい」

「きみに感謝など」

「兄貴」

響揮は天音の言葉を遮り、ディアナに顔を向ける。

「あなたの目的は、大統領を殺して連邦を壊すことだったはずだ。それをあきらめたってこと？」

「コーヒーをひと口飲んでから、ディアナは響揮と視線を合わせた。  
「これから花火があがるわ。それが見られれば、ほかのことはもうどうでもいい」

天音が息をのむ気配に気づき、響揮はちらりと兄に目をやった。  
窓枠の手すりに手錠で繋がれた天音の手は、かたく握りしめられている。

「花火ってなんです？ どうもきな臭い予感がするんですが」

壁際から、緊張した口調でサレムが訊く。

ディアナは答えずにまたコーヒーを口に運び、デジフレームを見つめた。開いたヴィジのウィンドウには、パトシップのコクピットの画像が映し出されている。操縦席にいるアレックスはまだ目覚めていない。

「シャンメイ、ブローディの様子を見てきて」

「はい、ミス・ディアナ」

キャビンを出ていくシャンメイを見送って、サレムがそっと息を

吐き、うつむいてなにかつぶやいた。

「さつき管制センターの通信を傍受したの。大統領専用船はすでに宇宙港を離れた。これから月の軌道を一周して地球に進路をとる。まもなくよ……花火が見られるわ」

「大統領専用船って……まさか、爆弾をしかけたのか？」  
響揮は愕然とした。

「テイラーが死ぬ前にやらせたんですか？」

サレムが身乗りだす。その拍子に手錠のセンサーが反応して軽い電撃に打たれ、彼は歯を食いしばった。

「奴だつて、連邦一警戒が厳重な大統領専用船に爆弾を仕掛けるのは――」

「テロリストなんて自己中心的な連中、あてにしていけないわ」  
ディアナは飲み終えたコーヒーマグのパックをダストシュートに放った。

「大統領専用船にはこの船と同じエンジンが積まれている。だからわたしはこの船を手に入れたのよ」

BGMが欲しいわね、とディアナはつぶやき、天音に顔を向けた。  
「《魔法使いの弟子》でいい？　どうしてもか、花火にはこの曲れて気がするわ」

\*

\*

「くそつ、地獄に堕ちて三千年呪われる、だったか？　サレムが言ったのは。まったく同感だよ」

サレムが響揮を連れてエンデュミオン号に移るのを待ち、アレックスはシートベルトをはずした。ショックパルス着弾の痛みが残る胸を押さえて顔をしかめ、席を離れる。

「ガキの芝居に引つかかるなんて、俺もヤキが回ったな」

あの少年には不思議に人を和ませる雰囲気があり、つい無防備な部分をさらしてしまうようだ。ふだんは用心深いサレムが簡単に気

絶させられたのもそのせいだろうと、いまなら理解できる。

しかも、してやられたとわかってても憎む気になれないところが癪にさわる。それはおそらく、ディアナも同じに違いなかった。

アレックスはディスプレイをのぞいた。サレムの制服の胸には通信機がセットされており、マイクロサイズのカメラから画像が送られてきている。ディアナはいつものように美しく、まさに女神の名にふさわしい堂々とした存在感だ。美は善なりのはずじゃないのかと、アレックスは心のなかで突っ込みを入れた。

こちらからエンデュミオン号に送られるヴィジの画像はサレムが細工して、操縦席で正体なく眠りこけているアレックスの録画をリピート再生している。

アレックスは顎を撫でた。これでいつまでディアナをごまかせるだろう？ 今後の展望は明るくはないが、ただ手をこまねいてはいられない。

彼はコクピットを出て、トランクルームに続く二重のハッチを開けた。ここは狭い筒状のコンテナを接続したもので、通常は使用しない装備を納めてある。緊急時には荷物を外に出し、脱出ポッドして使える設計だ。

アレックスは対人戦闘用の火器一式を収めたツールベルトをとり、腰に巻いた。閃光弾、催涙弾、音波銃、機動阻止剤、ネット弾。どれも非破壊兵器で、船の設備を傷つけることはない。

スラックスの裾を上げ、脛に巻いたホルダーのサバイバルナイフのわきに、予備の小型ショットパルス銃をダクトテープでとめる。

操縦席に戻ってバイザーつきのヘッドセットをつけ、バイザー内側のスクリーンに操縦席のディスプレイをリンクさせると、サレムが中継しているエンデュミオン号の内部が映った。

準備完了。

中継画像がキャビンに切り替わるのを確認してから、アレックスはエアロックを抜け、エンデュミオン号に足を踏み入れた。

バイザーのスクリーンに映った天音が元氣そうなのに安心しつつ、

アレックスは遙香を探した。キャビンには人質が三人、敵がふたり、戦闘員は自分だけ。どう考えても分が悪い。この件に本当になんの関係もない少女だけは、無事に地球に返してやらなければならない。ディアナの言葉によれば、遙香はゲストルームにいるはずだ。アレックスは通路に並ぶドアをのぞいていき、三つ目の部屋で少女を見つけた。ぴくりとも動かず、まるでコレクション用のビスクドールのように見える。

生きているのかと不安になり、アレックスは少女の顔を間近からのぞきこんだ。すると少女の目がいきなりぱっと開き、大きな黒い目に一瞬で恐怖がみなぎった。

叫ばれると直感し、アレックスはあわてて少女の口を手でふさいだ。

「静かに！ 俺はUCCIのアレックス・ブローディ、天音と響揮の知り合いだ。きみのことは知ってる。南十字星を持つてる響揮のガールフレンド、名前は遙香。だろう？」

少女の目に理解の色がひらめく。それからなぜか、少女は頬を染めた。

「俺、なにか変なこと言っただけかな？」

アレックスがゆっくりと手を口から離すと、遙香ははにかんだ顔で首を振った。アレックスは胸を撫でおろす。天音が教えてくれた南十字星の秘密には、彼女の気持ちをやわらげる効果があったようだ。

「あなたはパークで響揮を救急車に運んでいた人ね？」

「見てたのか。というか、それを覚えているのか？ きみは記憶消去を受けたはずだが」

遙香はベッドに体をとめていたストラップをはずし、ふわりと宙に体を浮かせた。

「夢のなかで一生懸命思い出してたの。忘れちゃいけないと思って響揮と約束したから」

少女の声の端が震えたのに気づき、アレックスはぼんと遙香の肩



に手を置いた。

「響揮は生きてるよ、怪我もしてない。天音も無事だ」

「ほんと!？」

泣かれたら困るとアレックスは思ったが、遙香はきゅっと唇を噛んでこらえていた。

「ふたりはどこにいるの？」

「この船のキャビンだ。だが会うのはもう少し待ってくれ。人質にされてる」

遙香はうなずいた。

「あなたがふたりを助けてくれるのね？」

素直な、頭のいい子だ。おまけに美人だ。アレックスはほほえんだ。

「ああ。俺の船がドッキングしてるから、きみはそっちへ移って待っていてくれ」

部屋を出てエアロックからパトシップに入るあいだに、ツールベルトから筒状の催涙弾とネット弾、それにキャンディ状の閃光弾をとって少女の華奢な手にゆだねる。

「これからききな臭いことになるかもしれない。自分の身は自分で守れ。敵が来たらピンを引いて投げつける。くれぐれも味方には当てるなよ」

遙香は覚悟した顔でこくりとうなずいた。

なかなか肝が据わってるじゃないか。アレックスは安心しかけて、即座に自分を戒めた。結局のところ、この子は響揮のガールフレンドだ。類は友を呼ぶってやつかもしれない。

つまり行動的で無駄に頭の回転が速く、危険分子で不確定要素だ。さすがに手錠でつないでおくわけにもいかないが、隠れていると言えはきつと我慢できずに出てきて無茶をする。……そんな予感があった。

被害妄想だろうかと考えながら、アレックスは少女にトランクルームを見せた。

「きみにしてもらいたいことがあるんだが、頼んでいいか？」

任務を与えれば、よけいなことに頭を回すこともないだろう。

遙香は勢い込んで首を縦に振った。

「あたしにできることなんでもするわ」

「助かるよ。俺が響揮と天音を連れて戻るまで、ここを守っていてほしいんだ」

アレックスは天井にある透明なカバーを示す。

「この部屋は緊急脱出ポッドでもある。カバーの奥の赤いボタンを押せば、船体と切り離される。棚のホルダーにマニュアルがあるから、しっかり読んで、いつでも使えるようにしておいてくれないか。きっと必要になると思うから。もし危険が迫ったら、迷わずにこれを使って逃げてくれ。ひとりでも行くんだぞ。きみはきみ自身の命を守ることを最優先に考えろ。いいね？」

「わかった。響揮と天音さんはあなたにまかせるから、きっと助けて。約束よ？」

遙香の目に絶対の信頼を認めて、アレックスはたじろぎつつうなずいた。

「約束する」

なぜかエメラインの面影が脳裏に浮かび、彼は表情を引きしめた。信頼に応えたい。だが状況は思わぬほうに変化している。

遙香をトランクルームに入れてハッチを閉じ、アレックスはバイザーに映る画像に神経を集中させ、顎を撫でた。

響揮に撃たれたのち、アレックスが完全に意識を失っていたのはほんの一分ほどだった。ショックパルス弾には耐性が高いほうなので、三十レジオン程度なら数分で視覚と聴覚が戻り、十分もすれば体の麻痺も消える。したがって響揮が自分を撃った理由は理解していたし、サレムの行動も意図を察したうえで黙認した。

もちろんサレムも、アレックスがすぐに覚醒したのに気づいていた。銃をホルスターに戻すとき、「ここは僕にまかせて。しばらく

寝たふりしててください」と耳打ちしていった。

いかに行動力があっても、響揮はやはりまだ子供なのだ。ディアナを脅せば逆効果だとは、少年の直線的な思考では気づけない。そもそもディアナに憎まれていると思っただけのところは幼すぎる。

かわいさ余って憎さ百倍と、アレックスは心中でつぶやく。

だからこそサレムは、ディアナの前でわざと響揮を痛めつけてみせたのだ。ワールドネットに情報を流すなどと脅されれば、ディアナは本気で響揮を殺しにかかるだろう。だが虐待された子供なら助けなくなる……とサレムは考えたに違いない。

母性本能などというものをディアナが持ち合わせているのかどうか、アレックスには大いに疑問なのだが、サレムは女という生き物になにかファンタジーな妄想を抱いているらしい。

ともあれ、芝居とはいえ、サレムは本当に響揮を切り札として道具として利用した。そのいかにも現実的で潔い決断は自分にはできないと、アレックスは寝たふりをしながら感心していた。

おかげで、こうしてエンデュミオン号に入ることができたわけだ。響揮に指摘されたように、アレックスひとりで特攻しても、エアロツクにさえたどりつけなかった可能性は高い。

それにしても、いつもどこか冷めた雰囲気サレムが、自分の特攻につきあうつもりだったというのが意外だった。

「ファンタジーな『ハル＆レイ』なら、特攻しても最終的には勝てるだろうがね」

残念ながら、自分たちはリアル世界の人間だ。物事、そううまくはいかない。

サレムは自ら悪役を引き受けて魔女の城に潜入したが、どうやらミイラ取りがミイラになったようだ。人質が増えただけじゃないかと、アレックスはぼやく。しかもいま、ディアナは遙香だけでなく、天音も響揮も解放すると言っている。

まったく、想定外の事態だ。

信じていいのか？ 花火とは爆弾なのか？ あの女はどうやって

大統領専用船を爆破する気なんだ？ 情報は不確定だが、大統領専用船に警告すべきか？

そのとき捜査局から通信が入り、アレックスは思考を中断されていらだった。

出ると厄介なことになりそうだが、出ないのもまた厄介なことになる。なにしろ、エンデュミオン号を追っていたこともドッキングしたこともまだ局に報告していないのだ。

『UCCEI1022、ブローディ主任？ サレム？ 早く出てくდაさいよ』

じれた声は、部下のムスマン・バヤルのものだ。アレックスはヴィジを入れずに応じた。

「こちらブローディ。まだ取り込み中だ。用件はなんだ？」

『生きてるなら連絡くださいって。緊急事態です、部長がいまにも噴火しそうです！ 俺ひとりじゃ抑えきれません』

「なんとか頑張れ。殉職なら葬式代は局持ちだから安心していいぞ」

『葬式代の心配するのは主任のほうじゃ？ さっきも緊急救難信号無視したし。気になって座標見たら、お隣はP船プライベートシップじゃないですか。

いったいどんなヤバイことに足突っ込んでるんです？』

優秀な部下はときとして非常に鬱陶しい。

「いまは訊くな」

短く返すと、ムスマンは状況を察したらしかった。

『じゃあとで。ランデブーの件と遭難者救助の件、管制センターに報告は？』

「これからする」

抑えたため息がスピーカーから聞こえてくる。

『さすが？ 弾丸？ブレット』

「なにか言ったか？」

『いいえ、空耳ですよ。取り込んでるのがP船の件なら、ルナサウス警察からの最新情報を送ります。役立つはずですよ』

「すまんな、ムスマン。部長には」

『P船の護衛って言ってます。噴火が収まるかも』

すばらしい、やはり持つべきものは優秀な部下だ。上司の教育のたまものだと自画自賛しながら、アレックスは送られてきたファイルを開いた。そして内容を確認し、しばしその場に呆然と立ちすくんだ。

バイザーのスクリーンをディアナの付き人の中国系少女が横切ったのに気づき、アレックスはわれに返った。

『すみません主任、ばれたみたいです』

サレムのささやきが聞こえた。

数秒だけ目を閉じて考え、アレックスは唇を噛んで目を開けた。ブルーの目には冷たいきらめきが宿っている。

彼はムスマンから送られたファイルをフォロディスクに落として胸ポケットに入れ、ヘッドセットをはずしてディスプレイから離れた。エアロックに向かいながらツールベルトとショルダーホルスターをはずし、トランクルームわきのホルダーにとめた。

エンデュミオン号のエアロックが開く。アレックスを認めたシャンメイが、さっと銃をとって可視光ポイントをアレックスの額に当てた。

アレックスはゆっくりと両手をあげ、頭の後ろで手を組んだ。

「落ち着け、俺は丸腰だ。まだ足のナイフをはずしてないが」

「動かないで。わたしがやるわ」

正確にアレックスに漂い寄り、スラックスの裾をまくるシャンメイに、アレックスは話しかける。

「ディアナと話したい。伝えなければならないことがある」

「交渉なら」

「いや、交渉じゃない。ディアナは人質を全員解放するつもりだよだからな」

シャンメイはちらりとアレックスの顔を見て、はずしたサバイバルナイフと予備の銃を自分のスパッツのウエストにはさんだ。アレックスの背後に回り、銃口で背中をつついて進むよう促す。

「すべてはミス・ディアナのお気持ちしだいよ。変わることもある」  
「……なるほど」

特攻するつもりが一転、投降する判断を下したのは是か非かと、アレックスはつかのま考え、近づいてくるキャビンのドアをにらみつけた。

\*

\*

「いいところに来たわね、ブローディ。じきに花火があがるわ。一発だけだから見逃さないようにして」

ディアナは冷たい笑みを浮かべて言い、AIに命じて3Dフォロの大きなスクリーンをつけさせた。キャビンには《魔法使いの弟子》のきらめくようなシンフォニーが流れている。

響揮は天音のそばから離れず、シャンメイがアレックスとサレムを電子手錠でつなぐ様子を見つめた。ふたりはドア脇の手すりをくぐらせた手錠で互いの右手首を拘束されて、なにか文句を言い合っている。『ハル＆レイ』を地でいっているようだと思えないことを考えつつ、響揮は気持ちを引きしめた。

拘束されていないのは自分だけだ。下手に動けば数少ない切り札を失うことになる。慎重に行動しなければならない。なにしろ、ディアナが自分たちを無事に解放する保証はなにひとつないのだからスクリーンには航路を監視する衛星からの画像が中継されている。放送局から流される正規の映像ではなく、管制センターのシステムをクラッキングして得ているものだ。

カメラは画面中央の、エンデュミオン号と同型のパールホワイトの船体を追っている。

「そろそろよ」

ディアナは画面の隅に表示された座標を見た。

「あと数秒……」

「くそっ」

アレックスが画面を見つめて歯を食いしばる。

スクリーンに見入るディアナの瞳には抑えた興奮の炎が燃え、エメルドのように輝いている。いつもよりいっそう美しく見えるのは皮肉なものだ。響揮には惨事を直視する勇気がどうしても出でず、画面から顔をそむけた。なにか起きるとわかっているのになにもしないのは、一種の拷問だった。

「響揮」

天音が小さな声で呼んだ。

「なに？」

「僕にかまわず、おまえはなんとか遙香ちゃんを連れて逃げる。彼女はたぶん、ぼくがいたゲストルームの隣の部屋だ。緊急脱出ポッドを使え」

「兄貴、どういう」

刹那、キャビンにディアナの叫びが響きわたった。

「なぜなの！？ どうしてなにも起きないの？」

さらに数秒スクリーンを見つめてから、ディアナはぱっと天音を振り返った。

「天音、まさかあなた……」

呆然としていた顔がやがてみにくくゆがみ、まなざしが鋭い憎しみに満たされる。

天音は顎を引いてディアナの視線を受け止め、窓枠につながれた手のこぶしに力を入れた。

「ぼくのほうが上手だったな、ディアナ」

「……ワクチンを入れたのね」

「効果を検証する暇がなかったから一発勝負だったが。効いたらしい」

「そうか……大統領船に仕掛けたのは爆弾じゃなくて、ウィルスプログラムだったのか」

アレックスがうなる。

「だからあんたは同型船を手に入れたんだな。エンジン制御システ

ムを研究して、ウイルスを仕込むために」

響揮は船影を追い続けているスクリーンに目をやった。白っぽい船体が画面の中央で小さくなっていく。

「あんな混雑した航路のど真ん中で船を粉々にするなんて」

サレムが歯ぎしりする。

「いったいどれだけのデブリが巻き散らされて、何隻の船が犠牲になるか」

「そんなこと気にする必要はないわ、アフラム」

答えるディアナの声は平坦で、その顔にももう感情は表れていなかった。

「……花火が終わったたらあなたたちを解放するつもりだったけれど、気が変わったから。シャンメイ、銃を」

通路に続くドアの前にいたシャンメイが、ぎくりとして手すりを離した。

「ミス・ディアナ」

「わかってる、あなたは銃が苦手よね。心配しないで、わたしが自分で始末をつけるから」

ディアナはシャンメイに近づき、ためらう手から銃を奪った。くるりと体を返し、銃口を天音に向ける。

響揮はとっさに兄を背にかばい、照準のポイントを自分の胸に受けた。

「どきなさい、響揮！」

「もうやめてくれ、ディアナ！　こんなこと意味ないだろ！」  
響揮は叫んだ。

「大統領は地球に帰る。フロ雷斯党首もまだ死んだわけじゃない。やり直すチャンスがあるってことだ。直接彼らと話すチャンスが。言葉で言わなければわからないって、俺に言ったのはあなただろう？　憎いなら憎いつて彼らに言えばいい。それであなたのお父さんが生き返るわけじゃないけど」

「そうよ、大切なのはそこ。パパはもう戻らない！　みんな　み



んな、パパと同じように宇宙の塵になるといいわ！」

ディアナはトリガーを引いた。ショックパルスが響揮の胸に吸い込まれ、瞬間、小柄な体のはじかれたように跳ねあがる。

「響揮　！」

天音の絶叫がキャビンにこだまするなか、弛緩して漂う響揮の体をシャンメイが抱きとめる。

ディアナは銃を天音に向け、ほほえんだ。

「ひとりずつ殺していくわ。あなたは最後よ。残される者のつらさをたっぷり味わうといい。選りなさい。次は誰にする？　死んだ恋人の兄さん？　妹みたいな隣の家の女の子？　そうね、あの子も起こしてここに連れてきて」

「やめろ、ディアナ！」

アレックスが叫び、左手に握ったキャンディ状の物体をキャビンの中央に投げた。振り向いたディアナの目前で物体がはじけ、瞬間、真っ白な光がキャビンを埋めつくした。

「閃光弾　こんなものを持っていたなんて」

視力を一時的に奪われ、ディアナはその場にただ立ち尽くす。

「響揮、目を覚ませ、逃げるんだ！」

アレックスの声に促され、響揮は必死で目を開けた。ディアナが撃ったのは、シャンメイがアレックスからとりあげた予備の小型銃だ。設定はパトロールモードの十五レジオン。響揮が気絶していたのはほんの数秒だった。もちろんアレックスはそれに気づいていたのだ。

シャンメイはディアナと同じく視力を奪われ、呆然としている。

響揮は彼女の腕から抜けだし、部屋を一瞥した。アレックスと、気絶していた響揮以外は閃光弾をともに浴びたらしい。だが閃光弾の目くらまし効果は三十秒程度で切れる。

「響揮、俺の船に行って　って、こら、人の話を聞け！　響揮！」

「このばかものが……」

アレックスの怒声が追いかけてくるが、響揮は無視してコクピツ

トへ飛んだ。ドアに鍵はかかっていない。

よし、ついてる！

コクピットに入ってドアを閉め、鍵をかけた。自動的に照明がつく。ぐるりと内部を見回し、正面のスクリーン脇に目指すものを見つけた。透明プラスチックのカバーをはずし、ボックスのなかの赤いボタンをためらいなく押し込む。

緊急救難信号だ。

十秒もしないうちに管制センターから確認を求める通信が入ってきたが、響揮は応えなかった。応える必要はない。いずれにしても近くにいる船が駆けつけてくる。

ドアが外からたたかれる音がした。響揮は深呼吸をしてから鍵をはずし、ドアを開けた。

「あなたって子は……」

ディアナの目には、ふたたび強い怒りが輝いている。キャビンのBGMはクラシックな楽器の織りなすハーモニーから、警戒を告げるAIの耳ざわりなアナウンスに変わっていた。

「自由にさせておいたのが間違いだったわ。アフラムの言うとおり、なにをしてくすかわからない。……油断したわたしが悪いんだけど」「二十分もすれば救助船が来るだろう。あなたがしようとしたことも、したことも、すべて公になる。でもこの船にはアレックスの船がドッキングしてるからね。いまならアレックスしだいで救難信号をなかったことにできる。……俺たちを解放してくれ、ディアナ」

ディアナは首をかしげ、ふっと笑った。すいとドアの縁に手をかけて体をコクピットに入れる。その動作は素早く、一瞬で響揮はしなやかな腕に引き寄せられ、正面から抱きすくめられた。ふわりと舞った甘い香りに気をとられ、抵抗するのが一拍遅れる。

「わたしを脅してるの？ いい度胸ね。でもごめんなさい、もうなにが公になろうとどうでもいいわ」

耳元でささやく声が終わるか終わらないかのうちに、響揮の脇腹でショックパルスが炸裂した。声もあげられないまま、響揮は気を

失った。

「今度はゲージを確認したわ。三十なら死なないわね。簡単には殺してあげないわよ」

## ACT14 マゼランの花嫁

遠くから響く電話の着信音に、響揮は意識を呼び覚まされた。体は動かないが、会話は聞こえる。

『ジョアンが意識をとり戻したわ』

女性の声だ。ディアナのものによく似ている。

『手の負傷はひどいけれど、命にかかわるものではないとお医者さまも言っているの』

「……残念、殺し損ねたわ」

答えたのはディアナ。

『やっぱり……。そうじゃないかと思っていたのよ。あなたのことも、地球に戻ればまたジョアンを殺そうとするんでしょうね。』

ネルソンの……復讐のために』

「わかってるじゃない」

『わかるわ。あなたは……わたしに似ているから』

撃たれてからどれくらいたったのだろうと、響揮は考えた。まだキャビンにAIの警戒アナウンスが流れているところを見ると、数分程度だろうか。アレックスもこんなふうに目覚めて、自分とサレムの会話を聞いていたのだと、響揮は思い当たった。

サレムの芝居を、アレックスは認めていたわけだ。

ますます『ハル&レイ』みたいだなと笑いそうになったが、もちろん笑ってなどいる場合ではない。

『信じられないかもしれないけど……わたしはネルソンを愛していたのよ』

ディアナの相手の女性は母親のナタリア・フローレスらしい。

「嘘。だったらロシュフォードと浮気したりしないはずよ」

『……言い訳はしないわ。フランクを愛したのも本当だから』

「パパを殺したのはジョアンじゃなくあなたね」

辛辣な口調でディアナがなじる。

『いいえ。ネルソンは自殺したの。遺書があったのよ』

ディアナが息をのむ気配がした。

「わたしは見ていないわ」

『あなたには見せなかった 見せられなかったの。遺書のこととは

ジョアンも知らないわ』

「見せて」

『それは……』

響揮は懸命にまぶたを持ち上げた。かすんだ視界に、ショートボブの黒髪の少女がぼんやりと像を結ぶ。

「気がついた？」

シャンメイがほえむ。

答えようとしたが、唇はかすかに動いたものの、声は出せなかった。響揮は目だけを動かして周囲をうかがった。大きな三Dスクリーンには経済界の女帝が大写しになっており、それをディアナが部屋の中央で、青ざめた顔で見つめている。自分はキャビンの隅でシャンメイに抱かれるように浮かんでいて、どうやら手は後ろで拘束されているようだ。兄とアレックス、サレムの位置は変わっていない。

「ディアナ、ちょっと口をはさませてもらうよ」

アレックスが低い声で言うと、ディアナはぎょつとしたように振り向いた。母親のこと以外は意識の外にいつていたとでもいうように。

「ミセス・フローレス、あなたのところにも、もう月から報告が届いたんじゃないませんか？」

アレックスの声は聞こえているはずだが、ナタリアは答えない。答えを待つこともなく、アレックスは続ける。

「二時間ほど前に、ミスター・ネルソン・アルメイダの遺体が月の裏側で発見された。南極近く、エイトケン盆地の小さなクレーターの中かで、調査中の水資源探査ロボットが見つけたんだ。ネルソンはディアナ、あんたの ディアナ・フローレス・アルメイダの父

「親だな？」

「パパの……遺体が月に？　嘘よ……」

喉元に手をあて、ディアナはあえいだ。

「パパは宇宙で死んだ。殺されたのよ！」

「検視でDNA鑑定も済んでいる。間違いない。あんたにあてたポイスメールを持っていた」

左手で胸ポケットからフロロディスクを取り、アレックスはディアナのほうにはじいた。

反射的にそれを受けとめたものの、ディアナはためらうようにしばらくディスクを見つめていた。やがてようやくデジフレームの前に行き、スロットに押し込んだ。

スピーカーから聞こえてくるのは、淡々として悟りに満ちた、やわらかな男性の声。

『愛しいディアナ。これをおまえが聞くとき、わたしはもうこの世にはいないだろう』

「……パパの声だわ」

ディアナがひとりごつのようにつぶやく。

『おまえを心から愛していたよ、ディアナ。だが、その目はいつか娘としてではなく女としておまえを見るようになっていった。』

何度おまえの眠っているベッドにこっそり近づいたことだろう？  
年ごとにおまえはナタリアそっくりになっていく。

わたしは弱い人間だ……取り返しをつかないことをしてしまう前に、けじめをつけるよ。

ここで、おまえと行くはずだった宇宙を眺めながら旅に出る。火星、木星、リギル・ケンタウルス、そして大マゼラン雲……。

正直に言えば、ひとりで行くのは寂しい。でもおまえにはいつかおまえにふさわしい運命の人が現れるから。花嫁のベールは、その

人のためにとっておかないとね。

さよなら、ディアナ。永遠に、おまえを愛してる」

声が途切れても、ディアナはその場を動かなかった。開け放されたコクピットのドアから、緊急通信の入信を知らせるブザーが絶え間なく聞こえてくる。

「泣いていいんだぞ」

アレックスが静かに声をかける。

「残される者のつらさは、おれにもよくわかる」

「……あなたにわかつてほしくなんかないわ、ブローディ」

「イヒディナツスライタルムスタキム」

サレムのつぶやきに、アレックスが不思議そうな目を向ける。

「？われらを正しい道に導きたまえ？という意味です」

「……アフラム、あなたはやっぱり人でなしね」

ディアナはきつと顔を上げ、コクピットに向かった。

『ヴィジを許可して、ディアナ。顔を見せてちょうだい。話しあいましょう。やり直したいのよ』

スクリーンの上、懇願するナタリアの頬には涙が伝い、声には嗚咽がまじっている。しかし、ディアナは耳を貸さなかった。

「遅いわ……ママ、すべて遅すぎる」

『ジョアンは生きてる。やりなおせるわ、きつと』

「無理よ。ママならわかるはず。ママはわたしだから……そうでしょう？」

ナタリアは息をのみ、かすれた声で訊いた。

『ディアナ……知っていたの？』

コクピットの入り口で体を止めて、ディアナはスクリーンを振り返った。

「わたしはビットダイバーよ。DNAバンクのデータが書き換えられていることに気がつかないと思う？ わたしはママのクローン。だからそっくりなのは当たり前」

「ヒトクローンの臨床応用は生殖倫理規定法で禁止されているはず  
です」

厳しい口調でサレムが割り込む。

「ママはフロレスなのよ、アフラム。できないことはこの世には  
ないわ。わたしはそのナタリア・フロレスのクローンなの。だから  
パパはわたしをかわいがった。わたしを愛した。でもパパは最後  
まで　わたしのなかのママを愛してたんだわ」

ディアナはフォロディスクを勢いよくダストシートに放りこん  
だ。

「自殺なんて……！　これ以上の裏切りがある？」

『ネルソンの希望だったのよ。彼は……子供をつくれな体だった  
の。それでもわたしの子を欲しがった。ほかの男の遺伝子はいらな  
いと言つて……。それもあなたは知っているのね、きつと』

「知ってるわ。永遠にさよなら、ナタリア　もうひとりのわたし」  
ディアナはA Iに命じて通信を切った。振り返り、響揮が目覚め  
たのに気づいて近づいてくる。

「三十じゃ足りなかったかしら。見かけによらず頑丈なのね」

「ディアナ　」

響揮はようやく言葉を絞りだした。

「この船で大統領を追いかけるつもりなのか？」

「察しがいいわね。もう動けるの？　ならもう一発お見舞いしてあ  
げるわ」

楽しげに言つて銃をかまえるディアナに、天音が声を張りあげる。

「やめてくれ、ディアナ！　これ以上弟を傷つけるな！　撃つなら  
僕を撃て！」

ディアナは銃口を天音に向け、撃つまねをしてみせた。くすつと  
笑つて銃をスラックスのウエストにはさみ、ついとコクピットに向  
かう。

「本当に、きみとお母さんは似ているな。この船のエンジン制御シ  
ステムには、きみが大統領船に仕掛けたのとは違うタイプのウイル



スが仕掛けられている。気づいていたか？」

ディアナは振り返って天音の顔を見つめ、一瞬のちに笑いだした。「いったい誰が、なんて訊く必要もないわね。あの人はわたしだもの」

「時間がなくて発動条件はわからなかったが、この船の進路を地球に向けるのは危険だ。あきらめろ、ディアナ」

「あきらめる？ わたしの辞書にそんな言葉はないわ」

最高のジョークを聞いたとしても言いたげに、ディアナはあしらう。「天音、わたしは死神なんでしょう？ だったら期待に添わないからね」

にこやかに告げる様子は楽しげでさえある。彼女はコクピットに入り、すぐに出てきてキャビンを見回した。

「自動操縦で地球へ向かうよう指示したわ。優しいナタリアのおかげで船が爆発するのかどうか、みなさんでたしかめてちょうだい。わたしはここでさようならよ。幸い、俊足で小回りのきく船がある。利用させてもらっわ、ブローディ」

「……俺のパトシップで大統領船に突っ込むつもりか」

アレックスは齒ぎしりした。

「大統領船には宇宙軍の護衛船が張りついてるぞ。撃墜されるのがオチだ」

「行けるところまで行くわ」

とんとコクピットのドアを手で押してキャビンを横切ると、ディアナは慣性がついたままシャンメイから響揮の体を抱きとり、通路に面したドアを開けた。まだ体の麻痺が解けない響揮は、抵抗もできずにキャビンから連れ出された。

「僕を連れていけ！」

天音が叫び、窓枠の手すりから手錠をはずそうともがくが、手錠はかえって締まるだけでどうにもならない。

ディアナが振り返り、冷たく言った。

「残念だけど天音、あなたは切り札にはならないのよ。もらってい

くわ、あなたの大事な弟。わたしの邪魔をしたことを永遠に悔やんでなさい。シャンメイ、行くわよ」

\*

\*

薄暗い通路を漂いながら、ディアナはシャンメイにほえんだ。

「いままでありがとう、シャンメイ。さっきあなたの銀行口座にお金を振り込んだわ。弟さんと妹さんを大事にね」

耳から小さな真珠のピアスはずし、シャンメイの手に握らせる。  
「あなたにも似合うと思うわ」

「ミス・ディアナ、わたしも行きます。連れていってください」  
潤んだ目を、シャンメイはピアスを握った手の甲でぬぐう。

「だめよ。あなたには弟と妹がいるわ。守ってあげるのがあなたの仕事。それに、わたしのための最後の仕事がある」

「最後の仕事？」  
エアロックの扉の前で体を止め、ディアナはコントロールパネルを示した。

「わたしたちがパトシップに入ったら、エアロックを封鎖してドッキングを解除してちょうだい。片方だけで強制解除すると、ドッキングベイが傷むから」

シャンメイは悲しげな顔でうなずく。

「……わかりました、ミス・ディアナ」

「それとね……」

ディアナは付き人の少女の耳になにかささやくと、「いいわね？」と少女の顔をのぞきこんで念を押した。

またこくりとうなずいて、シャンメイはエアロックに入るディアナと饗揮を見送った。

\*

\*

「だからサレム、なんでミイラ取りがミイラになってんだって話だろう」

「そこに戻るんですか主任？」

「そもそもだ、おまえがこんな危険物を持ちだすから厄介なことに」

「さらに遡るんですか。過去の失敗蒸し返して部下を責めると、部下がいじけますよ？」

「おまえに言われたくないな。だいたいおまえがあいつに歩き回っていいなんて言うから」

「問題はそこじゃなくて、特攻するなんて主任があの子に言ったことでしょ」

「俺は言っていない！ あいつが勝手に」

「あーもう、ふたりとももう少し冷静になれないのか？ ののしりあつて問題が解決するなら裁判所はいらない」

アレックスとサレムは同時に、窓際にいる天音のほうをきつと振り返った。そしてやはり同時に、拘束されていない左手の人さし指をびしっと天音に突きつけた。

「おまえの弟のこと言ってるんだよ！」

「そもそも十五歳の男女をふたりだけで旅行に行かせるなんてアレックスがあわてて部下の口をふさぐ。」

「ジュラ紀のモラルを人に押しつけんなよ、恥ずかしいったら」

「ジュラ紀には人類いませんよ、そんなことくらいチンパンジーだって知ってます」

「知らないだろ、チンパンジーは」

「あーもう、なんで話がそれるんだ？ 問題はどうすればこれをはずせるかってことだろう？」

天音は窓枠の手すりにつながれている手錠をもどかしげに鳴らす。  
「早くディアナを止めないと響揮が危ない」

「……1022号には遙香も乗ってる」

アレックスの言葉に、天音は青ざめた。

「なんだって？ どうして」

「あそこがいちばん安全だと思ったんだ。遙香には緊急脱出ポッドを使えと念を押しておいたが、ひとりで使ってくれるかな」

「遙香は責任感の強い子だ。たぶん響揮を助けようとするだろう」

「……だよな」

アレックスは息を吐いた。

「結局、類は友を呼ぶ、だ。パトシップの盗難防止システムも、ディアナが相手じゃ役に立たんだろうし……どうすれば1022号を止められるかな」

「まずは僕らが自由にならないと。このままだと、僕らも船と一緒にデブリになってしまう」

「その前にたぶん、宇宙省の特殊部隊が喜々として突入してきますよ。ディアナはご丁寧に通信回線全部切っていきましたからね。緊急難信号を発して一切の応答を絶った豪華プライベートシップ。救出成功なら広報部にもおいしいネタです」

サレムは言って、肩をすくめた。

「乗ってるのが俺たちだったってわかったときの部長の顔、想像すると萎えるな……」

憂鬱な顔でアレックスがつぶやく。

「噴火しますね、確実に」

「噴火……？ そうだ、ムスマン！ 奴は俺がこの船に乗り込んだのを知ってるぞ。ムスマンなら追跡してるはずだ」

「僕らのパトシップも？」

「ああ、もちろん」

そのとき通路に通じるドアが開き、すっとシャンメイが入ってきた。

「シャンメイ！ 脱出したんじゃないかったのか？」

天音が窓際から問いかけると、シャンメイは無表情な顔で首を振った。

「ミス・ディアナから最後の仕事をまかされたので」

短いチャイナドレスの裾をめくり、スパッツのウエストから銃を抜く。銃口を天音に向け、照準のポイントを額に定める。

天音は息をのんだ。BGMも警告アナウンスも消えたキャビンに、ハエの羽音のようなかすかな空調の音が響いている。

「?さよなら、天音?」

瞬間、ぎゅつと目を閉じた天音だったが、衝撃が襲ってこないのに気づき、まぶたを上げる。

シャンメイの顔はあいかわらず無表情で、手には手錠のキーが握られていた。

「?残される者のつらさを味わいなさい?。そう伝えろと言われたわ」

天音は顎を引き、奥歯を噛みしめた。

「あくまで響揮を道連れにするつもりなのか」

壁を押して天音のそばに飛ぶと、シャンメイは慣れた身のこなしで窓枠の手すりをつかんで体の向きを変え、天音の手首から手錠はずした。手すりを押し離してキャビンを横切り、アレックスとサレムをつないでいた電子手錠もはずす。

「おまえさんはこれからどうするんだ?」

アレックスが訊くと、シャンメイは顔を伏せた。

「……ミス・ディアナに……生きていてほしい。助きたいの」  
きつと顔を上げて、アレックスの目を見つめた。

「わたしにできることがあればなんでもするわ。手伝わせて」  
その顔はもう、意思のない機械人形のものではなかった。

「わかった」

アレックスはうなずく。

「これから通信システムを再起動してディアナに通信を送る。……呼びかけてくれ。おまえさんの大事な人に、戻ってこいと」  
サレムはすでにデিজフレームに取りつき、ムスマンと連絡をとろうと試みている。

天音はコクピットに入り、ディスプレイをにらんだ。

「自動航行システムにロックがかけてる。パスワードを探るのに時間がかかりそうだ」

アレックスはシャンメイを見る。

「パスワードを知らないか？ 知らないよな」

「知ってるわ」

きっぱりと、シャンメイが答えた。

「？マゼランの花嫁？よ」

ポルトガルの英雄の名を冠した星雲に、ディアナはどれほどの思いを抱いていたのか。アレックスは隕石の衝突痕に覆われた月の南極を脳裏に描いた。冷たいクレーターの底、銀河を見あげて命を絶った男の罪の深さと思う。

男の目に最後に映っていたのは、彼方に星のベールを広げる大マゼラン雲だろうか？ それとも愛した娘の花嫁姿だろうか。

答えはもう、誰にもわからない。

\*

\*

シャンメイの姿がドアに遮られて見えなくなると、響揮は自分の腕をとらえているディアナを見あげた。

「強制解除でドッキングベイが傷むなんて、はじめて聞いたよ」

「わたしもよ」

ディアナは軽く首をかしげる。

「それでも言わないと、最後までついてきそうなもの」

「シャンメイをだましたのか？」

「あの子は……よく尽くしてくれたから」

パトシップに入ると、ディアナはてきばきとエアロックを閉じ、二重の扉をロックしてシールを確認し、ドッキングを解除した。響揮の体を副操縦席に押しつけ、シートベルトで固定する。

「でもあなたには最後までつきあってもらうわ。わたしは行けるところまで行くつもり。人質がいればぎりぎりまで近づける。それが

子供なら　大統領の暗殺を阻止したヒーローならなおさら」

「無駄だよ。子供一人と連邦大統領の命なんて、比較の対象にもならない」

響揮はようやく麻痺の解けてきた手を動かしてみた。だが手首にはめられているのは例の電子手錠だ。うかつには動かせない。

「撃墜されるならそれでもいいわ。子供を犠牲にした大統領なんて、市民が支持すると思う？　どちらにしてもロシュフォードは終わりよ」

操縦席についたディアナは、よどみなく発進準備を進めていく。パトロールシップにはパイロットを個体認識して盗難を防ぐシステムが備えられている。だが連邦所属のクロスネットオペレーターであるディアナにとって、その程度は障害にはならない。

「自分を犠牲にしてまでロシュフォードを失脚させることに、なんの意味があるんだ？　フロールレスの家名にも傷がつく。ナタリアは……クローンかもしれないけど、あなたを育てた母親だろう？　悲しませるのがそんなに楽しいのか？」

あきれたというふうには、ディアナはため息をついた。

「天音に聞いたでしょう？　あの人はわたしの船にウィルスを仕込んで、わたしを殺そうとしていたのよ。わたしが死んでも悲しんだりしない。母親？　あのこそ死神だわ」

「でも……ナタリアは泣いてたよ。愛してなければ、あなたのために泣いたりしないだろ」

ディアナは苦笑した。大統領専用船に追いつくための速度と時間を計算し、燃料の残量を確認する。エンジンが点火すると、軽い加速のGによって体がシートに押しつけられた。

「男ってばかね。女が泣けば簡単にだまされる」

「だって……男は女の子を泣かせちゃいけないんだ、絶対に」

「笑わせないでよ。そんな考え方、古くさすぎてギャグにもならないわ。でも……」

操縦席から身を乗り出したディアナが、間近から響揮の顔をのぞ

きこむ。

「そういうところにわたしは……惹かれてしまうのかもしれない。きみも天音も、家族にたつぷり愛されて育ったから。わたしには決して手に入れないものを持っているから、欲しくなってしまうのかもしれない。奪いたくなってしまうのかもしれない」

手を伸ばして響揮の頬を包み、引き寄せる。

「ディアナ」

重ねられた唇のあたたかさは、生の証明。

ディアナには何度も殺されかけているというのに、拒めない自分が響揮は信じられなかった。いまだって勝ち目のない戦いの道連れにされようとしているのに。

頭の奥がしびれて、なにも考えられなくなる。

やがて吐息とともに、ディアナの唇が離れた。エメラルドの瞳があたたかな輝きで満たされる。

「……十年遅く生まれてくればよかった。まっさらな少女として、きみに会えればよかったのに」

そのとき突然、コクピットの後方から声がした。

「響揮から離れて！」

響揮は肩越しに振り返った。

「……遙香！」

ショックパルス銃をかまえた遙香が、コクピットの入り口からディアナを狙っていた。彼女は一瞬目を閉じ、トリガーを引いた。しかし。

「……あ、あれ？」

あわててトリガーを何度も引くが、ショックパルスが発射される気配はない。

「遙香、安全装置！」

響揮は教えたが、そもそも安全装置とはなにかも遙香は知らない可能性が高い。アレックスが置いていった銃を見つけて手にとったのだろうか、とんだ計算違いだ。



あきれたようなため息をもらし、ディアナがシートベルトをはずして遙香のもとに飛んだ。

「遙香、逃げろ！」

そうは言ったものの、こんな狭いパトシップのなかで逃げる場所などありはしない。響揮はシートベルトをはずそうともがいたが、うっかり電子手錠のワイヤーを引いて電撃に見舞われ、失神しそうになった。

ディアナが遙香の手から銃をもぎとり、銃口を遙香に向けた。安全装置をはずし、赤いポイントを遙香の胸に当てる。

「危ないおもちゃにはさわらないほうがいいわよ、怪我するから。あなた、また記憶が戻ったのね？ まあ、もうどうでもいいわ。わたしの邪魔をしないでいてくれれば」

遙香はひるまず言い返す。

「あなたこそ、あたしの邪魔をしないで。あたしは響揮と一緒に帰るんだから」

すいとディアナは背中からコクピットの前方へ下がり、副操縦席のシートに手をかけた。

「残念ね、彼はもうわたしのものよ」

手を伸ばして響揮の顎をすくいあげ、キスしてみせる。響揮は電撃のショックで体に力が入らず、抵抗できなかった。

「やめて！ 響揮にさわらないで！」

遙香がいきなり閃光弾を投げつけ、コクピットが真っ白な光に包まれた。予想外のこと、今度は響揮もまともに閃光を見てしまった。目の奥が焼かれるようでいて痛みはなく、視界がただ一面にメタリックなグレーに染まる。

「響揮、行くよ！」

遙香の声とともにシートベルトがはずされ、宙を引いていかれて、どこか狭い空間に押し込まれた。拘束された腕が押しつけられた壁はゆるくカーブしている。

「遙香、ここは」

「響揮、足ひつこめて。ハッチ閉じるよ！」

「待ちなさい、遙香！」

うつすらとよみがえってきた響揮の視界に、ハッチに迫ってくるディアナの姿が映った。

「しつこいわね……！」

遙香が手にした円筒のピンを抜き、投げつける。宙で破裂した円筒からねばつく繊維のネットが広がり、ディアナの上半身からみついた。はがそうとする手にもべったりと張りついて動きが鈍る。

ディアナの鼻先で、遙香はハッチを閉めた。もう一枚、内側のハッチを閉じて気密を確認する。背後の壁に設置された生命維持システムを作動させ、正常に動くことをたしかめて、予備の酸素パックと非常用食料、水の入ったバッグを壁際のラックにとめる。外部力メラの映像を表示する小さなスクリーンのスイッチを入れ、動作をチェック。

アクション映画のヒロインばりに動く遙香はまるで別人のようで、響揮はただあつけにとられて眺めていた。

と、遙香がこちらに顔を向けた。

「響揮、行くよ？」

「行くつて、どこに」

「決まってる。ルナホープだよ！」

遙香は天井のカバーをはずし、赤いボタンを押し込んだ。

\*

\*

緊急脱出ポッドが離れていくのを確認して、ディアナは口元に苦い笑みを浮かべた。反転して追うことはできる。でもそうすると大統領船を追いかける燃料が足りなくなる。

「ネット弾なんて、女には最悪の敵ね。メイクが落ちてしまっじゃない」

つぶやき、べたべたした繊維をタオルにからめて落としながら、

ディアナはディスプレイを眺めた。進行方向を映したカメラからの映像には、半分の地球が映っている。

通信が続々と入ってくる。UCCIE、管制センター、そしてエンデュミオン号。

応じるつもりはなかったのに、指が自然に動いてしまった。

回線を開くと、ブローディの声が聞こえてきた。映像は敢えて消した。弱気になるのはいやだったから。

『ディアナ、俺たちはこれからルナホープに戻る。俺のパトシップの緊急脱出ポッドはUCCIEの僚船が回収に入った。エンデュミオン号のエンジン制御システムに仕掛けられていたウイルスも天音が除去したよ』

天音。ふと脳裏に浮かんでくる面影を、ディアナは首を振って払う。

「さすがね。じゃあ」

『待てよ、ディアナ。本当に突っ込むつもりなのか？ 大統領船の護衛船団には不審船の撃墜命令が出ている。考え直して』

『ミス・ディアナ！』

ブローディの言葉を遮って聞こえてきた声に、ディアナは口元をほころばせた。忠実でけなげな少女を、ディアナはいつしか妹のように思っていた。

「シャンメイ。よかったわ、あなたの声が聞けて」

『ミス・ディアナ……わたし……もう一度あなたに 会いたい。』

お願いです、戻ってきてください』

シャンメイは泣いていた。

「ありがとう、シャンメイ。……さよなら」

ディアナは通信を切った。耳元に指をやり、主を失ったピアスの穴を撫でる。

ひとりぼっちだ。でも寂しいとは思わない。思いたくない。

そう、父親と同じように旅立つだけだ。

人は結局ひとりで生まれ、ひとりで死んでいく。なぜ悲しむこと

があるだろう？

燃料の残りを再計算し、ディアナは船の速度を上げる。

\*

\*

「パトシップの緊急脱出ポッドって、こういう構造だったのか……」  
響揮はつぶやいた。感心したわけではなかった。トランクルームと兼用って、ほんとに緊急時に役に立つのかよ、と内心で突っ込んだだけだ。いったい定員は何人なんだ？

内部は直径一・五メートル、高さ二メートルほどの狭い円筒だ。そこに備品が納められているので、空間はさらに狭く、ふたり入れば体が自然に触れあってしまう。

「アレックスなんかひとりでも入れないかも」

「響揮を助けてくれた人ね？ あたしその人に、ここを守ってるって言われたのよ」

「アレックスに？」

遙香はうなずいた。

「響揮が来るかもしれないから、使えるようにしておけって」

「じゃあまた助けられたんだな、ラッキーカラーに。助けられてばかりだ。俺はほんとに、ひとりじゃなにもできないってことだな」

響揮は苦笑して右足を持ちあげた。ブーツを脱ごうとするが、後ろ手にかけられた電子手錠を気にしているせいで、なかなかうまくいかない。

「なにしてるの？」

「ああ、ブーツのなかに手錠のキーが入ってるんだ。取ってもらえる？」

なんでそんなところに、と言いながら遙香はキーを取り、響揮の手錠をはずした。

ようやく両手が自由になり、響揮は息をつく。

「サレムが 俺がさんざん振り回した捜査局の人が、こっそり入

れてくれたんだ」

足首にまで手錠をかけたのは、脱出の手段を響揮に与えるためだった。キーを手錠のスリットに通しながら、サレムはカメラの死角で予備のキーを響揮のブーツのなかに押し込んだ。その時点で、サレムの態度が豹変したのは演技だったのだと響揮は悟った。しかし正直、電子手錠はもう勘弁だ。凶悪犯としてUCCIに逮捕されるような事態にだけは陥るまい。

「響揮、これ……」

遙香がTシャツの下からペンダントを引き出し、首からはずした。響揮があたしに買ってくれたものよね？ 裏にあたしの名前と誕生日がある」

無重力の空間で、ペンダントはふわふわと浮かび、銀のヘッドと月光の石がくるりと回る。

ことの発端はこのペンダントだったと、響揮は考えた。あの六月はじめの日曜日。いまとなつては遠い昔に思える蒸し暑い午後。

「ディアナが返してくれたのよ。だからあたしは、記憶消去を受けても響揮のことを思い出せた。……たぶんあの人は、ほんとに悪い人じゃない。もちろん許せはしないけど」

「……そうかもな。俺も……認められはしないけど」

ディアナの思いも、いまならほんの少しだけわかる気がした。彼女の求めていたもの、目指していたところ。

「これね、ちゃんと響揮からもらいたいの。……かけてくれる？」

「ああ。もう誕生日の当日だしな」

無重力ではペンダントをかけるのは難しい。遙香の首の後ろに回した手がふとしたはずみでうなじに触れると、彼女は頬を赤らめた。ハッピーバースデー、遙香」

「ありがと、響揮。すごくうれしい。渚沙にもお礼言わないとね」「知ってたのか」

「推測だけだね。だって響揮が誕生石なんて知ってるわけないもん」  
宙に浮かぶ銀の月をしばらく眺めてから、遙香は目を伏せ、響揮

の胸にしがみついていた。

「……心臓の音だ。響揮、本物の響揮だよな？ 生きてるんだよね？ 殺されてしまったんじゃないかって、もう二度と会えないんじゃないかって……怖くてたまらなかった」

「……生きてるよ」

響揮はそつと遙香の体に腕を回し、抱きしめた。遙香はふんわりとやわらかくてあたたかく、シャンプーの香りがする。

「……キスして、響揮」

「えっ？」

思わず声が裏返る。

「もう、二度言わせるつもり？」

遙香は両手で響揮の顔をはさんで引き寄せ、唇を重ねた。

「消毒」

「え、なに？」

「なんでもない！ ねえ、真夏に告白されてうれしかった？」

響揮は真つ赤な顔で、しどろもどろに返す。

「な、なんだよいきなり……こんなときにする質問なのか？」

「だって気になって仕方ないんだもん。まだはつきり答えてもらってないって真夏は言ってた。そうなの？」

「それは木田が……その、遙香に俺を意識させるために言っただと思う。木田は俺が遙香を好きだって知ってたから」

「うそっつ！」

「……たぶん、知らなかったのは遙香だけだ」

遙香はため息をつく。

「あたし……ほんとばかだった。真夏に謝らなきゃ、首をちよつとかしげてほえんだ。」

「それからお礼も言わないとね」

\*

\*

十分もたたないうちに、ふたりの乗った緊急脱出ポッドはUCC  
Iのパトロールシップに回収された。エンデュミオン号の発信した  
救難信号を受けてパトシップが多く出動していたため、救助も早か  
った。

UCC Iや宇宙軍が使う公用宇宙港に下ろされたふたりは、いか  
めしい護送車でセントラル地区にあるUCC Iのオフィスに送られ  
た。

応接室のソファに腰を下ろすと、ほどなくアレックスとサレムが  
来て、それぞれふたりを抱きしめた。

「大活躍だったね、遙香。よく響揮を連れて帰ってくれた」

抱擁をとくと、アレックスは遙香の頭を撫でた。遙香が頬を染め  
る。

「あたし、ただ夢中で……」

「いい度胸をしてる。局にスカウトしたいくらいだよ」

「兄貴は？」

響揮の問いに、サレムが答える。

「病院で精密検査。彼は三日も仮死催眠に入っていましたからね」

「精密検査？ 兄貴はいつもと変わらないふうに見えたけど」

サレムは首を振った。

「エンデュミオン号の個室にモニターやら点滴やらがそろえてあり  
ました。天音は看護されてたんですよ」

アレックスが感慨深げにつぶやく。

「彼女、本当に天音に惚れてたんだな」

「……ディアナが本当に愛してたのは、お父さんだけだったと思う  
よ」

響揮の言葉に、三人の目が響揮に集中した。

「おまえから恋愛講義を聞かされるとはね」とアレックス。

遙香は憤慨した口調だ。

「あの人は響揮にも気があったのよ」

サレムはただうなずいた。

「脳が疲れているようですね、サムライボーイ。ストロベリー味のゼリーを試してみますか？」

「俺を殺す気？ 肘鉄の仕返しはもう十分しただろ？」

響揮はポケットから電子手錠のキーを取り、サレムに返した。

「裏切ったふりして手錠のキーを靴のなかに入れるの、『ハル＆レイ』のシーズン3でやってたよね。すっかりだまされた」

サレムはにやりとした。

「真に迫ってたでしょ。というか、演技でもなく本音でやればよかったし、楽しかったよ」

「……以後、あなたを怒らせないように注意するよ」

「なんだ、おまえも『ハル＆レイ』みたいなファンタジー刑事ドラマを観てたのか。意外だな」

アレックスが茶化すように言うと、サレムは胸を張った。

「僕は柔軟なんですよ」

「あーはいはい。そろそろお祈りの時間じゃないのか、サレム？」  
アレックスのマイティフォンが鳴った。

「ブローディだ。……そうか」

たったひとりで通話を切り、アレックスは三人の顔をぐるりと見た。

「1022号が宇宙軍の護衛船に撃墜された」

「……マアッサラム（平穩を）、ディアナ」

静かに続くアラビア語の祈りの言葉が部屋を満たす。

「彼女らしい最期だな」

アレックスがぼつりとつぶやいた。

ひとりで寂しくはないだろうかと、響揮は考える。

ディアナは美しくて、残酷で、孤独な女神だった。

\*

\*



視界には、幾万の星々を抱く漆黒の闇が広がっている。真空の宇宙で生身の人間が生きられるのはわずか数分だ。

大マゼラン雲はどこだろう？

もう探すこともかなわず、ディアナは幼い日にサンパウロの屋敷から眺めた星空を脳裏に映す。

十六万年かけてかの星雲から届いた光は、銀河の腕のそばで花嫁のベールのように淡くたたずみ、はるかな夢の航路へと彼女を誘っていた。

火星で青い夕焼けを見てから、木星へ向かう。太陽系をあとにして、四・二光年先のリギル・ケンタウルスへ。そして船は銀河系を離れ、数百億の星々がひしめく大マゼラン銀河へと舵を切る。

そこならきつと、手を伸ばせば星がつかめるに違いない。

すうつと目からあふれた涙は、宙を漂う間もなく蒸発してしまう。唇がわずかに動き、最後の言葉を吐き出す。

けれども、声を伝える空気は、ここにはなかった。

\*

\*

その日の午後。

ルナホープ宇宙港の到着ロビーで、響揮たちは両親を出迎えた。

「やあ、父さん母さん、久しぶり」

天音につこり笑いかけられて、両親はぽかんと口を開けた。

「天音！」

「ええ？　なんで天音が月にいるのぉ！？」

報道規制が続いているため、両親は昨夜の事件のことをまだ知らされていない。だが、規制が解除されても事件は公にはならないと、響揮にはわかっていて、被疑者死亡でこの件は終わりだ。

「休暇がとれたんだよ」

さらりと天音が答える。

「それより疲れただろう？　到着がかなり遅れたから。まずホテル

に行って少し休む？」

「ううん、遅れた分を取り戻さなきゃ！」

憤慨した顔で真城子がまくしたてる。

「こちとらたった四日しかいられないってのに、五時間も遅れるなんてひどいと思わない？ 航路上で事故とか事件とかがあったってだけで、細かい説明はいつさいなし。通信規制でマイティフォンも使えないし。もう、ほんと大迷惑っ！ 慰謝料請求したいわ！」

「響揮や遙香ちゃんとも連絡がとれなくて、どうなるかと思ったよ」  
佑司は心底安心したように息を吐く。

「僕とマキちゃんだけじゃ、ルナホープで絶対迷うだろうしね」

響揮と遙香、天音は顔を見合わせ、苦笑した。

「じゃあ急ぎましょ。氷の海遊覧ツアーがもうじき出るから。ネクススホールのBゲートよ」

先に立って歩きだした遙香を見て、佑司が不思議そうな顔を響揮に向けた。

「ふたりは今日、宇宙遊泳ツアーじゃなかったのかい？」

響揮は肩をすくめた。

「それはもう、十分すぎるほど堪能したよ」

## エピソード　夕焼けに半月

北アメリカ大陸南部の街ヒューストンは、本格的な夏を迎えてうだるような暑さだ。

郊外にある地球連邦アストロノーツ・アカデミーでは、次年度の新入生を決める最終選抜が行われている。緊張した顔の受験生が学内をうろつくと歩き回り、在学生がほえましげにそれを眺める光景は、この時期のアカデミーの風物詩だ。

月から帰ってすぐヒューストンに飛んだ響揮だが、時差や低重力の影響もすでに抜け、コンディションはまずまずだった。割り当てられた宿舎の部屋で出かける準備をしながら、渡米前に遙香と渚沙から「一緒につくったの」と渡されたシールパックを開ける。

中には一センチほどの厚さのクッキーがいくつか入っている。

そえられたカードには『フォーチュン・クッキーだよ。試験の前に割ってね!』と、渚沙の丸っこい字で書かれ、遙香の字で『食べ過ぎ厳禁!』と追伸がある。

月旅行では渚沙の占いにかなり不信を抱いた響揮だったが、律儀に毎朝ひとつ割り、おみくじをとりだすのが習慣になっていた。

薄いパラフィン紙を広げると、大吉と大きく書かれていた。

「四日連続かよ、ほかの入ってるのか?」

苦笑して、クッキーを口に入れる。舌になじんだ、遙香のプレインクッキーの味だ。大吉のおみくじよりも、その味が響揮にはなにより頼もしい味方だった。

三次選抜の日程も六日目が終わわり、翌日の面接を残すのみとなった夕方。響揮はさすがに疲れを感じながら、校舎のベランダの手すりにもたれて空を眺めていた。夕方といっても気温はまだ高く、西日を受ける肌が熱い。

夕焼けに染まる雲、頬を撫でる湿気を帯びた風。やがて半月が南の空にうつすらと姿を現す。

響揮は目を細めて、三十八万五千キロの彼方を思った。

そんな少年を、向かいの校舎の窓からふたつの鋭い目が見つめていた。

「フランクが合格させると言ってきたんだがね。正直なところ、きみはどう思う？」

恰幅のいい初老の男が、ディジフレームの画面に目を向けて訊いた。ゆったりとした肘掛け椅子に座って足を組み、右の頬から顎に残る古い傷跡をなぞるように手を当てる。胸にA Aの流星のマークがついたジャンプスーツはサイズが合わなくなってきたいるらしく、腹のあたりの生地がぴんと張っている。

「もちろん、大統領命令だとしてもふたつ返事で受け入れる気はない。あの少年がフランクの命を救ったのはたしかかもしれないが、むしろ選別の目が一段と厳しくなるだけだ」

『わたしから言うことはなにもありませんよ、校長。選抜試験の結果がすべてでしょう』

ヴィジのウィンドウのなかで、涼やかな青い目の青年が肩をすくめた。

「冷たいな、ブローディ。うちを首席で卒業したきみの目から見て彼はどうかと訊いてるんだ。ルナホープで会ったんだろっ？」

『校長も人が悪いな。？会った？どころじゃないのはご存じでしょう？ 報道規制はかかってても、あなたなら宇宙省内のあらゆる資料を見られるはずだ』

校長は片方の眉を上げてみせ、椅子に背中をあずけた。

「彼の武勇伝は聞いたさ。だがヒーロー症候群の生徒はうちには要らないからね」

『ああ、つまりあら探しですね。彼を落とす理由がなんにもないん

で困ってるんだ』

無然とした表情になった校長に、アレックス・ブローディがにやりと笑いかけた。ディジフレームにメール着信のサインがつく。

『いま送ったのは六月二十二日に起きた一連の事件の報告書です。報道規制の延長申請に使うので、彼の行動を抜き出した書類も添付しました。まだ宇宙省のアーカイブには入っていないはずだ。評価の参考になるでしょう』

校長はメールを開き、数十ページにわたる文書に目を通しはじめた。

『……すいませんが校長、読みふけるのはヴィジを切ってからに願いますよ』

「ああすまん、つい」

校長はあわててウィンドウのなかのアレックスに視線を戻す。目が合うと、アレックスはまたにやりとした。

『そうとう彼に関心があるようですね』

「当然だろう？ あれだけのことをしてるのに、見ればまだほんの子供だ」

校長は窓の外にちらりと目をやった。向かいの校舎のベランダではくだんの少年を含め、受験生数人がなにか楽しげに話している。

『あーそれ、それが危険なんだ。外見で奴を判断すると痛い目に遭いますよ』

「？痛い目？の内容も報告書に記載してあるのかね？」

校長がにやりとして返すと、アレックスは居心地悪そうに身じろぎした。

「わたしが本当に求めているのはお行儀のいい役所向きの文章じゃなく、きみのナマの意見なんだがね、？弾丸・ブローディ？」

『やめてくださいよ。そんな昔のあだ名持ちだすなんて、恥ずかしくて死にそうです』

「じゃあ素直に白状したまえ。きみは彼をどう思ったんだ？」

アレックスは数秒のあいだためらってから、しぶしぶというよう

に口を開いた。

『アカデミーの入学式で、校長はいつも話されてますよね。？考える、行動せよ、そして生き残れ？と。報告書を書きながら、わたしはそれを思い出していました』

「生き残れというのは比喩的な意味が大きい。しかも生き残る手段を持つ人間　サバイバリストになれということだ」

手をあげて校長の言葉を遮り、アレックスは首を振る。

『サバイバリストが全員、生存者になれるわけじゃない。両者のあいだには火星のマリネリス峡谷ほども深い溝があります。それは校長自身がいちばんよくご存じのはずだ』

校長は一瞬、記憶を探るかのように目を宙に泳がせ、右頬の古傷に指をすべらせた。

『でも彼は　響揮はそれを飛び越えてみせた。それこそ弾丸のようだね。あの日の月域はまさに、苛烈なサバイバルゲームの舞台でした。瞬時に正確な判断をくだし、ためらいなく行動しなければ生き残れなかった。まあ、奴の場合はその判断とやらがかなり斜め上……いや独創的で、周囲が巻きこまれるんで厄介ですが』

肩をすくめて、アレックスは続ける。

『奴は絶対に敵に回すな、味方にするなら覚悟しろ。そんなところですかね、わたしのナマの意見は』

「……褒めてるのかけなしてるのか、どっちなんだ？」

あきれ顔になった校長に、アレックスはくすくす笑う。

『誉れ高い？弾丸？の称号は喜んで彼に譲りますよ。じつに名残惜しいですが。いやほんとに』

「彼は弾丸どころか弾道ミサイルなんじゃないかって、悪い予感があるんだがね」

校長は抑えたため息をもらし、また窓の外に目をやった。

その視線の先を追いかけるようにして、ヴィジのウィンドウでアレックスが目細めた。

『飛距離が長いのは長所でしょう。どんな弾頭を搭載するか、そこ

が校長はじめ先生方の腕の見せどころだ。わたしは神も運命も信じないし、予言者でもありませんが、これははつきり言えますね。五年後の卒業式にあなたが最初に証書を手渡すのは彼、ヒビキ・タカトウですよ  
『よ』

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2003w/>

---

烈月のサバイバー

2011年9月5日03時33分発行